

# 渋江遺跡

## 第2・3次発掘調査報告書

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第124集



2004

財団法人 山形県埋蔵文化財センター



# 渋江遺跡

第2・3次発掘調査報告書

---

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第124集

平成16年

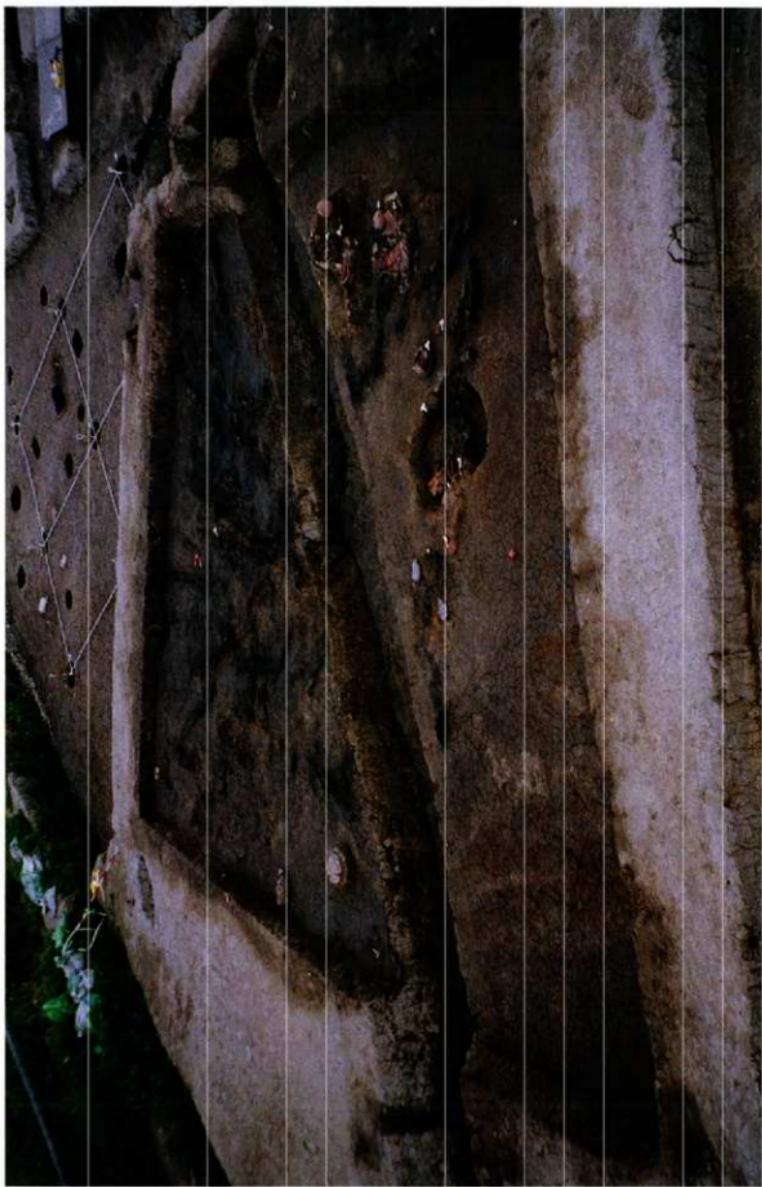
財団法人 山形県埋蔵文化財センター





洪江遺跡近景（北から）

S T 35 残土・炭化材検出状況（東から）



卷頭写真 2

S.T.47捲蓋状況(内から)

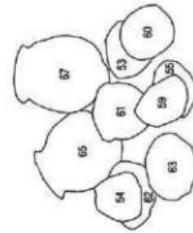
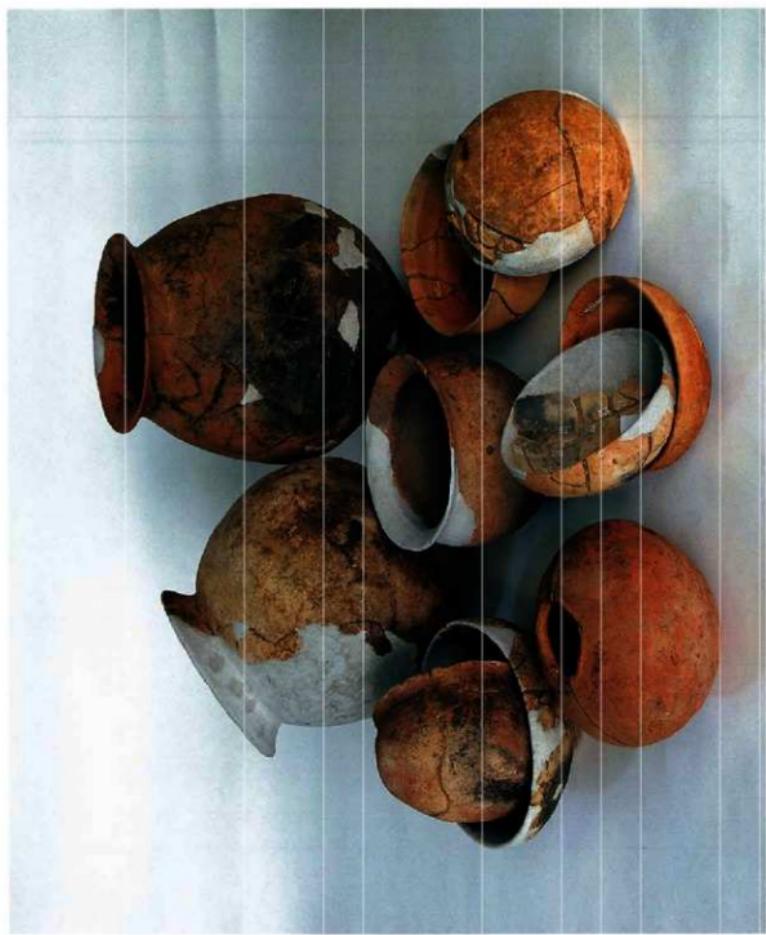


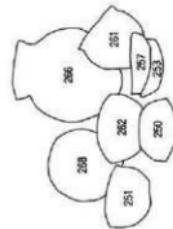
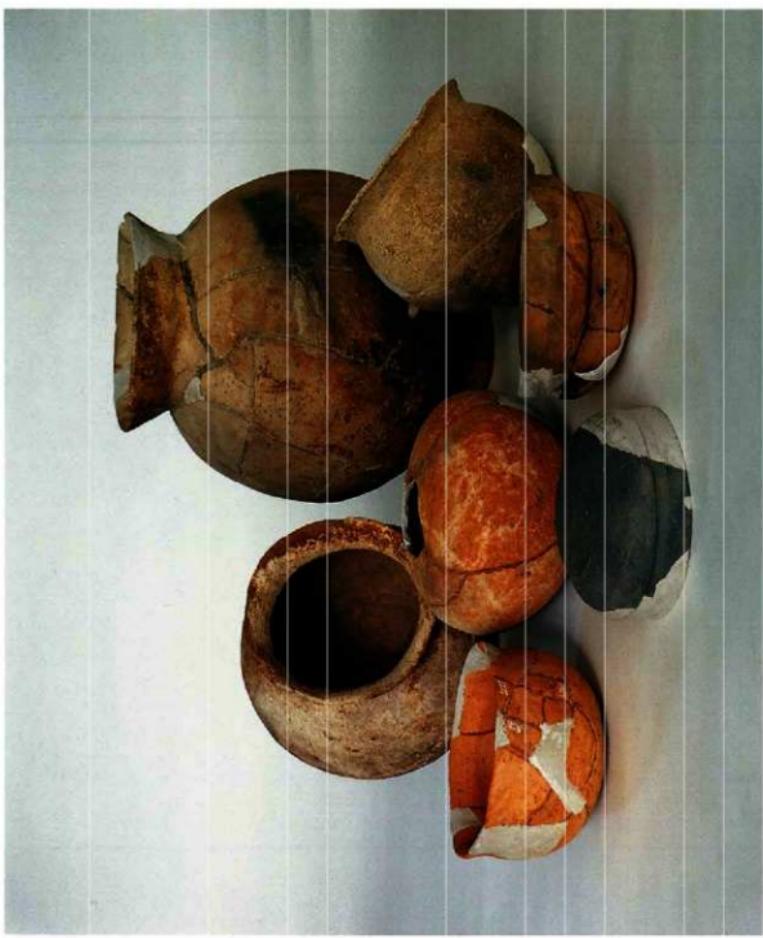


S X226遺物出土状況（南から）

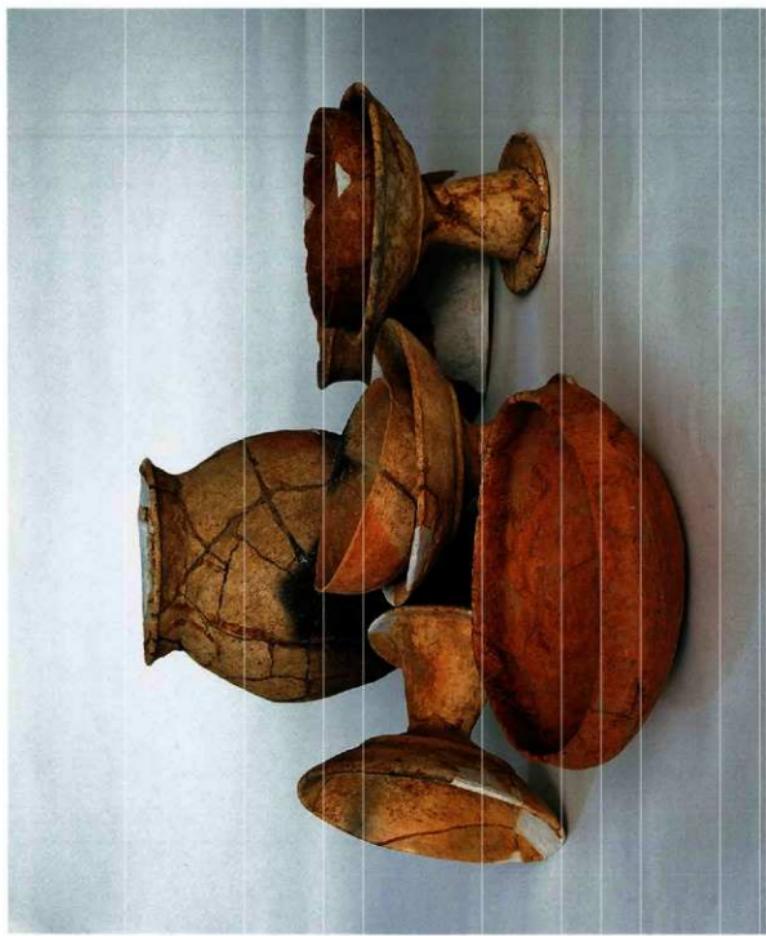


S T706 - R P216出土状況（東から）





S X 226出土土器





# 序

本書は、財団法人山形県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した、渋江遺跡の調査成果をまとめたものです。

渋江遺跡は県都山形市の北西部に位置し、立谷川扇状地の扇端部にあたる渋江地区に所在します。渋江地区は肥沃な土地と豊富な水により、水田のほか果樹や畑作生産も盛んな農業地域ですが、近年では東北中央自動車道建設をはじめ県道など道路網の整備も着々と進んでいます。

この度、東北中央自動車道相馬・尾花沢線建設工事に伴い、工事に先立って渋江遺跡の発掘調査を実施しました。

調査では、馬見ヶ崎川の自然堤防上に営まれた古墳時代中期を中心とした集落跡が確認され、焼失家屋を含む竪穴住居跡や土坑、祭祀遺構、中世の集落を区画する溝跡等が検出されました。また、古墳時代の土師器や須恵器のほか弥生土器なども出土し、当時の人々の生活を研究するうえで大変貴重な資料を得ることができました。

埋蔵文化財は、祖先が長い歴史の中で創造し、育んできた貴重な国民的財産といえます。この祖先から伝えられた文化財を大切に保護するとともに、祖先の足跡を学び、子孫へと伝えていくことが、私たちの重要な責務と考えます。その意味で、本書が文化財保護活動の啓発・普及、学術研究、教育活動などの一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査においてご協力いただいた関係各位に心から感謝申し上げます。

平成16年3月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター

理事長 木村 宰

## 例　　言

- 1 本書は東北中央自動車道相馬・尾花沢線（上山～東根間）建設工事に係る「渋江遺跡」の第2次・第3次発掘調査報告書である。
- 2 既刊の年報、調査説明資料などの内容に優先し、本書をもって本報告とする。
- 3 調査は日本道路公团東北支社の委託により、財団法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。
- 4 調査要綱は下記のとおりである。

道　跡　名　渋江遺跡  
道　跡　番　号　160（山形県遺跡番号）  
所　在　地　山形県山形市大字渋江字田中  
調　査　主　体　財団法人山形県埋蔵文化財センター  
理　事　長　木場　精耕（平成11年～12年度）  
理　事　長　木村　宰（平成13年～15年度）

### 第2次調査

受　託　期　間　平成11年4月1日～平成12年3月31日  
現　地　調　査　平成11年9月20日～平成11年10月29日  
調　査　擔　当　者　調　査　第三課長　佐藤　正俊  
　　　　　　　　調　査　研究員　氏家　信行（調査主任）  
　　　　　　　　調　査　研究員　犬飼　透  
　　　　　　　　調　査　員　衣袋　忠雄

### 第3次調査

受　託　期　間　平成12年4月1日～平成13年3月31日  
現　地　調　査　平成12年4月17日～平成12年9月27日  
調　査　擔　当　者　調　査　第三課長　佐藤　正俊  
　　　　　　　　主任調査研究員　氏家　信行（調査主任）  
　　　　　　　　調　査　研究員　犬飼　透  
　　　　　　　　調　査　員　大泉壽太郎  
　　　　　　　　調　査　員　齋藤　健洋

### 平成13年度整理作業

整　理　期　間　平成13年4月1日～平成14年3月31日  
整　理　擔　当　者　調　査　第三課長　佐藤　正俊  
　　　　　　　　主任調査研究員　氏家　信行

### 平成14年度整理作業

整　理　期　間　平成14年4月1日～平成15年3月31日  
整　理　擔　当　者　調　査　第三課長　阿部　明彦  
　　　　　　　　主任調査研究員　氏家　信行

平成15年度整理作業

整 理 期 間 平成15年4月1日～平成16年3月31日

整 理 担 当 者 調査第三課長 阿部 明彦

主 任 調査 研究員 齊藤 主税

主 任 調査 研究員 氏家 信行

- 5 本書の作成・執筆は、氏家信行が担当し、阿部明彦が監修した。
- 6 委託業務は下記のとおりである。  
    基準点測量業務 株式会社工藤測量設計  
    遺構の写真測量・実測業務 株式会社シン技術コンサル
- 7 出土遺物、調査記録類については、報告書作成終了後、山形県教育委員会に移管する。
- 8 発掘調査および本書を作成するにあたり、下記の方々からご協力、ご助言をいただいた。(順不同・敬称略)  
    日本道路公団東北支社山形工事事務所、山形県教育庁社会教育課文化財保護室、山形県土木部高速道路整備推進室、山形県山形建設事務所高速道路用地対策課、東南村山教育事務所、山形市教育委員会、山形市土地開発部都市計画課、赤塚次郎、萩本 勝

## 凡　　例

1 本書で使用した遺構・遺物の分類記号は次のとおりである。

S T…堅穴住居跡	S B…掘立柱建物跡	S E…井戸跡
S K…土 坑	S D…溝 跡	S X…性格不明遺構
S P…柱 穴	E L…遺構内カマド	E K…遺構内土坑
E B…建物跡柱穴	E P…遺構内柱穴	R P…登録土器
R Q…登録石器	P…土 器	S…蝶

2 遺構番号は、現地調査段階での番号をそのまま報告書の番号として踏襲した。

3 報告書執筆基準は下記のとおりである。

- (1) 遺跡概要図・遺構配置図・遺構実測図中的方位は磁北を示している。
- (2) グリッドの南北軸は、N—40° 50' —Wを測る。
- (3) 遺構実測図は1/10～1/400他の縮図で採録し、各々スケールを付した。なお、遺構実測図中の水色は炭化物、青色は炭化材、橙色は焼土を表し、遺物実測図は1/12他で採録し、●は遺物の出土地点を表す。
- (4) 遺物実測図・拓影図は、原則的に1/1～1/4で採録し、各々スケールを付した。なお、断面実測図の拓影図は右側に内面、左側に外面を表した。
- (5) 遺物実測図について、土師器・赤焼土器・陶磁器は断面白抜き、須恵器は断面黒ベタとした。また、土器内外面の朱色は彩色を、網点は黒色処理を表す。
- (6) 遺物観察表中の（ ）の数値は図上復元の推計値、〔 〕は残存値を示している。
- (7) 遺物図版は、任意の縮尺で採録した。
- (8) 遺物番号は、遺物実測図・遺物観察表・遺物図版ともに共通したものである。
- (9) 基本層序および遺構覆土の色調の記載については、1987年版農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版標準土色帳」に従った。

# 目 次

I 調査の経緯	
1 調査に至る経過	1
2 調査の概要	2
II 遺跡の立地と環境	
1 立地と地理的環境	4
2 歴史的環境	4
III 遺跡の概要	
1 遺跡層序	7
2 造構と遺物の分布	11
IV 遺構	
1 竪穴住居跡	12
2 堀立柱建物跡	61
3 井戸跡	61
4 土坑・性格不明造構	61
5 溝跡	66
V 遺物	
1 弥生土器	73
2 住居跡出土土器	78
3 土坑・性格不明造構出土土器	84
4 溝跡出土土器	85
5 柱穴・包含層出土土器	85
6 石器・石製品	86
7 古錢	87
8 土師器の分類	87
VI まとめと考察	
1 まとめ	138
2 考察	140
報告書抄録	卷末

## 表

表1 弥生土器観察表	129	表3 土器観察表(2)	131
表2 土器観察表(1)	130	表4 土器観察表(3)	132

表 5 土器觀察表 (4) .....	133	表 9 土器觀察表 (8) .....	137
表 6 土器觀察表 (5) .....	134	表 10 石器・石製品觀察表 .....	137
表 7 土器觀察表 (6) .....	135	表 11 古鉄觀察表 .....	137
表 8 土器觀察表 (7) .....	136		

## 図 版

第 1 図 調査区概要図.....	3	第 36 図 S T714 .....	53
第 2 図 地形分類図.....	5	第 37 図 S T717 .....	54
第 3 図 遺跡位置図.....	6	第 38 図 S T716 .....	55
第 4 図 基本層序.....	8	第 39 図 S T718・721 .....	57
第 5 図 遺構配置図.....	9	第 40 図 S T719 .....	58
第 6 図 S T13・14 .....	20	第 41 図 S T719・E L485 .....	59
第 7 図 S T33・34 .....	21	第 42 図 S T720 .....	60
第 8 図 S T35燒土・炭化材分布図.....	23	第 43 図 S B50 .....	63
第 9 図 S T35・E L585 .....	24	第 44 図 S E 8・S K 9・231・S X17・230 .....	64
第 10 図 S T35完掘図.....	25	第 45 図 S X226・229・245 .....	65
第 11 図 S T36 .....	26	第 46 図 S D 4 .....	68
第 12 図 S T37 .....	27	第 47 図 S D 7・89・91 .....	69
第 13 図 S T39 .....	28	第 48 図 S D88・90 .....	70
第 14 図 S T40・702・703 .....	29	第 49 図 S D87 .....	71
第 15 図 S T40遺物分布図 .....	31	第 50 図 弥生土器分布図 .....	75
第 16 図 S T701 .....	32	第 51 図 弥生土器 (1) .....	76
第 17 図 S T701・E L429・遺物分布図 .....	33	第 52 図 弥生土器 (2) .....	77
第 18 図 S T41 .....	34	第 53 図 土師器分類図 (1) .....	90
第 19 図 S T42 .....	35	第 54 図 土師器分類図 (2) .....	91
第 20 国 S T43 .....	36	第 55 国 S T13・33・34・35出土土器 .....	92
第 21 国 S T44 .....	37	第 56 国 S T35出土土器 .....	93
第 22 国 S T45 .....	38	第 57 国 S T35・36出土土器 .....	94
第 23 国 S T47 .....	39	第 58 国 S T37・39出土土器 .....	95
第 24 国 S T47遺物分布図 .....	40	第 59 国 S T40出土土器 .....	96
第 25 国 S T704 .....	41	第 60 国 S T40出土土器 .....	97
第 26 国 S T705 .....	42	第 61 国 S T40出土土器 .....	98
第 27 国 S T705・E L586・遺物分布図 .....	43	第 62 国 S T703・702・701出土土器 .....	99
第 28 国 S T706 .....	44	第 63 国 S T701出土土器 .....	100
第 29 国 S T707 .....	45	第 64 国 S T701出土土器 .....	101
第 30 国 S T709・715 .....	46	第 65 国 S T41出土土器 .....	102
第 31 国 S T708・711 .....	47	第 66 国 S T42・43出土土器 .....	103
第 32 国 S T712 .....	49	第 67 国 S T44出土土器 .....	104
第 33 国 S T712・E L486 .....	50	第 68 国 S T44・S T47出土土器 .....	105
第 34 国 S T712遺物分布図 .....	51	第 69 国 S T47出土土器 .....	106
第 35 国 S T713 .....	52	第 70 国 S T47・704出土土器 .....	107

第 71 図	S T704出土土器	108	第 82 図	S T719・720・721出土土器	119
第 72 図	S T705出土土器	109	第 83 図	S K231・S X226出土土器	120
第 73 図	S T705出土土器	110	第 84 図	S X226・S D 4・90・87出土土器	121
第 74 図	S T705・706・707出土土器	111	第 85 図	S D87出土土器	122
第 75 図	S T712出土土器	112	第 86 図	柱穴・包含層出土土器	123
第 76 図	S T712出土土器	113	第 87 図	包含層出土土器	124
第 77 図	S T712・713・714出土土器	114	第 88 図	包含層出土土器	125
第 78 図	S T716出土土器	115	第 89 図	包含層出土土器	126
第 79 図	S T717出土土器	116	第 90 図	石器・石製品	127
第 80 図	S T718・719出土土器	117	第 91 図	石製品・古鐵	128
第 81 図	S T719出土土器	118			

## 写真図版

卷頭写真 1	渋江道路近景	写真図版20	S T40・701・702・703完掘状況
卷頭写真 2	S T35焼土・炭化材検出状況	写真図版21	S T41・42完掘状況他
卷頭写真 3	S T47積立状況	写真図版22	S T43完掘状況他
卷頭写真 4	S X226遺物出土状況	写真図版23	S T44完掘状況他
	S T706・R P216出土状況	写真図版24	S T45完掘・S T47遺物出土状況他
卷頭写真 5	S T35出土土器	写真図版25	S T47完掘状況他
卷頭写真 6	S T719出土土器	写真図版26	調査区上層全景
卷頭写真 7	S X226出土土器	写真図版27	S T704完掘状況他
卷頭写真 8	彩色土器	写真図版28	S T705遺物出土状況他
写真図版 1	基本層・2次調査区全景他	写真図版29	S T705完掘状況他
写真図版 2	3次調査区上層・下層全景	写真図版30	S T706完掘状況他
写真図版 3	上層遺構空中写真 1	写真図版31	S T707完掘状況他
写真図版 4	上層遺構空中写真 2	写真図版32	S T708・709・711・715完掘状況他
写真図版 5	上層遺構空中写真 3	写真図版33	S T712遺物出土状況他
写真図版 6	上層遺構空中写真 4	写真図版34	S T712完掘状況他
写真図版 7	下層遺構空中写真 1	写真図版35	S T713・714完掘状況他
写真図版 8	下層遺構空中写真 2	写真図版36	S T716完掘状況他
写真図版 9	下層遺構空中写真 3	写真図版37	S T717完掘状況他
写真図版10	下層遺構空中写真 4	写真図版38	S T718・721完掘状況他
写真図版11	S T13土層断面・完掘	写真図版39	S T719土層断面・遺物出土状況他
写真図版12	S T14土層断面・完掘	写真図版40	S T719・720完掘状況他
写真図版13	S T33・34完掘状況	写真図版41	S B50・S E8・S K9完掘状況他
写真図版14	S T35土層断面他	写真図版42	S X17・230・S K231完掘状況他
写真図版15	S T35完掘状況他	写真図版43	S X226精査状況他
写真図版16	S T36土層断面・完掘	写真図版44	S D4・89完掘状況他
写真図版17	S T37完掘状況他	写真図版45	S D88・90・91完掘状況他
写真図版18	S T39・40完掘状況他	写真図版46	S D87土層断面・完掘状況他
写真図版19	S T701・702・703土層断面他	写真図版47	トレンチ・調査区完掘全景

写真図版48	弥生土器（1）	写真図版71	土師器（21）
写真図版49	弥生土器（2）	写真図版72	土師器（22）
写真図版50	弥生土器（3）	写真図版73	土師器（23）
写真図版51	土師器（1）	写真図版74	土師器（24）
写真図版52	土師器（2）	写真図版75	土師器（25）
写真図版53	土師器（3）	写真図版76	土師器（26）
写真図版54	土師器（4）	写真図版77	土師器（27）
写真図版55	土師器（5）	写真図版78	土師器（28）
写真図版56	土師器（6）	写真図版79	土師器（29）
写真図版57	土師器（7）	写真図版80	土師器（30）
写真図版58	土師器（8）	写真図版81	土師器（31）
写真図版59	土師器（9）	写真図版82	須恵器（1）
写真図版60	土師器（10）	写真図版83	須恵器（2）
写真図版61	土師器（11）	写真図版84	須恵器（3）
写真図版62	土師器（12）	写真図版85	須恵器（4）
写真図版63	土師器（13）	写真図版86	須恵器（5）
写真図版64	土師器（14）	写真図版87	須恵器（6）
写真図版65	土師器（15）	写真図版88	粗器
写真図版66	土師器（16）	写真図版89	陶器
写真図版67	土師器（17）	写真図版90	石器
写真図版68	土師器（18）	写真図版91	石製品（1）
写真図版69	土師器（19）	写真図版92	石製品（2）・古鏡
写真図版70	土師器（20）		

# I 調査の経緯

## 1 調査に至る経過

東北中央自動車道相馬・尾花沢線の建設事業計画は、平成2年度に県土木事業の上山～東根間都市計画道路整備事業として計画され、その後、国幹審より高速道路整備路線計画として、平成5年度に施行命令が発令され、平成8年度から本格的に事業が開始された。

この間、山形県教育委員会では山形県土木部等の関係諸機関と協議を図りながら平成2年度から遺跡詳細分布調査を実施している。

淡江遺跡は、周知の遺跡で平成2年度にA調査（現地確認調査・表面踏査）と馬見ヶ崎川河川改修に係るB調査（試掘調査）が実施され、平成3年度に中小河川改修に伴う立ち会い調査、平成7年度に再度のA調査が山形県教育委員会により行われている。

その後、東北中央自動車道（相馬・尾花沢線）の路線が遺跡にかかることになった。そこで、同教育委員会によって平成11年6月23・24日に事業実施地区内の遺跡範囲・確認面までの深さを詳細に把握するためのB調査が行われた。調査は、東北中央自動車道と主要地方道山形羽入線に面する範囲のうち、買収がなされた部分を対象に10ヶ所の試掘区を設定し、重機を使用して掘削後、人力で面整理と土層断面等の観察を行い、北側の5ヶ所から遺構・遺物が検出され、遺跡は古墳・平安時代の集落跡であると推定された。

以上の調査結果に基づいて、山形県教育委員会と事業主体である日本道路公团が協議を行い、道路建設工事の着手前に遺跡の予備調査（第1次調査）を実施し、その後に本発掘調査を計画的に進めることで調整が図られた。予備調査は、日本道路公团の委託を受けて財團法人山形県埋蔵文化財センターが担当したもので、緊急発掘調査の一環として行うトレント等による調査である。その内容は、全体の事業量を掌握し長期間の発掘調査をより効率的に行い、全体計画の調整を図るために実施する目的のものである。東北中央自動車道（相馬・尾花沢線）は平成9年度から実施された。

これらを受け、日本道路公团と山形県埋蔵文化財センターで協議した結果、平成11年度は事業実施区域の第1次調査を行い、全体の事業量を掌握した後に工事用道路として使用する側道部分の発掘調査を実施して、平成12年度に本線部分の発掘調査を行う計画で合意した。

しかし、用地買収と道路建設工事の工程等の諸問題が発生したため、日本道路公团と財團法人山形県埋蔵文化財センターで再度協議をした結果、当初の計画を変更し、平成11年度は側道部分の発掘調査（第2次調査）を先に実施し、次に本線部分の予備調査（第1次調査）を行うこととし、平成12年度に本道部分の発掘調査（第3次調査）を実施するとの合意がなされ、平成11年度の第1・2次調査を実施している。

平成11年度に実施した本線部分の第1次調査の結果から、遺跡の南側には多数の住居跡と遺物の分布が2層に分かれて存在することが確認され、二面の集落跡が同一地点に所在すると推測された。また、北側には遺物の出土は少数であるが、河川跡または水田跡の存在が考えられ

た。この結果に基づき、山形県埋蔵文化財センターが日本道路公団の委託を受けて、平成12年度に第3次発掘調査が実施された。

## 2 調査の概要

調査に先立って、平成11年4月13日と9月10日そして、平成12年4月13日に日本道路公団東北支社山形工事事務所と山形県埋蔵文化財センターによる渋江遺跡発掘調査に関する打ち合わせ及び調整を行った。

以下に第2・3次調査の概要を述べる。なお、第1次調査については、「東北中央自動車道相馬・尾花沢線関係予備調査報告書(3)」山形県埋蔵文化財センター調査報告書第73集に掲載してあるので割愛する。

### 〈・第2次調査の概要〉

調査対象区域は西側の側道部分で未買収地を除く、面積770m<sup>2</sup>について平成11年9月20日～10月29日までの実働27日間で実施した。

調査は、対象部分について重機を使用して表土除去した後、計画路線内のセンター杭STA167+50mとSTA168を基準とし調査区に5m×5mを1単位とする方眼グリッドを設定した。

その後、人手により土を丁寧に削り遺構を検出する面整理作業を行った。次に、検出された遺構に登録番号を付け、土層観察のため覆土をベルト状に残したり、半截したのち完掘した。

遺物は、一括出土品・残存状態の良いものについて登録番号を付し、他は遺構・グリッド毎に取り上げた。また、遺構の精査と併行して遺構の平面図・断面図の作成、写真撮影などの諸記録作業、遺物の取り上げを行い10月29日に調査を終了した。

調査終了後の11月9日に第1次調査区域を含めた空中写真撮影を実施し、翌日の11月10日に関係者のみによる第1・2次調査の説明会を現地で開催、そして11月12日に機材撤収を行った。

### 〈・第3次調査の概要〉

前年度の予備調査・第2次調査の結果より、二面の集落跡を加味して面積7,300m<sup>2</sup>について平成12年4月17日～9月27日までの実働106日間で実施した。

調査は、二面の集落跡が確認された対象区域南側について1回目の表土除去を重機を使用して行い、前年度を踏襲して調査区に5m×5mを1単位とする方眼グリッドを設定した。

その後、人手により土を丁寧に削り遺構を検出する面整理作業を行い、検出された遺構に登録番号を付け、土層観察のため覆土をベルト状に残したり、半截したのち完掘した。

遺物は、完形品・一括出土品について登録番号を付し、他は遺構またはグリッド毎に取り上げた。また、遺構の精査と併行して遺構の平面図・断面図の作成、写真撮影などの諸記録作業、遺物の取り上げを行うと同時に下面の遺構分布を把握するためのトレンドを設定し、人力により掘り下げた。上面の調査が終盤に近づいた7月13日に調査の成果を広く公表する第1回目の調査説明会を現地にて開催し、山形市立明治小学校と山形市立第七中学校の生徒達をはじめ多数の参加者を得ることができた。

上面の調査区全体の空中写真撮影を翌14日に実施し、上面の調査を終了した。翌週の7月17日からは、調査区南側の二面目及び北東半の表土除去そして、北西部の遺構確認トレンド掘り下げを重機械を使用して行った。さらに、5m×5mを1単位とする方眼グリッドを上面と

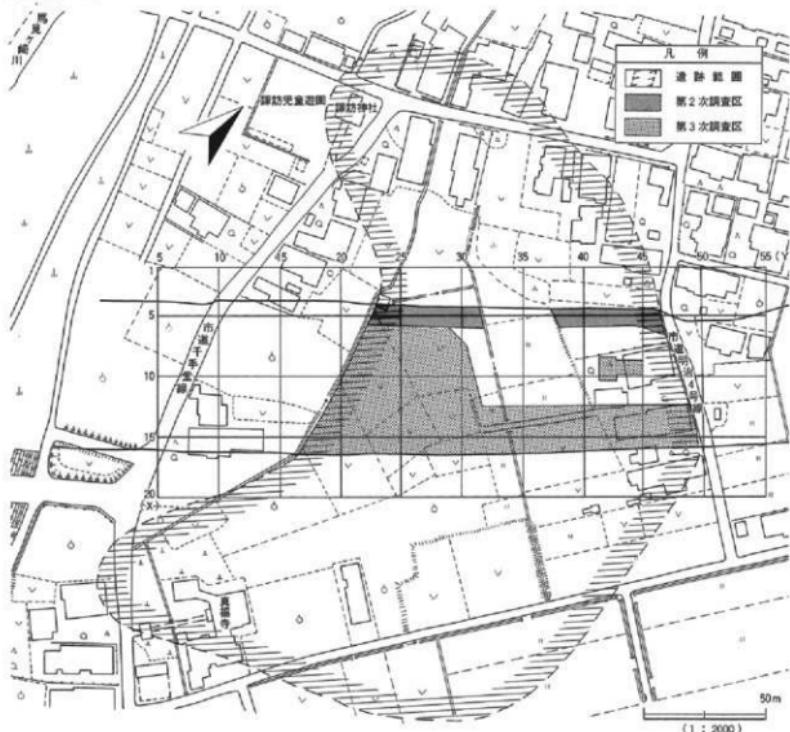
同様に設定した。

その後、人手により土を丁寧に削り遺構を検出する面整理作業を行った結果、南側で下層面の遺構が検出されたが、北東半及び北西部では、少数の遺物は出土するものの、遺構は発見されなかったことから、調査区北側は平面図・断面図そして、写真撮影を行い調査を終了した。

調査区南側の下層面は、遺構を検出した後、遺構に登録番号を付け、土層観察のため覆土をベルト状に残したり、半蔵したのち完掘していった。

遺物は、完形品・一括出土品について登録番号を付し、他は遺構毎またはグリッド毎に取り上げた。また、遺構の精査と併行して遺構の平面図・断面図の作成、写真撮影などの諸記録作業、遺物の取り上げを行った。調査終了が近づいた9月21日に下面の調査区全体の空中写真撮影を実施し、秋分の日の9月23日に第2回目の調査説明会を向河原遺跡と合同で開催し、多くの参加者から説明を聞いていただくことができた。

そして、9月27日に洪江遺跡の調査を終了し、機材撤収は向河原遺跡の調査終了日の10月13日に行なった。



第1図 調査区概要図

## II 遺跡の立地と環境

### 1 立地と地理的環境

山形市は、県中央部東寄り山形盆地の南部に位置し、市域は東が奥羽山脈西斜面の丘陵地帯から、西は出羽山地東斜面の丘陵帶に及ぶ。また、中央平野部を北流する須川は東部山岳帯から流れる馬見ヶ崎川・立谷川などの中小河川と西部出羽丘陵帶から流れる本沢川・富神川などの小河川を集め、市の北西で最上川に注ぐ。扇状地は立谷川と馬見ヶ崎川で発達し、市の中心部をなす旧山形城下町は馬見ヶ崎川扇状地の扇央湧泉帶に形成されている。

渋江遺跡は山形市北西部の立谷川扇状地扇端部にあたる山形市大字渋江字田中に所在し、馬見ヶ崎川（白川）右岸の自然堤防上に立地し、標高97mを測る。

遺跡が所在する渋江地区は山形市中央部から北西約6km、山形盆地の中央部、立谷川と馬見ヶ崎川の下流沿岸に位置する。渋江・田中・三条ノ目の3集落を有し、昭和29年に山形市に編入されるまでは隣接する灰塚・中野目と共に明治村を構成していた。

地区の北東部には豊かな水田地帯が広がり、近年では果樹や畑作生産も盛んな農業地域であるが、馬見ヶ崎川・立谷川の他、西方に須川が存在し、最上川の支流である三本の河川が近隣を流れているために、昔から水害に悩まされた地域であった。しかし、昭和25年頃から開始された土地改良事業や昭和35年からの白川沿岸畠地区画整理事業などの大事業で水害や干害の克服に努力した農業先進地域である。

現在は、地区を南北に縦断する東北中央自動車道の建設と共に周辺道路網の整備が着々と進んでいる。

### 2 歴史的環境

渋江遺跡が所在する山形市北西部は、立谷川と馬見ヶ崎川（白川）によって形成された肥沃な扇状地と豊富な水により、太古より集落が営まれてきたと考えられ、周辺には稻作が本格化する弥生時代から中世にかけての遺跡が多く点在する。

遺跡の南東方向約2.0kmに立地する弥生時代後期の七浦遺跡は、連弧文・連綫山形文などの桜井式に併行する土器の他に3本の石包丁が伴出している。

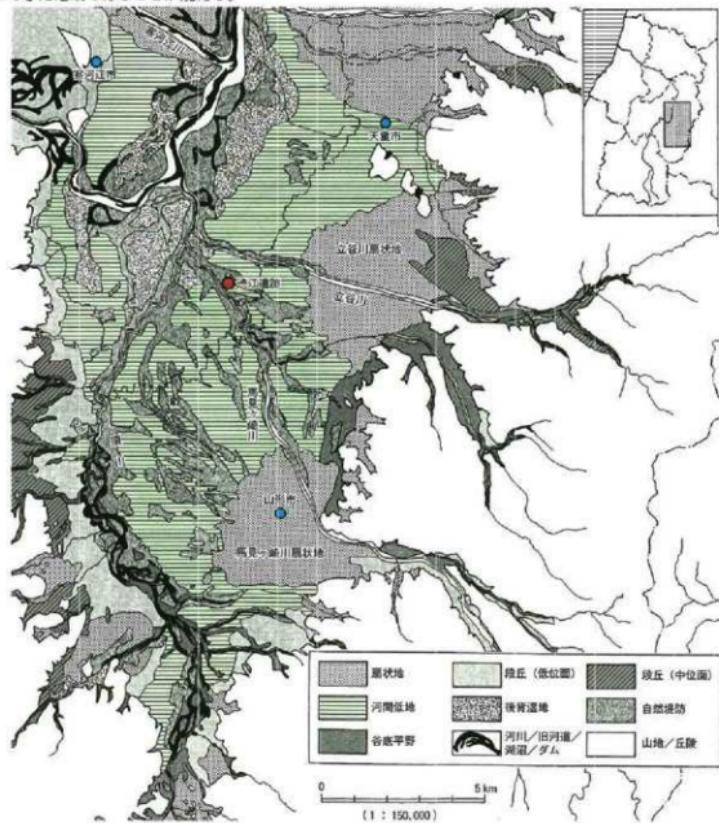
**衛守塚古墳群** また、古墳時代の遺跡としては、本遺跡の南方約4.0kmに位置する国指定史跡の鷲遺跡をはじめ、漆山地区的衛守塚古墳群などが所在する。衛守塚古墳群の2号墳は明治12年に発掘調査され、墳丘裾部に長丸太が打ち込まれている径11m・高さ1.5mの円墳であることが確認された。墳丘内部からは竹櫛残片や弓残片などの副葬品を伴う木棺が出土している。

**中野城跡** そして、北西方向2.0kmに所在する中野城跡は、中世の連郭式の平城で本丸の規模は東西36m・南北32mで二の丸まで構築されていた17haに及ぶ大規模な城跡である。『漆山県令編年記』に「中野村の義は、義光公より山形城と同格なり、御世繼人在城なり」と記述があるように、山形城の最も有力な支城であった。

さらに、遺跡の近隣には東北中央自動車道建設工事に伴い平成11年度～13年度にかけて緊急発掘調査が実施された、向河原遺跡・服部遺跡・藤治屋敷遺跡・馬洗場B遺跡が馬見ヶ崎川南方の自然堤防上に立地する。これらの遺跡からは古墳時代から奈良・平安時代の集落跡、河川が発見されている。

服部・藤治屋敷遺跡は、河川跡から土器と共に農耕具や建物の部材など多数の木製品が出土し、馬洗場B遺跡からは平安時代の集落跡の下層から古墳時代前期の集落跡が検出され、土器などと共に青銅鏡の「内行花文鏡」が出土している。「内行花文鏡」は古墳時代のものとして 内行花文鏡は日本海側最北の出土例として注目される。

肥沃な土地と、豊富な水などの恵まれた自然条件により、途切れること無く人々の生活が営まれてきた地域であることが窺える。



第2図 地形分類図



第3図 通路位置図（国土地理院発行2万5千分の1地形図「山形北部」を使用）

### III 遺跡の概要

#### 1 遺跡層序

遺跡は、立谷川扇状地の扇端部に位置し、馬見ヶ崎川下流の白川右岸の自然堤防上の畠地・果樹・水田地帯に立地する。

層序の確認は、第3次調査の遺跡の中心となる南側の調査区（A-A'）と遺跡の範囲確認のためのトレント（B-B'）そして、第2次調査区の北側部分（C-C'）の3ヵ所で行った。各層序について概略を記す。

遺跡の中心となる調査区は9層に細分され、I層は畠地の耕作土で厚さ10~15cmを測る。II層は暗褐色のシルトでにぶい赤褐色シルトを点状に混入し、III層は黒褐色シルトに暗褐色シルトを斑状に含む。IV層は暗褐色シルトとなる。このIV層の下面が上層の遺構確認面となり、表土から約40cmの深さを測る。遺構確認面となるV層は暗褐色シルトで、炭化粒を混入する黒褐色シルトのVI層と同じ黒褐色シルトのVII層を帯状に堆積する。そして、VII層下に一部VIII層を挟み下層の遺構確認面となる暗褐色シルトのIX層となる。IX層下面是泥炭層が広がる。

範囲確認トレンチの堆積土は8層に細分され、前述の層序とは異なりI層の耕作土が厚さ30~60cmを測り深く耕作されている。下面のII層も草の根を混入する暗褐色シルトで耕作土に近い様相を示す。III層・IV層は黒褐色シルトではば均質に堆積し固くしまっている。V層は灰黄褐色の粘質シルトでIV層とV層の土を斑状に混入している。そして、V層の下層は粘土質になりグライ化がみられる層が堆積する。VI層が黒色粘土、VII層は褐灰色粘土、VIII層は黒褐色粘土となる。VIII層は各層とも厚さ10cm程の深さで堆積し、VIII層は30cmの厚さを測る。V~VIII層は泥炭層と考えられる。このトレントからは遺構が検出されず、遺物の出土もほとんど無い。

第2次調査の北側調査区も、前述の2ヵ所の層序とは異なり、各層が厚く堆積し全体にしまりがない様相を示した。層序は6層に細分され、各層が比較的厚く堆積する。

I層は耕作土で30~40cmを測る。I層下面に堆積するII・V層は黒褐色シルトで、V層中にII層の土がブロック状に混入している。両層共に厚さ35cmを測る。また、黒褐色シルト質粘土であるIV層はII層下面に帯状に薄く堆積している。これら、II・VI・V層直下がこの調査区の遺構確認面となり、III層の黒褐色シルト質粘土及びVI層の黒褐色砂質シルトが堆積する。表土から確認面までの深さは約60cmを測る。

以上3ヵ所の層序概略を述べたが、遺構の密な地域の南半と希薄な地域の北半で層序の違いが顕著にみられた。

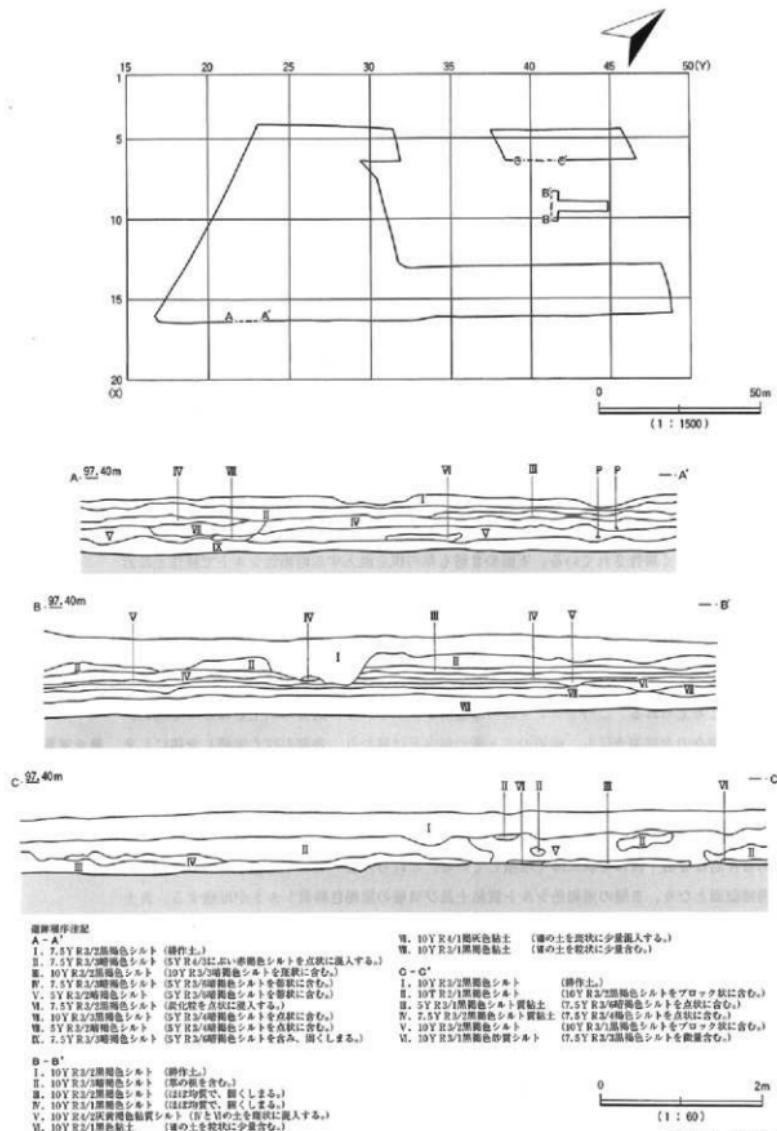
密な地域はシルト質の土が堆積しているのに対して希薄な地域は粘土質もしくは粘土が堆積し、下層部はグライ化に近い傾向を示している。これは、遺構の密な地域が河川に近いために、氾濫による影響を受け、砂質に近い土が堆積していったことと、地目が畠地であったことも要因として考えられ、遺構の希薄な地域は、水田であったために粘土に近い土質を示したと推測される。

第3次調査区

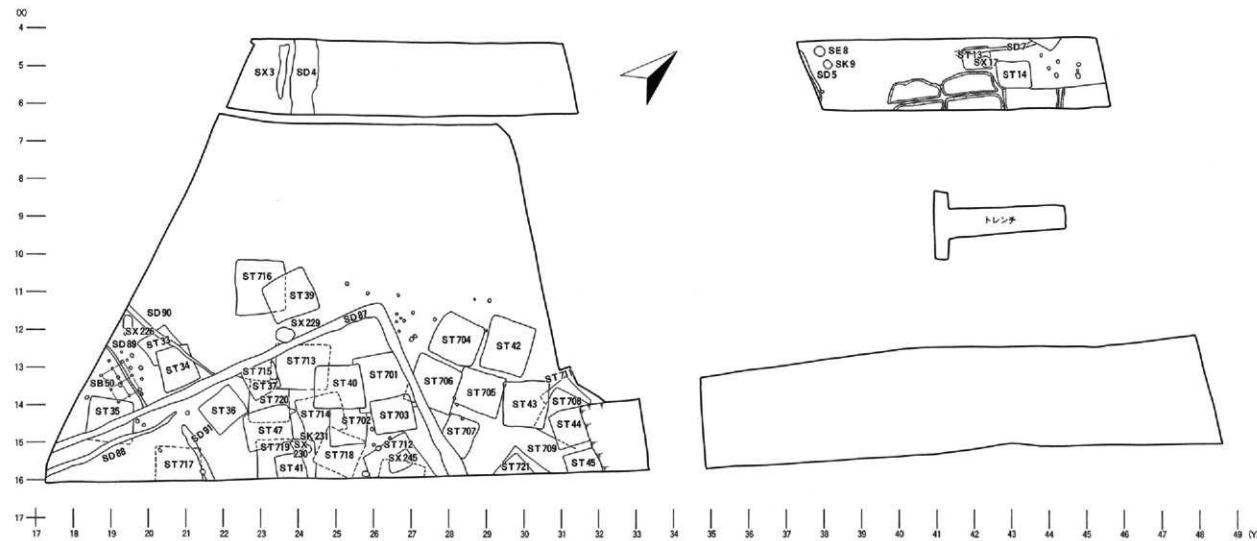
トレント

第2次調査区

### III 造跡の概要



第4図 基本層序



0  
20m  
(1 : 500)

第5図 通路配置図

## 2 遺構と遺物の分布

今回の第2・3次調査で検出された主な遺構は、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、井戸跡、土坑、溝跡などであり、分布状況は、調査区の北東部及び南西部に集中する傾向を示した。

第2次調査区では、南側が暗渠で一部破壊を受けている溝跡1条と性格不明遺構1基なのに對して、北側は竪穴住居跡2棟、井戸跡1基、土坑、溝跡などが検出された。但し、この第2次調査区は遺物の出土も少なく、遺構の遺存状態も良くない。

第3次調査区においては、北側は泥炭層となり、明確な遺構が検出されなかつたのに対し、南側からは焼失住居を含む竪穴住居跡33棟、掘立柱建物跡1棟の他に溝跡、土坑、性格不明遺構などが検出された。そして、南側の調査区でも東半と西半で分布状況に顕著な違いがみられ、西半には明確な遺構が皆無なのに対し、東半に前述の遺構が全て集中し、古墳時代の遺構と中世の溝跡が混在している状況である。また、この区域には古墳時代の集落跡が二面確認されたが、その分布も上層・下層とも同じ状況を示し、住居の重複もみられ同様の区域で建て替えが行われていることが窺える。そして、溝跡が古墳時代の住居跡を壊し構築されており、調査区南東部が遺構の集中区域となっている。

遺物は、整理箱にして第2次調査で6箱、第3次調査で72箱の計78箱出土した。古墳時代の遺物が大半を占め、他に石器や弥生土器そして中世の陶器、古錢などがある。

第2次調査区の遺物は、古墳時代の土器片が北側の調査区で多く出土し、南側の調査区からは、溝跡から出土した古錢・陶磁器などの中近世の遺物数点であり、南側と北側の調査区で分布状況の違いがみられた。但し、北側の調査区でも一括出土の遺物は少なく、破片が多数を占めその遺存状況は良くない。

第3次調査区では、遺構の分布と同様に北側では近世の遺物が数点のみであり、出土遺物の9割以上が南側の調査区に集中している。遺物は、ほとんどが古墳時代の土器であるが、石器や弥生土器、中世の陶器なども出土している。

古墳時代の遺物は、大半が遺構の分布と同じ分布状況を示し、竪穴住居や土坑などの覆土から出土しているが、一部まとまって包含層から出土したものもみられた。石器は住居跡や溝跡からの出土もあるが二次的混入と推測される。

弥生土器はグリッド出土が多くを占めるが、古墳時代の住居跡覆土中からの出土もみられた。但し、その分布は調査区東側に偏り、南東端に多数集中している傾向があり、この周辺に当該期の遺構の存在を窺わせる分布を示した。

中世の陶磁器類は、中世期の溝跡から多く出土した。但し、この溝跡の覆土からは古墳時代の土器なども出土している。しかし、古墳時代の住居跡を破壊して溝跡が構築されていることから、その際に混入したものと考えられる。以上、各時代の遺物が混在するものの遺物の分布も遺構の分布と概ね同じ状況を示していた。

上記の遺構と遺物の分布状況から、第2・3次の調査区は遺跡の西側部分にあたり、集落跡の西端部と考えられる。従って、遺跡は東側に広がり、集落跡の中心は東側に存在すると考えられた。

第2次調査区の遺構分布

第3次調査区の遺構分布

第2次調査区の遺物分布

第3次調査区の遺物分布

## IV 遺構

### 1 壇穴住居跡

壇穴住居跡は第2次調査区で2棟、第3次調査区の上層で16棟、下層で17棟の調査区全体で重複も含め総計35棟検出された。時期差はあるものの古墳時代に属すると考えられる。遺存状態は一部の破壊がみられたが、土器がまとまって出土したものが多くを占め、概ね良好であった。また、焼失住居跡と考えられるものも検出されている。以下に、第2次調査区及び第3次調査区の上層・下層各住居跡の概要を述べる。

#### 第2次調査区 (1) 第2次調査区の壇穴住居跡

##### S T13 (第6図)

第2次調査区北側の4-42・43Gで検出された。西側をS D 7に北東隅をS X17に切られる。平面プランは長辺約3.7m、短辺約3.0mの長方形を呈し、床面までの深さは確認面から約20cmを測る。長辺の主軸はN-36° 50' -Eを測る。

壁は緩やかに立ち上がり、床面は堅くしまり平坦である。柱穴が西側に2基(E P26・27)と東側に3基(E P28~30)検出されたが、E P26・27はS D 7、E P30はS X17の底面から検出されている。遺物は、覆土及び床面付近から土師器の壊、甕の破片などが出土した。

##### S T14 (第6図)

第2次調査区北側の5-43・44GでS T13の北東隅で検出された。平面プランは長辺約4.7m、短辺約3.7mのはば長方形を呈し、床面までの深さは確認面から約20cmを測る。長辺の主軸はN-45° 50' -Eを測る。

壁は緩やかに立ち上がり、床面は堅くしまり平坦である。床面から7基の柱穴(E P18~24)が検出された。遺物は図示できなかったが、土師器の壊破片の他に覆土から近世の陶器片なども出土している。

#### 第3次調査区上層 (2) 第3次調査区上層の壇穴住居跡

##### S T33・34 (第7図)

S T33は調査区南側の12-20・21GでS T34と重複して検出され、東側をS T34に切られ西側壁の一部をS D90に切られる。平面プランは長辺約4.5m、短辺4.0m以上を測る長方形を呈すると言えられる。床面までの深さは確認面から約10cmと浅い。長辺の主軸はN-6° 50' -Eを測る。壁の立ち上がりは急で、床面は堅くしまり平坦である。床面から8基の柱穴(E P398~405)が検出された。遺物は覆土から土師器の略完形の壊や甕の破片などが出土している。

S T34は、調査区南側12・13-21・22GでS T33と重複して検出された。西側でS T33を切り、西壁と北壁の一部をS D90に切られる。平面プランは長辺約5.4m、短辺約4.8mを測る長方形を呈する。床面までの深さは確認面から約15cmを測る。長辺の主軸はN-66° -Wを測る。

壁の立ち上がりは急で、床面は堅くしまり平坦である。床面から柱穴が東側に3基（E P 393～395）と西側に5基（E P 390～392・396・397）の計8基検出された。遺物は、土師器の壺、両黒土器、高坏、甕などが覆土及び床面から出土した。

#### S T 35 (第8～10図)

焼失住居

調査区南側隅14・15・19・20Gで検出され、S D 87・88に切られる。平面プランは長辺約6.2m、短辺約5.7mを測る長方形を呈する。床面までの深さは確認面から約25cmを測り、主軸方位はN-47°-Eを測る。

住居内全域に炭や炭化した建築部材と焼土が遺存し焼失住居である。建築部材は、住居跡の中央部に向かうように残存しているのが認められた。壁の立ち上がりは急で、床面は軋らかく、遺物、炭化部材の遺存により床面を確認した。内部施設は、住居北東壁中央部の内側にカマド（E L 585）1基と南東壁付近に長径1.1m、短径1.0m、深さ20～25cmを測る貯蔵穴（E K 412）が1基確認された。柱穴は床面から5基（E P 570～574）検出された。

カマドは、西側一部をS D 87に破壊されているが、煙道を持たず逆U字状に構築されている内部燃焼型の様相を示し中央先端部に丸形で頭の長い壺を、手前に壺を設置している様子を窺わせる土器の出土状態である。そして、カマド横には床面より一段高い断面が台形状となる盛り上がりが確認され、土師器の壺、甕、鉢などがまとめて出土したが詳細は不明。

遺物は住居内やカマド付近、そして貯蔵穴などから土師器の壺、両黒土器、甕、鉢、などの他にカマドの支脚に使用されたとも考えられる石製品も出土している。

#### S T 36 (第11図)

調査区南側で東寄りの13・14-22・23Gで検出された。平面プランは長辺約5.4m、短辺約4.6mを測る長方形を呈する。確認面から床面までの深さ15cmを測り、長辺の主軸はN-3°50' -Eを測る。壁は緩やかに立ち上がり、床面は堅くしまり平坦である。床面から7基の柱穴（E P 352-358）が検出された。また、住居跡の中央部に炭化物の集中域と炭化材が検出されている。

遺物は、土師器の壺・甕・鉢などが覆土や床面から出土している。

#### S T 37 (第12図)

調査区南側で東寄りの中央13-23・24Gで検出され、西側をS D 87に切られる。平面プランは南北約4.3m、東西4.0m以上を測る不整形方を呈すると考えられる。床面までの深さは確認面から約15cmを測り、南北軸はN-9°50' -Eを測る。壁は急角度で立ち上がり、床面は軋らかく凹凸が認められる。また、S T 36と同様に住居跡の中央部に炭化物と炭化材が検出されている。

床面からは6基の柱穴（E P 385～389・478）が検出され、その位置などからE P 385-388が主柱穴と考えられる。

遺物は、土師器の壺、甕、高坏の脚部、瓶などが覆土から出土している。

#### S T 39 (第13図)

南側調査区のはば中央10・11-24・25Gで検出された。平面プランは長辺約6.5m、短辺約6.0mの長方形を呈する。床面までの深さは確認面から約20cmを測り、長辺の主軸はN-16°-Eを測る。壁は緩やかに立ち上がり、床面は堅くしまり平坦である。また、住居跡内の南壁

付近から炭化物と焼土が認められ、地床炉とも考えられたが明確には検出されなかった。柱穴は床面から8基（E P 377～384）検出され、その規模と位置からE P 377～380が主柱穴と推測される。遺物は、土師器の壺、甕、壺の破片が覆土から出土した。

#### S T 40・702・703（第14・15図）

S T 40は南側調査区の13・14・25・26Gで、S T 701・702と重複して検出された。平面プランは長辺約6.1～7.1m、短辺約5.6～6.0mの長方形を呈する。確認面から床面までの深さは約20cmを測り、長辺の主軸はN-42°—Eを測る。

壁は緩やかに立ち上がり、床面は堅くしまり平坦である。柱穴は床面から6基（E P 419～424）検出された。また、住居内西隅から土器と共に焼土と炭化物が検出されており、カマドが構築されていたとも考えられる。遺物は、西隅の焼土部分を中心に覆土及び床面から土師器の壺、鉢、甕、壺、甕などが出土している。

S T 702は14・15・25・26GでS T 40の東側に接して検出され、西側をS T 701・702に切られる。平面プランは長辺5.2m以上、短辺約5.1mを測る長方形を呈すると考えられる。長辺の主軸はN-45° 50'—Wを測る。壁は緩やかに立ち上がり、床面は堅くしまり平坦である。柱穴は床面から3基（E P 416～418）検出された。

遺物は、覆土から土師器の壺や破片資料の他に古墳時代の須恵器甕破片が出土している。

S T 703は13・14・26～28GでS T 702の北東側でS T 701と重複して検出された。平面プランは長辺約5.5m、短辺約4.6mの長方形を呈する。確認面からの深さ約15cmを測り、長辺の主軸はN-34° 10'—Eを測る。壁は急角度に立ち上がり、床面は堅くしまり平坦である。柱穴は床面から6基（E P 406～411）検出された。

遺物は覆土から土師器の土器片と古墳時代の須恵器甕破片が出土している。

#### S T 701（第16・17図）

南側調査区13～15～26～28Gで検出され、北側をS D 87に切られ南側をS T 40に、東側をS T 703に切られる。平面プランは長辺7.7m以上、短辺約7.5mを測る長方形を呈すると考えられる。深さは確認面から約15cmを測り、主軸方位はN-28°—Eを測る。壁の立ち上がりは急角度で、床面は堅くしまり平坦である。内部施設はカマド1基（E L 429）と貯蔵穴2基（E K 426・472）が確認された。

カマドは北側中央に構築され、先端部はS D 87に破壊され袖部分が残存している。また、貯蔵穴は径約80cmで深さ約30cmを測るE K 472が北側隣に、径約55cmで深さ約15cmを測るE K 426が北側隣にそれぞれ検出された。柱穴は床面から5基（E P 413～415・427・428）が住居内西側に集中して検出された。

遺物は、土師器の壺、甕、壺のほか菅玉、砥石も出土している。

#### S T 41（第18図）

調査区南側15～24・25Gで検出され、東側は調査区外に延びると考えられる。平面プランは南北約4.1m、東西3.2m以上を測る方形を呈すると推測される。深さは、確認面から約25cmを測り、南北軸はN-28° 60'—Eを測る。壁は急角度で立ち上がり、床面は堅くしまり平坦である。柱穴は床面から9基（E P 359～367）確認された。

TK 23型式並行 遺物は、覆土及び床面からTK 23型式並行の須恵器の壺蓋、甕破片と土師器の破片などが出土

土した。

#### S T 42 (第19図)

調査区の11~13~29~31Gで検出された。近世の暗渠及び歯跡 (S D71~74) によって擾乱を受けている。平面プランは長辺約6.8m、短辺約6.0mを測る長方形を呈する。確認面からの深さは約15cmを測り、主軸方位はN-51° 60' -Eを測る。壁は急角度で立ち上がり、床面は堅くしまり平坦である。内部施設は東壁にカマド1基(E L324)と貯藏穴2基(E K323・328)が確認された。

カマドは東壁中央部に検出され土器、焼土が残存するのみで大半は破壊を受けていた。また、貯藏穴は長径45cm、短径30cm、深さ約10cmを測るE K323がカマドの東に、径約55cmで深さ約15cmを測るE K328が西側に検出された。柱穴は床面及び歯跡底面から9基(E P325~327・329~334)検出された。住居跡内に炭化材及び炭化物の散乱が確認され、焼失住居と考えられる。遺物は覆土、床面、カマド、貯藏穴から土師器の壺、高杯、壺、甕などの他に砥石が出土した。小型の丸底壺は外面に彩色が施されている。

#### S T 43 (第20図)

調査区の13・14~30・31Gで検出され、近世の暗渠及び歯跡 (S D75・76) によって擾乱を受けている。平面プランは長辺約6.1m、短辺約5.9mを測る長方形を呈する。確認面からの深さ約20cmを測り、主軸方位はN-47° 50' -Eを測る。壁は急角度で立ち上がり、床面は堅くしまり平坦である。内部施設はカマド1基(E L322)が東壁に確認されたが、焼土が残存するのみで大半は破壊を受けていた。柱穴は床面から20基(E P301~321)検出され、E P301・304・306・308・310・311・314・318~321が壁柱穴となり、E P303・313がその規模、位置から主柱穴と考えられる。

遺物は、覆土から土師器の鉢、甕などが出土した。

#### S T 44 (第21図)

調査区の14・15~30・31Gで検出されたが、北側は泥炭層となり残存していなかった。平面プランは南北4.3m以上、東西約5.0mを測る長方形を呈すると考えられる。確認面からの深さ約15cmを測り、主軸方位はN-21° 50' -Eを測る。壁は急角度で立ち上がり、床面は堅くしまり平坦である。内部施設はカマド1基(E L376)が北東側に検出されたが、土器、焼土が残存するのみで大半は破壊を受けていた。また、詳細は不明であるが、床面に小窓が集中する部分とカマドが破壊される際に拡散したと考えられる焼土と炭化物の広がりが認められた。柱穴は床面から6基(E P346~351)検出され、規模、位置からE P346・348・350・351が主柱穴と推測される。遺物は、カマドや覆土、床面からT K47型式並行の須恵器の壺蓋、土師器の壺、鉢、甕、壺、壺などが出土した。壺には須恵器模倣のものが2点ある。

T K47型式並行

#### S T 45 (第22図)

調査区の15~32・33Gで検出され、北側は泥炭層で東側は調査区外となる。規模は南北4.9m以上、東西3.5m以上を測る。確認面からの深さは約15cmを測り、南北軸はN-22° 20' -Eを測る。壁は急角度で立ち上がり、床面には若干の凹凸が認められる。床面から柱穴が10基(E P335~344)検出された。

遺物は、覆土から土師器の破片が出土している。

## S T47 (第23・24図)

調査区の14・15・23・24Gで検出された。平面プランは長辺約6.3m、短辺約5.1mの長方形を呈する。確認面からの深さは約20cmを測り、主軸方位はN-27° 10' -Eを測る。

壁は緩やかに立ち上がり、床面は堅くしまり平坦である。内部施設はカマド1基(E L345)と貯蔵穴2基(E K372・373)が検出された。カマドは北壁の西端に構築され、竪穴外に約1.0m程突出し底面に土器片を數く構造で炭化物が検出されている。貯蔵穴は長径70cm、短径50cm、深さ10cmのE K372と径50cm、深さ10cmを測るE K373が重複して南東床面に検出された。さらに、周溝(E D550)及び柱穴6基(E P369-371・374・375・473)が床面から検出され、規模・位置などからE P369・370・371・473が主柱穴と考えられる。また、住居内南東隅に遺物を一括発見したとも推測される遺物の集中部分が検出されている。

出土遺物は覆土、床面、カマド底面から土師器の壊、壺、壺、古墳時代の須恵器壺破片などが出土した。

## 第3次調査区層 (3) 第3次調査区下層の竪穴住居跡

## 前期の住居跡 S T704 (第25図)

調査区の11・12・28・29Gで検出され、S T42の西側に位置する。平面プランは一辺約6.0mを測る正方形を呈する。確認面からの深さは約15cmを測り、南北軸はN-22° 40' -Eを測る。壁は急角度で立ち上がり、床面は堅くしまり平坦で周溝(E D442)が巡る。住居内中央付近から焼土と炭化物が検出され、地床炉とも考えられるが明確な炉跡は検出されなかった。また、床面から柱穴が6基(E P443-447・471)が検出され、規模・位置などからE P443・444・447・471が主柱穴と考えられる。

遺物は焼土・炭化物の集中部分を主に土師器の壺、壺の他に、床面付近から古墳時代前期に属すると考えられる器台、小型の鉢などが出土した。

## S T705 (第26・27図)

調査区の13・14・29・30Gで検出され、S T704の東側に位置し西側でS T706を切る。平面プランは長辺約6.2m、短辺約5.4mを測る長方形を呈する。確認面からの深さは約15cmを測り、主軸方位はN-58° 10' -Eを測る。壁は急角度で立ち上がり、床面は堅くしまり平坦である。内部施設はカマド1基(E L586)が検出された。カマドは住居跡東側に構築され、煙道を伴わない内部燃焼型となる。また、柱穴は床面から7基(E P430-436)が検出された。

遺物はカマド及び覆土、床面から土師器の壊、壺、壺などが出土している。

## 前期の住居跡 S T706 (第28図)

調査区12-14-27-29Gで検出され、S T704の南側に位置し南側をS D87に東側をS T705に切られる。平面プランは一辺約6.3mを測る方形を呈する。確認面からの深さは約10-15cmを測り、南北軸はN-25° -Wを測る。壁は緩やかに立ち上がり、床面は堅くしまり平坦である。内部施設は貯蔵穴が1基(E K553)西壁に検出されたが、北半をS D87に破壊されている。規模は径約1m、深さ約15cmを測る。柱穴は床面から3基(E P448・449・556)が検出されている。

遺物は、覆土及び床面から土師器の壺や壺の破片の他、古墳時代前期に属すると考えられる

土師器の彩色された器台などが出土している。

#### S T 707 (第29図)

調査区14・15・28・29Gで検出されS T706の東に位置し、南西隅をS D87に切られる。平面プランは長辺約4.5~5.0m、短辺約4.2mの台形状を呈する。確認面からの深さは約10~15cmを測り、長辺の主軸方位はN-23° 60' -Wを測る。壁は急角度で立ち上がり、床面は堅くしまり平坦である。住居内床面の南壁付近から少量の炭化材が検出されている。

柱穴は床面から5基（E P 437~441）検出され位置・規模などからE P 437・438・440・441が主柱穴と考えられる。

遺物は、床面及び覆土、柱穴から土師器の内黒土器や甕、土師器破片が出土した。

#### S T 709 (第30図)

調査区の15-30・31Gで検出され東半は調査区外となる。規模は東西6.0m以上、南北4.6m以上で確認面からの深さは約10cmを測る。南北軸はN-14° 60' -Wを測る。

壁は緩やかに立ち上がり、床面は堅くしまり平坦である。周溝と柱穴が北壁に検出され、住居内中央と考えられる南壁に少量の炭化物が検出された。

遺物は、覆土及び床面から土師器の土器破片が出土している。

#### S T 715 (第30図)

調査区13-23・24Gで検出されたが、西半は削平を受けていた。規模は東西3.1m以上、南北4.6m以上で確認面からの深さは約15cmを測る。南北軸はN-46° -Eを測る。

壁は急角度で立ち上がり、床面は堅くしまり平坦である。柱穴は床面から1基（E P 500）のみ検出された。遺物は出土しなかった。

#### S T 708・711 (第31図)

調査区の13・14-31・32Gで2棟重複して検出された。切り合いからS T708がS T711よりも新しいと推定される。

S T708は東側が泥炭層となり検出されず、平面プランは東西が6.5m以上、南北約6.3mを測る方形を呈すると考えられる。確認面からの深さは約10cmを測り、主軸方位はN-65° 50' -Eを測る。壁は急角度で立ち上がり、床面は堅くしまり平坦である。内部施設は、炉跡（E L 587）と考えられる焼土が住居内の東側に検出された。また、柱穴が床面から6基（E P 451~453・470・474・475）検出されている。

遺物は土師器の破片が出土している。

S T711は大半をS T708に切られて検出された。平面プランは東西約4.8m、南北約4.6mを測る長方形を呈すると考えられる。確認面からの深さは約15cmを測り、南北軸はほぼ磁北と一致する。壁は急角度で立ち上がり、床面は堅くしまり平坦である。床面から柱穴が3基（E P 476・477・450）検出された。

遺物は出土しなかったが、切り合いからS T708よりも古ないと推定される。

#### S T 712 (第32~34図)

調査区の14-15-26-28Gで検出され、東側が調査区外となる。当初、カマド（E L 486）を作り1棟の住居跡としたが、E L 486の周間に周溝らしきものが確認されたことから2棟の住居跡が重複していた可能性がある。しかし、明確に確認出来なかったことから今報告ではS

T712に伴うカマドとしている。

S T712の平面プランは長辺約7.3m、短辺約6.8mを測る長方形を呈すると推測される。確認面からの深さは約20cmを測り、長辺の方位はN-81°-Wを測る。壁は急角度で立ち上がり、床面は堅くしまり平坦である。柱穴は床面から8基（E P487～494）検出されたが、壁柱穴と考えられる。また、住居内中央や西側に遺物をまとめて廃棄したような状況を呈す、二次加熱を受けた遺物の集中部分が検出されている。

E L486は主軸方位がN-38°-Wを測り、貯蔵穴（E K584）を伴うコの字形状を呈し、煙道を持たない内部燃焼型と推測され、土器と共に炭化物、焼土が検出されている。

遺物は、E L486周辺から土師器の壺、高壺、甕、鉢などが出土し、S T712中央や西側からは土師器の壺、高壺などが出土している。また、土器には彩色された壺と高壺の脚部がある。

#### 焼失住居 S T713（第35図）

調査区の12・13-24・25Gで検出されたが、住居跡の大半が削平されていた。規模は東西4.1m以上、南北4.8m以上で確認面からの深さは約10cmを測る。南北軸はN-54°-Wを測る。

残存部分から焼土、炭化材、炭化物が出土したことから焼失住居と推定される。柱穴は床面及び削平部分から3基（E P566・567・581）検出された。

遺物は覆土から土師器の甕が出土している。

#### S T714（第36図）

調査区13・14-24-26Gで検出されたが、北側の大半が削平を受けていた。平面プランは長辺5.9m以上、短辺約5.1mを測る長方形を呈すると推定される。確認面からの深さは約15cmを測り、長辺の主軸方位はN-17°-Eを測る。柱穴は床面から8基（E P461-464・521・577-579）検出された。

遺物は覆土から土師器の甕口縁部片が出土した。

#### S T717（第37図）

調査区の15-21・22Gで検出されたが、大半が削平され東側は調査区外となる。規模は東西4.0m以上、南北6.0m以上を測ると考えられる。確認面からの深さは約10cmを測り、長辺の主軸方位はN-37°50'-Eを測る。壁は急角度で立ち上がり、床面は若干の凹凸が認められる。内部施設は南側にカマド1基（E L580）が検出された。また、柱穴が2基（E P554・555）西側に確認された。

遺物はカマド及び覆土、床面から土師器の壺、甕、壺、瓶、鉢などが出土している。

#### S T716（第38図）

調査区の10・11-23・24Gで検出された。平面プランは東西約7.0m、南北約6.6mを測る長方形を呈する。確認面からの深さは約10cmを測り、主軸方位はN-48°-Wを測る。壁は緩やかに立ち上がり、床面は堅くしまり平坦である。内部施設は南側にカマド1基（E L485）が検出された。E L485は、残存部分から煙道を持たない内部燃焼型と考えられる。また、柱穴は床面から5基（E P479-483）検出されている。

遺物は、カマド周辺及び床面、覆土から土師器の壺、甕、壺、瓶などが出土地している。

#### S T718（第39図）

調査区の14・15-25・26Gで検出された。削平を受けていたため壁の立ち上がりは不明で、

平面プランは長辺約5.7m、短辺約5.4mを測る長方形を呈する。長辺の主軸方位はN—65° 50'—Eを測り、床面は堅くしまり平坦である。柱穴は5基（E P 454～458）確認された。

遺物は覆土及び床面から、土師器の破片とTK 208型式並行の須恵器の壺蓋、壺の破片などTK 208型式並行が出土している。

#### S T 721 (第39図)

調査区の15—30・31Gで、S T 709の床面から検出された。東側が調査区外となるために西隅部分のみの検出となる。規模は東西3.7m以上、南北4.4m以上を測り、確認面からの深さは約10cmを測る。南北軸はほぼ南北と一致する。壁は急角度で立ち上がり、床面は堅くしまり平坦で、壁際を周溝（E D 551）が巡ると考えられる。また、周溝内側に小柱穴が4基確認され、主柱穴と推測される柱穴が1基（E P 552）検出された。

遺物は、覆土から土師器の壺が出土している。

#### S T 719 (第40・41図)

調査区の15・16—23—25Gで検出された。東側が調査区外となるため西半のみの検出となる。平面プランは長辺約7.7m、短辺5.1m以上を測る長方形を呈すると考えられる。確認面からの深さは約20cmを測り、主軸方位はN—39° 10'—Eを測る。壁は急角度で立ち上がり、床面は堅くしまり平坦である。住居跡内に多量の焼土や炭化材、炭化物の散乱が認められたことから焼失住居と推測される。

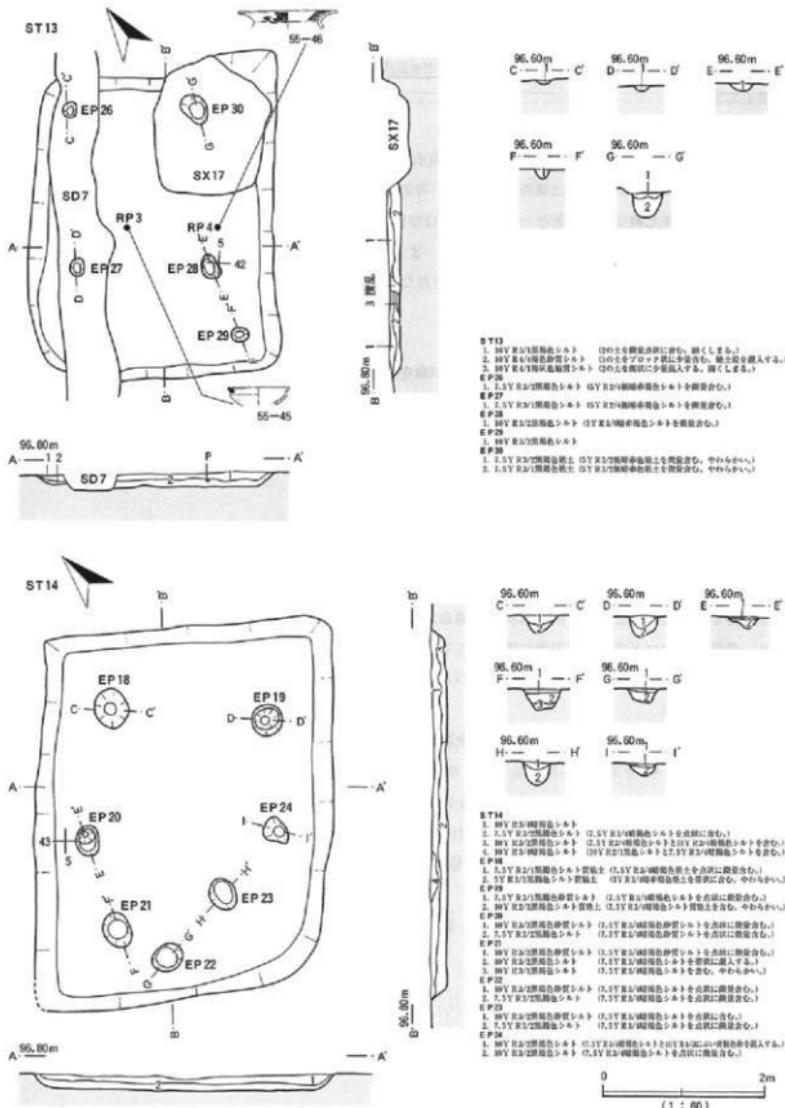
内部施設は北壁中央付近にカマド1基（E L 495）とカマド内側に貯蔵穴1基（E K 583）が検出された。E L 495は残存部分から煙道を持たない内部燃焼型と推測され、中央部から瓶の底部が出土している。また、E L 495西側に壺が2個体埋設されていた。貯蔵穴は長径約95cm、短径75cmを測る楕円形を呈し、深さ約30cmを測る。柱穴は床面から2基（E P 575・576）検出され、遺物は、カマド周辺及び床面や覆土からTK 208型式並行の須恵器の壺蓋、土師器の壺、壺、壺、瓶が出土し、壺には無類や複合口縁のものもある。TK 208型式並行

#### S T 720 (第42図)

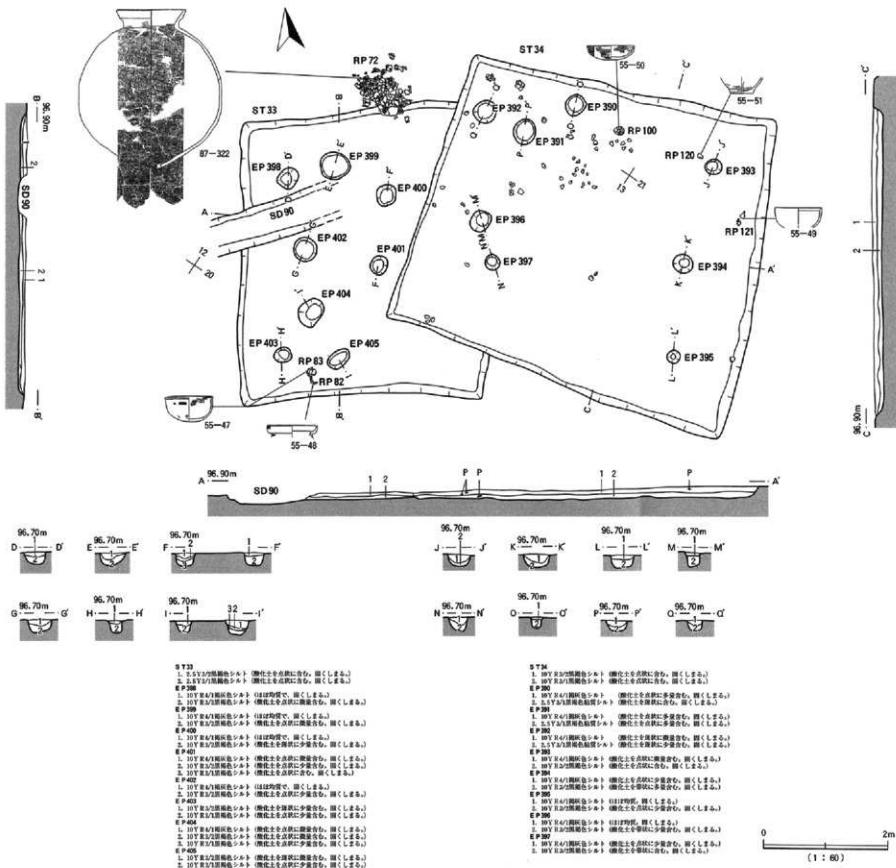
調査区の13・14—23・24Gで検出された。北隅をS T 713に西隅をS T 715に切られる。平面プランは一辺約5.4mを測る正方形を呈すると考えられる。確認面からの深さは約15cmを測り、南北軸はN—41° 50'—Eを測る。壁は緩やかに立ち上がり、床面は堅くしまり平坦である。住居内中央から焼土と炭化物の集中が認められ、地床炉（E L 496）と考えられる。柱穴は床面から6基（E P 497～499・568・569・582）検出された。規模・位置からE P 497～499・582が主柱穴と推測される。

遺物は、炉跡や覆土、床面から土師器の壺、壺の破片資料が出土した。

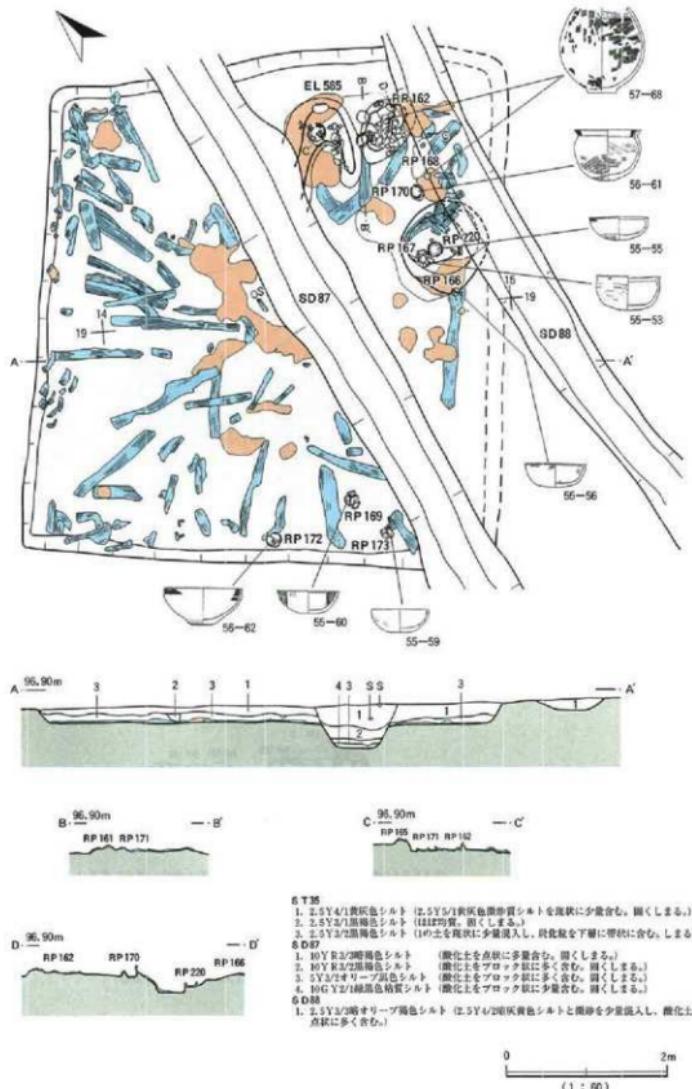
#### 焼失住居



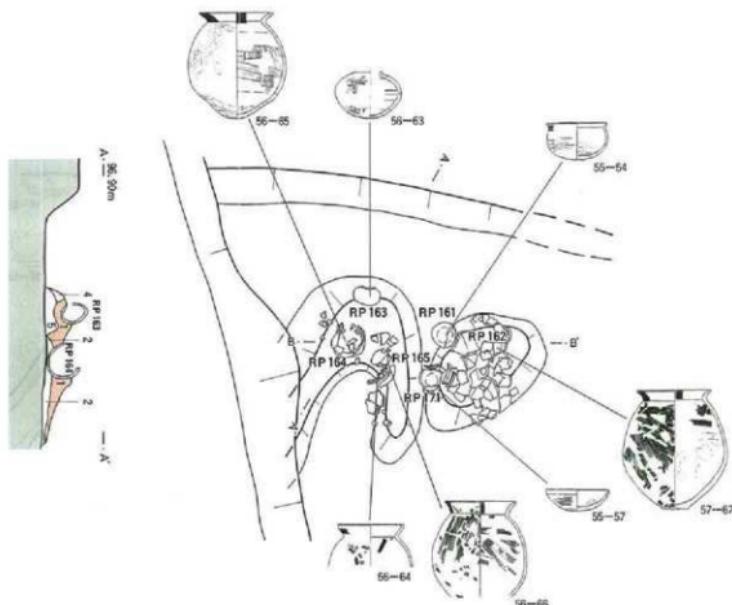
第6図 ST13・14



第7図 ST33・34



第8図 S T35焼土・炭化材分布図

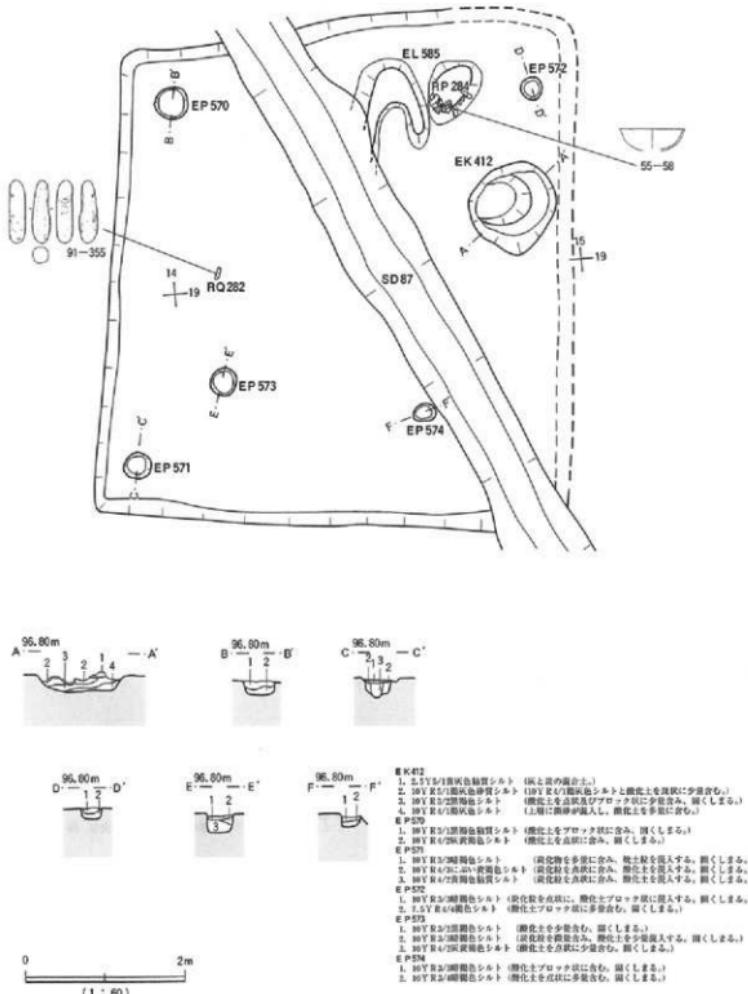


## S T35 - E L585

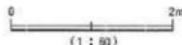
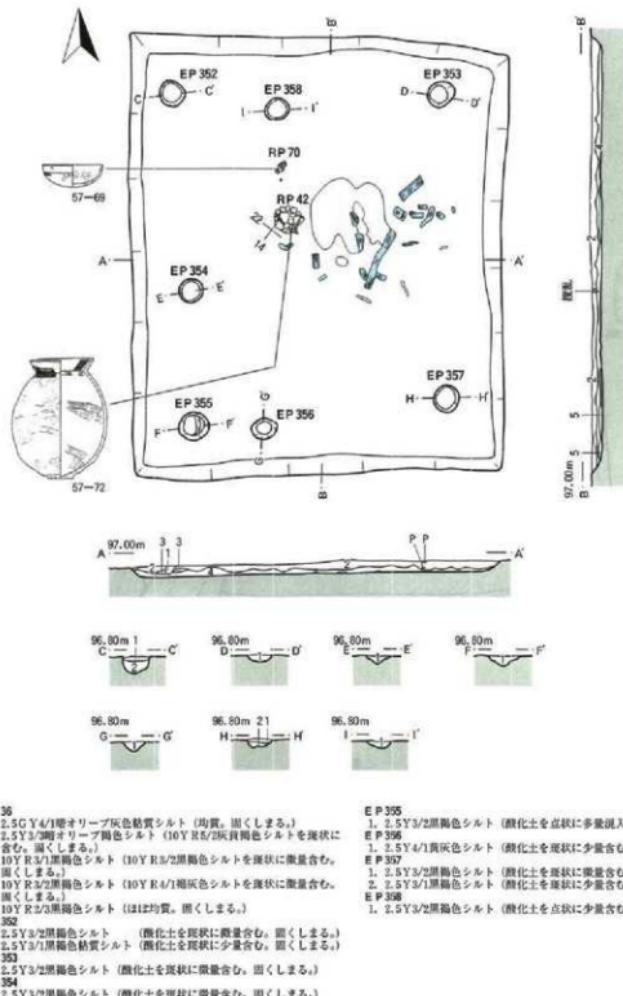
1. 7.5Y R 4/3褐色地土 (7.5Y R 8/3浅黄褐色地土をブロック状に多く含む。固くしまる。)
2. 7.5Y R 4/3褐色地土 (7.5Y R 8/3浅黄褐色地土と10Y R 2/2墨褐色シルトを帯状に多く含む。固くしまる。)
3. 10Y R 4/3にぶい黄褐色シルト (鉄化鉱を斑状に含む。固くしまる。)
4. 10Y R 4/3灰黄褐色粘質シルト (鉄化土を斑状に含み、固くしまる。)
5. 10Y R 4/3褐色粘質シルト (鉄化土を点状に微量含む。固くしまる。)
6. 10Y R 4/4褐色シルト (鉄化鉱を点状に少量含む。固くしまる。)
7. 10Y R 4/6褐色シルト (鉄化鉱を微量含む。固くしまる。)
8. 7.5Y R 4/3褐色シルト (10Y R 4/3にぶい黄褐色シルトを斑状に含む。固くしまる。)

0  
1m  
(1 : 30)

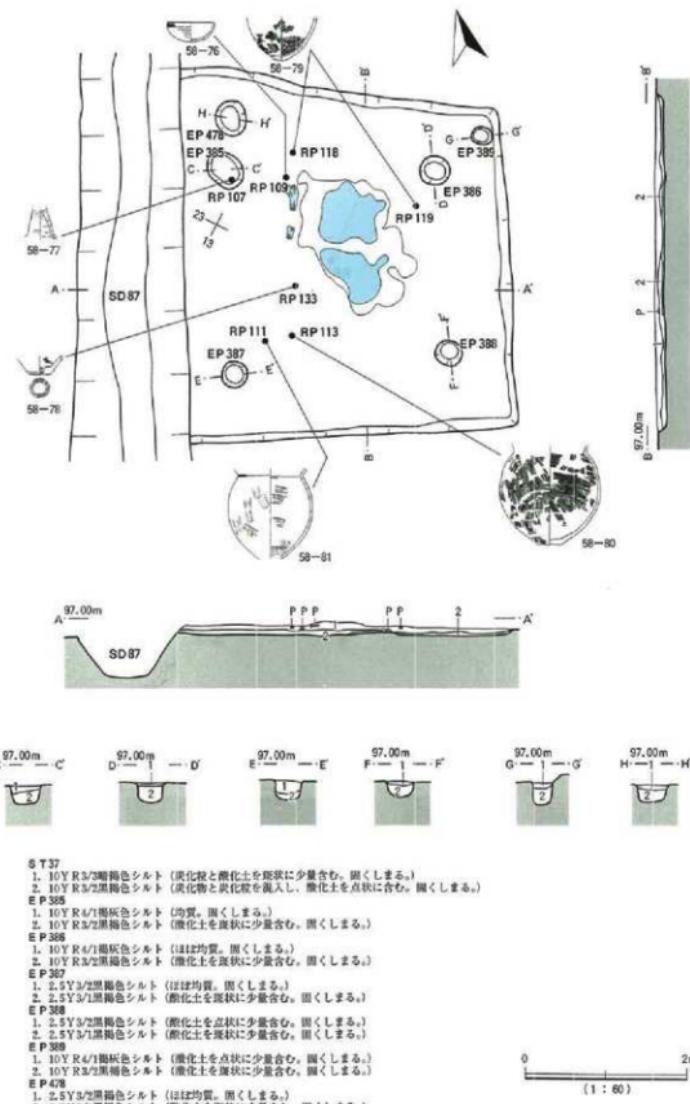
第9図 S T35 - E L585



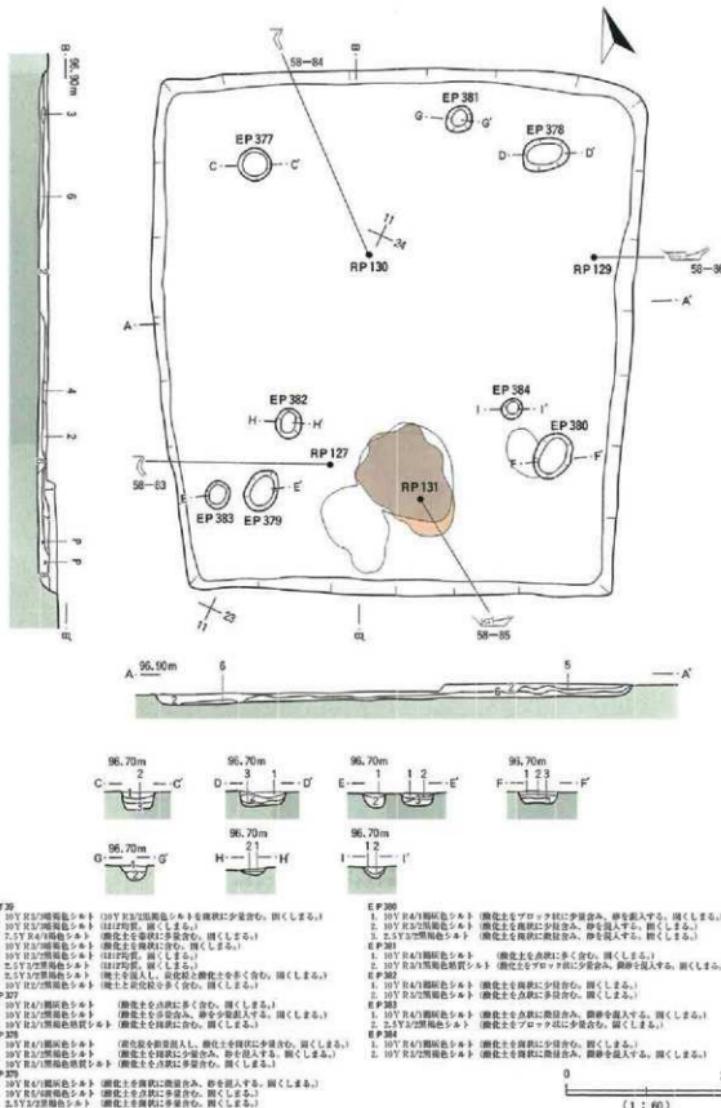
第10図 S T 35実掘図



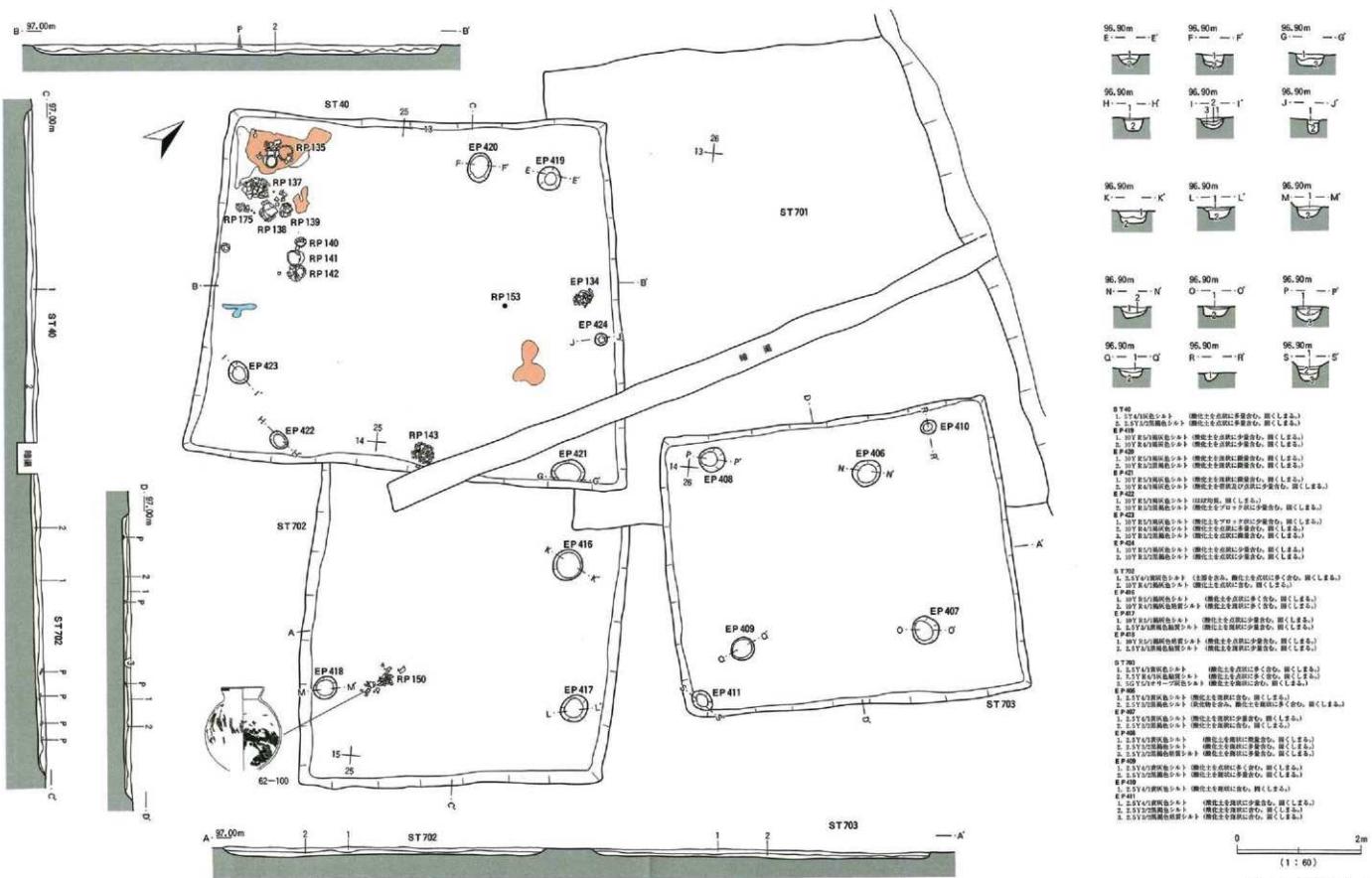
第11図 S T 36



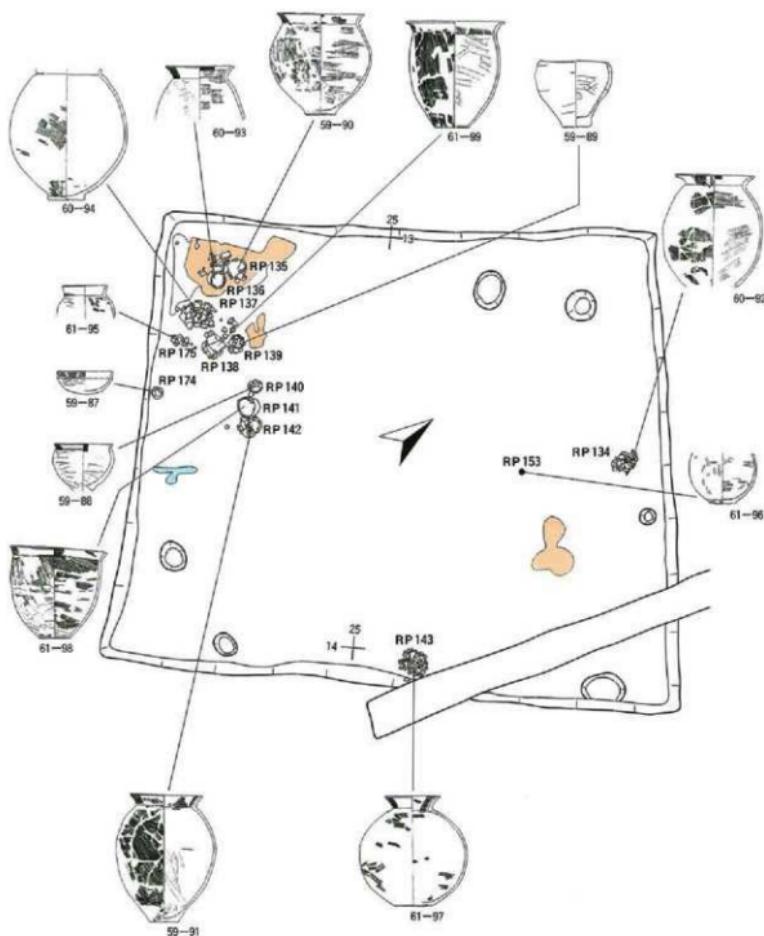
第12図 S T 37



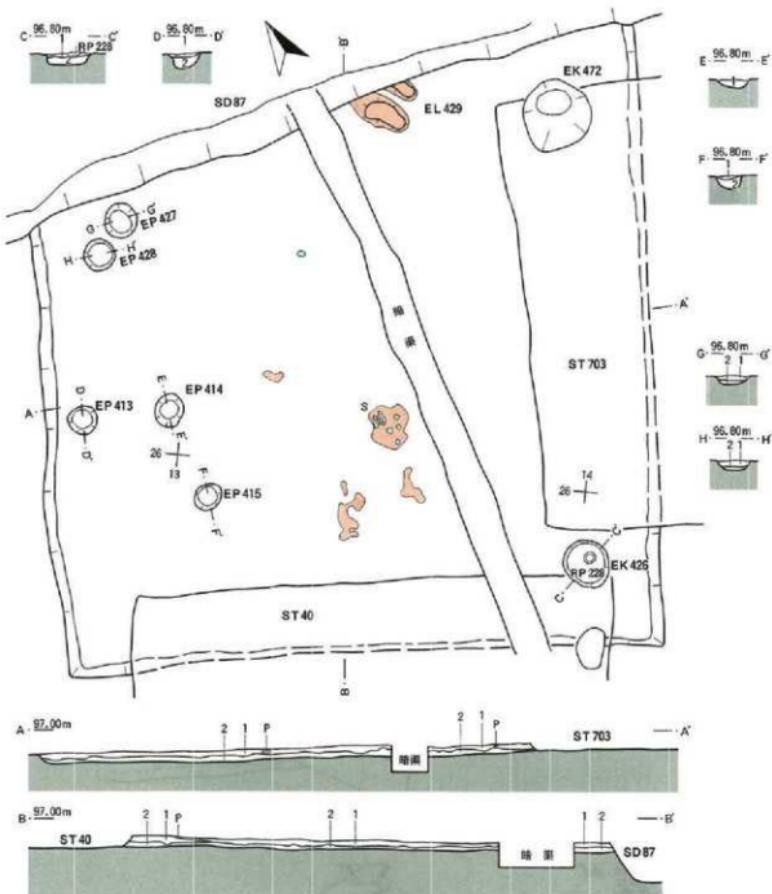
第13図 S T39



第14図 S 40-702-703



第15図 S T 40遺物分布図



- B T 703**
1. 2SY4/1暗褐色シルト (懐化土を点状に多く含む。固くしまる。)
  2. 10Y R/4暗褐色シルト (懐化土を点状に多く含む。固くしまる。)
  - E K 472**
    1. 10Y R/4暗褐色シルト (懐化土を点状に含む。固くしまる。)
    2. 2SY2/2黒褐色シルト (懐化土を点状に含む。固くしまる。)

**E P 413**

    1. 10Y R/4暗褐色シルト (懐化土を点状に含む。固くしまる。)
    2. 1SY2/2緑オリーブ褐色シルト (懐化土を点状に多く含む。固くしまる。)

**E P 414**

    1. 10Y R/4暗褐色シルト (懐化土を点状に含む。固くしまる。)
    2. 1SY4/2黒褐色シルト (懐化土を点状に多く含む。固くしまる。)

**E P 415**

    1. 10Y R/4暗褐色シルト (懐化土を点状に多く含む。固くしまる。)
    2. 1SY2/2黒褐色シルト (懐化土を点状に多く含む。固くしまる。)

**E P 427**

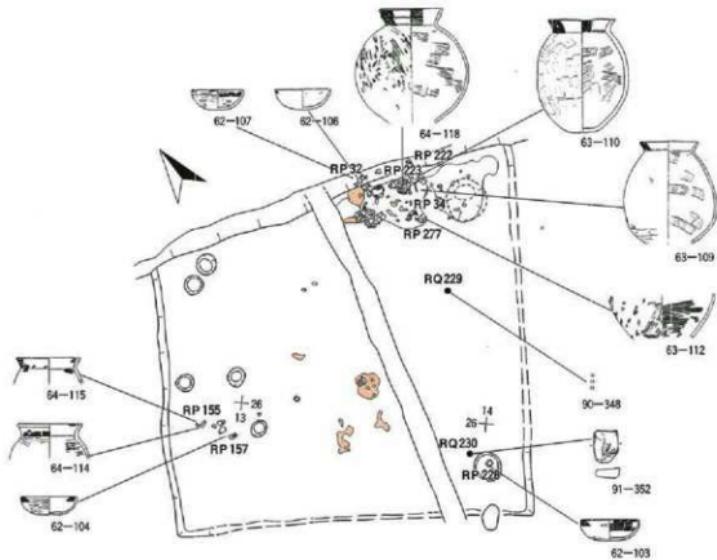
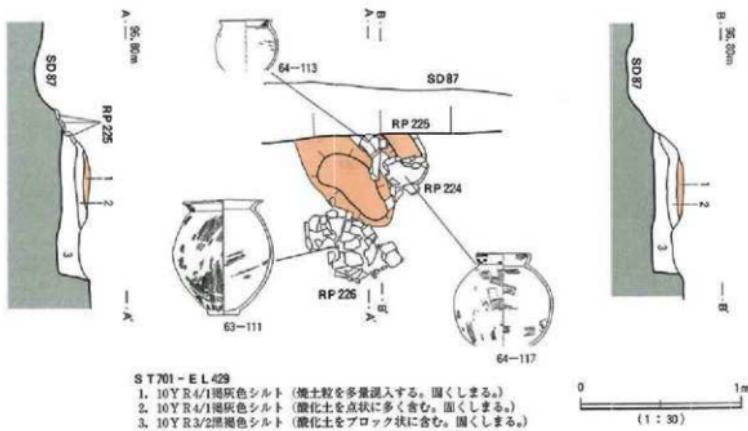
    1. 10Y R/4暗褐色シルト (懐化土を点状に含む。固くしまる。)
    2. 1SY4/2黒褐色シルト (懐化土を点状に多く含む。固くしまる。)

**E P 428**

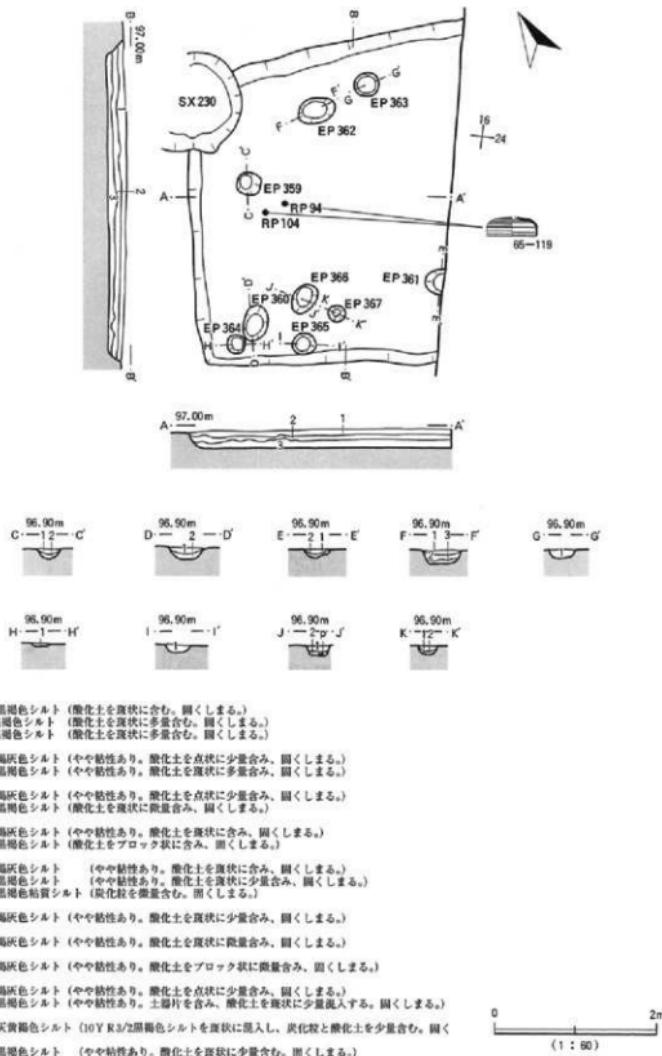
    1. 10Y R/4暗褐色シルト (懐化土を点状に多く含む。固くしまる。)
    2. 2SY4/1暗褐色シルト (懐化土を点状に少く含む。固くしまる。)

0 2m  
(1 : 60)

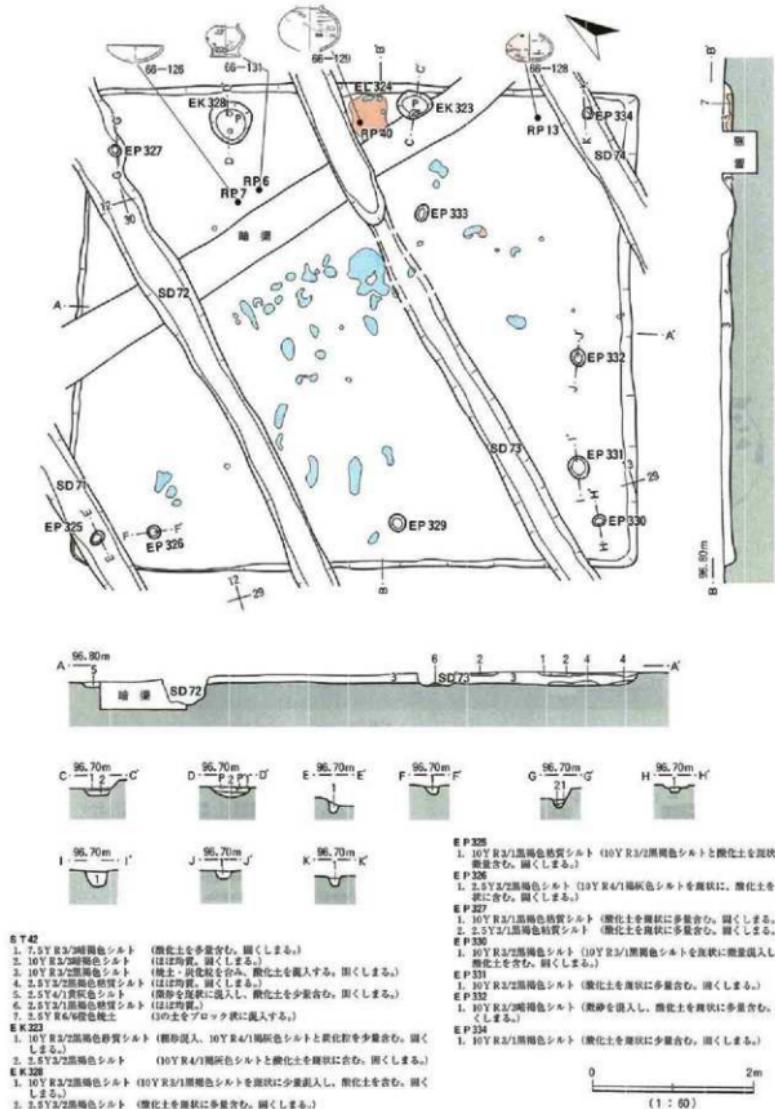
第16図 S T 701



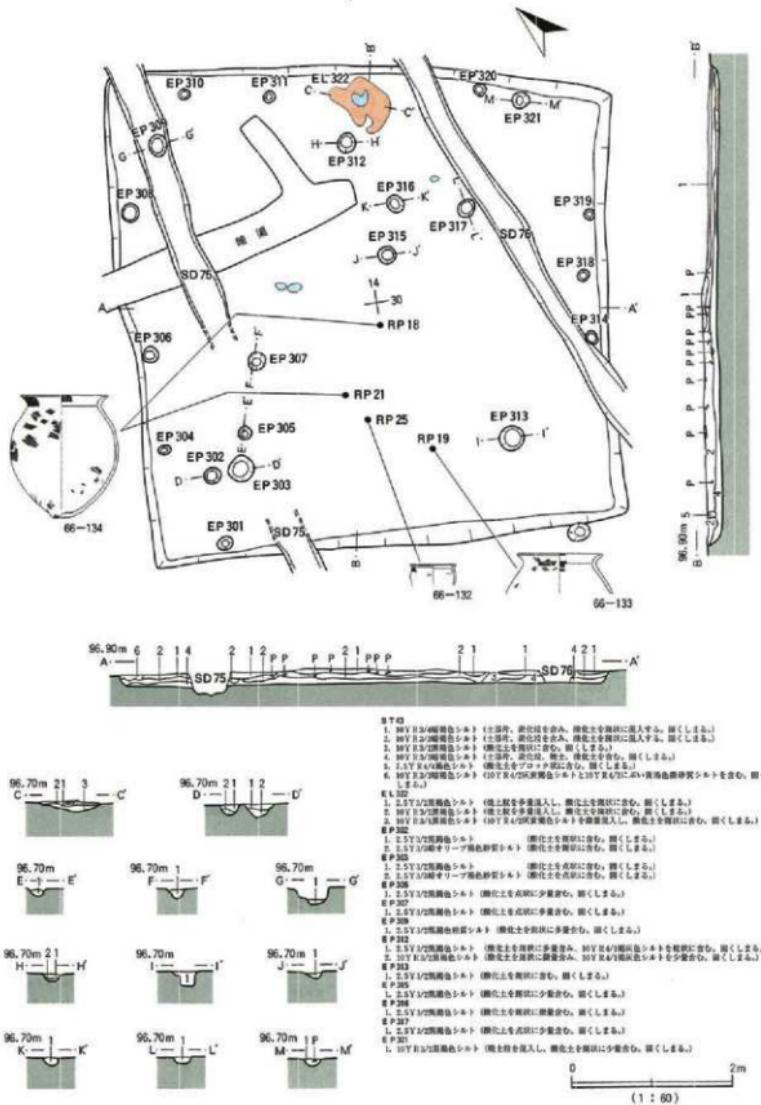
第17図 S T701 - E L429・遺物分布図



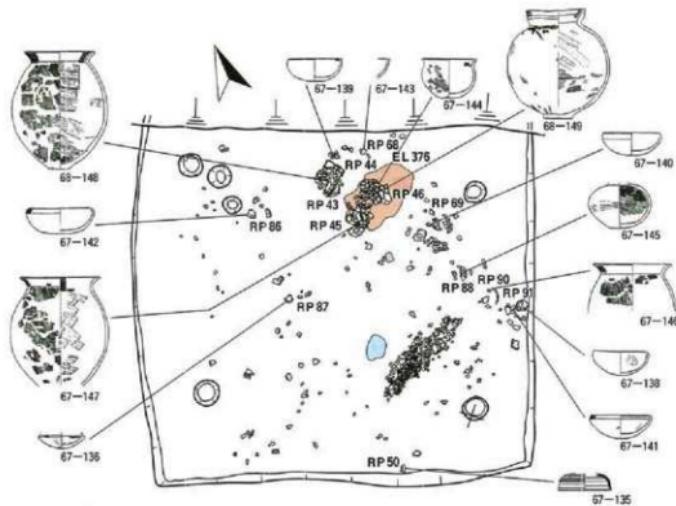
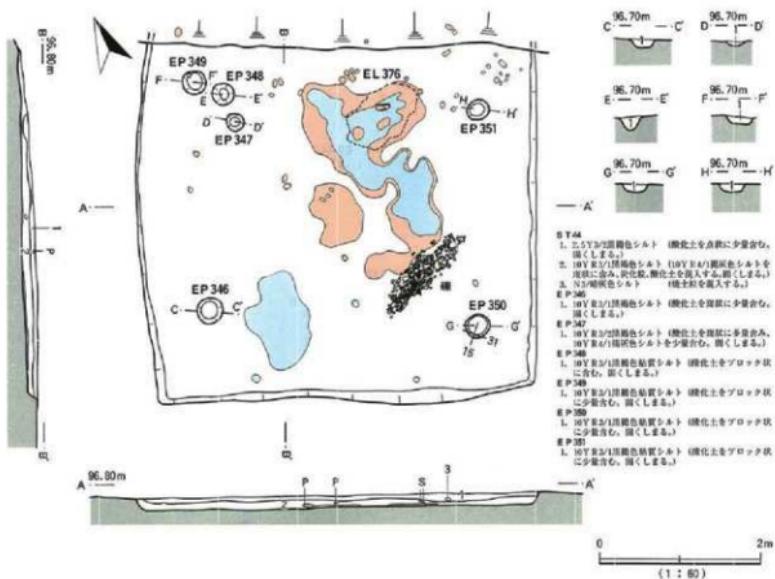
第18図 S T 41



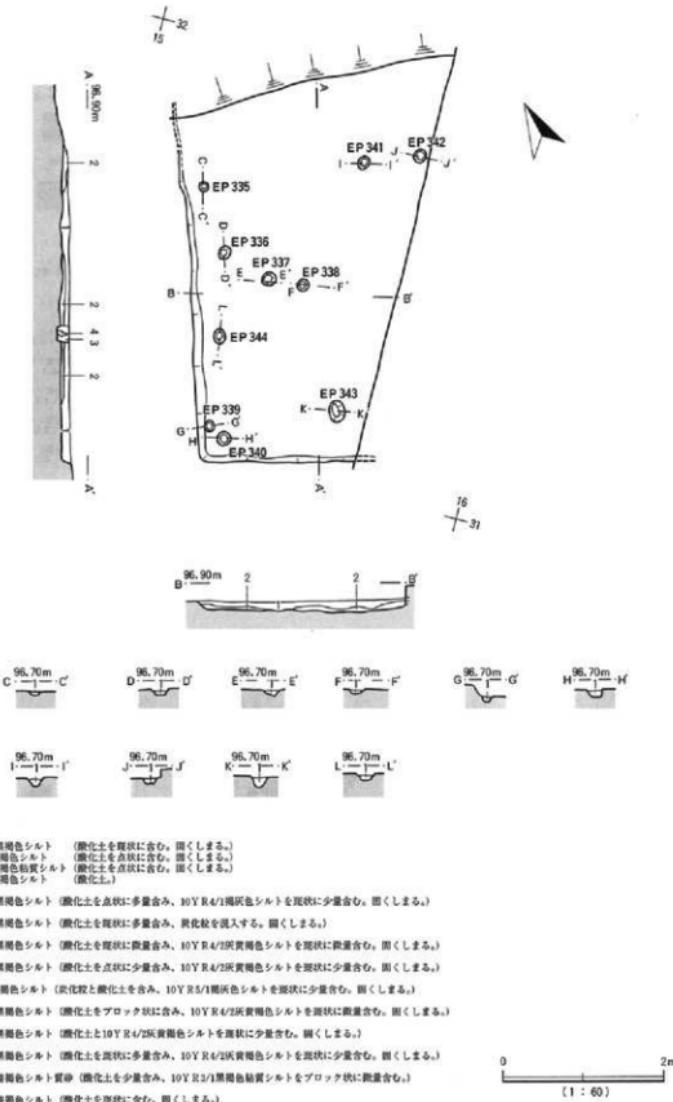
第19図 S T 42



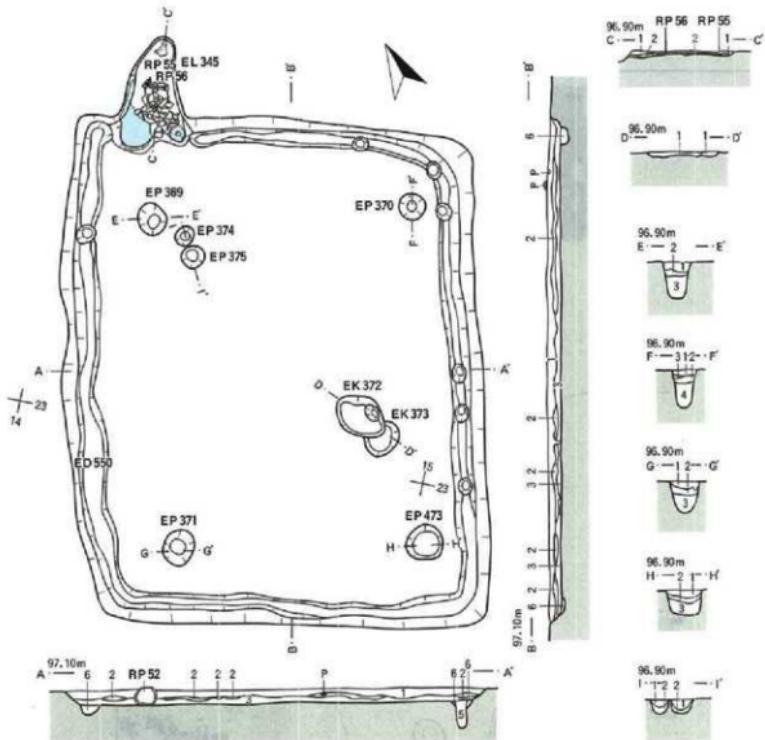
第20図 S T 43



第21図 ST 44



第22図 S T 45

**S T 47**

- 1. 2.5Y 3/2明褐色シルト (酸化土を点状に多量含む。固くしまる。)
- 2. 2.5Y 3/2明褐色シルト (酸化土を斑状に少量含む。固くしまる。)
- 3. 2.5Y 3/2黒褐色シルト (酸化土を斑状に少量含む。固くしまる。)
- 4. 2.5Y 3/1暗褐色シルト (酸化土を斑状に少量含む。固くしまる。)
- 5. 2.5Y 3/1暗褐色粘質シルト (酸化土を点状に少量含む。固くしまる。)
- 6. 2.5Y 3/2暗褐色シルト (酸化土を斑状に含む。固くしまる。)
- E K 380**
- 1. 2.5Y 3/2明褐色シルト (酸化土を斑状に少量含む。固くしまる。)
- 2. 2.5Y 3/2明褐色シルト (酸化土を斑状に少量含む。固くしまる。)
- 3. 2.5Y 3/2黒褐色シルト (酸化土を斑状に少量含む。固くしまる。)
- E K 372**
- 1. 10Y R 4/1暗灰色シルト (酸化土をブロック状に含む。固くしまる。)
- 2. 2.5Y 3/1暗褐色シルト (酸化土を斑状に含む。固くしまる。)
- E K 373**
- 1. 2.5Y 3/1暗褐色シルト (酸化土を斑状に含む。固くしまる。)
- 2. 2.5Y 3/2明褐色シルト (酸化土を斑状に含む。固くしまる。)
- E P 374**
- 1. 10Y R 4/1暗灰色シルト (酸化土をブロック状に含む。固くしまる。)
- 2. 2.5Y 3/1暗褐色シルト (酸化土を斑状に含む。固くしまる。)
- E P 375**
- 1. 10Y R 4/1暗灰色シルト (酸化土を斑状に少量含む。固くしまる。)
- 2. 2.5Y 3/2黒褐色粘質シルト (酸化土を斑状に少量含む。固くしまる。)

**E P 301**

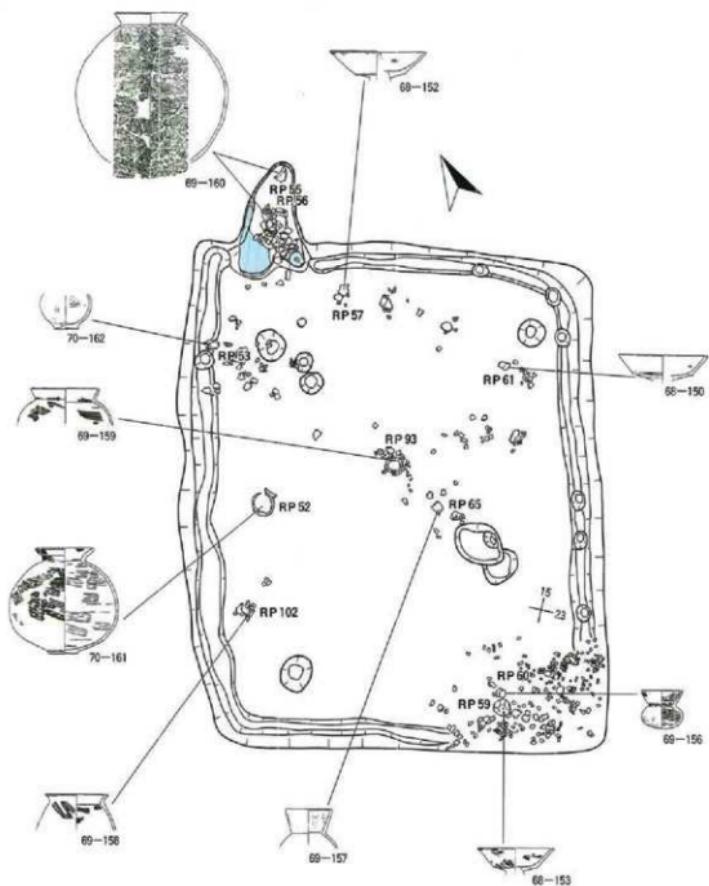
- 1. 2.5Y 3/2明褐色シルト (酸化土をブロック状に少量含む。固くしまる。)
- 2. 2.5Y 3/2明褐色シルト (酸化土を斑状に含む。固くしまる。)
- 3. 2.5Y 3/2黒褐色シルト (酸化土を斑状に含む。固くしまる。)

**E P 309**

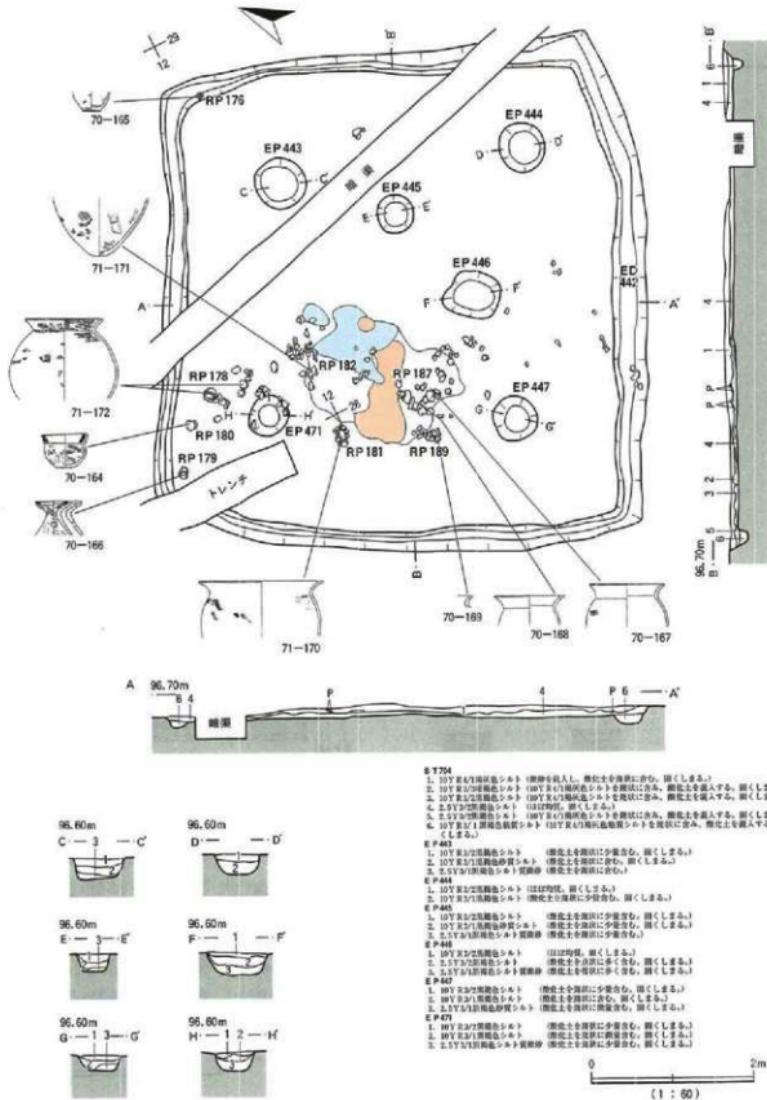
- 1. 2.5Y 3/2黒褐色シルト (酸化土を斑状に少量含む。固くしまる。)
- 2. 2.5Y 3/2黒褐色シルト (酸化土を斑状に含む。固くしまる。)
- 3. 2.5Y 3/2黒褐色シルト (酸化土をブロック状に含む。固くしまる。)
- 4. 2.5Y 3/2黒褐色粘質シルト (酸化土を点状に含む。固くしまる。)
- E P 376**
- 1. 2.5Y 3/2明褐色シルト (酸化土を斑状に少量含む。固くしまる。)
- 2. 2.5Y 3/2明褐色シルト (酸化土を斑状に少量含む。固くしまる。)
- E P 377**
- 1. 10Y R 4/1暗灰色シルト (酸化土をブロック状に含む。固くしまる。)
- 2. 2.5Y 3/1暗褐色シルト (酸化土を斑状に含む。固くしまる。)

0  
2m  
(1 : 60)

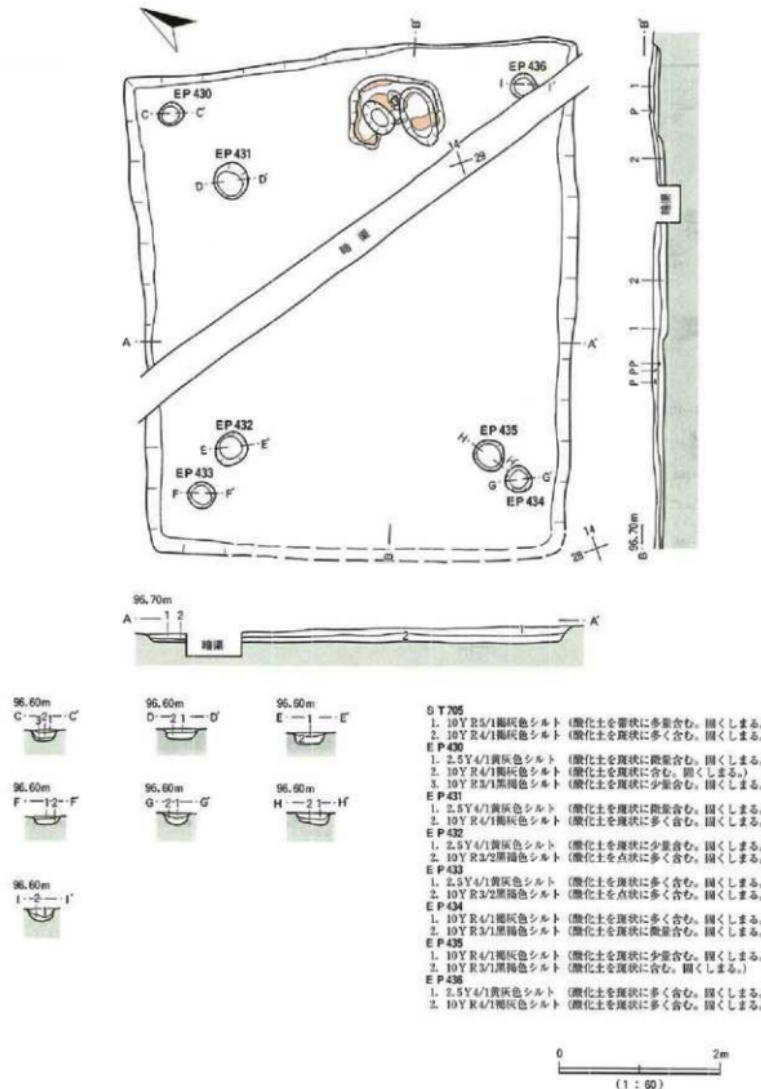
第23図 S T 47



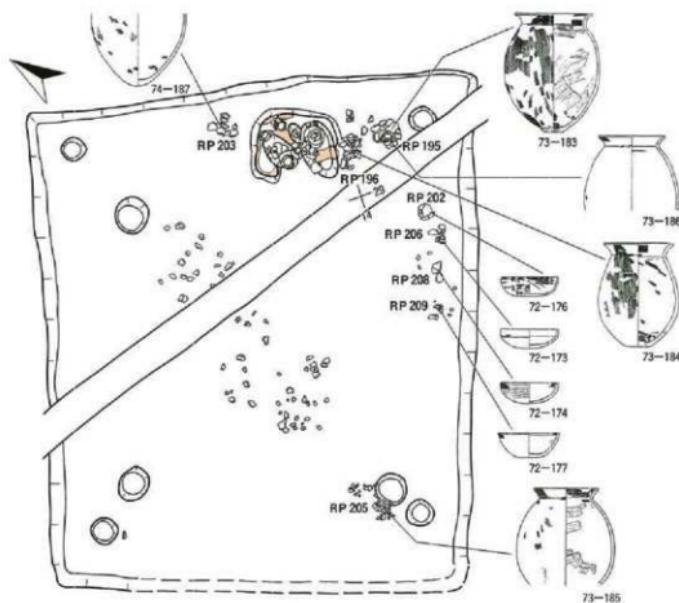
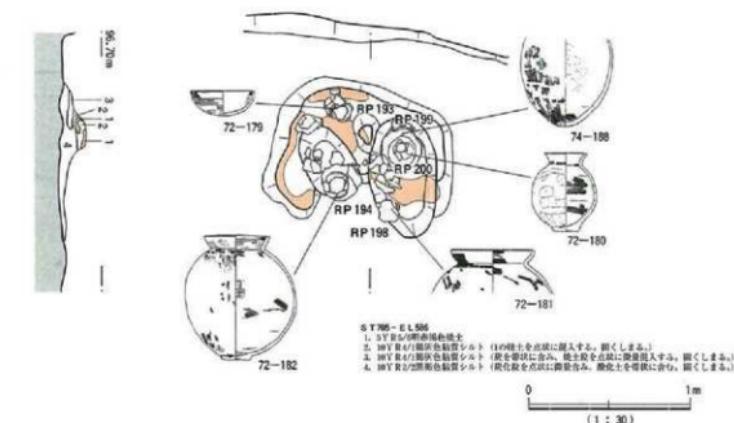
第24図 S T 47遺物分布図



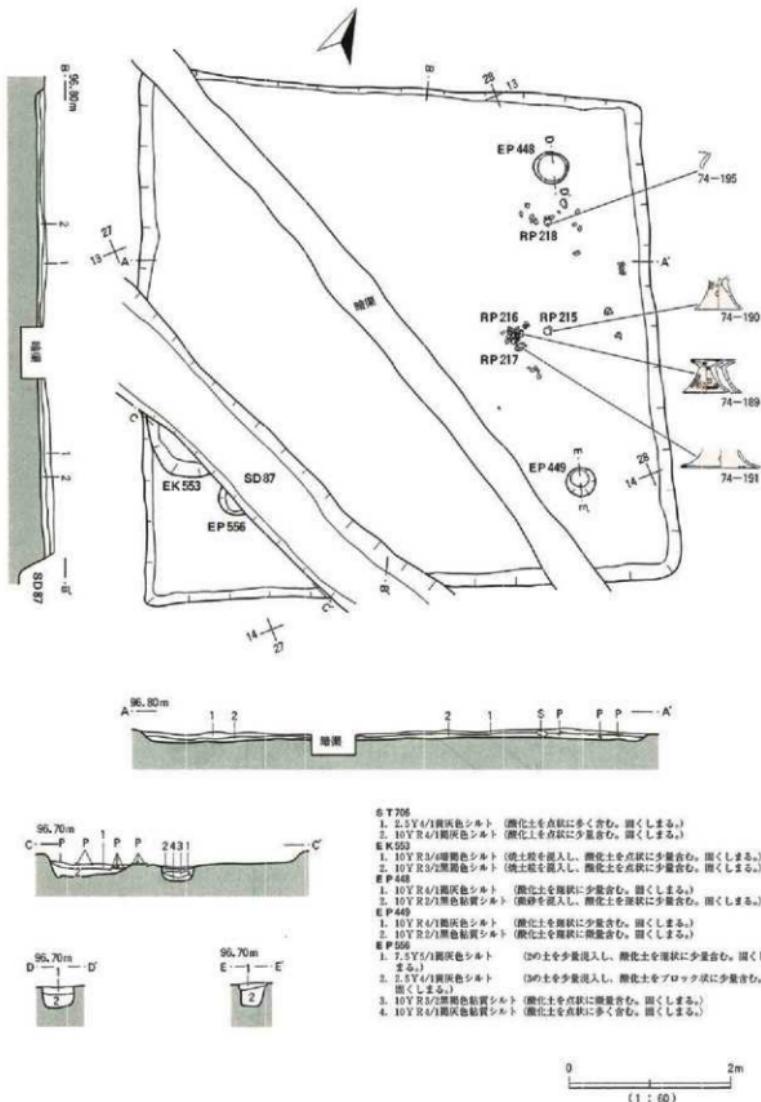
第25図 S T 704



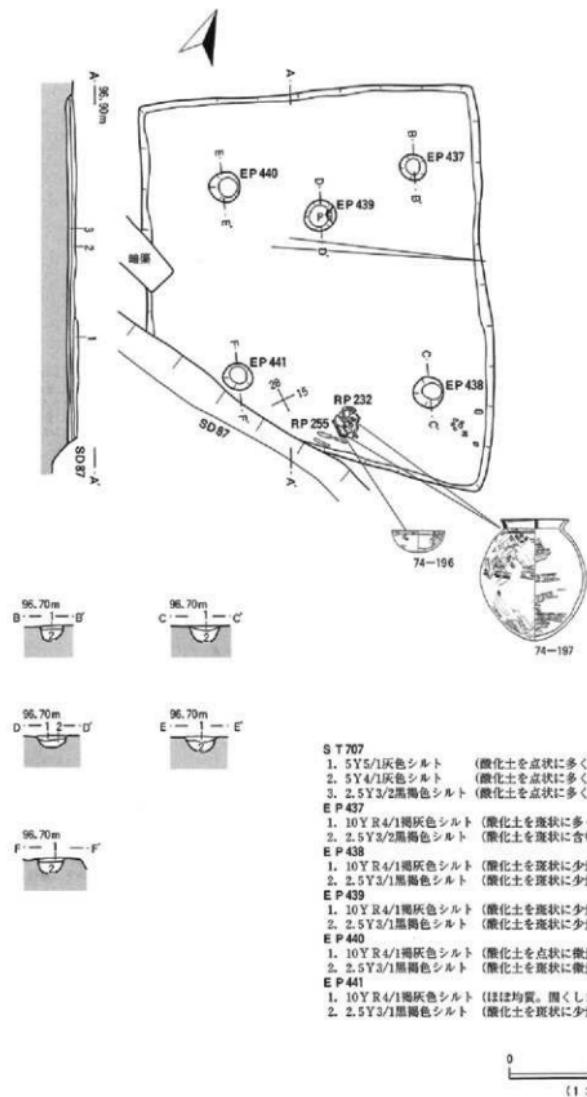
第26図 S T 705



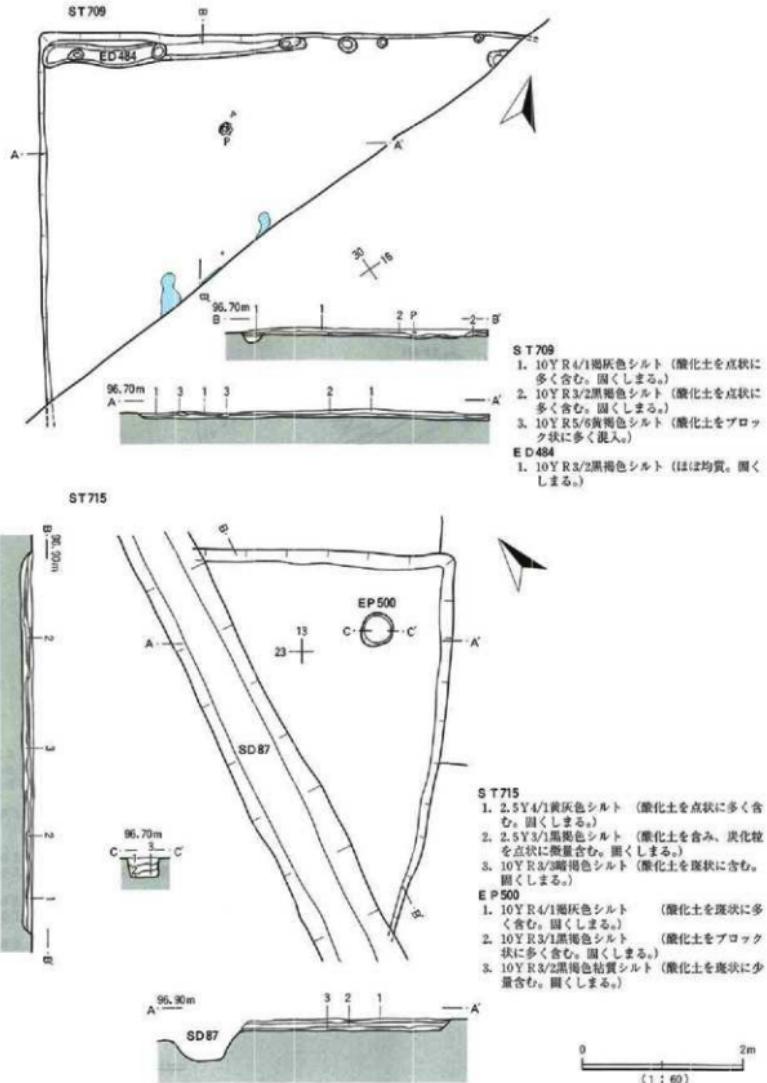
第27図 S T705 - E L586・遺物分布図



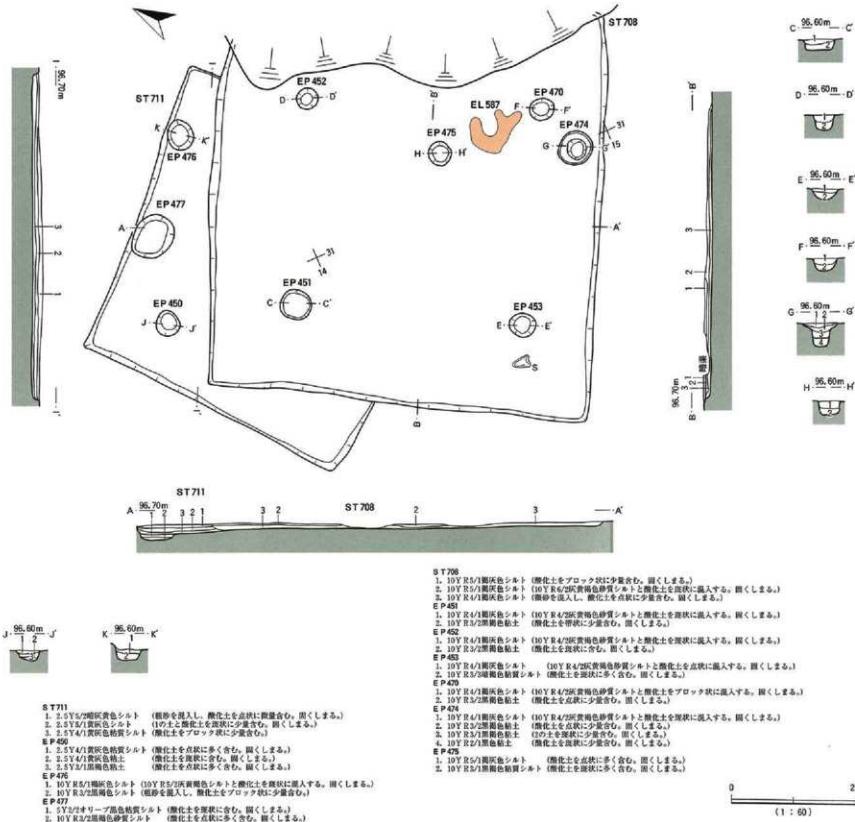
第28図 S.T 706



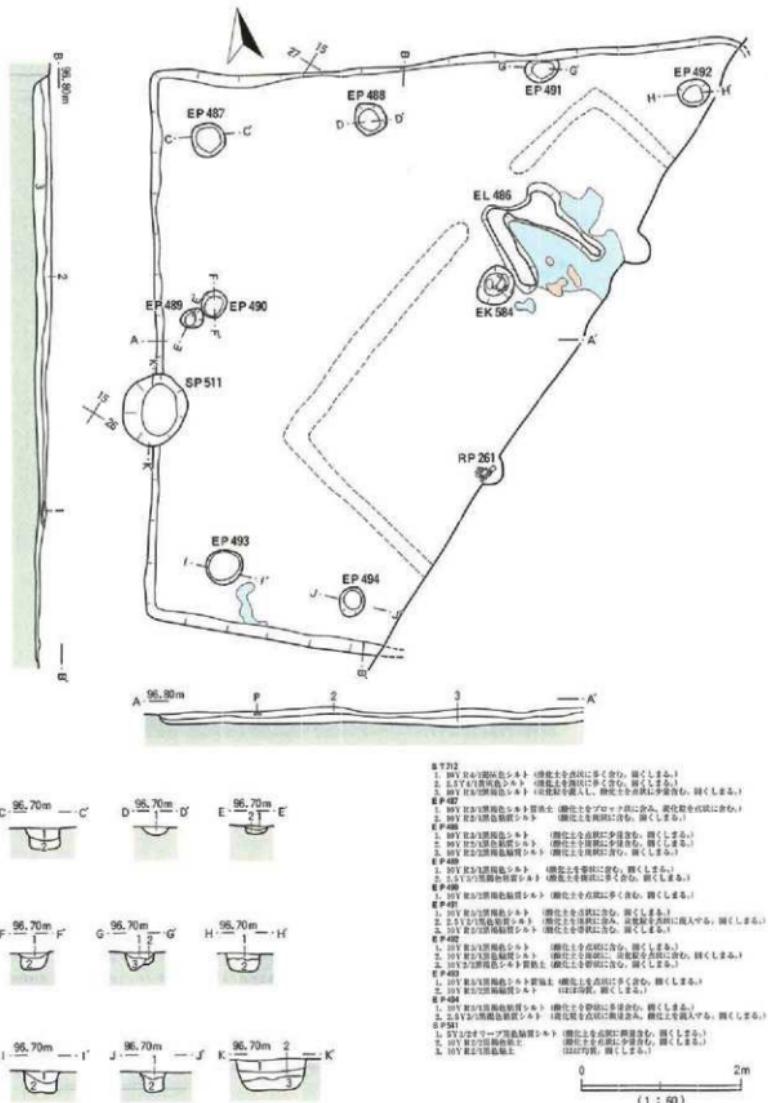
第29図 S T 707



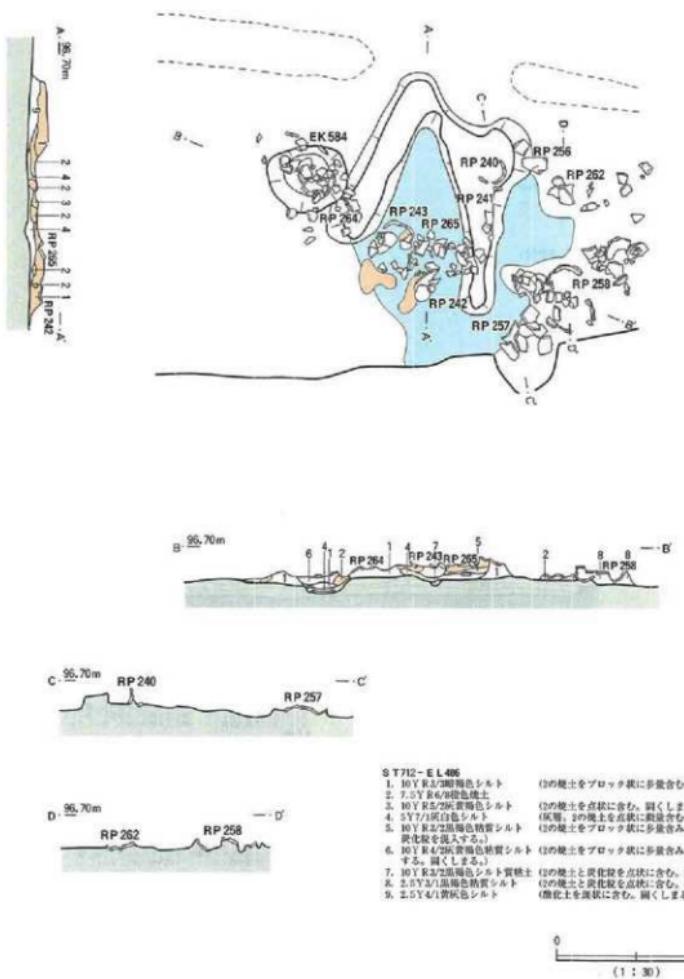
第30図 ST 709・715



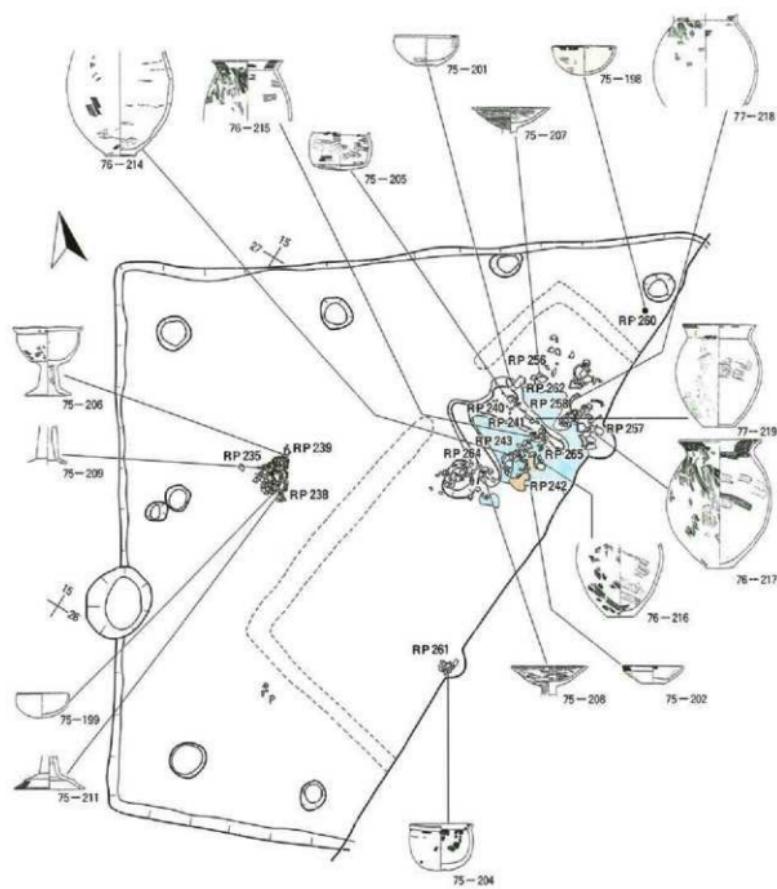
第31図 S ST 708 - 711



第32図 S-T712



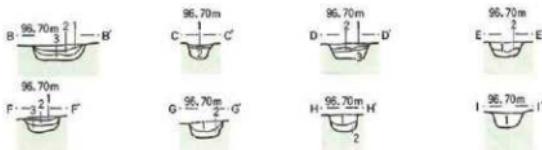
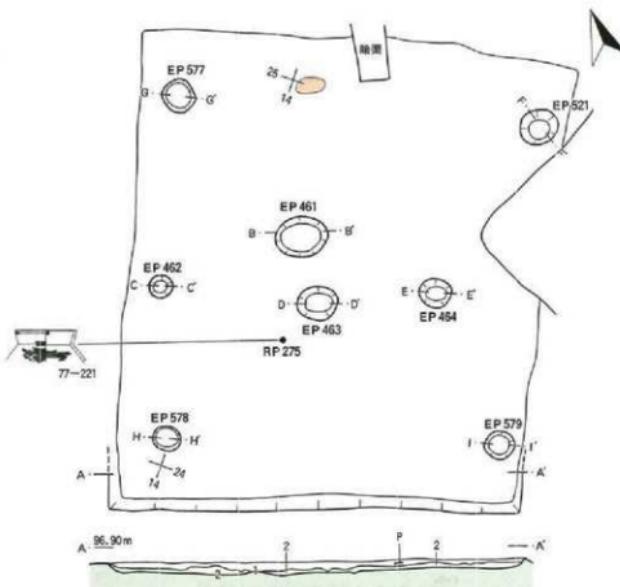
第33図 S T712 - E L486



第34図 S T712遺物分布図



第35図 S T 713

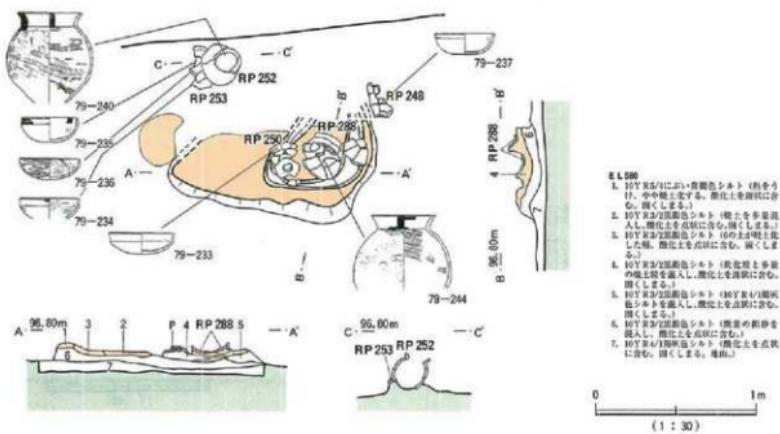
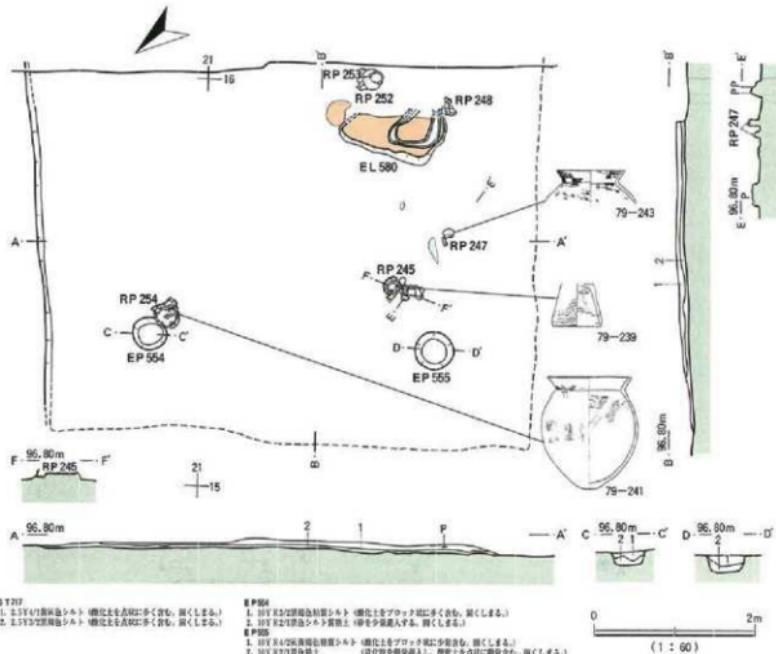


- S T 714**
- 1. 10Y R 4/1黒褐色シルト (酸化土を点状に多く含む。固くしまる。)
  - 2. 10Y R 3/2黒褐色シルト (酸化土を点状に多く含む。固くしまる。)
  - E P 463**
    - 1. 2.5Y R 4/1黒褐色シルト (酸化土を小ブロック状に少く含む。固くしまる。)
    - 2. 10Y R 4/1黒褐色シルト (酸化土を小ブロック状に少く含む。固くしまる。)
    - 3. 10Y R 3/2黒褐色シルト (酸化土を点状に多く含む。固くしまる。)  - E P 462**
    - 1. 10Y R 4/1黒褐色シルト (酸化土を小ブロック状に含む。固くしまる。)
    - 2. 10Y R 3/2黒褐色シルト (酸化土をセラフ状に含む。固くしまる。)  - E P 464**
    - 1. 10Y R 4/1黒褐色シルト (酸化土を小ブロック状に少く含む。固くしまる。)
    - 2. 10Y R 3/2黒褐色シルト (酸化土を点状に多く含む。固くしまる。)

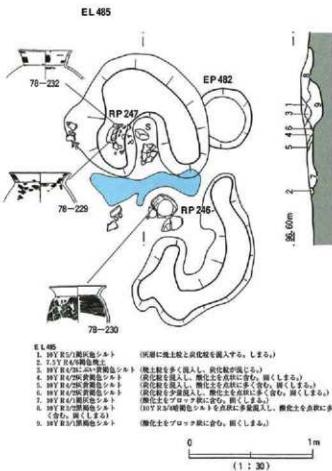
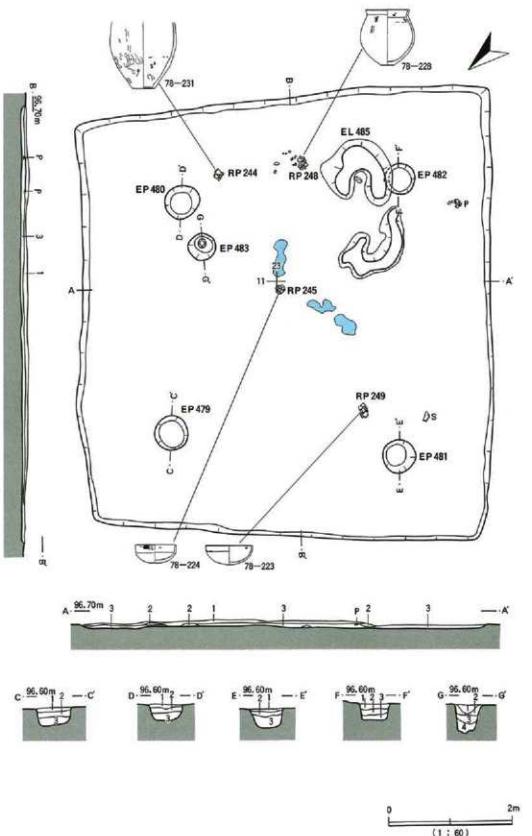
- E P 521**
- 1. 2.5Y R 4/1黒褐色シルト (酸化土をセラフ状に少く含む。固くしまる。)
  - 2. 2.5Y R 4/1黒褐色シルト (酸化土を点状に多く含む。固くしまる。)
  - 3. 10Y R 3/2黒褐色シルト (酸化土を点状に多く含む。固くしまる。)
  - E P 577**
    - 1. 10Y R 4/1黒褐色シルト (酸化土をセラフ状に多く含む。固くしまる。)
    - 2. 10Y R 3/1黒褐色シルト (酸化土を点状に多く含む。固くしまる。)
    - E P 579**
      - 1. 10Y R 3/2黒褐色シルト (酸化土を点状に多く含む。固くしまる。)

0 2m  
(1 : 60)

第36回 S T 714



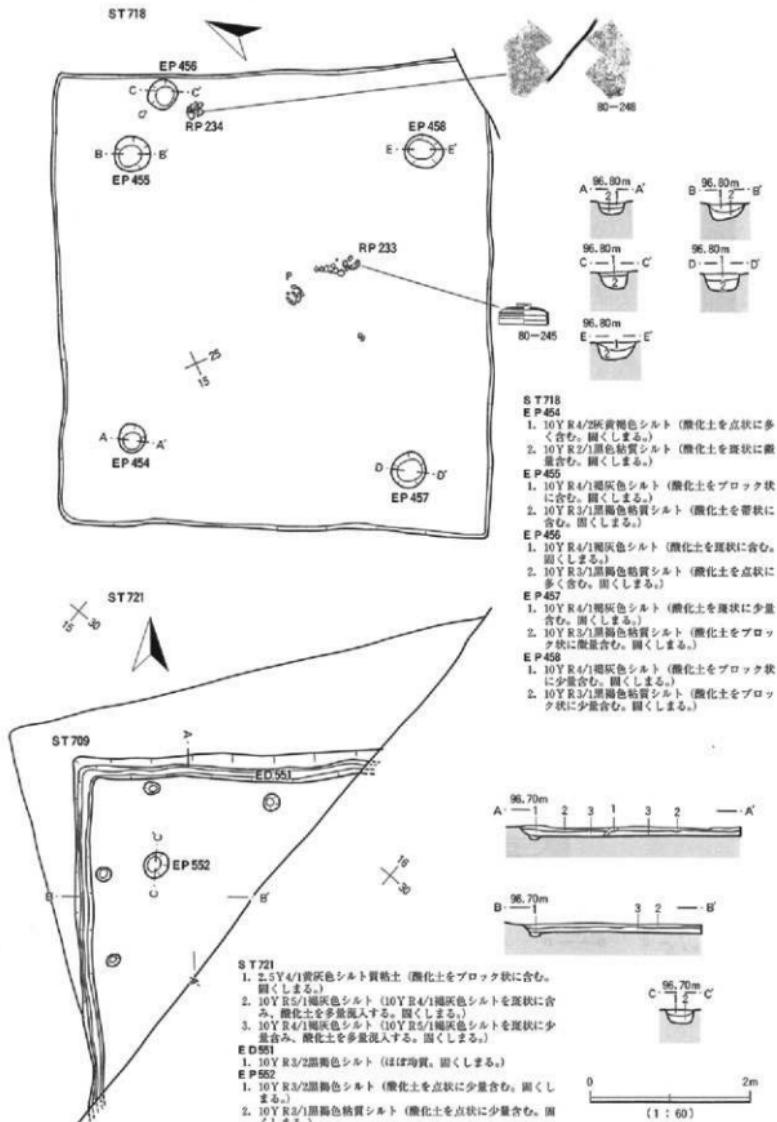
第37図 S T 717



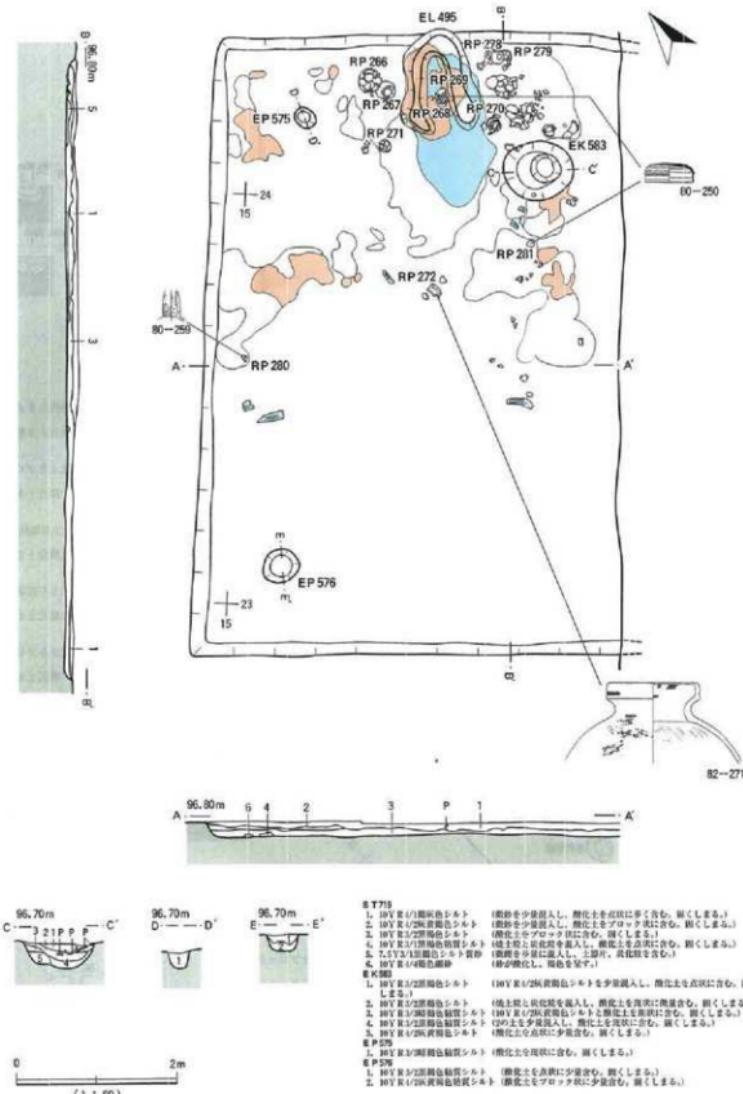
- S T716**
1. 107 R3E1黒褐色シルト (黒土色シルトをカットする。厚くしまる。)
  2. 107 R3E2黒褐色シルト (黒土色シルトをカットする。厚くしまる。)
  3. 107 R3E3黒褐色シルト (黒土色シルトを多く含む。厚くしまる。)
  4. 107 R3E4黒褐色シルト (黒土色シルトを多く含む。厚くしまる。)
  5. 107 R3E5黒褐色シルト (黒土色シルトを多く含む。厚くしまる。)
  6. 107 R3E6黒褐色シルト (黒土色シルトを多く含む。厚くしまる。)
  7. 107 R3E7黒褐色シルト (黒土色シルトを多く含む。厚くしまる。)
  8. 107 R3E8黒褐色シルト (黒土色シルトを多く含む。厚くしまる。)
  9. 107 R3E9黒褐色シルト (黒土色シルトを多く含む。厚くしまる。)
- EL 485**
1. 107 R2E1黒褐色シルト (黒土色シルトを多く含む。厚くしまる。)
  2. 107 R2E2黒褐色シルト (黒土色シルトを多く含む。厚くしまる。)
  3. 107 R2E3黒褐色シルト (黒土色シルトを多く含む。厚くしまる。)
  4. 107 R2E4黒褐色シルト (黒土色シルトを多く含む。厚くしまる。)
  5. 107 R2E5黒褐色シルト (黒土色シルトを多く含む。厚くしまる。)
  6. 107 R2E6黒褐色シルト (黒土色シルトを多く含む。厚くしまる。)
  7. 107 R2E7黒褐色シルト (黒土色シルトを多く含む。厚くしまる。)
  8. 107 R2E8黒褐色シルト (黒土色シルトを多く含む。厚くしまる。)
  9. 107 R2E9黒褐色シルト (黒土色シルトを多く含む。厚くしまる。)

- S T716**
1. 107 R2E1黒褐色シルト (黒土色シルトをカットする。厚くしまる。)
  2. 107 R2E2黒褐色シルト (黒土色シルトをカットする。厚くしまる。)
  3. 107 R2E3黒褐色シルト (黒土色シルトを多く含む。厚くしまる。)
  4. 107 R2E4黒褐色シルト (黒土色シルトを多く含む。厚くしまる。)
  5. 107 R2E5黒褐色シルト (黒土色シルトを多く含む。厚くしまる。)
  6. 107 R2E6黒褐色シルト (黒土色シルトを多く含む。厚くしまる。)
  7. 107 R2E7黒褐色シルト (黒土色シルトを多く含む。厚くしまる。)
  8. 107 R2E8黒褐色シルト (黒土色シルトを多く含む。厚くしまる。)
  9. 107 R2E9黒褐色シルト (黒土色シルトを多く含む。厚くしまる。)
- E P400**
1. 107 R4E1黒褐色シルト (黒土色シルトを多く含む。厚くしまる。)
  2. 107 R4E2黒褐色シルト (黒土色シルトを多く含む。厚くしまる。)
  3. 107 R4E3黒褐色シルト (黒土色シルトを多く含む。厚くしまる。)
- E P401**
1. 107 R4E1黒褐色シルト (黒土色シルトを多く含む。厚くしまる。)
  2. 107 R4E2黒褐色シルト (黒土色シルトを多く含む。厚くしまる。)
  3. 107 R4E3黒褐色シルト (黒土色シルトを多く含む。厚くしまる。)
- E P402**
1. 107 R4E1黒褐色シルト (W1)及び(黒褐色シルトを表面に投入し、黒化土を表土に多く含む。厚くしまる。)
  2. 107 R4E2黒褐色シルト (W1)及び(黒褐色シルトを表面に投入し、黒化土を表土に多く含む。厚くしまる。)
  3. 107 R4E3黒褐色シルト (W1)及び(黒褐色シルトを表面に投入し、黒化土を表土に多く含む。厚くしまる。)
- E P403**
1. 107 R4E1黒褐色シルト (W1)及び(黒褐色シルトを表面に投入し、黒化土を表土に多く含む。厚くしまる。)
  2. 107 R4E2黒褐色シルト (W1)及び(黒褐色シルトを表面に投入し、黒化土を表土に少しある。)
  3. 107 R4E3黒褐色シルト (W1)及び(黒褐色シルトを表面に投入し、黒化土を表土に少しある。)
  4. 107 R4E4黒褐色シルト (W1)及び(黒褐色シルトを表面に投入し、黒化土を表土に少しある。)

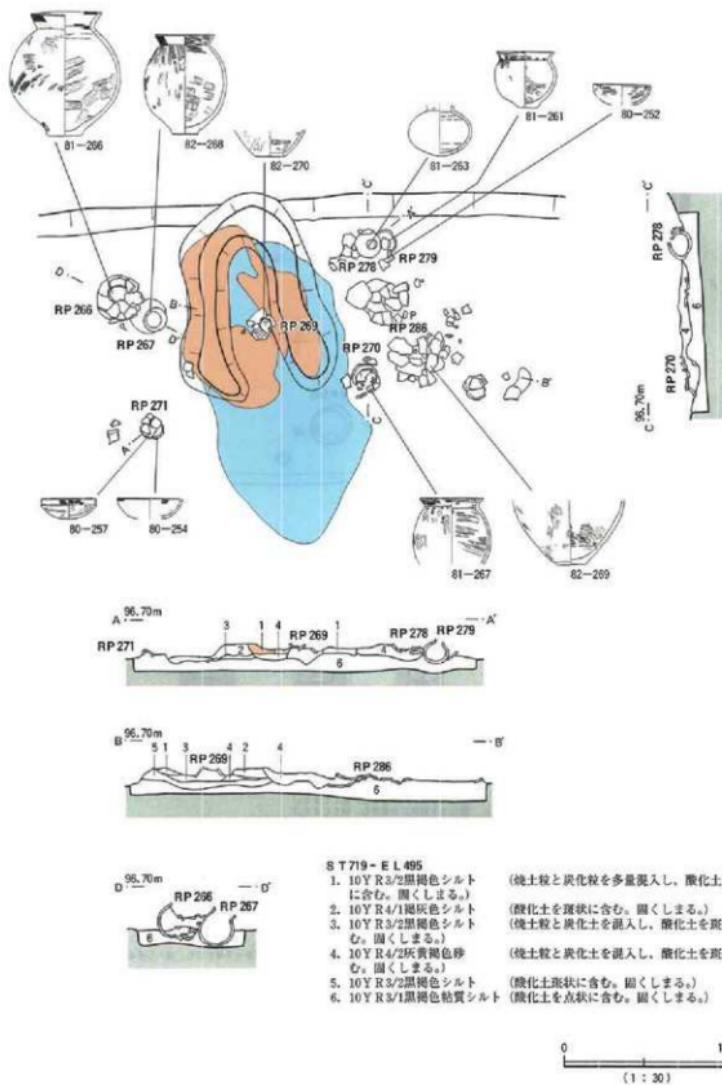
第38図 S T716



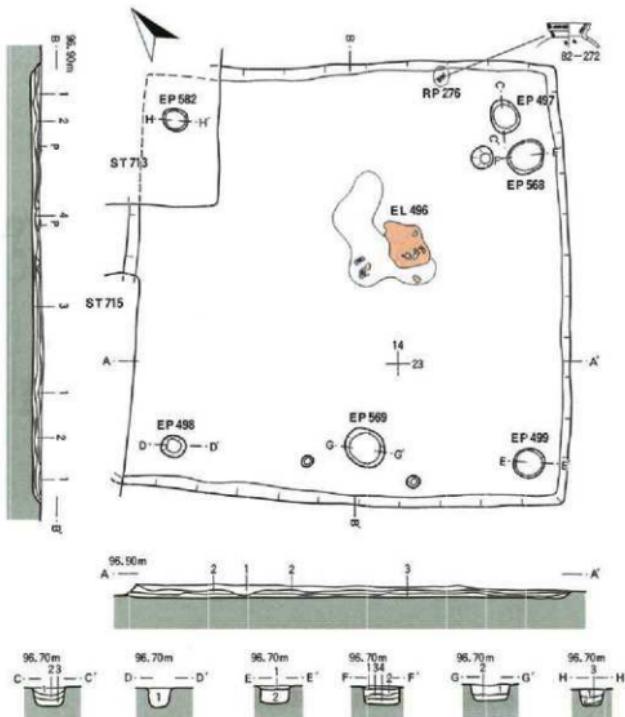
第39図 S T718・721



第40図 S T719



第41図 S T 719 - E L 495



## 9T20

1. 10Y R 2/1黒褐色シルト (酸化土を点状に少量含む。土器を含む。酸化土を斑状に含む。固くしまる。)
2. 2.5Y R 2/2黒褐色粘質シルト (酸化土を点状に多く含む。酸化土を斑状に含む。固くしまる。)
3. 10Y R 2/1黒褐色粘質シルト (酸化土を点状に多く含む。酸化土をブロック状に含む。固くしまる。)
4. 2.5Y R 2/1黒褐色シルト (酸化土を点状に含む。土器を含む。酸化土を少量含む。固くしまる。)

## EP 497

1. 10Y R 2/3黒褐色シルト (酸化土を斑状に少量含む。固くしまる。)
2. 10Y R 2/2黒褐色粘質シルト (酸化土を斑状に少量含む。固くしまる。)
3. 2.5Y R 2/1黒褐色シルト (酸化土を斑状に含む。固くしまる。)

## EP 498

1. 10Y R 2/2黒褐色粘質シルト (酸化土をブロック状に多く含む。固くしまる。)
2. 10Y R 2/2黒褐色シルト (酸化土を点状に少量含む。固くしまる。)
3. 2.5Y R 2/2黒褐色シルト (酸化土を斑状に含む。固くしまる。)

## EP 499

1. 10Y R 2/2黒褐色シルト (酸化土をブロック状に多く含む。固くしまる。)
2. 10Y R 2/2黒褐色粘質シルト (酸化土を斑状に少量含む。固くしまる。)
3. 2.5Y R 2/1黒褐色シルト (酸化土を斑状に含む。固くしまる。)

## EP 500

1. 10Y R 2/2黒褐色シルト (酸化土を斑状に少量含む。固くしまる。)
2. 10Y R 2/2黒褐色粘質シルト (酸化土を斑状に少量含む。固くしまる。)
3. 2.5Y R 2/1黒褐色シルト (酸化土を斑状に含む。固くしまる。)

## EP 501

1. 10Y R 2/2黒褐色シルト (10Y R 2/2黒褐色シルトを少量混入し。酸化土をブロック状に含む。固くしまる。)
2. 10Y R 2/2黒褐色粘質シルト (10Y R 2/2黒褐色粘質シルトと酸化土を斑状に少量含む。固くしまる。)

## EP 502

1. 10Y R 2/2黒褐色シルト (10Y R 2/2黒褐色シルトを斑状に少量含む。固くしまる。)
2. 10Y R 2/2黒褐色粘質シルト (10Y R 2/2黒褐色粘質シルトと酸化土を斑状に少量含む。固くしまる。)
3. 10Y R 2/2黒褐色シルト (10Y R 2/2黒褐色シルトを斑状に混入し。酸化土をブロック状に厚層含む。固くしまる。)

0  
(1 : 60)  
2m

第42図 S T 720

## 2 挖立柱建物跡

### S B 50 (第43図)

### 柱の建物

調査区南側端13・14—19・20Gで検出された。規模は東西2間×南北2間で中央にも柱を持つ縦柱の建物跡である。長軸は磁北から西に81度50分傾く。柱間の距離は東西が約2.2m、南北が約1.7mを測る。各柱穴の規模は径25~30cmの円形を呈し、確認面からの深さは15~25cmを測る。遺物の出土は無く詳細は不明だが、E B 565がS T 35と重複することから古墳時代以前の建物と考えられる。

## 3 井戸跡

### S E 8 (第44図)

第2次調査の北側調査区4—38GでS K 9西に隣接して検出された。平面プランは長径約1.4m、短径約1.3mの橢円形を呈する。確認面からの深さ約0.8mを測る。断面形は、開口部が広く堀り方途中に段を形成し底が若干狭くなり底面は凹凸はあるが、ほぼ平坦に近い台形状となる素掘りの井戸と考えられる。

覆土は上層がシルト質、下層が粘土の2層に大別され、さらに5層に細分される。1層は黒褐色のシルト、2層は赤褐色のシルト質粘土で1層下面に帯状のブロックで堆積する。3・4層は黒色の粘土、5層は黒褐色の粘土となり粘性が強い堆積層となり、自然に埋没した状況が窺える。遺物の出土が無く詳細は不明。

## 4 土坑・性格不明遺構

第2・3次調査で検出された土坑・性格不明の落ち込み状の遺構は15基程で、その大半が第3次調査区に集中し、第2次調査区では2基のみであった。

時期を明確に判断できる遺物が出土したのは土坑1基、性格不明遺構1基である。しかし、この2基は遺物にまとまりがみられ良好な資料が得られた。以下に主なもの概略を述べる。

### S K 9 (第44図)

第2次調査の北側調査区4—39GでS E 8東に隣接して検出された。平面プランは径約1.1mの円形を呈する。深さは確認面から約35cmを測る。断面形は堀り方途中に段を形成し、底面から緩やかに立ち上がる形状を示す。覆土は4層に大別されるが、概ね黒色シルトに赤褐色のシルト及び粘土を混入する堆積土となる。遺物の出土は無い。

### S X 17 (第44図)

第2次調査の北側調査区4—43GでS T 13と重複して検出された。検出状況から、S T 13よりも新しい。平面プランは長辺1.5m、短辺1.1mの不整形形を呈する。確認面からの深さ約30cmを測り、断面形は堀り方途中に段を形成し、底面が平坦となる形状を示す。底面に拳大の礫が数かれ、炭化物も検出されたが、遺物に出土が無いため詳細は不明。覆土は4層に分かれ暗褐色及び黒褐色のシルトが堆積する。

### S X 230・S K 231 (第44図)

S X 230は調査区南側東端15—24・25GでS K 231と接して検出された。西端をS P 161に切

られる。平面プランは長辺約2.5m、短辺約1.2mを測る隅丸の不整形を呈する。深さは確認面から約30~40cmを測る。断面形は底面が平坦で、壁面が急角度で立ち上がる台形状となる。

覆土は4層に大別されるが、4層は1層上面にブロック状に堆積するのみで、基本層は1層の暗オリーブ褐色、2・3層の黒褐色のシルトである。遺物は、土師器の破片が出土している。

S K 231は、15—25GでS K 230と接して検出された。土層断面からS K 230よりも新しい。平面プランは長径約1.2m、短径1.0mを測る楕円形を呈する。確認面からの深さは約50cmを測り、断面形は底面が平坦で壁面が急角度で立ち上がる台形状となる。

覆土は6層に細分されるが、基本層は1・3・4・6層の暗褐色、黒褐色のシルト及び黒褐色の粘質シルトであり、2・5層はブロック状に堆積する。

遺物は、底面付近から土師器の环と瓶の破片が重なった状態で出土した。

#### S X 229 (第45図)

南側調査区でS T 39の東側12—24GでS D 87に接して検出された。土層断面からS D 87よりも新しい。平面プランは長径約2.4m、短径約2.0mを測る楕円形を呈する。確認面からの深さは約15cmを測る。断面形は底面に若干の凹凸が認められるがほぼ平坦で、壁面が緩やかに立ち上がるレンズ状となる。覆土は4層に細分され、1・2層は黒褐色シルト、3層は褐色、4層がオリーブ黒色のシルトとなり、3・4層は2層に内包される堆積である。

遺物の出土は無いが、S D 87を切ることから中世以降の所産と考えられる。

#### S X 245 (第45図)

南側調査区で15—27Gで検出され、西側を近年の暗渠で破壊され、内部南側一部に近年の撒乱を受けている。平面プランは長辺約3.2m、短辺約2.2mを測る隅丸方形を呈する。深さは確認面から約20cmを測り、断面形は底面に若干の凹凸が認められるがほぼ平坦で、壁面が急角度に立ち上がる台形状となる。

覆土は2層に分かれ、1層が褐灰色シルトで2層は黒褐色シルトとなり、いずれも酸化土を混入する。遺物は砥石が1点出土した。

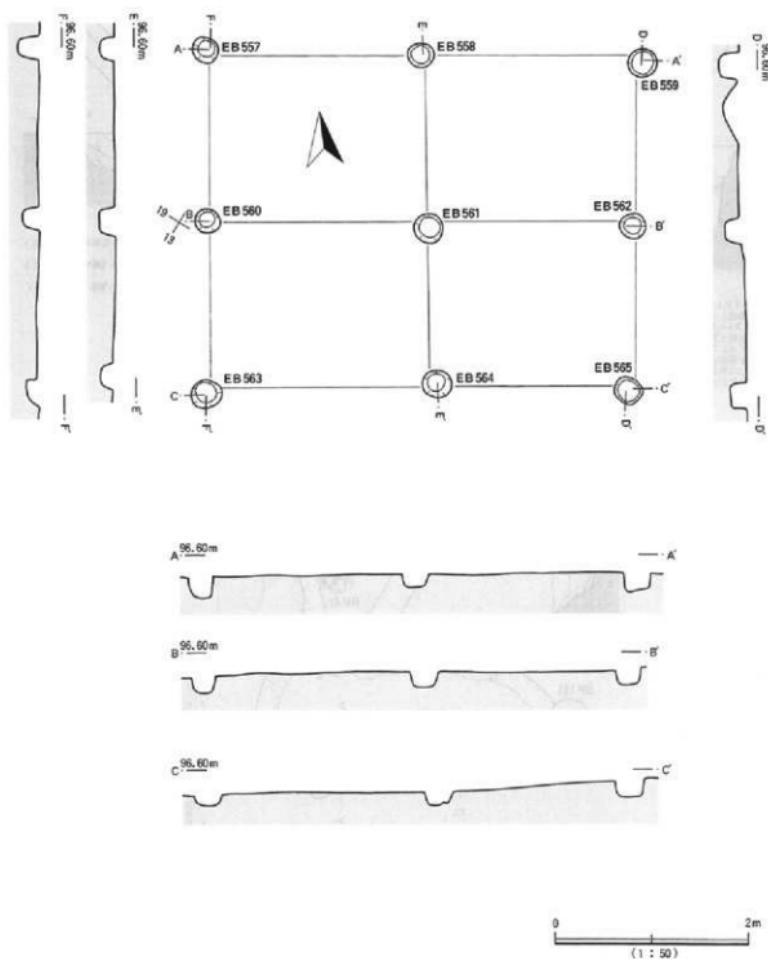
#### 祭祀遺構 S X 226 (第45図)

南側調査区の最南端11—20GでS T 33の西側に検出された。平面プランは長辺約1.5m、短辺約1.4mで西側が斜めになる三角形の形状を呈する。深さは確認面から約15cmを測る。断面形は、底面に凹凸が認められ、壁面は北・東壁が急角度で立ち上がり、南壁は緩やかに立ち上がる台形に近い形状である。

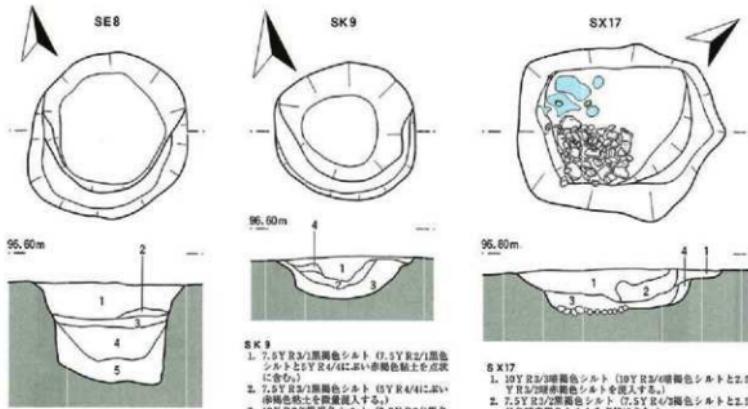
覆土は4層に細分され、1・2層が暗褐色シルトで、3・4層が黒褐色シルト、5層は暗褐色シルトとなる。また、1・4層はほぼ均質であるが、2・3・5層は酸化土を含み、5層は2層に比較して酸化土が多く混入する。

遺物は、完形品が土師器の环3点、高环3点、壺1点で、他に壺の口縁部から体部にかけての資料が1点出土している。

完形の土器は南東壁にまとまっており、高环2個体の口縁部が合わされ、大型の环の中に別の环が内包された状態で出土している。これら土器には、大型の环や壺部が反り返る高环などの特徴が認められ、祭祀に使用されたと考えられる。



第43図 S B50

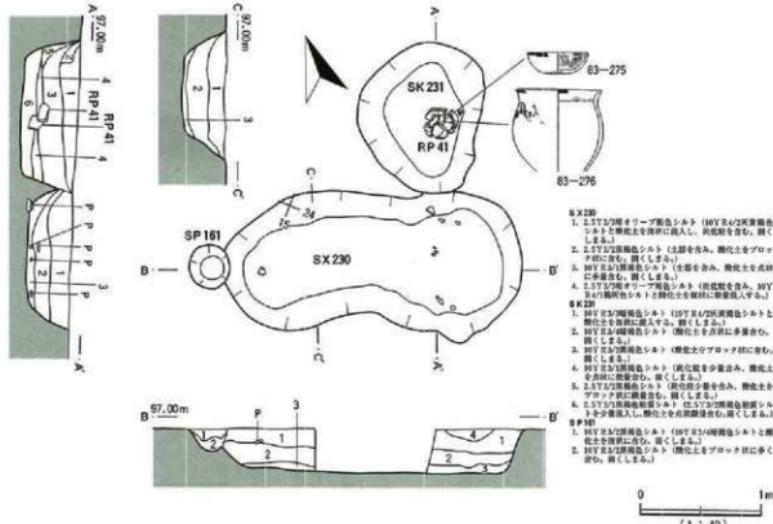


**S E8**

- 7.5Y R 3/1黒褐色シルト (7.5Y R 4/4に近い黒褐色シルトを薄地盤の上部に含む。)
- 5Y R 4/4赤褐色シルト質粘土 (7.5Y R 2/1黒褐色粘土質シルトを混入する。)
- 10Y R 1.7.5Y 黄褐色粘土 (7.5Y R 3/4暗褐色粘土を中状に含む。)
- 5Y R 2/1黒褐色粘土
- 10Y R 3/2黒褐色粘土

- SK 9**
- 7.5Y R 3/1黒褐色シルト (7.5Y R 2/1黒褐色シルトと7.5Y R 4/4に近い黒褐色粘土を点状に含む。)
  - 7.5Y R 3/1黒褐色シルト (7.5Y R 4/4に3.5% 混褐色粘土を含み混入する。)
  - 10Y R 1.7.5Y 黄褐色粘土 (7.5Y R 2/1黒褐色シルトと7.5Y R 4/4に近い黒褐色シルトをブロック状に含む。)
  - 7.5Y R 3/1黒褐色シルト (7.5Y R 3/1黒褐色シルトと5Y R 4/4に近い黒褐色シルトを点状に含む。)
  - 10Y R 3/2黒褐色シルト

- SX 17**
- 10Y R 3/2暗褐色シルト (10Y R 2/2暗褐色シルトと2.5% Y R 2/2暗褐色シルトを混入する。)
  - 7.5Y R 2/2暗褐色シルト (7.5Y R 3/3褐色シルトと2.5% Y R 2/2暗褐色シルトを混入する。)
  - 10Y R 3/2暗褐色シルト (7.5Y R 2/1黒褐色シルトと7.5Y R 3/4暗褐色シルトを点状に含む。)
  - 10Y R 3/2黒褐色シルト



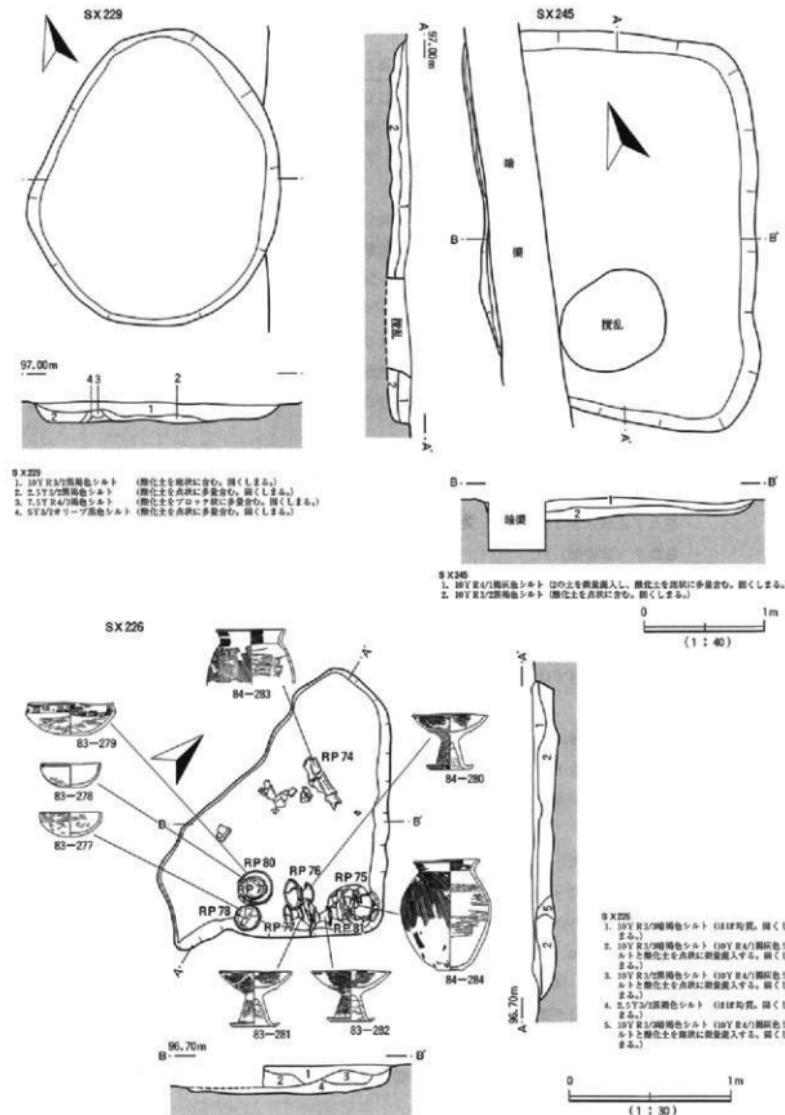
- B X28**
1. 10Y R 3/2暗褐色シルト (10Y R 4/2黒褐色シルトと薄地盤を含む。薄地盤を多く含む。)
  2. 10Y R 2/2暗褐色シルト (薄地盤を含む。)
  3. 10Y R 3/2暗褐色シルト (土層を含み、酸化土を横状に含む。)
  4. 10Y R 3/2暗褐色シルト (酸化土を少量含み、酸化土を横状に含む。)
  5. 10Y R 3/2暗褐色シルト (酸化土を含む。酸化土を横状に含む。)

- B' X29**
1. 10Y R 3/2暗褐色シルト (10Y R 4/2黒褐色シルトと薄地盤を含む。薄地盤を多く含む。)
  2. 10Y R 2/2暗褐色シルト (薄地盤を含む。)
  3. 10Y R 3/2暗褐色シルト (酸化土を含む。)
  4. 10Y R 3/2暗褐色シルト (酸化土を少量含み、酸化土を横状に含む。)
  5. 10Y R 3/2暗褐色シルト (酸化土を含む。酸化土を横状に含む。)

- B X30**
1. 10Y R 3/2暗褐色シルト (10Y R 3/2暗褐色シルトと酸化土を含む。酸化土を点状に含む。)
  2. 10Y R 3/2暗褐色シルト (酸化土を点状に含む。)
  3. 10Y R 3/2暗褐色シルト (酸化土を含む。)
  4. 10Y R 3/2暗褐色シルト (酸化土を少量含み、酸化土を横状に含む。)
  5. 10Y R 3/2暗褐色シルト (酸化土を含む。酸化土を横状に含む。)

- B' X31**
1. 10Y R 3/2暗褐色シルト (10Y R 3/2暗褐色シルトと酸化土を含む。酸化土を点状に含む。)
  2. 10Y R 3/2暗褐色シルト (酸化土を点状に含む。)

第44図 S E8・SK 9・231・SX 17・230



第45図 S X 226・229・245

## 5 溝 跡

第2・3次調査で検出された明確な溝跡と判断できたものは7条である。その大半が第3次調査区に集中し、第2次調査区では希薄になる傾向がみられた。

時期を明確に判断できる遺物が出土した溝跡は3条であったが、中には、中世に集落を区画していたと考えられる溝跡も検出された。以下に各溝跡の概略を述べる。

### S D 4 (第46図)

第2次調査の南側調査区4~6-24・25Gで検出された。第2次調査区を東西に横断する長さ10m以上の溝跡で、北東部を近年の暗渠施設に破壊されている。

幅約3.0~3.5m、確認面からの深さ45~50cmを測る。断面形は西側で台形状、東側でレンズ状となり、中央は豊面に段を形成し底面が平坦な形状となる。

覆土は、黒褐色粘土と黄灰色粘土、暗オリーブ褐色シルトなどが混在する様相を示し、粘土質の土が多く堆積している。覆土の堆積状況から、底層は自然埋没で上層は人為的に埋められたと考えられる。また、さらに東側へ延びると推測されたが、東側の第3次調査区では検出できなかった。

遺物は、覆土から須恵器の坏底部、青磁片、砥石、古鏡（寛永通宝）が出土している。坏は底部切り離しがヘラ切りであることから奈良時代の所産と考えられるが、当該期の遺構が検出されず流れ込みと推測され、この溝跡は中世から江戸時代頃まで機能していたと推定される。

### S D 7 (第47図)

第2次調査の北側調査区4-41~44Gで、S T13と重複して検出された。長さ7.0m以上の南北方向の溝跡であるが、北側は擾乱を受け、南側は浅くなり検出できなかった。

幅約40~70cmを測り南側が広く、北側が狭くなり、確認面からの深さは約12~20cmを測る。断面形は、南側では壁が急角度で立ち上がり、底面が平坦となる台形状を示し、北側ではU字状となる。

覆土は、3層に分かれ、1層が黄灰色の粘質シルト、2層が灰黄色の粘質シルト、3層は褐色の粘質シルトとなり、3層は南側断面のみで堆積する。

遺物の出土が無く詳細は不明であるが、S T13を切ることから古墳時代以降に機能していたと考えられる。

### S D 89 (第47図)

調査区南側13~15-19・20Gで検出された東西方向の溝跡である。東側をS D87に切られ、西側は調査区外となり、長さ9.5m以上を測る。東側の一部をS X225に切られている。

幅約40~60cm、確認面からの深さ約15~30cmを測り、部分的に浅く狭くなる様相を示している。断面形は、東側端の壁面が急角度で立ち上がり、底面が平坦となる台形状となり、中央部から西側は底面が弧を描き嶮が急角度で立ち上がるU字状を呈する。

覆土は3層に分かれ、1層は暗オリーブ褐色のシルト、2・3層が黒褐色シルトとなり、各層に酸化土が混入し、3層のみ灰色の粘質シルトが混じる。また、1層は東側、3層は西側だけに堆積する状況である。

遺物の出土が無いため詳細は不明である。

**S D 91 (第47図)**

調査区南側東端15・16・21・22Gで検出された東西方向の溝跡である。調査区内での長さ7.7mで、さらに東側に延びると考えられる。

幅約0.7~1.0m、確認面からの深さは約30~40cmを測る。断面形は北側の壁面が緩やかに立ち上がり、南側の壁面は急角度に立ち上がる。また、底面は凹凸がある。

覆土は1層で、黒褐色のシルトとなり炭化鉱・酸化土を含む。遺物の出土が無く詳細は不明。

**S D 88 (第48図)**

調査区南側14~16~18~21Gで検出された南北方向のS D 87とほぼ平行に延び、S T 35を切る溝跡である。調査区内での長さ約19.3mを測り、さらに南側に延びると考えられる。

幅約30~90cm、確認面からの深さは約15cmを測りほぼ一定、部分的に幅が狭くなっている。断面形は壁が緩やかに立ち上がり、底面が弧を描くレンズ状を呈す。

覆土は1層で、暗オリーブ褐色のシルトで微砂と酸化土を混入する。

規模・覆土などがS D 90と類似していることから、S D 90と同時期の中世頃に機能していたと推測される。

遺物は、覆土から土師器の小破片が数点出土したが流れ込みと考えられる。

**S D 90 (第48図)**

調査区南側12~14~20~22Gで検出された東西方向の溝跡で、東側でS D 87と交わり、S T 33・S T 34を切る。調査区内での長さは約13.7mを測り、さらに西側の調査区外へ延びると考えられる。

幅約30~70cm、確認面からの深さは約8~20cmを測り、西側から東側にかけて幅が狭く、深さが浅くなっていく様相を示している。断面形は、東側がレンズ状を呈し、西側は壁面が急角度で立ち上がり、底面がほぼ平坦な台形状に近い形となる。

覆土は1層で、暗オリーブ褐色のシルトで酸化土を少量混入している。

遺物は、覆土から流れ込みと考えられる土師器の小破片が数点と床面から白磁碗の口縁部片が出土している。

床面出土の白磁から、この溝跡は中世頃に機能していたと推測される。

**S D 87 (第49図)**

調査区南側12~16~18~29Gで検出され、調査区中央で直角に曲がる溝跡である。S T 35・37他の古墳時代の住居跡を切り、S X 223・229に切られる。調査区内での長さは約71.5mを測り、さらに南側と東側の調査区外に延びる。

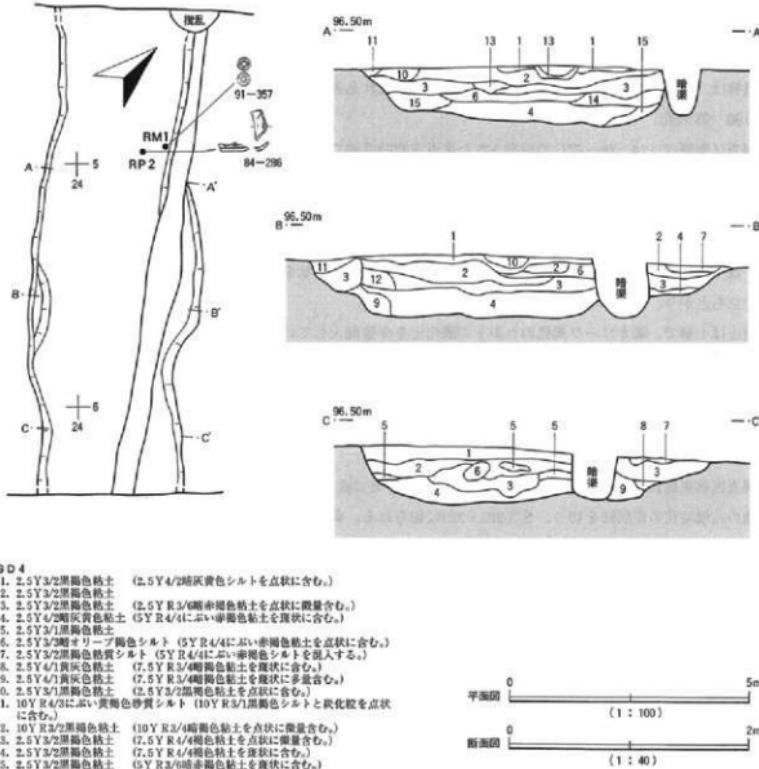
幅約0.8~3.0m、確認面からの深さは約50~65cmを測り、南北方向よりも東西方向が幅が広くなり、深い傾向を示している。断面形は、壁面が急角度で立ち上がり、底面が平坦となる台形状を示すが、東端では壁面に段を形成し底面の最深部がV字状を呈する。

覆土は、19層に細分されたが、1層の暗褐色シルト、2・3層の黒褐色シルト、5層のオリーブ黒色シルト、6層の緑黒色粘質シルトの5層が基本層となり、他の土はブロック状または基本層の間に薄く堆積している。また、大半の土に酸化土が混入し均質で混じりがないのは13層の黒褐色シルトと14層の黒褐色粘質シルトのみである。覆土は概ね帶状に堆積しており、自然に埋没した様相を示している。

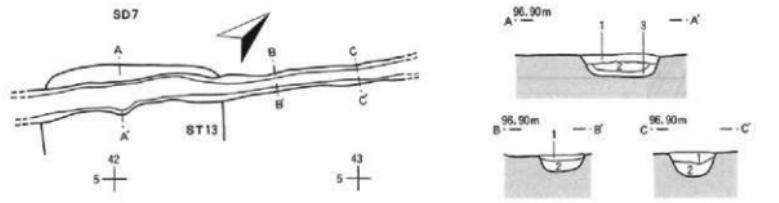
**中世の区画溝**

遺物は、覆土から石器（石鏡）や土師器の壺などの破片、有孔円板と砥石などの石製品、須恵器の高台付壺の底部、壺の体部破片そして、株洲系陶器の鉢鉢及び瓷器系陶器の壺破片と青磁の口縁部などの中世須恵器と多岐に渡り出土した。

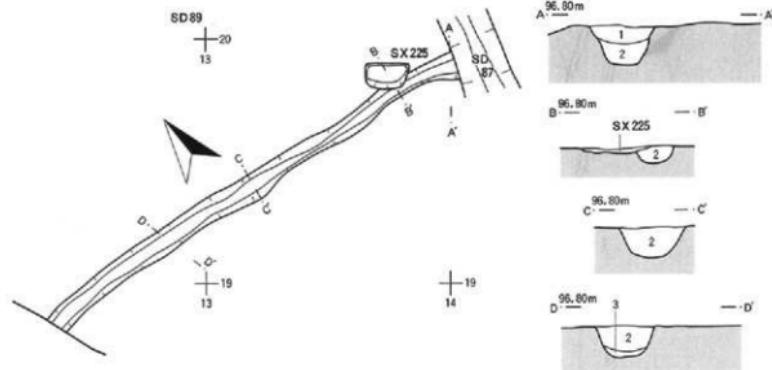
古墳時代以前の遺物は溝跡を構築する際に破壊した古墳時代の住居跡から入り込んだと考えられ、所轄時期は、陶磁器片などから中世に機能していた集落を区画する溝跡と推定される。



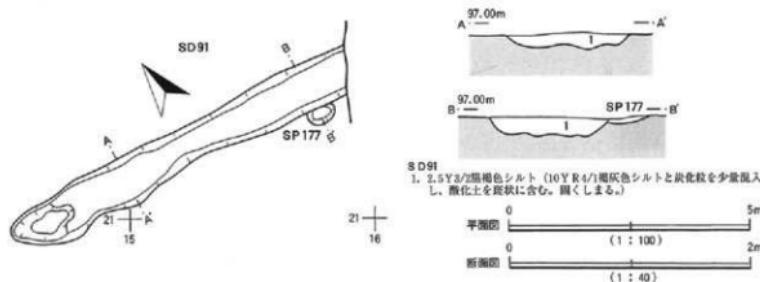
第46図 SD 4



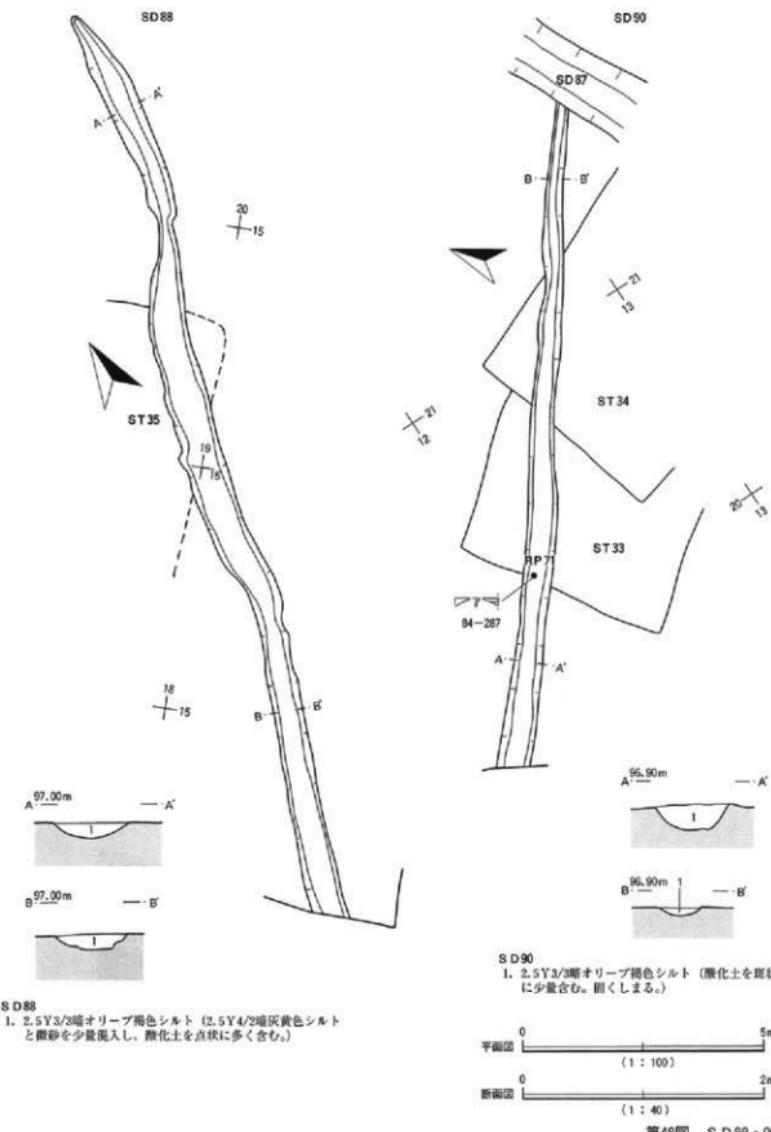
**SD7**  
 1. 2.5Y 4/1 黄灰褐色粘質シルト (10Y R 5/6 黄褐色シルトを点状に含む。)  
 2. 10Y R 5/2 黄褐色粘質シルト (10Y R 5/6 黄褐色シルトを斑状に含む。)  
 3. 7.5Y R 4/1 暗灰褐色粘質シルト (7.5Y R 4/6 暗色シルトを斑状に含む。)



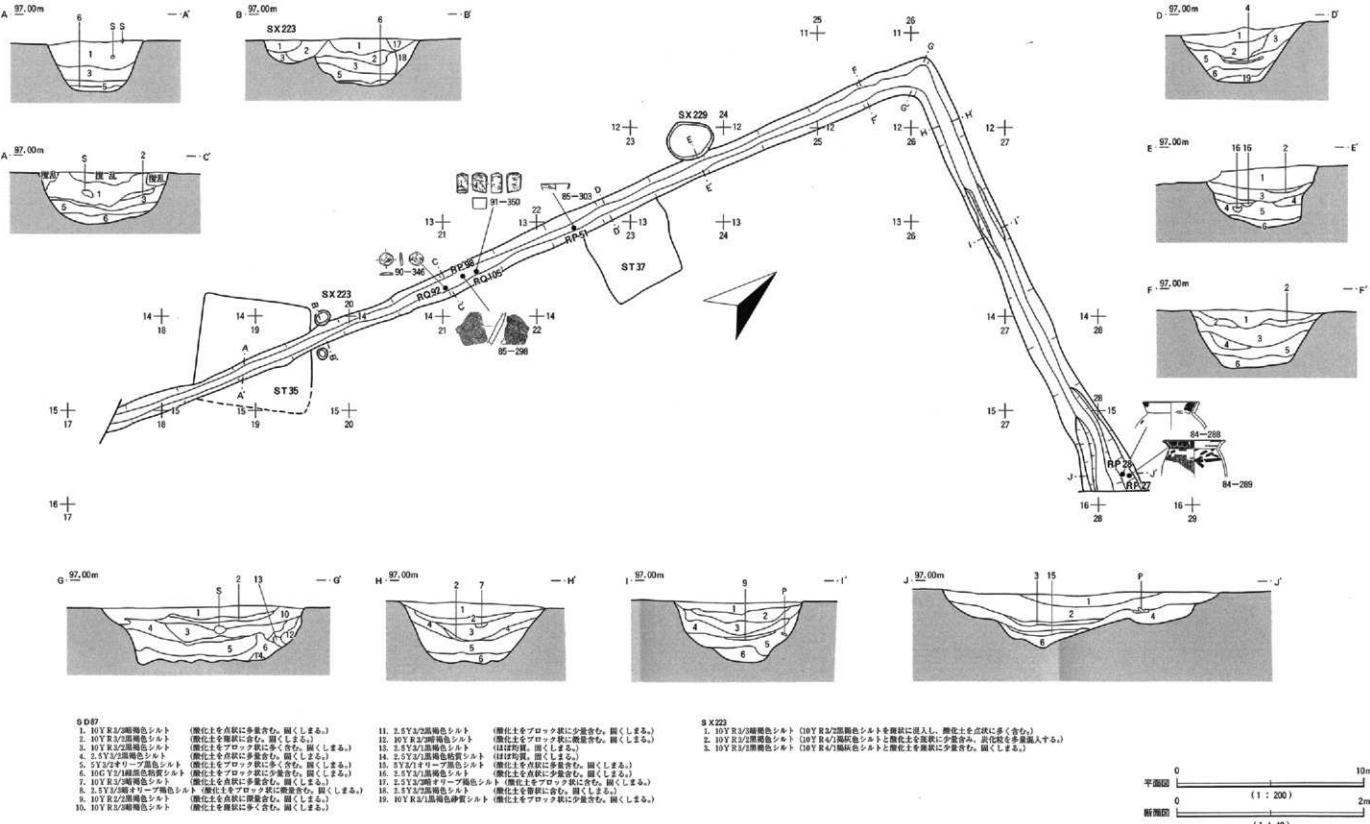
**SD89**  
 1. 2.5Y 3/3時 オリーブ褐色シルト (酸化土を点状に多量含む。)  
 2. 2.5Y 3/2 暗褐色シルト (酸化土を点状に多量含む。固くしまる。)  
 3. 2.5Y 3/2 暗褐色シルト (N 4/ 暗色粘質シルトを斑状に少量混入し、  
酸化土を点状に含む。固くしまる。)



第47図 S D 7 • 89 • 91



第48図 SD 88・90



第49図 S 87

## V 遺 物

第2・3次調査では、整理箱にして総計78箱の遺物が出土した。古墳時代の遺物が大半を占め、他に石器、弥生土器そして奈良・平安時代の土器や中世の陶磁器、古鏡などがある。

第2次調査区では遺存状況が悪く、破片が多数を占めたが、第3次調査区では、遺構毎に遺物のまとまりが認められ概ね良好な遺存状態であったことが窺える。

分布状況は、各時代の遺物が混在するものの遺構の分布と概ね同じ状況を示していた。

以下に各遺物を種別もしくは遺構毎に特徴を述べる。

### 1 弥生土器（第51・52図）

第2・3次調査において、約400点を超える弥生土器が出土している。その多くはグリッド出土となるが、古墳時代の遺構の覆土から土師器と共に出土したものもある。弥生土器は小破片が大半を占め、中には同一個体と考えられるものも多く含まれている。但し、同時期の遺構は検出されていない。分布状況をグリッド毎に集計したものを第50図に示している。なお、遺構の覆土から出土したものも便宜上グリッドに含めている。

弥生土器の出土分布は調査区の東側に集中して出土しており、概ね遺構の分布と同様の出土状況を示している。但し、11点以上と比較的多く出土している区域は10-24G以南と限られる傾向がみられる。この区域は、「山形考古第7巻3号（通巻33号）」に報告された一渋江遺跡第4次調査補遺一の第2図に示されている縄文・弥生遺物の集中域に続くことから、この区域に弥生時代の集落の存在を示唆するとも考えられる。図示した弥生土器44点について概略を述べる。

器種は、破片からの推定となるが大半が壺または甕と考えられる。また、6~8の口縁から頸部の破片、9~10の口縁部の破片、15~18の体部と底部の破片、22~24の口縁部と体部の破片、25~27の口縁部の破片は接合部分がみられなかつたが、同一の個体と考えられる。

土器に施される文様には撚糸の圧痕文や撚糸文が多く施されるが、沈線文、刺突文、竹管文などもみられる。

撚糸の圧痕文のみ認められるものには、横位とU字状の側面圧痕文が施されるもの（3）、連弧の側面圧痕文が施されるもの（2）、連弧と横位の側面圧痕文が施されるもの（4・5・6~8・11）がある。11は壺の頸部と体部の境に施文され、頸部は無文となる。また、4・6には口縁部にも撚糸圧痕文が施される。そして、1・38は羽状撚糸文と考えられ、28・39にも撚糸側面圧痕文が認められる。

口縁部資料でL R縄文の圧痕文が施されるもの（12・13）では、12は横位の側面圧痕文、13は波状様の側面圧痕文がみられる。

沈線文による文様は横線文・連弧文・変形工字文がみられる。2本の連弧文と1本の横線文が認められるもの（19）、横線文と連弧文が各1本認められ、地文がL R縄文となるもの（20）、変形工字文に撚糸側面圧痕文が施され、円形浮文が張り付けられるもの（21）、口縁部に撚糸

弥生土器の分布

文、平行沈線文、頸部に半裁竹管による刺突文が施されるもの（34）、頸部に横線文が認められるもの（35）の他に、同一個体と推定される22～24は波状口縁の口縁端に刺突文が施され、径約3mmの孔も空けられる。口縁部に連弧文、頸部には平行沈線文の間に刻目が施され、撲糸Rの地文が体部に認められる。

33は口縁と体部の境に刻目が施され、口縁及び口唇部そして体部に撲糸文が認められる。また、同一個体の9・10は口縁に竹管による刺突文が施され、口唇部付近と頸部に横位の撲糸側面圧痕文が施文されている。同じく同一個体の25～27は口縁が折返し口縁となり、撲糸Rが施文されている。

14・29・32は口縁部に撲糸Rが施文される資料で、口唇部にも施文されるもの（29）と体部にも施文されるもの（14・32）がみられ、14・32は頸部無文となる。

櫛目状沈線文が施されるものは同一個体の15～18で、体部上方に撲糸Rが施文され、体部下方から底部に櫛描状沈線文が施される。

37は頸部に半裁竹管文が認められ、体部には撲糸Rと考えられる地文が施される。

地文のみ確認できるものでは、撲糸Lの地文が施されるもの（31・36・40・41）と撲糸Rの地文が施されるもの（30・42・43・44）がある。底部資料は全て平底である。

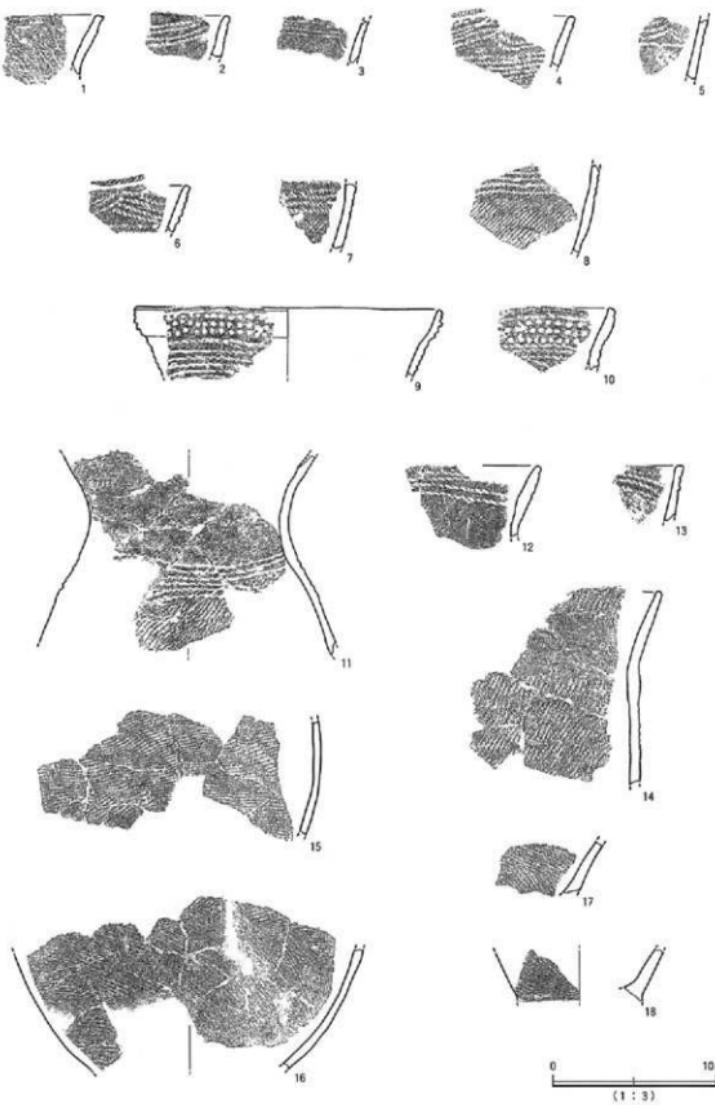
#### 部位の文様

以上から、土器に施文される文様を各部位に分けると、口縁～頸部は撲糸側面圧痕文（横位・斜位・U字・連弧）、L R 繩文側面圧痕文（横位・波状）、沈線文（横線・並行・連弧・変形工字文）、刺突文、半裁竹管による刺突文や刻目文が、体部には撲糸側面圧痕文（横位）、櫛目状沈線文、底部には撲糸圧痕文、櫛描状沈線文がみられる。

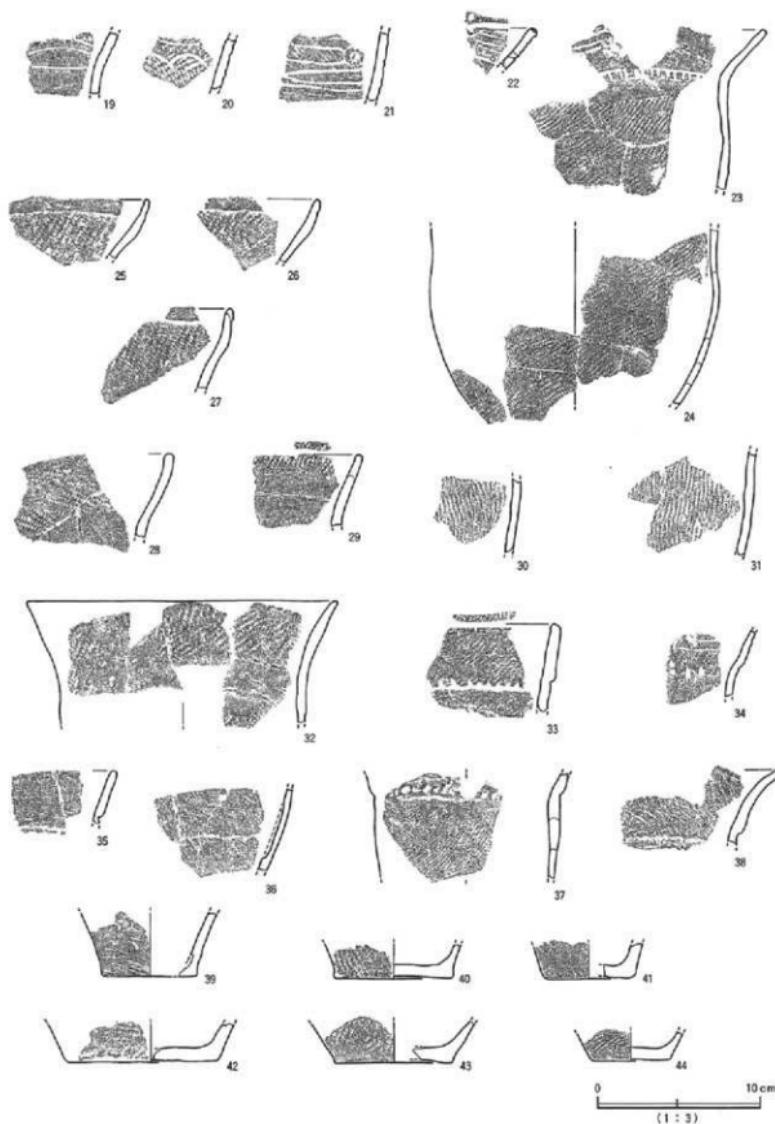
これら弥生土器にみられる刺突文や沈線文、円形浮文、撲糸の側面圧痕文などの文様から本遺跡出土の弥生土器は弥生時代後期の天王山式に比定されると考えられる。



第50図 弥生土器分布図



第51図 弥生土器 (1)



第52図 弥生土器（2）

## 2 住居跡出土土器 (第55~82図)

### S T13出土土器 (第55図45・46)

口縁部がくの字に折れて外反する形態で外面にミガキ、ナデ調整が認められる壺(45)と口縁部が強く外反し、外面の頸部に刷毛目調整が施される壺(46)の口縁部資料である。

### S T33出土土器 (第55図47・48)

丸形で口縁部が直立する形態で内外面にミガキとナデ調整が施される壺(47)、折返し口縁となる壺(48)の口縁部資料である。

### S T34出土土器 (第55図49~52)

49は口縁部が直立する形態となる壺、50は内外面に黒色処理とミガキ調整が施される両黒土器の壺で、口縁部がくの字に折れ直立する形態となる。

51は小型の壺の底部資料で、内外面にケズリ調整が認められる。高壺(52)は脚部に2ヵ所の穿孔の痕が確認できたが、その位置から4個の孔があったと推測される。

### S T35出土土器 (第55図53~第57図68)

壺は身が深く、口縁と体部の境がくびれ口縁部が外反する鉢形で丸底のもの(53)と平底のもの(54)、丸形の形態で口縁部が直立するもの(55)、口縁部が外にのびるもの(56~58)、口縁部が内寄するもの(59)がある。53・54はケズリとナデ調整が、55・59の外面、56の内外面、57の内面にミガキ調整が認められる。また、60は両黒土器の壺で、内外面に黒色処理とミガキが施される。

鉢は口縁部と体部の境がくびれ口縁が外反するもの(61)と口縁部が直立するもの(62)があり、61は外面に刷毛目、内面にヘラナデ調整が施され、62は内外面の口縁部にナデ調整が認められる。

63の壺は体部が丸形で頸部が長くなる形態と考えられ、外面にミガキ調整が施される。

壺は長胴形のもの(64)、球胴形となるもの(65・66・68)、菱形のもの(67)があり、口縁部は、64が直行で外傾し、65・67は強く外反、66は緩く外反する形態となる。65の体部と底部、そして67の内面にケズリ調整が認められる。

### S T36出土土器 (第57図69~75)

壺は口縁部が「くの字」に折れて口縁が直行するもの(69・70)と口縁と体部の境がくびれ口縁が外反するもの(71)で、69は内外面に、70・71は内面にミガキ調整が認められる。

72の壺は長胴形で口縁部が直行で外傾する。

壺は口縁部資料で、73・74ともに口縁部が外反する。調整は外面にナデ、ヘラナデやケズリ調整がみられる。

### S T37出土土器 (第58図76~81)

76の壺は口縁部がくの字に折れ直行する形態で、外面にナデ、ケズリ調整が認められる。

77は高壺の中空柱状の脚部資料で、形態は裾部が大きく開くと考えられる。

78は壺の底部資料で、底部に径3.0cm程の孔が開けられる単孔式のもので、外面にケズリ、内面に刷毛目、ヘラナデの調整が施される。

壺は体部の形態が球胴形のもの(80)と長胴形のもの(81)があり、79は丸底壺の底部資料

である。調整は刷毛目、ヘラナデが施される。

#### S T 39出土土器 (第58図82~86)

坏 (82) は丸形で、口縁部が外にのびる形態と考えられる。

壺は、83・84が口縁部の資料でナデや刷毛目、ヘラナデの調整が認められ、85はヘラ削りが施される底部資料である。

86は壺の底部資料で外面にヘラ削り、底面はヘラ削りの後にナデ調整を施している。

#### S T 40出土土器 (第59図87~第61図99)

87の坏は口縁部がくの字に折れ直行する形態で、外面にナデとケズリ調整が認められる。

鉢は外面にナデとケズリ、内面にナデ、ヘラナデ、ケズリ調整が施され、口縁部と体部の境にヘラ削りと考えられる稜があるもの (88) と平底で、体部がふくらみそのまま口縁部が内弯する形態となり、内面にヘラ削りがみられるもの (89) がある。

壺は、平底で体部は菱形に近く口縁部が外反するもの (90)、長胴形で口縁部が強く外反するもの (91~93) がある。3点とも外面には刷毛目が、内面はヘラナデ調整が認められる。

壺は胴部が長胴形のもの (94・95) と丸形のもの (96・97) があり、95は口縁部が直行し、96は外反する形態となる。

98・99は共に無底式の壺形の瓶で、頸部がくびれ口縁部が外反する形態となる。内外面に刷毛目調整が施される。

#### S T 702・703出土土器 (第62図100~102)

S T702出土土器で図示できたものは土器部の壺 (100) と須恵器壺破片 (101) で、100の壺は胴部が丸形となり、口縁部が内弯する器形で内外面に刷毛目調整が施され、101は、須恵器壺体部の破片資料で外面にタタキ目、内面に青海波アテ痕が認められる。

S T703出土土器で図示できたのは須恵器の壺破片 (102) のみで、S T702出土の須恵器壺と同一と思われる。外面にタタキ目、内面に青海波アテ痕が認められる。須恵器は、調整痕の様子から古墳時代のものと考えられる。

#### S T 701出土土器 (第62図103~第64図118)

坏は、全体的な形が丸形となる形態であるが、口縁部が内弯するもの (103・104)、口縁部が外にのびるもの (106) と口縁部がくの字に折れて直行するもの (107) がある。103は外面にケズリ、ナデ、内面にナデ、ヘラナデ調整が、104は外面にケズリ、ナデ、内面にナデ調整、106は内面に107は内外面にミガキ調整が認められる。105・108は口縁部のみの資料であるため全体の器形は不明であるが、105は口縁部が内弯し、108の口縁部は外反する。105・108の外面にミガキ、ナデ、内面にナデ調整が認められる。

壺は、長胴壺で口縁部が直行で外傾するもの (109)、口縁部が緩やかに外反するもの (110) と、体部が菱形に近い形態で口縁部が強く外反するもの (111) の他、器高が35cmを超える大型の壺と考えられるもの (112) がある。また、113~115は小型の壺で、113は丸形で短い口縁部が外傾する。114・115は口縁部が直行で外傾し、体部の形態は不明である。116は口縁部の破片資料で直行で外傾する。調整は外面に刷毛目、ナデ、ケズリが、内面に刷毛目、ヘラナデ、ナデ調整などが施される。

壺は胴部が丸形となる形態であるが、117は口縁部が内弯し、118は複合口縁となる。調整は

117の外面に刷毛目、ナデ、ヘラナデが、118は外面に刷毛目、ナデ、内面にナデ、ヘラナデが施されている。

#### S T 41出土土器（第65図119～125）

土師器も出土しているが、小破片のみであるため割愛し、須恵器のみ図示した。

坏蓋（119）はロクロ整形で、天井部はやや高く丸みを持ち、外面に回転ヘラ削り調整を施す。口縁部と天井部の境の稜はシャープで、口縁部は外弯気味に下がり、口唇部は内傾する凹面となる。また、内外面に縁が付着している。縁部や器形の特徴から陶色幅年TK23型式に相当すると考えられる。

大型壺の肩部（120）と体部（121～125）資料は外面にタキ目、内面に青海波アテ痕が認められ、調整痕や器形などから同一個体と考えられ、調整痕の様子から古墳時代の所産である。

#### S T 42出土土器（第66図126～131）

126の坏は口縁部資料で底部を欠くが、単純口縁の丸形で口縁部が外にのびる形態と考えられる。外面にミガキ調整が認められる。

127は小型の高坏で、坏部が欠損する。脚部は中空の短脚で、ハの字に聞く形態となる。脚部外面にケズリ、ナデ調整が施される。

壺は体部資料であるが、丸形で頸部が長くなると考えられるもの（128・129）、口縁部を欠き体部が丸形で平底となるもの（130）、口縁部を欠く小型の壺と考えられる資料で、体部が丸くふくらみ、底部が高台様につまみ出されているもの（131）がある。128は小型の壺で体部下方に最大径を持ち、外面に彩色されケズリ、ナデ調整が認められる。また、129は体部中央部に最大径を持ち、外面にミガキ、内面にケズリ、ナデ調整が施されている。130は内外面にヘラ削り調整が施され、131は外面にヘラナデ、内面に指圧痕が認められる。

#### S T 43出土土器（第66図132～134）

132は鉢の口縁部から体部上部の資料で、外面に刷毛目、ナデ調整が施される。

壺は、口縁部から体部上部の資料で口縁部が強く外反するもの（133）と、体部は球胴形で口縁部が強く外反する形態となるもの（134）があり、133は内外面に刷毛目、ナデ調整が認められ、134は内外面に刷毛目とナデ調整が施される。134は完形の資料である。

#### S T 44出土土器（第67図135～第68図149）

135の須恵器坏蓋はロクロ整形で、外面のみに縁が付着している。天井部は比較的低く丸みを持ち、天井部外面の約2/3まで回転ヘラ削り調整を施す。口縁部と天井部の境の稜は鈍く、口縁部は外反して下がる特異な形態となる。陶邑以外の生産地と考えられるが詳細は不明である。陶色幅年に当たはるとすれば、TK47型式頃に相当すると考えられる。

坏は、底部が丸く、口縁部と底部の境に段が作出され、口縁部が内傾する須恵器模倣の形態となるもの（136・137）、全体的な形が丸形となるが、口縁部が内寄するもの（138・139）と口縁部がくの字状に折れ直行するもの（140）、口縁部がくの字状に内屈するが、全体的な形がV字形となるもの（141）とU字形の形態となるもの（142）がある。また、143は口縁部の破片資料で口縁部と体部の境がくびれ口縁部が外反する。136の外面にはケズリ、ナデ調整が、内面にはミガキとナデ調整が施され、底部はヘラ削りが認められる。137は内外面にナデ調整がみられ、138・141・143の内面にミガキ調整が141の外面にヘラナデ調整が認められる。

144の鉢は外面に刷毛目、内面にヘラナデが施され、底部はヘラ削りで作出されている。

壺は口縁部を欠くが、体部が丸形で頸部が長くなるもの（145）と、完形の資料で、胴部が丸く口縁部が複合口縁となるもの（149）がある。145は最大径を体部や上方に持ち、底部は平底となる。調整は外面にケズリ、内面に刷毛目がみられる。また、149も底部が平底で刷毛目やヘラナデの調整が施される。

壺は長胴形で口縁部が強く外反する形態（146～148）となる。調整は外面に刷毛目とナデ、内面に刷毛目やヘラナデ、ナデが施される。

#### S T 47出土土器（第68図150～第70図163）

高坏は150～154が脚部を欠く坏部の資料で、155は裾部のみの資料である。150～153は坏下部に後がつき、150・151はその後が強く引き出される。152～154は坏部が外傾する形態となる。155は中空柱状で裾部が大きく開く脚部である。150・151・152の外面または内面にミガキ調整がみられ、153の内外面に刷毛目調整が認められる。また、154は内外面にヘラナデ調整が施される。

壺は体部下半を欠く資料である。長胴形で口縁が強く外反するもの（158）と球胴形で口縁部が直行で外傾するもの（159）と考えられる。共に、内外面に刷毛目調整が施される。

壺は体部が丸形で頸部が長い形態となるもの（156・157）、体部が丸形で、口縁部が外反するもの（160）、折返し口縁となるもの（161）、小型のもの（162）がある。156は完形の小型壺で、ナデ、ケズリ、ヘラナデの調整が施される。157は内外面にミガキが認められる。また、160は二次加熱を受け残存状態が悪いため内面に刷毛目調整がかすかに認められるのみで、161は外面に刷毛目、内面にヘラナデが施され、内外面に縫が付着する。162は内外面にケズリがみられる。

163は須恵器壺の体部破片と考えられ、外面にタタキ目、内面に青海波アテ痕がみられ、調整痕などから古墳時代のものである。

#### S T 704出土土器（第70図164～第71図172）

164は完形、165は上半部を欠く小型の鉢である。164は頸が長い形態となり、外面に刷毛目調整が施される。165は外面にケズリ、刷毛目、内面にケズリがみられる。

166は裾部を欠く器台で、外弯ぎみに口縁部がつまみ出され縫を持つ。脚部に透かし孔がみられる。外面にミガキ、ナデ、内面にナデ、ヘラナデの調整が施される。

壺は、口縁部が緩やかに外反するもの（167）と強く外反するもの（168・170）があり、170は大型となる。また、169は口縁部の破片、171は丸底の底部の資料である。調整は167・170・171の外面と169の内外面に刷毛目が認められ、171の内面にヘラナデが施される。

172は体部が丸形で口縁部が外反する壺で、底部を欠く。外面に刷毛目とヘラナデ、内面にヘラナデ調整がみられる。

#### S T 705出土土器（第72図173～第74図188）

坏は全体的な形が丸形のものであるが、口縁部に違いがみられ、くの字状に折れ直行するもの（173・174・179）、くの字状に内屈するもの（175）、内弯するもの（176）、外にのびるもの（177）、くの字状に折れ外反するもの（178・179）となる。調整は174の外面にケズリが認められ、175～179の内外面にミガキが施される。

壺は、大型で丸形のもの（181）、長胴形で小型のもの（180）と大型のもの（182）がある。調整は3点とも内外面に刷毛目がみられるが、180の外面にケズリ、182の内外面にはミガキが施される。

甕は長胴形のもの（183・184・185）と球胴形のもの（185）がみられ、183は口縁部が緩やかに外反し、184～186は口縁部が強く外反する形態となる。また、187・188は口縁部を欠く資料で、丸底で底面が窪められる。調整は内外面に刷毛目が多く認められるが、183・185の内面にはヘラナデ調整も施されている。

#### S T 706出土土器（第74図189～195）

器台（189～191）は3点とも内外面に彩色され、透かし孔がみられる。189以外は脚部のみの資料となる。189は完形で口縁部は直立し端部は丸くなる。189・190の外面にはミガキ調整がみられ、大型器台の191は遺存状態が悪く縦部のナデしか認められない。

192は坏部と縦部を欠く高坏で、全体の形態は不明であるが、中空の短脚でハの字に聞く脚と考えられる。外面にミガキ調整が認められ、透かし孔がみられる。

193～195は口縁部のみの破片資料で甕（193・194）、壺（195）と考えられ、194・195が複合口縁となる。これら破片にはナデ調整が認められる。

#### S T 707出土土器（第74図196・197）

196は内面に黒色処理される内黒土器の坏で、口縁部が外反し、内面に稜が入る。外面にケズリヘラナデ、内面にミガキ調整が施される。

197は球胴形で、口縁部が緩やかに外反する甕で、外面に刷毛目、ナデ、ヘラ削り、内面に刷毛目、ナデ、ヘラナデの調整が施される完形の資料である。

#### S T 712出土土器（第75図198～第77図219）

坏は全体的な形が丸形となるもの（198・199）、口縁部と体部の境がくびれ口縁部が外反するもの（200・201）、口縁部がくの字状に折れる平底のもの（202・203）があるが、198・202は口縁部が外にのび、199は内弯、203は口縁部が内屈する形態である。また、200は丸底で201は平底となる。198と202の内外面には彩色が施されている。調整痕は198の外面と201の内面にミガキがみられ、202・203の内外面にケズリ、ナデ調整が認められる。

鉢は底部が窪み、短い口縁部が外反するもの（204）と、丸底で底部が広い205がある。205は上部に被熱の痕がみられることから天地逆に使用されたと推測される。204は内外面に刷毛目、ナデ、205は外面にケズリ、ナデ、内面にナデ、ヘラナデ調整が施される。

高坏は、中空柱状の脚部で坏部が鉢形となるもの（206）、坏部の中段に稜をもつもの（207・208）、坏下部に稜がつくもの（210）の他、中空柱状で縦部が大きく聞く脚部（209）、脚部に稜があるもの（211）、中空で透かし孔をもつ脚部（212）がある。211のみ外面に彩色が施される。また、206の坏部外面に刷毛目が、207・208の内外面にミガキ、ナデ、ヘラナデが認められ、212の外面にナデ調整がみられる。

甕は、長胴形となるもの（214～217）と、球胴形となるもの（218）がみられ、213・215・217の口縁部は強く外反する。また、215と216は同一個体と考えられる。調整痕は、体部外面に刷毛目が多くみられ、体部内面は刷毛目、ヘラナデが認められる。

219の瓶は頭部にくびれがあり、口縁部が外反する變形で、無底式である。外面にミガキ、

ナデ、内面にミガキ、ヘラナデ調整が施される。

**S T713・714出土土器**（第77図220・221）

220はS T713出土の底部を欠く壺で、体部が球胴形で口縁部が緩やかに外反する形態となる。外面に刷毛目、ナデ、内面にケズリ、ナデ調整が施される。

221はS T714出土の壺の口縁部である。体部は長胴形と考えられ、口縁部が直行で外傾する。内外面に刷毛目とナデ調整が認められる。

**S T716出土土器**（第78図222～232）

壺は全体的な形が丸形で、口縁が外にのびるもの（222）、口縁が直立するもの（223）、口縁がくの字に折れ直行するもの（224～226）がある。227も口縁がくの字に折れ直行する形態となる。225はヘラナデにより体部と口縁部の境に稜がつく。調整は、222の内面と224・225・227の内外面にミガキが認められ、225・226の外面にケズリが施される。

壺は小型で口縁部が口縁部が直行で外傾するもの（228）、体部が長胴形と考えられ口縁部が直行で外反するもの（229）と口縁部が強く外反するもの（230）がみられる。3点とも体部の内外面に刷毛目調整が施される。

231は無底の瓶で口縁部を欠く。内外面にケズリと刷毛目調整がみられ、232の壺は体部を欠くが丸形になると考えられ、口縁部が外反する。調整は内外面にナデがみられる。

**S T717出土土器**（第79図233～244）

壺は丸形で、口縁部がくの字状に折れ直行するもの（233～235）、口縁が直立するもの（236）、口縁が外にのびるもの（237）がみられる。調整は全ての壺内面と234・236の外面にミガキが認められる。また、234の体部と口縁部の境にケズリが施される。

238は鉢の口縁部から体部の破片資料で外面にナデ、内面にヘラナデ調整がみられる。

壺は球胴形で口縁部が緩やかに外反するもの（240）と、長胴形で口縁部が直行で外傾するもの（241）がある。240は口縁部から肩部にかけてナデ調整が施され、体部外面にはケズリとヘラナデ、内面はヘラナデと刷毛目調整が施される。241は外面に刷毛目、内面にヘラナデ調整がみられる。

242は体部下半を欠くが、深鉢形の瓶と考えられる。外面にケズリ、内面にヘラナデ調整が施される。

壺（243・244）は2点とも体部が丸形と考えられ、口縁部が外反する。243は内外面に刷毛目、ナデ調整が施され、244は外面にケズリ、ヘラナデ、内面にヘラナデ調整が認められる。

**S T718出土土器**（第80図245～248）

245の須恵器壺はロクロ整形で、天井部は低く平らで外面に回転ヘラ削り調整が施される。口縁部と天井部の境の後はシャープで、口縁部は直線的に下がり、口唇部は凹面となる。天井部にわずかな反り返りの段がみられることからツマミが付くと考えられる。また、外面に媒が付着する。壺部や器形の特徴から陶邑編年のT K208型式併行と推定される。

246の高壺は口縁部の破片資料で、壺部中段に稜が付き口縁部が外反するもので、内面にミガキとナデ調整が認められる。

247・248の須恵器破片は大型の壺部片で、外面にタタキ目、内面に青海波アテ痕がみられる。調整痕や器厚などから古墳時代の所産である。

**S T719出土土器** (第80図249~第82図271)

249の須恵器坏蓋のツマミは、250の須恵器坏蓋の出土から古墳時代のものと考えられる。250の須恵器坏蓋はロクロ整形で、天井部はやや高く丸みを持ち、外面に回転ヘラ削り調整を施す。口縁部はほぼ直線的に下がり、口唇部は内傾する凹面となる。器形の特徴から陶邑編年のTK208型式併行と考えられる。

坏は、口縁部と体部の境がくびれ口縁が外反するもの(251)、全体的な形が丸形で、口縁が直立するもの(252)、口縁が外にのびるもの(254)、口縁がくの字に折れ直行するもの(253・257・258)がある。255は丸形で口縁が直行するもの、256は口縁がくの字に折れ直行するものと考えられる。調整は251は外面にケズリ、ヘラナデ、内面にナデがみられ、他はミガキ及びナデやヘラナデ調整が施されている。

259は中空柱状の高坏の脚部で、裾部は大きく開くと考えられる。外面にミガキとケズリ調整がみられる。

臺は、無頸のもの(260)、体部が丸形で頸部が長いと考えられるもの(262・263)、口縁部が複合口縁となる大型のもの(271)がある。260は内外面にミガキが、262は外面にミガキ、内面にケズリ、271は内面に刷毛目、外面にケズリ調整がみられる。

261は完形の鉢で、外面にナデ、刷毛目、外面にナデ、ヘラナデ調整が施される。

甕は、口縁部が強く外反するもの(267)、緩やかに外反するもの(264)、直行で外傾するもの(265・266・268)があり、266は体部が球胴形で、267・268は長胴形となる。269は大型の甕底部と考えられる。調整は外面にケズリ、刷毛目が内面にヘラナデが多くみられる。

270は無底式の瓶底部で、外面にケズリ、内面にヘラナデの調整痕が認められる。

**S T720・721出土土器** (第82図272~274)

272・273はS T720から出土した臺である。272は複合口縁となる小型のもので、内外面に刷毛目、ナデ調整がみられ、273の破片資料は内外面にナデ、ヘラナデの調整が認められる。

274はS T721から出土した坏で、口縁部がくの字に折れ直行する形態となる。内外面にミガキが施されている。

**3 土坑・性格不明遺構出土土器** (第83図275~第84図284)**S K231出土土器** (第83図275・276)

坏(275)は丸形で口縁が外にのびる形態のもので、内面にミガキが施される。

276は頸部にくびれがあり、口縁部が外反する壺形のもので、無底式と考えられる瓶である。内外面にミガキが認められる。

**S X226出土土器** (第83図277~第84図284)

坏(277~279)、高坏(280~282)、甕(283・284)があり、279に278が内包され、281と282の口縁部が合わせられた状態で出土した。283以外は完形である。

坏は各々の形態に違いがみられ、277は口縁がくの字に折れ直行し、278は丸形で口縁が直立し、279は口縁部が内屈する。また、279は口径208mm、器高81mmを測る大型の坏である。調整は3点とも外面にミガキ、ケズリがみられ、277・279は内面にもミガキが施される。

高坏は、3点とも坏下部に稜がつき、脚部は中空でハの字に開き裾部が反り返る形態となる。

が、口縁端部が外弯するもの（280・282）と内弯するもの（281）がある。全て外面にミガキ、ナデ、内面にミガキが施されている。

壺は長胴形で、口縁部が緩やかに外反する形態となるもの（283・284）で、外面に刷毛目、ナデ、内面に刷毛目、ヘラナデなどの調整が施される。

#### 4 溝跡出土土器（第84図285～第85図）

##### S D 4・90出土土器（第84図285～287）

S D 4 出土土器は須恵器壺（285）と青磁（286）がある。

285はロクロ整形で、底部切り離しがヘラ切りとなる壺の底部資料である。286は青磁碗で、内面に飛龍文があり、断面に漆雜ぎ痕が認められる。大柄遺跡に類例がみられ龍泉窯の所産と 漆雜ぎ痕 考えられる。時期は13世紀頃と推測される。

S D 90出土の287は白磁碗の口縁部資料であるが、釉は明緑灰色を呈する。

##### S D 87出土土器（第84図288～第85図303）

S D 87出土土器は、土師器の壺（288～290）・高壺（291）、須恵器の高台付壺（292）・壺（293～297）、珠洲焼の壺（298）・擂鉢（299・300）、委器系の壺（301）・擂鉢（302）、青磁（303）などで古墳～中世まで各時代に渡る。但し、土師器は S D 87構築時の古墳時代の住居跡からの流れ込みと考えられる。

土師器の壺は体部が球胴形で口縁部が直行で外反するもの（288）、長胴形で口縁部が強く外反するもの（289）、小型で口縁が短いもの（290）がみられる。調整は刷毛目、ナデ、ヘラナデなどが施される。

高壺は、中空の脚部で、壺部が丸みを持って立ち上がるものの（291）と考えられる。調整等は内外面が剥落するため不明。

292は須恵器の高台付壺で、底部切り離しは回転糸切りのロクロ整形となる。

293～297は須恵器の壺体部片で外面にタタキ目、内面にアテ痕がみられ、293は外面に296は内面に自然釉が付着する。

298は珠洲系陶器の壺片で外面にタタキ目、内面はアテ痕の後にナデ調整を施す。299・300も珠洲系陶器の擂鉢片で、内面に鉢目が認められロクロ整形である。

瓷器系陶器は301と302があり、301は壺の体部片、302は擂鉢の底部と考えられる。302の底部切り離しは静止糸切りとなる。これら陶器の時期は15世紀頃と考えられる。

303の青磁は香炉と推測される口縁部の破片で、内面に鑄造卉文が認められる。時期は S D 4 出土の286と同じ13世紀頃と考えられる。

#### 5 柱穴・包含層出土土器（第86～89図）

柱穴・包含層からは、古墳～奈良・平安時代及び中世に属する土器が出土している。304～324の土師器、325～328の須恵器は古墳時代に属し、329～337は奈良・平安時代の須恵器、338～341は中世の陶磁器である。以下に機種毎に概略を述べる。

柱穴出土の土器は1点で壺（304）の底部資料である。底に径3.0cm程の穴が開けられ内外面にケズリ調整が施されている。S P 204から出土した。

包含層出土土器で図示したものは37点である。坏は口縁が直立するもの（305）、口縁が外傾するもの（306）、口縁が内弯するもの（307）がある。306のみ外面にケズリ・ナデ、内面にミガキとナデ調整が認められる。

高坏は308～314の7点で、脚部が中空となるもの（308～313）が多くみられ、脚部中実のもの（314）は1点だけである。また、310はS X 226出土の高坏と同様な脚部の裾に反り返りが認められ、313は外面に彩色及び脚部に透かし孔が施される。

器台は内外面に彩色が施されるもの（315・316）と脚部に透かし孔があるもの（317）で、ミガキ調整が施される。314の高坏脚部と器台（315～317）は古墳時代前期に属すると考えられる。

壺は丸形で頸部が長いもの（318）と、口縁部が複合口縁のもの（321・322）がある。318は小型で外面にケズリ、刷毛目、内面に押圧痕が認められ、322は大型のものである。

319・320は手握のミニチュア土器で、320にケズリと押圧痕がみられ、323・324の壺は、口縁部が外反し、体部が長胴となるもの（323）と体部が球形に近い形態のもの（324）がある。古墳時代の須恵器は壺（325～328）の破片で外面に平行タタキ目、内面に青海波アテ痕がみられる。これらは同一個体と考えられる。

平安時代の須恵器には、坏（329）、双耳坏（330）、壺（331・332）、甕（333～337）があり、底部切離しは329が回転糸切り、330は回転ヘラ切りとなる。また、甕には自然釉が付着する。

中世の陶磁器は珠洲系（338・339）、壺器系（340）、青磁（341）で、338・339は同一個体の甕、340は擂鉢で内面に鉢目が認められ、青磁は端反続と考えられる。陶磁器は14～15世紀頃の所産と推測される。

## 6 石器・石製品（第90図～第91図355）

342は石錐で、基部と先頭部が欠損し、残存長約33mmを測る。両面に連続的な調整加工が施される。石材は玉髓質である。

343は削器で背面側と主要剥離面の左側縁部から先端部にかけて連続的な調整加工を施し刃部とする。

344は搔器で、背面側の右側縁部から先端部にかけて急角度の調整加工を施し刃部を形成している。345は箒状石器で、背面と主要剥離面の両面に調整加工が施され先端部が刃部になる。形態は撥形で、刃部は直線状で両刃状である。343～345は幅長の剥片を素材とし、石材は頁岩である。342～345は古墳時代以前の所産と考えられることから流れ込みと推定される。

346・347は有孔円盤で共に径約1～2mmを測る2ヶ所の孔が空けられ、表裏面に擦痕が認められる。石材は綠泥片岩である。

- |   |  |
|---|--|
| 管 | 玉 348は中央部に径5mmの穿孔があり管玉と考えられる。大半が破損しているため、残存長は約4mmである。石材は碧玉となる。   |
| 砾 | 石 349～354は砾石で、表面のみ使用したもの1点（352）、表面と片側側面を使用したもの1点（351）、表面と両側面を使用したもの2点（349・354）、表裏面と両側面を使用したもの2点（350・353）である。いずれも使用面に擦痕が認められる。全て破損品であり、完形のものは無い。石材は349のみ凝灰岩、他は堆積岩である。 |

355はS T 35から出土した支脚と考えられる棒状の石製品で、全体に被熱痕が認められる。支  
石材は堆積岩となる。

## 7 古 銭 (第91図356・357)

古銭は2点のみで、356は中国の明の時代に鋳造された永樂通寶でグリッドから出土した。  
357はS D 4出土の18世紀前半に鋳造された寛永通寶と考えられる。

## 8 土師器の分類 (第53・54図)

本遺跡の主たる時期である古墳時代中期の土師器について分類を行う。前期に属すると考え  
られる土師器は数量が限られることなどから、ここでは除くこととした。

器種は壺、高壺、瓶、甕、壺の5種について行ったが、器形・法量から壺には黒色土器の壺  
を含め、鉢としたものは小型甕として甕の範疇として分類した。なお、欠損により全体の器形  
が明確でないものについても分類に加えたものがある。

分類に際しては、「山形考古第7巻第2号(通巻32号)」—山形県における古墳時代中期の土  
器様相(1)阿部・吉田・平成14年—の分類基準を参照している。

■

### 分類基準

[壺]：黒色土器の壺も器形分類に含めている。

### 壺 の 分 類

A類：口縁部がくの字状に折れる平底のもの。

a類：口縁部が外にのびるもの。

b類：口縁部が内屈するもの。

B類：全体的な形が丸形となる単純口縁のもの。

a類：口縁が内弯するもの。

b類：口縁が直立するもの。

c類：口縁が外にのびるもの。

1類：口径と器高の比が~2.0のもの。

2類：口径と器高の比が2.0~2.5のもの。

3類：口径と器高の比が2.5~3.0のもの。

4類：口径と器高の比が3.0~のもの。

C類：口縁がくの字状に折れ直行する単純口縁のもの。

a類：直行する部分が1/3以下のもの。

b類：直行する部分が1/3以上を占めるもの。

1類：口径と器高の比が2.0~2.5のもの。

2類：口径と器高の比が2.5~3.0のもの。

3類：口径と器高の比が3.0~のもの。

D類：口縁部がくの字状に内屈するもの。

a類：全体的な形がV字形となるもの。

b類：全体的な形がU字形となるもの。

E類：口縁部がくの字状に折れ外反するもの。

F類：口縁部と体部の境がくびれ口縁部が外反するもの。

a類：底部が丸底となるもの。

b類：底部が平底となるもの。

1類：口径と器高の比が～2.0のもの。

2類：口径と器高の比が2.0～2.5のもの。

3類：口径と器高の比が2.5～3.0のもの。

G類：須恵器模倣の形となるもの。

#### 高 坯 の 分 類 [高坏]

A類：脚部に稜があるもの。

B類：中空柱状の脚部を有し、坏部が鉢形となるもの。

C類：坏下部に稜がつき、脚部がハの字に開き裾部が反り返るもの。

D類：坏下部の稜が強く引き出されるもの。

E類：坏下部に稜がつくもの。

a類：坏部が外傾するもの。

b類：坏部が内弯するもの。

F類：坏部の中段に稜がつくもの。

G類：中空柱状で裾部が大きく開く脚部。

H類：中空の短脚となるもの。

#### 瓶 の 分 類 [瓶]

A類：壺形、頸部にくびれがあり、口縁部が外反する無底式のもの。

a類：最大径が口縁部にあるもの。

b類：最大径が胴部にあるもの。

B類：深鉢形となるもの。

C類：無底式となる底部。

D類：単孔式となる底部。

#### 甕 の 分 類 [甕]

【甕】：壺形、包量などから鉢としたものの中に小型甕の範疇として分類に加えたものがある。

A類：器高35cm以上となる特大型。

B類：器高23cm以上の大型で球胴形（器高÷胴径が1.15以下）となるもの。

a類：頭のすぼまりが強い（胴部径+頸部径が1.5以上）もの。

b類：頭のすぼまりが弱い（胴部径+頸部径が1.5未満）もの。

1類：口縁部が強く外反するもの。

2類：口縁部が緩やかに外反するもの。

3類：口縁部が直行で外傾するもの。

C類：器高23cm以上の大型で長胴形（器高÷胴径が1.15以上）となるもの。

a 類：頸のすばまりが強い（胴部径÷頸部径が1.5以上）もの。

b 類：頸のすばまりが弱い（胴部径÷頸部径が1.5未満）もの。

1 類：口縁部が強く外反するもの。

2 類：口縁部が緩やかに外反するもの。

3 類：口縁部が直行で外傾するもの。

D 類：菱形となるもの。

E 類：器高23cm以下となる小型の型。

a 類：器高が15cm以上で頸が短いもの。

1 類：口縁部が強く外反するもの。

2 類：口縁部が直行で外傾するもの。

b 類：器高15cm以下で頸が短いもの。

1 類：胴径が口径より大きいもの。

2 類：胴径が口径と同じぐらいか小さいもの。

### 【型】

### 壺 の 分 類

A：複合口縁となるもの。

B：折返し口縁となるもの。

C：丸形となるもの。

a 類：胴部が丸形で頸部が短いもの。

1 類：口縁部が外反するもの。

2 類：口縁部が内弯するもの。

b 類：胴部が丸形で頸部が長いもの。

1 類：大型のもの。

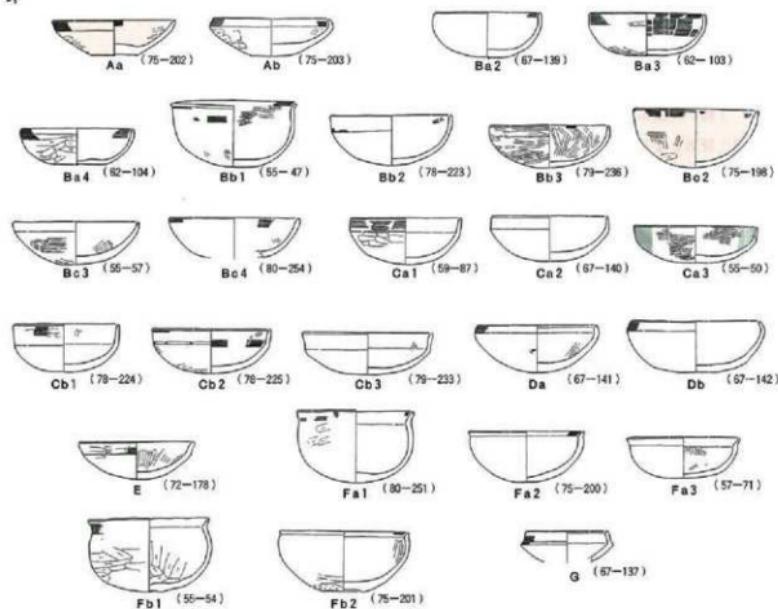
2 類：小型のもの。

D：長胴形となるもの。

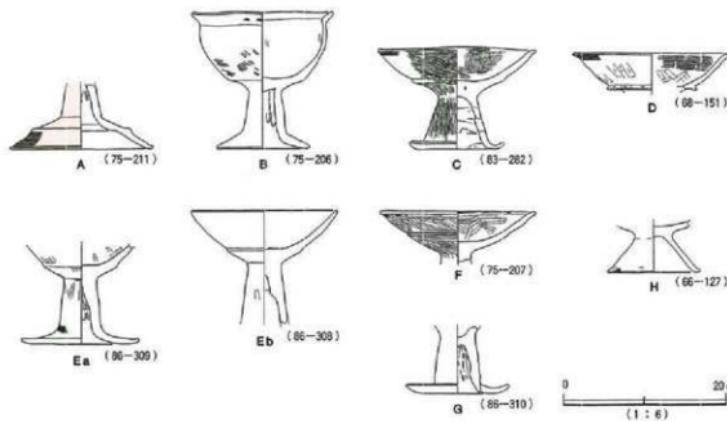
E：胴部が丸形で底部がつまみ出されるもの。

F：無頸のもの。

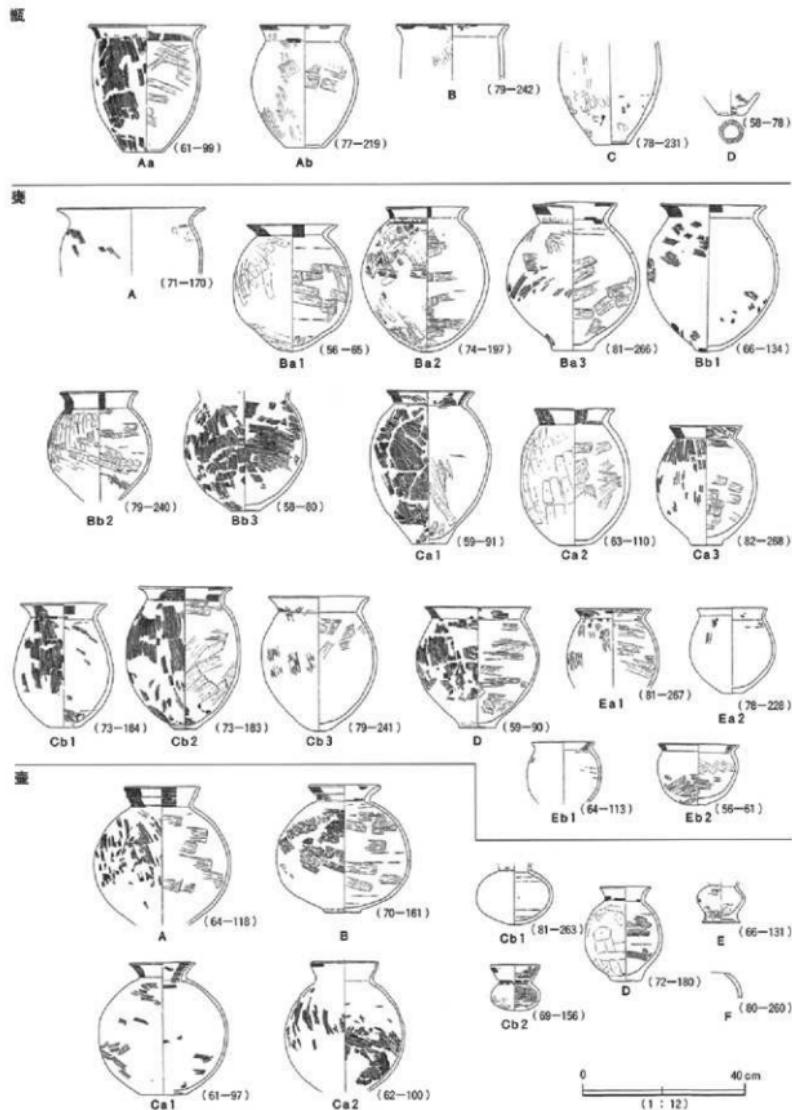
环



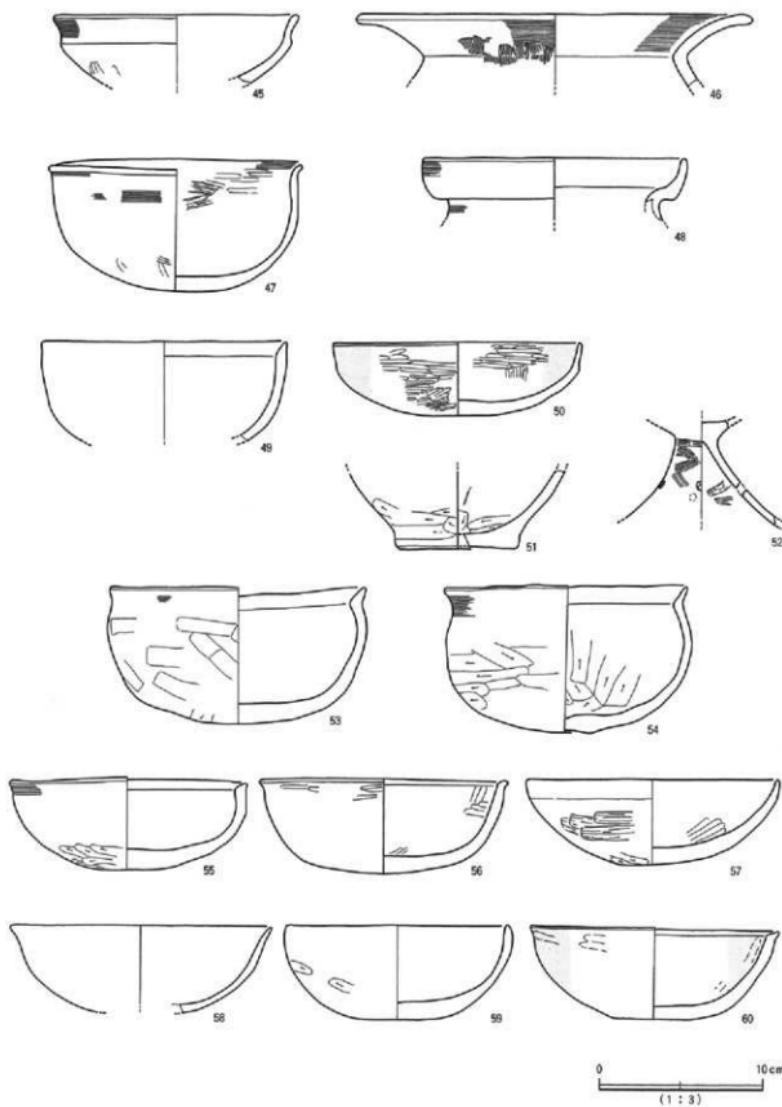
高环



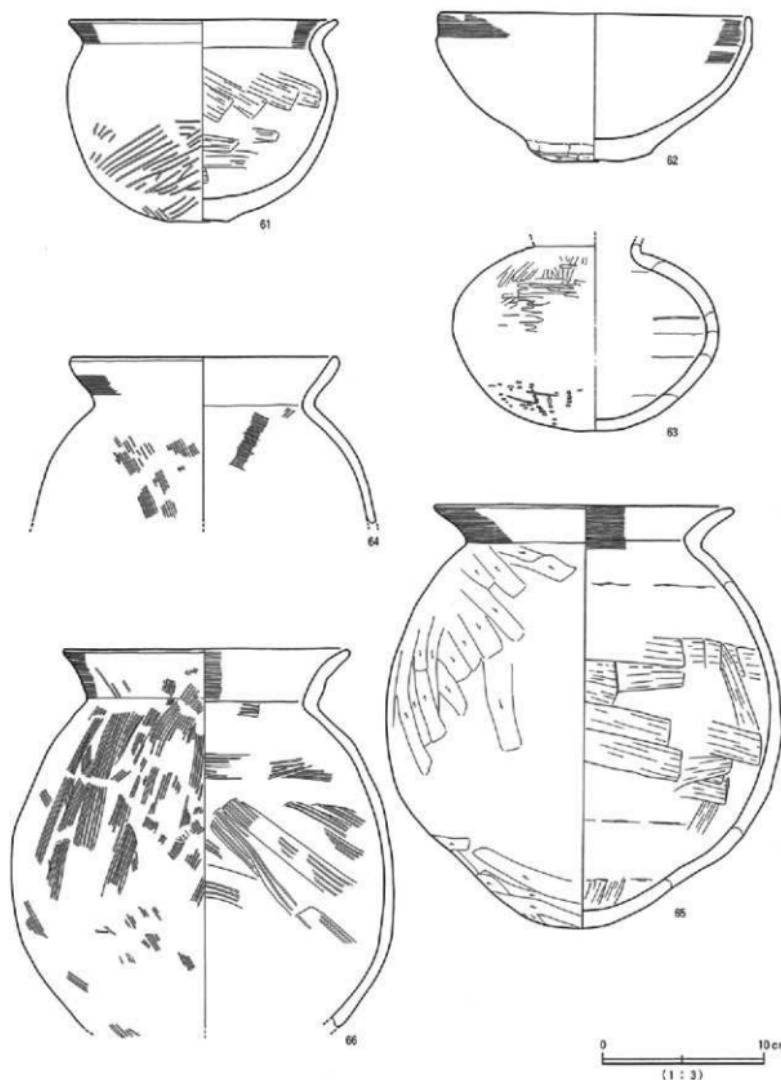
第53图 土质器分類圖(1)



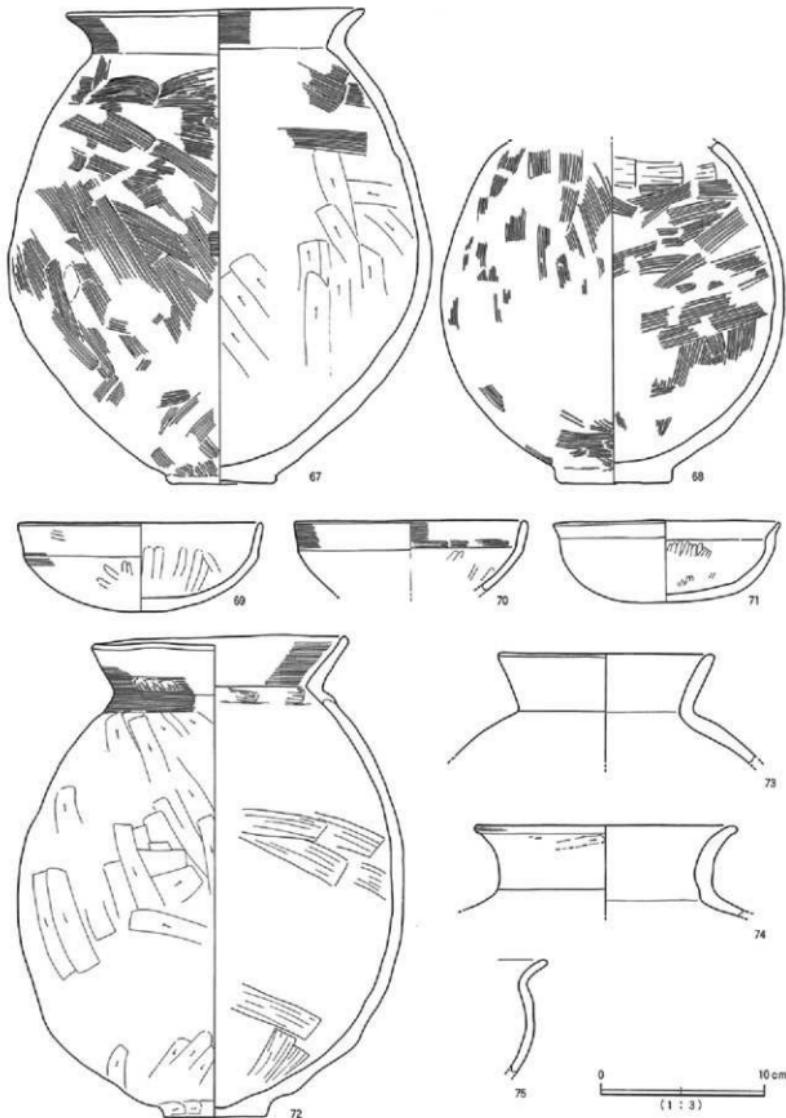
第54図 土器分類図(2)



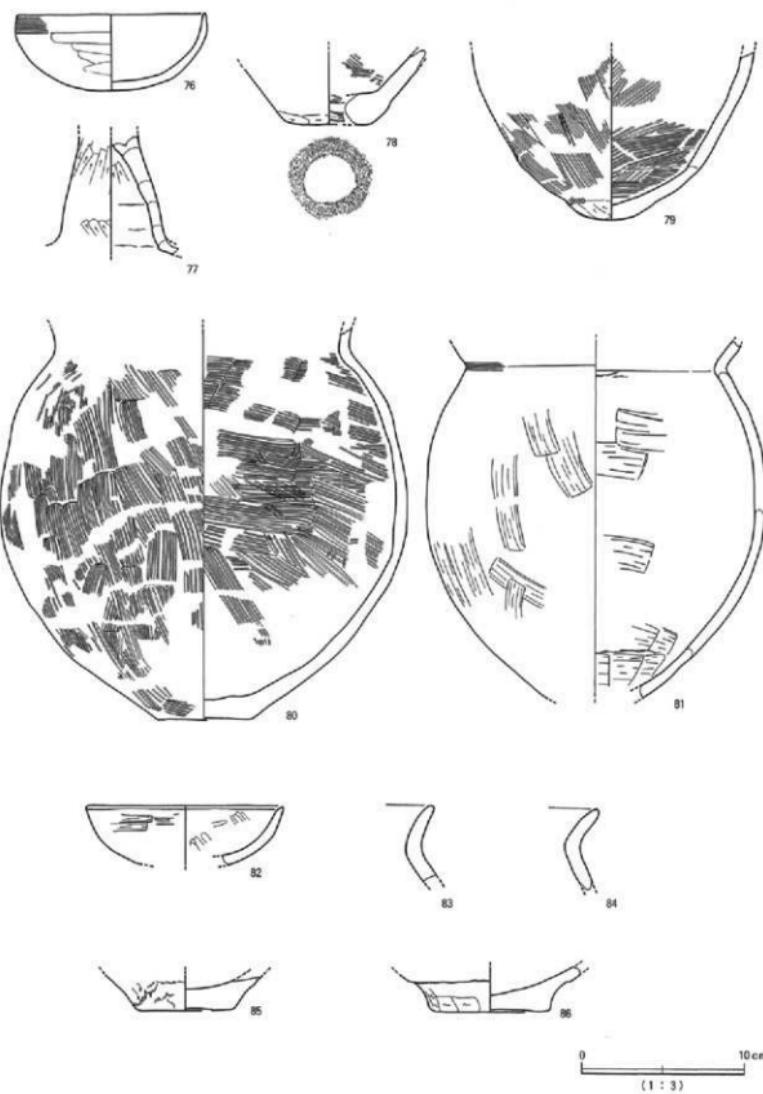
第55図 ST 13・33・34・35出土土器



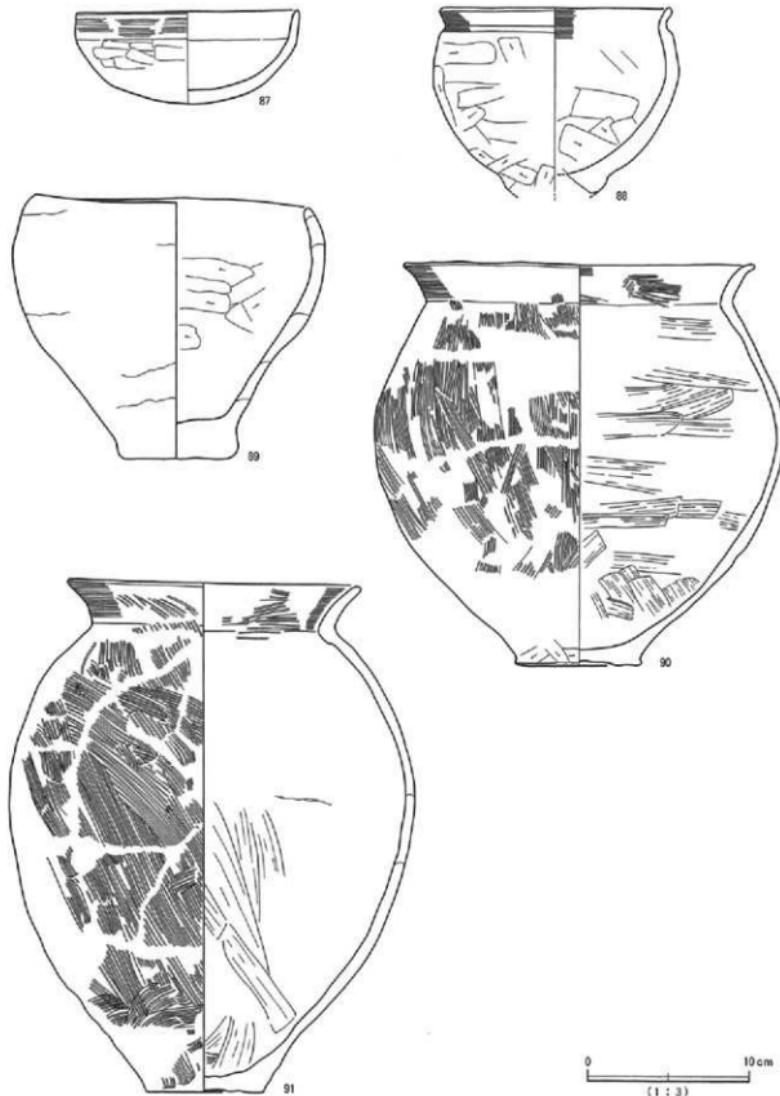
第56図 ST 35出土土器



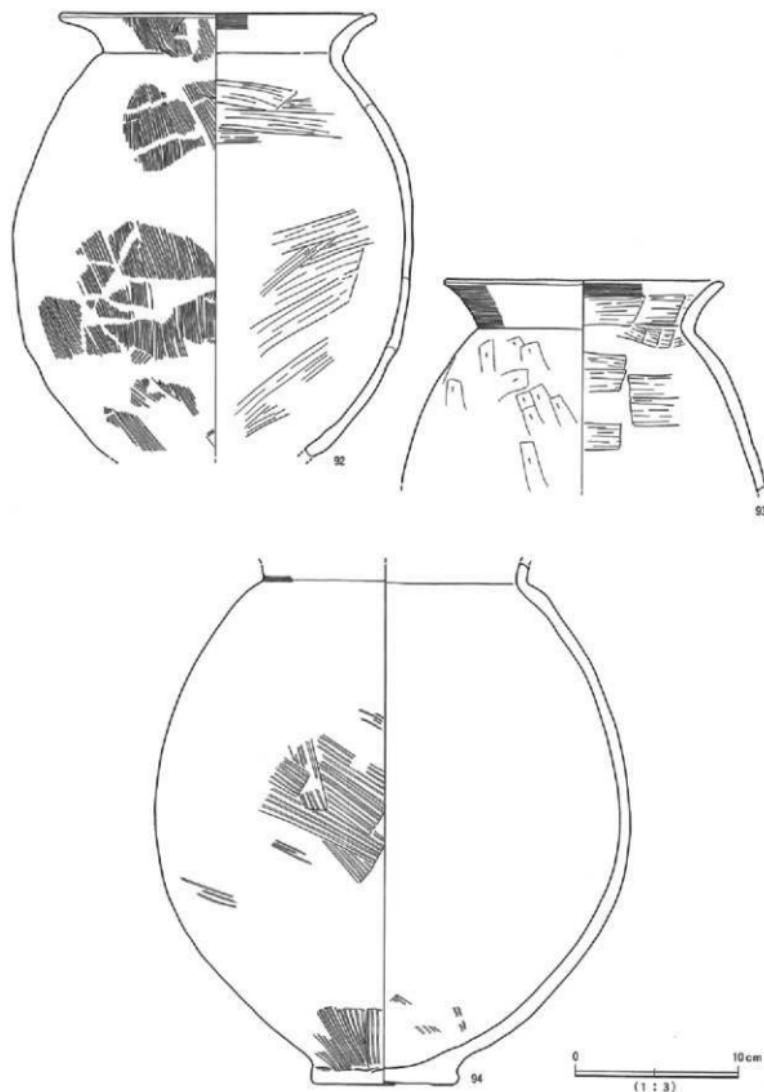
第57図 ST 35・36出土土器



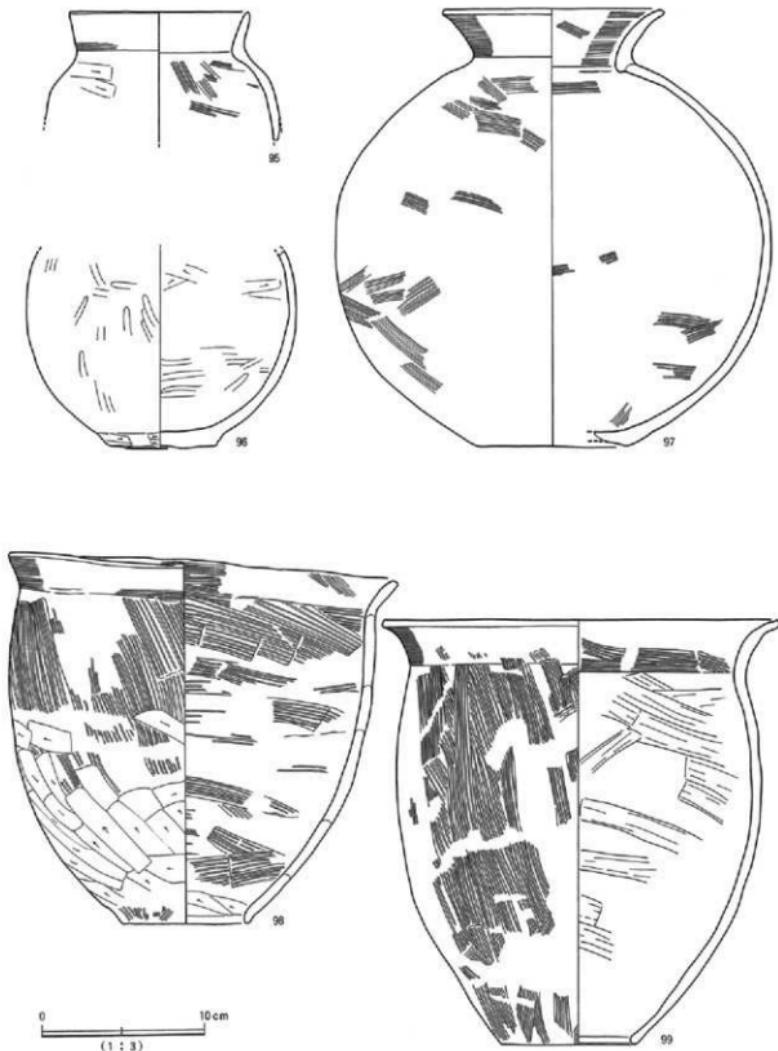
第58図 ST 37・39出土土器



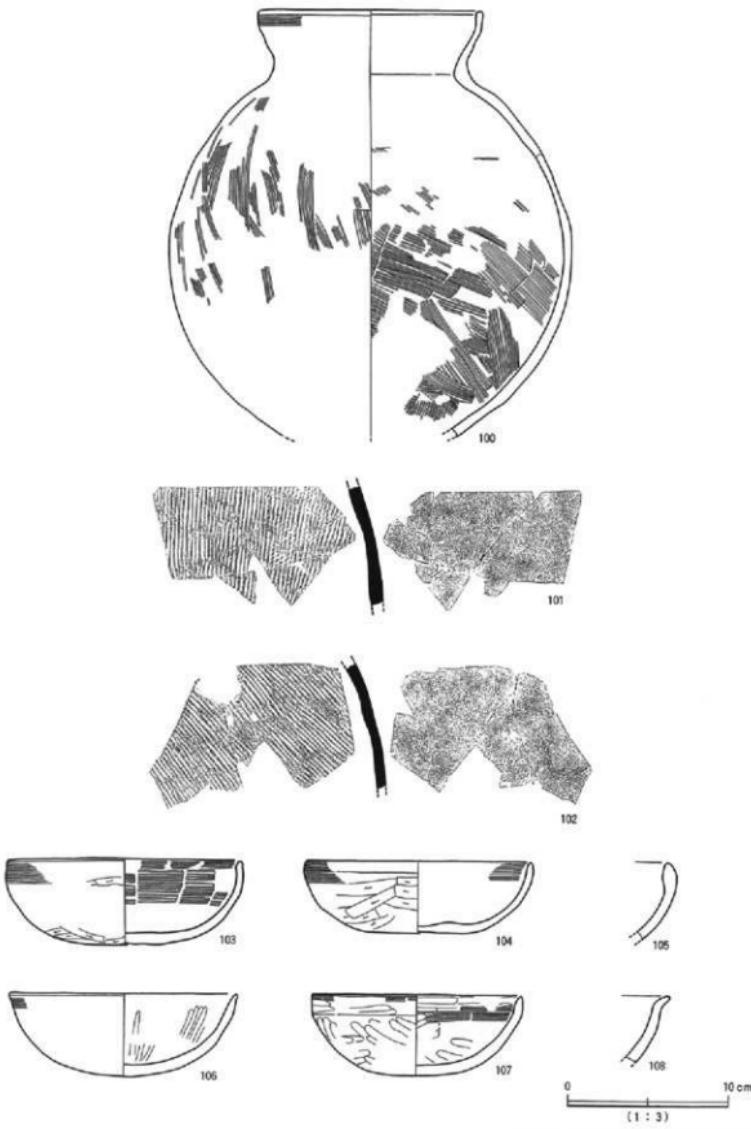
第59図 S T 40出土土器



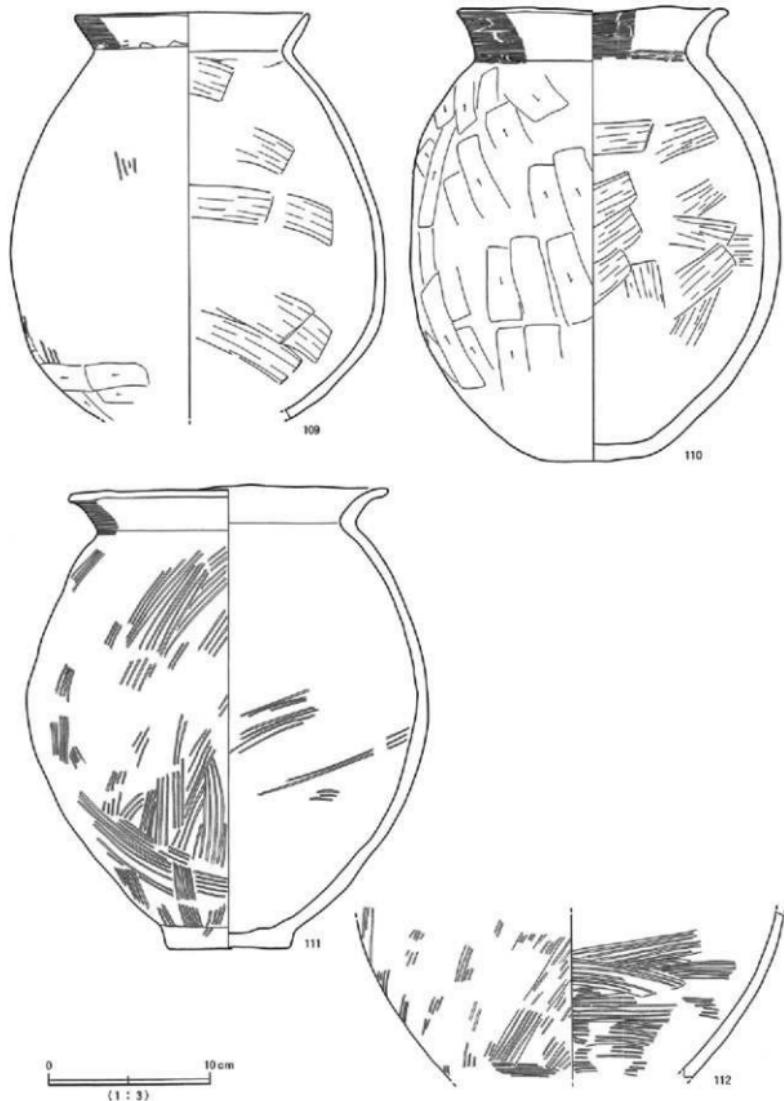
第60図 S T 40出土土器



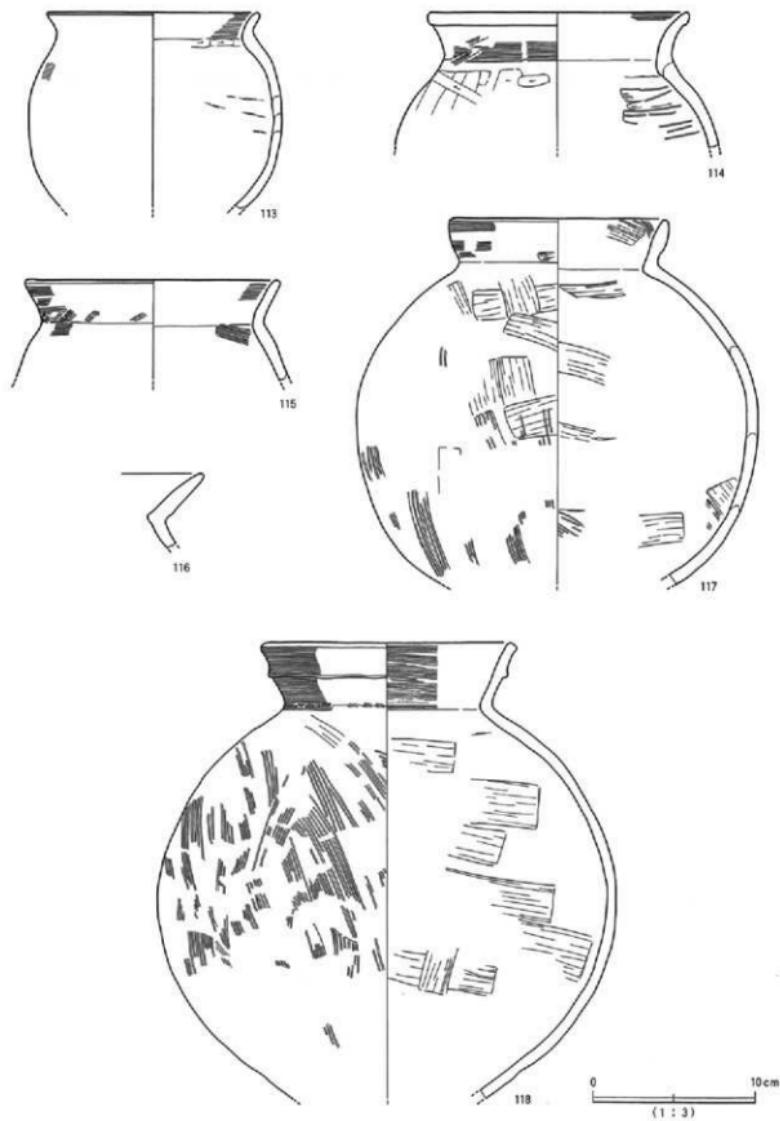
第61図 S T 40出土土器



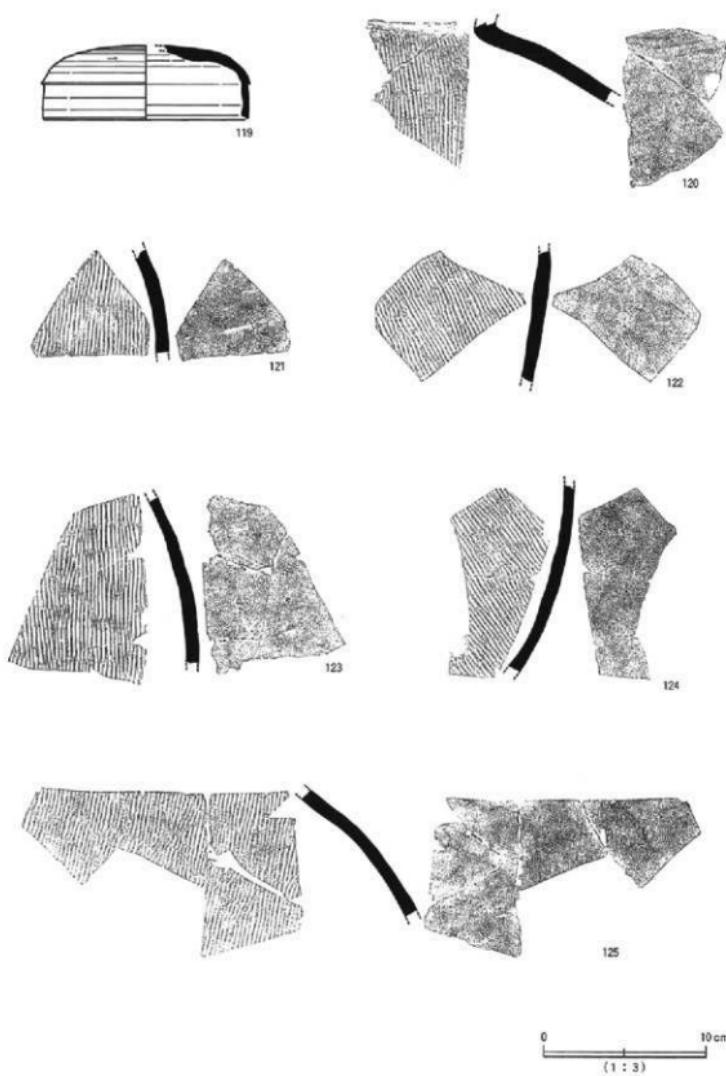
第62図 S T 703・702・701出土土器



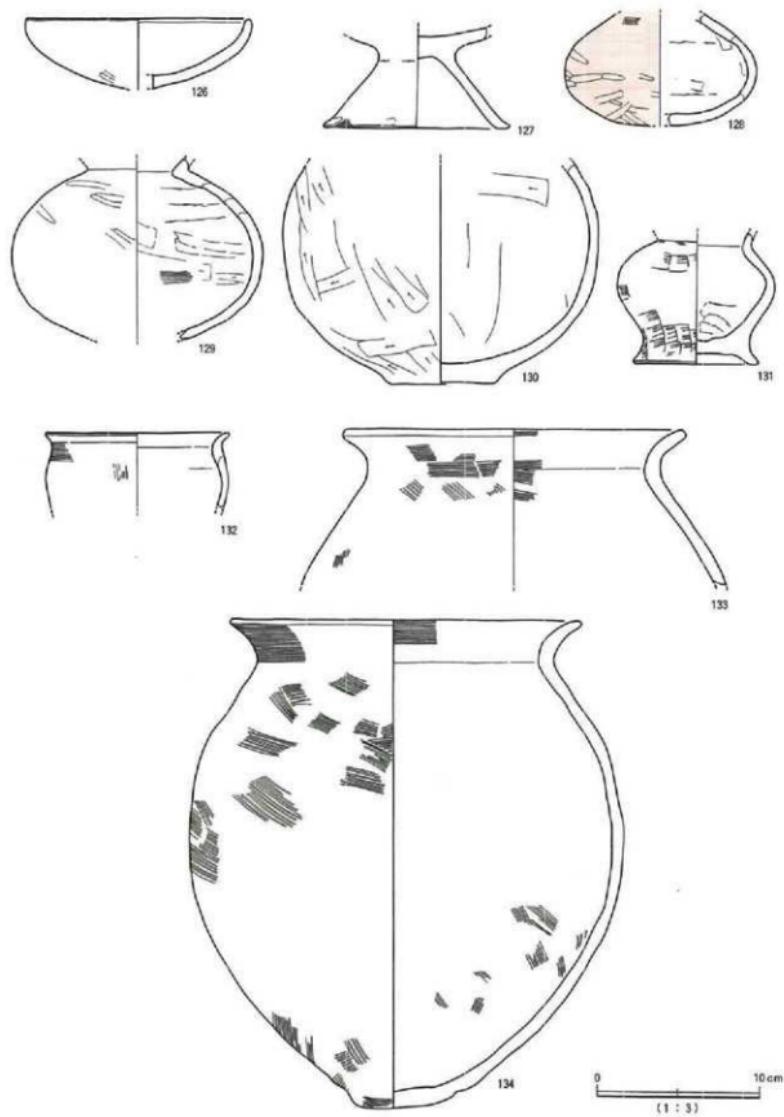
第63図 S T701出土土器



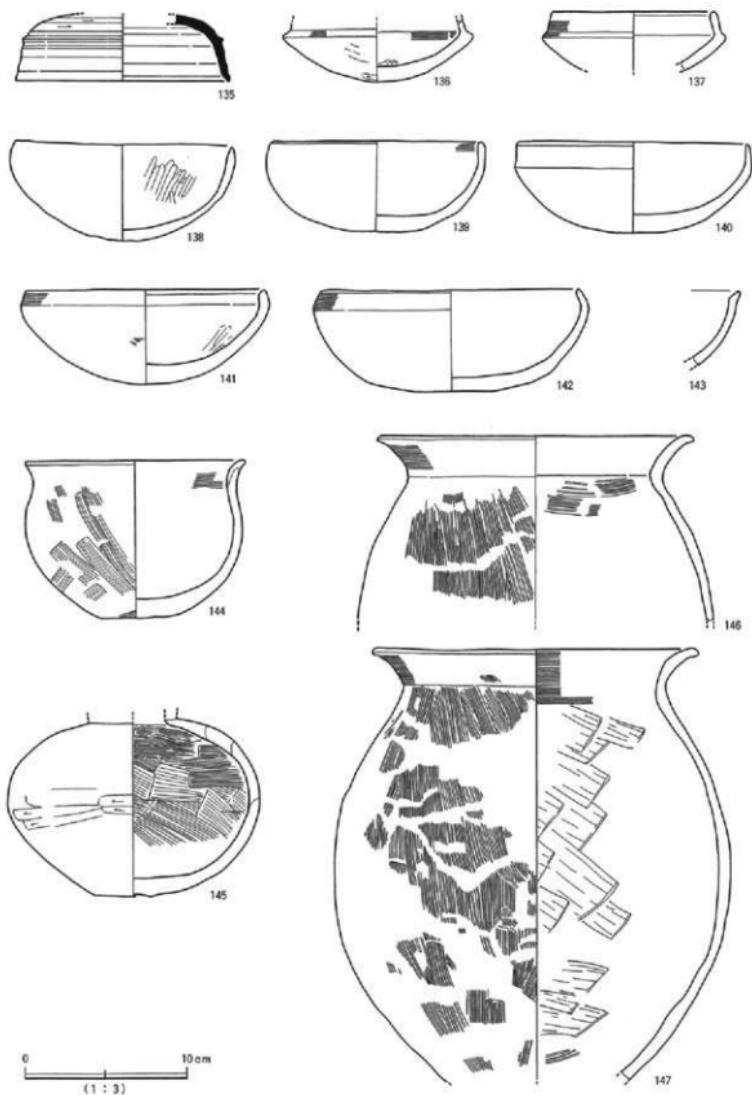
第64図 S T 701出土土器



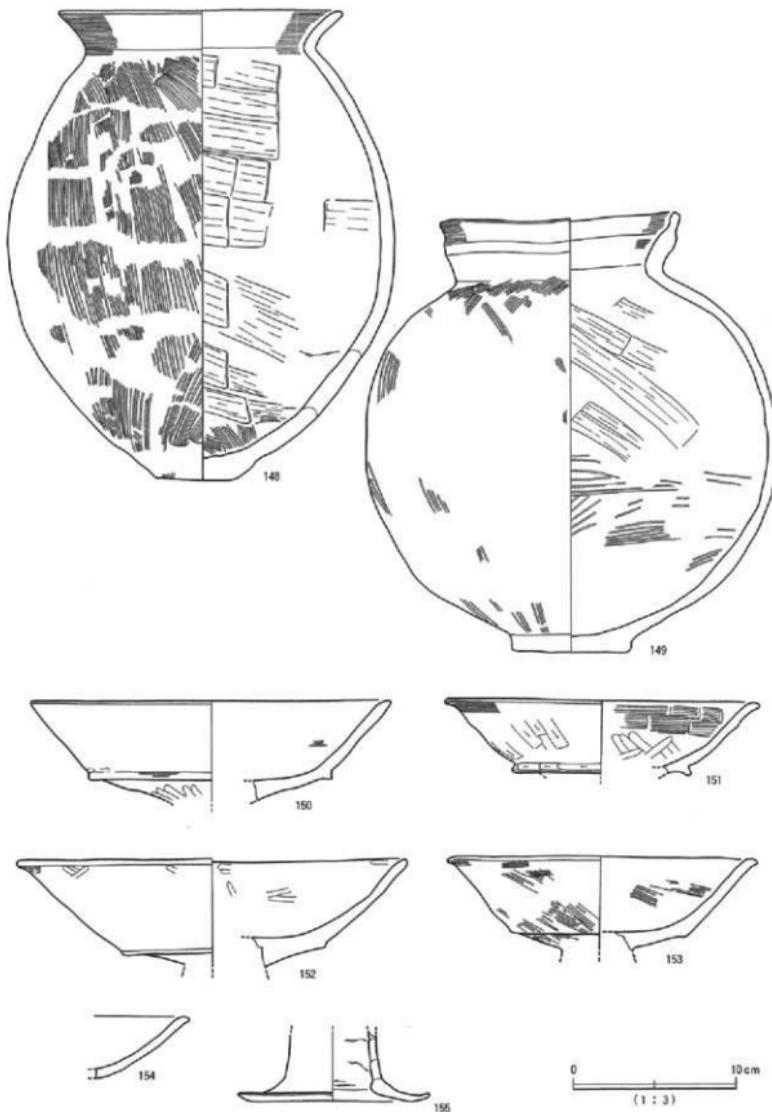
第65図 S T41出土土器



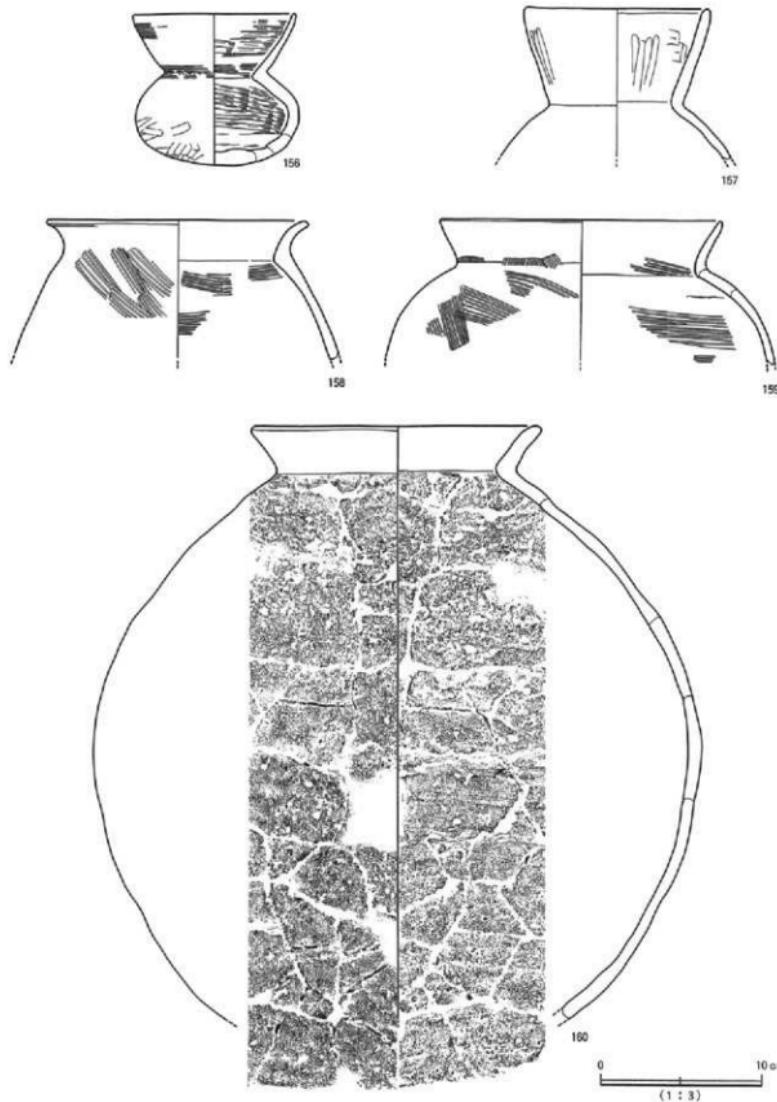
第66図 S T 42・43出土土器



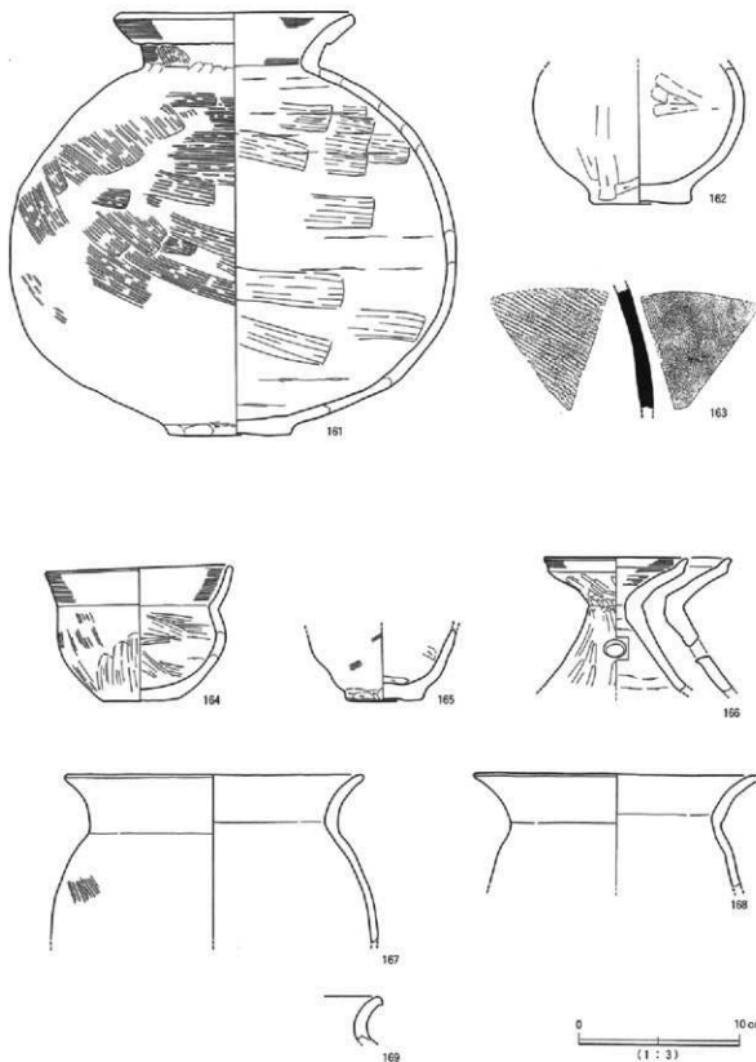
第67図 S T 44出土土器



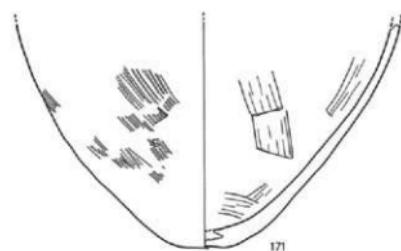
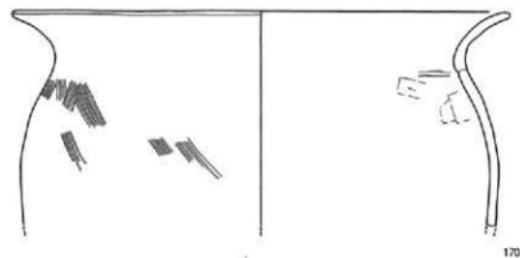
第68図 S T 44・47出土土器



第69図 S T47出土土器

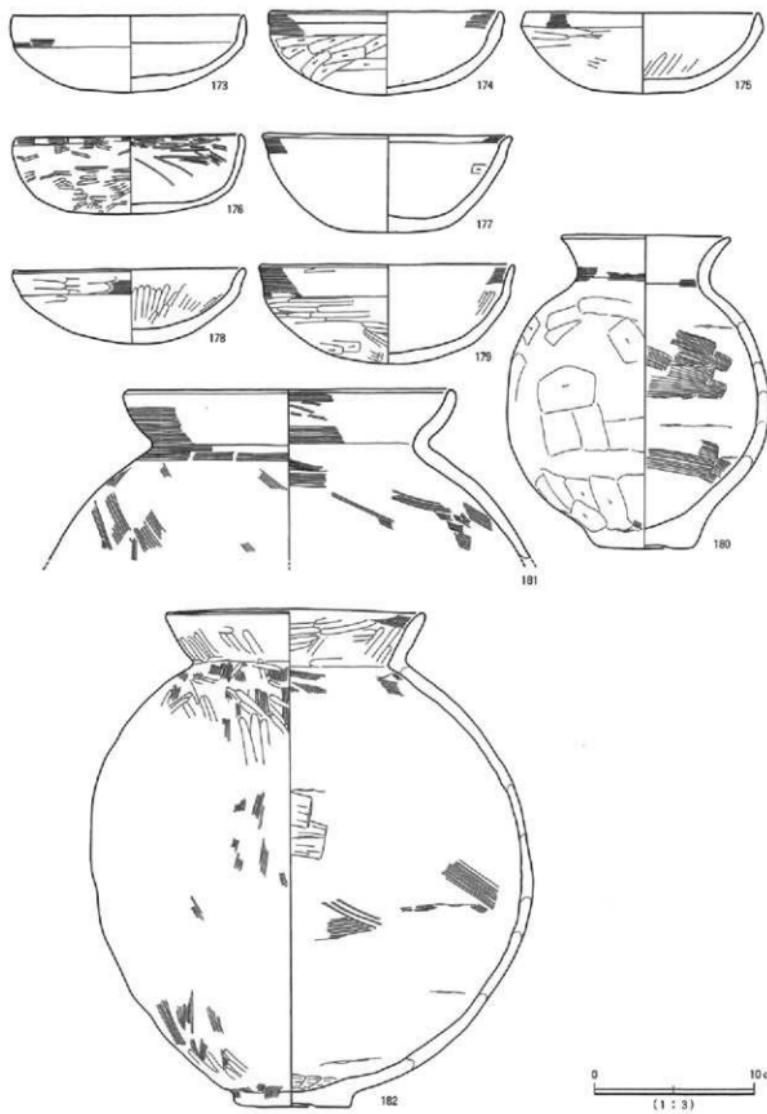


第70圖 S T47・704出土土器

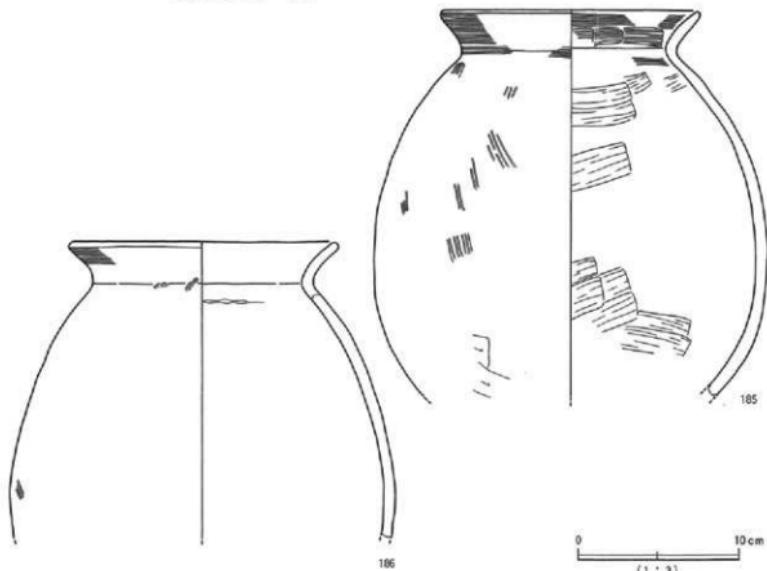
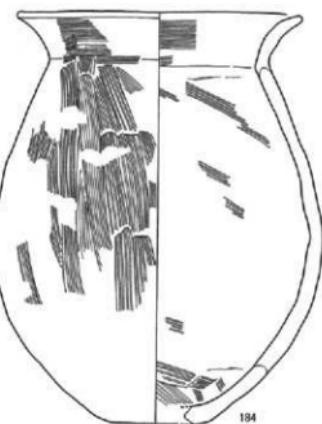
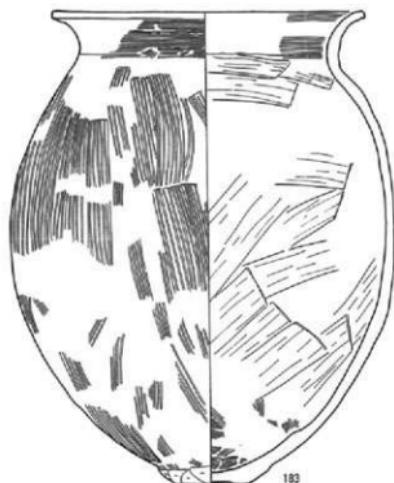


0 10 cm  
(1 : 3)

第71図 S T 704出土土器



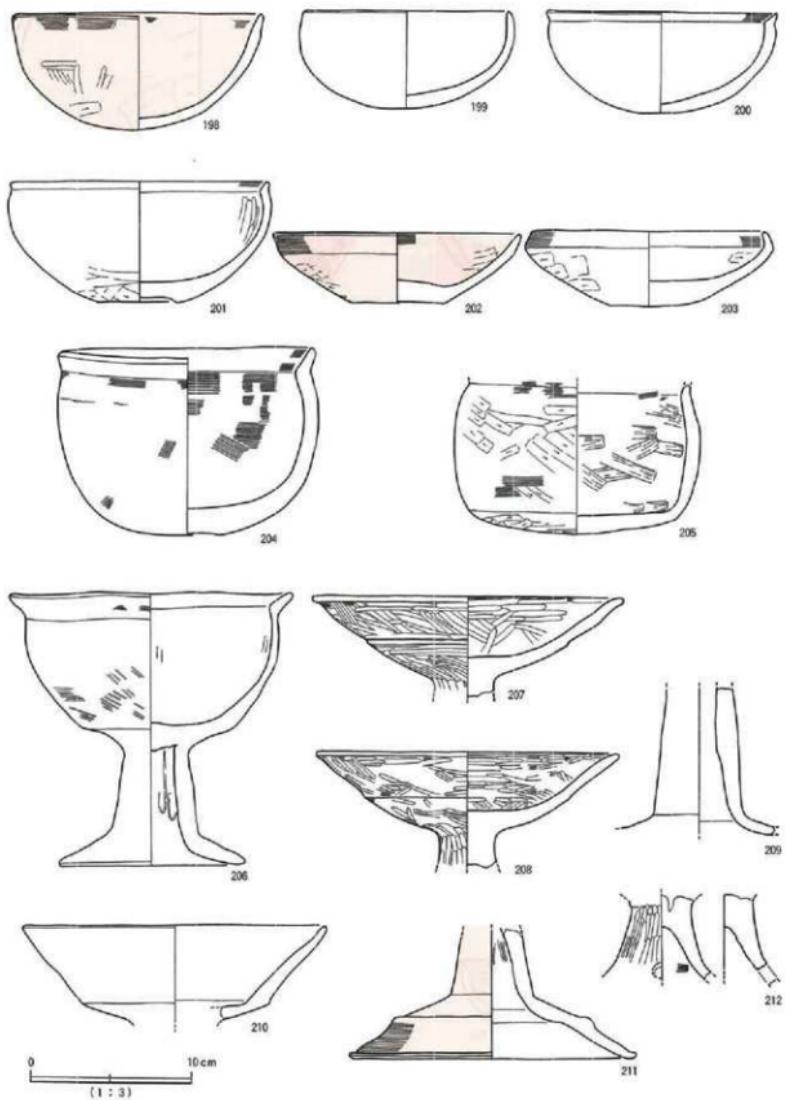
第72図 S T 705出土土器



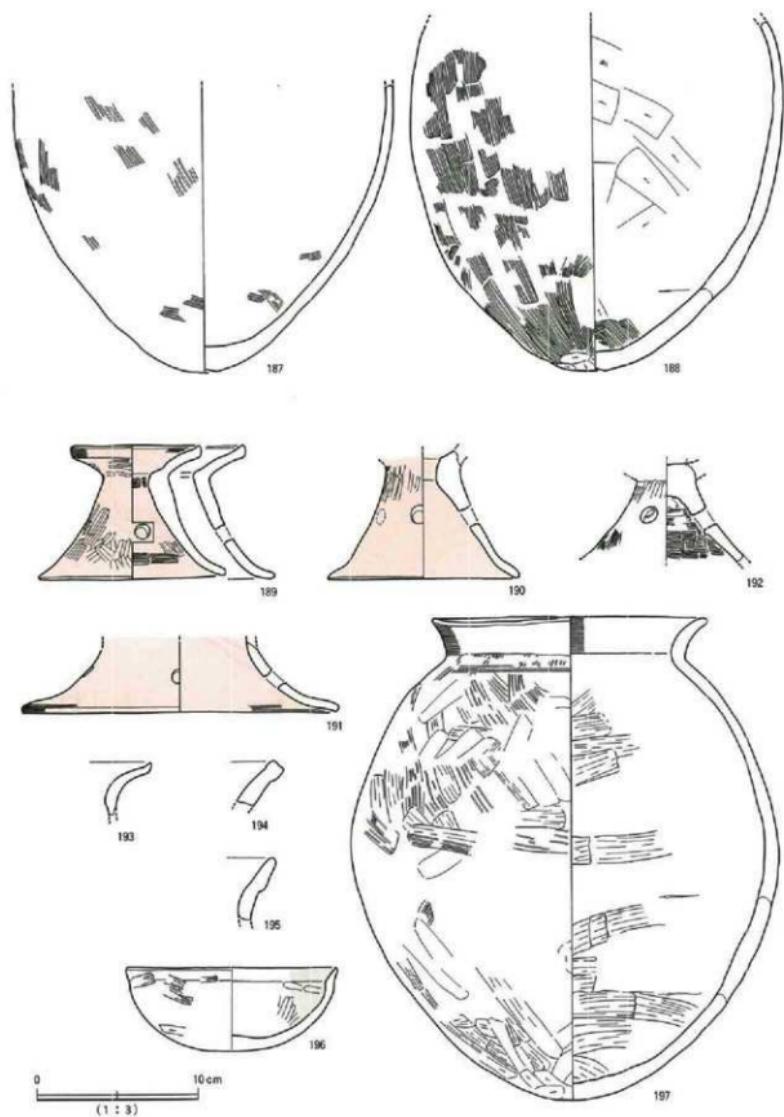
186

0 10 cm  
(1 : 3)

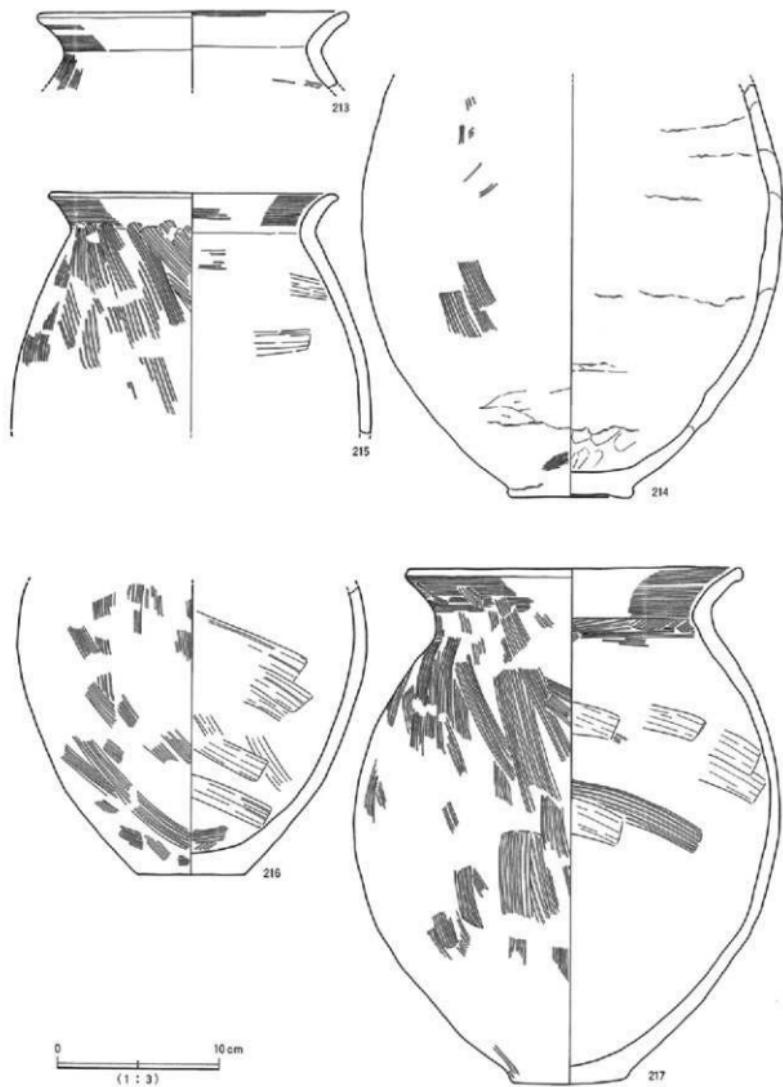
第73図 S T 705出土土器



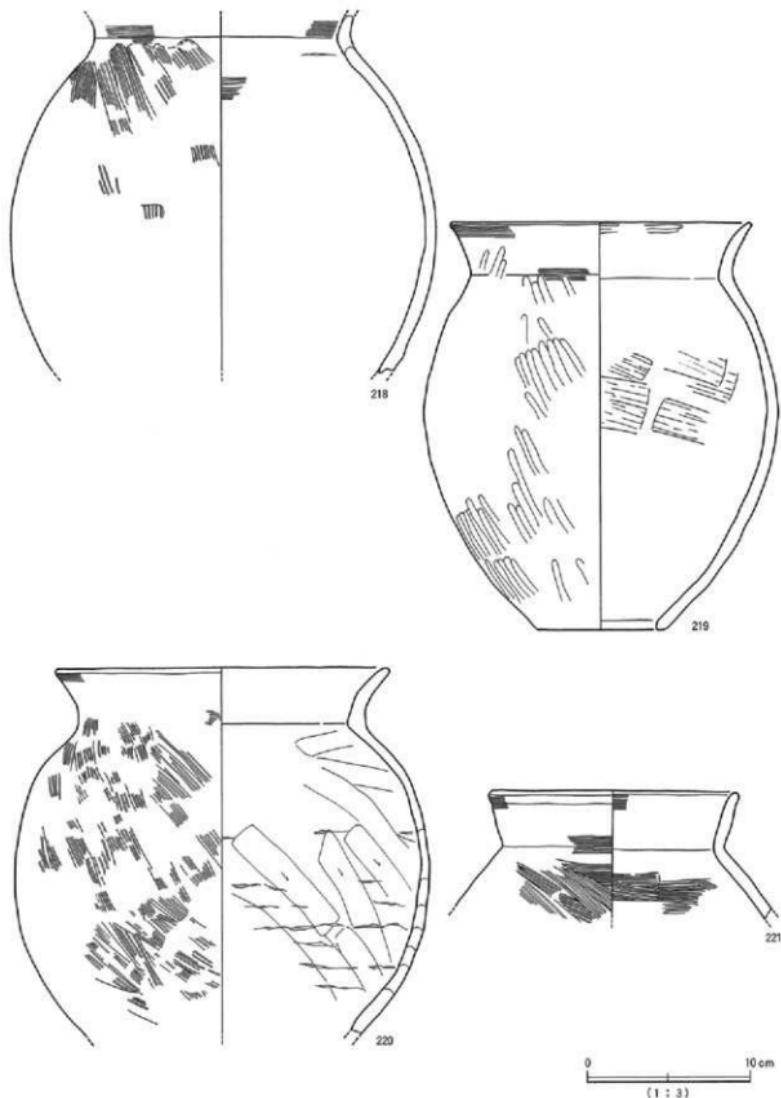
第75図 S T712出土土器



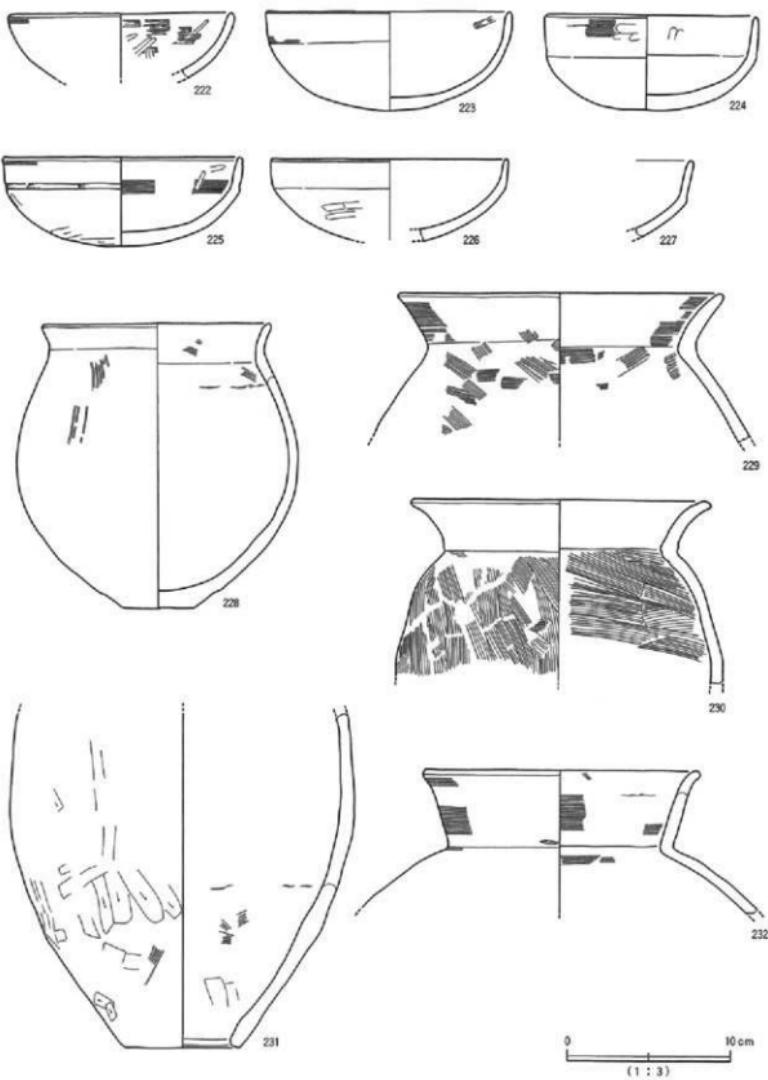
第74図 S T 705・706・707出土土器



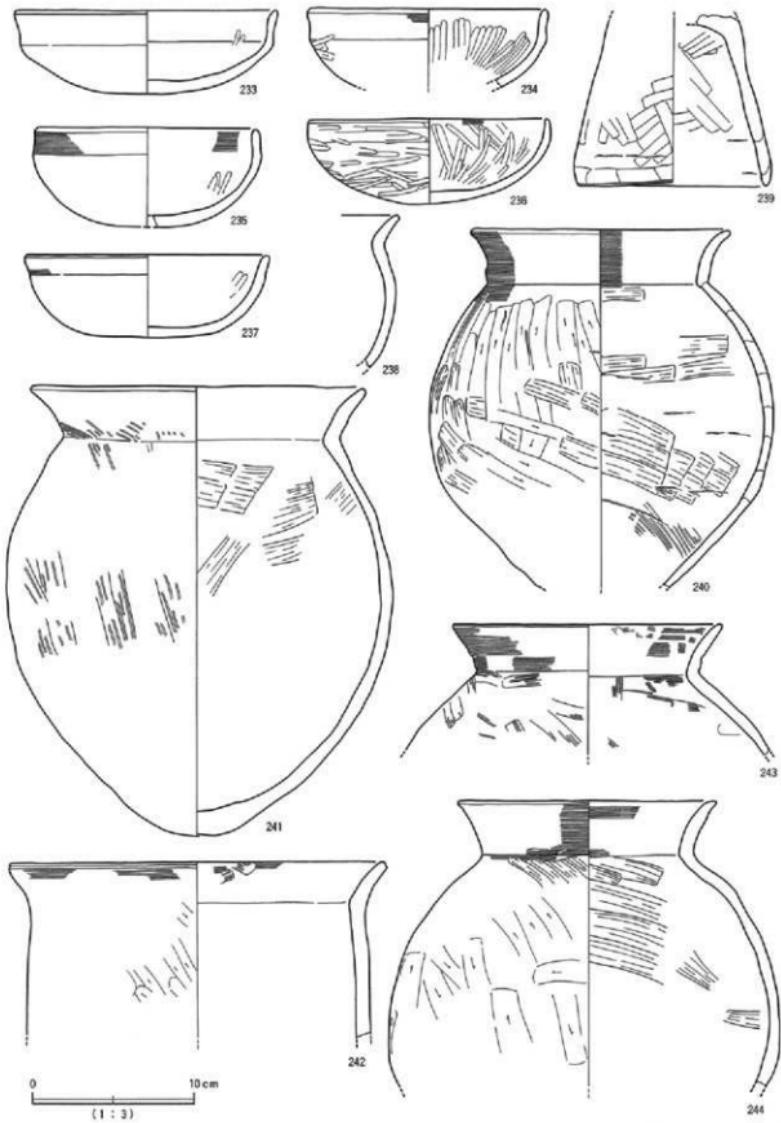
第76図 S T712出土土器



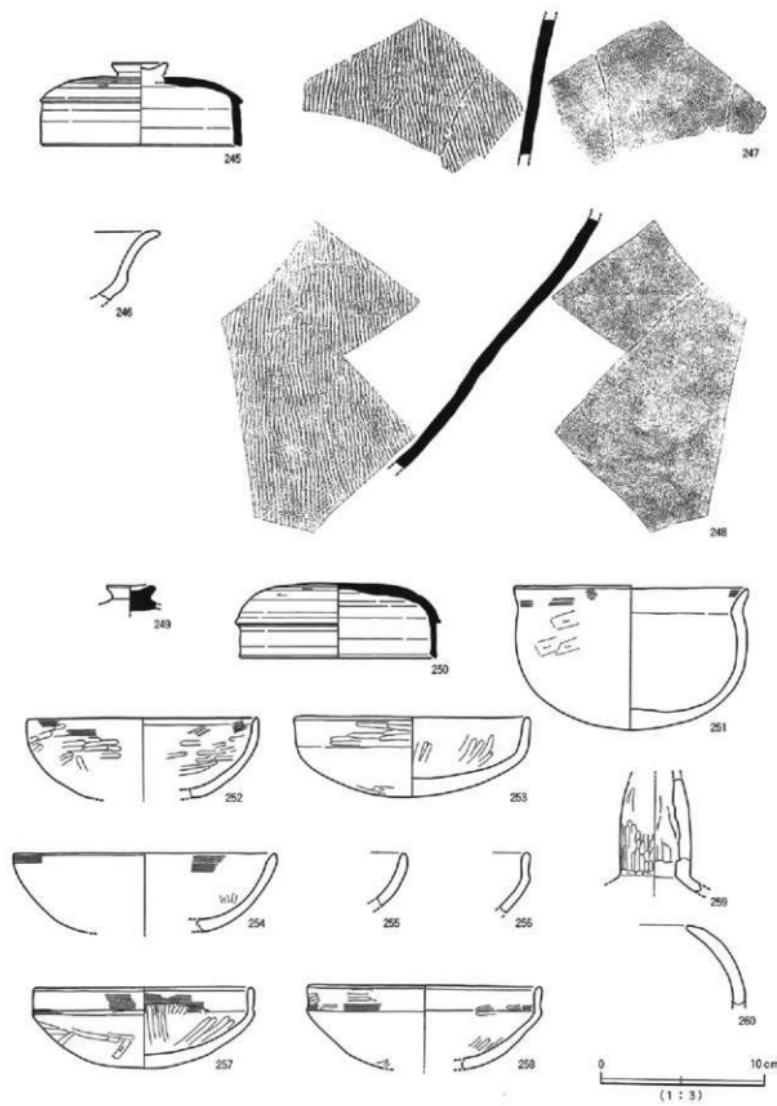
第77図 S T 712・713・714出土土器



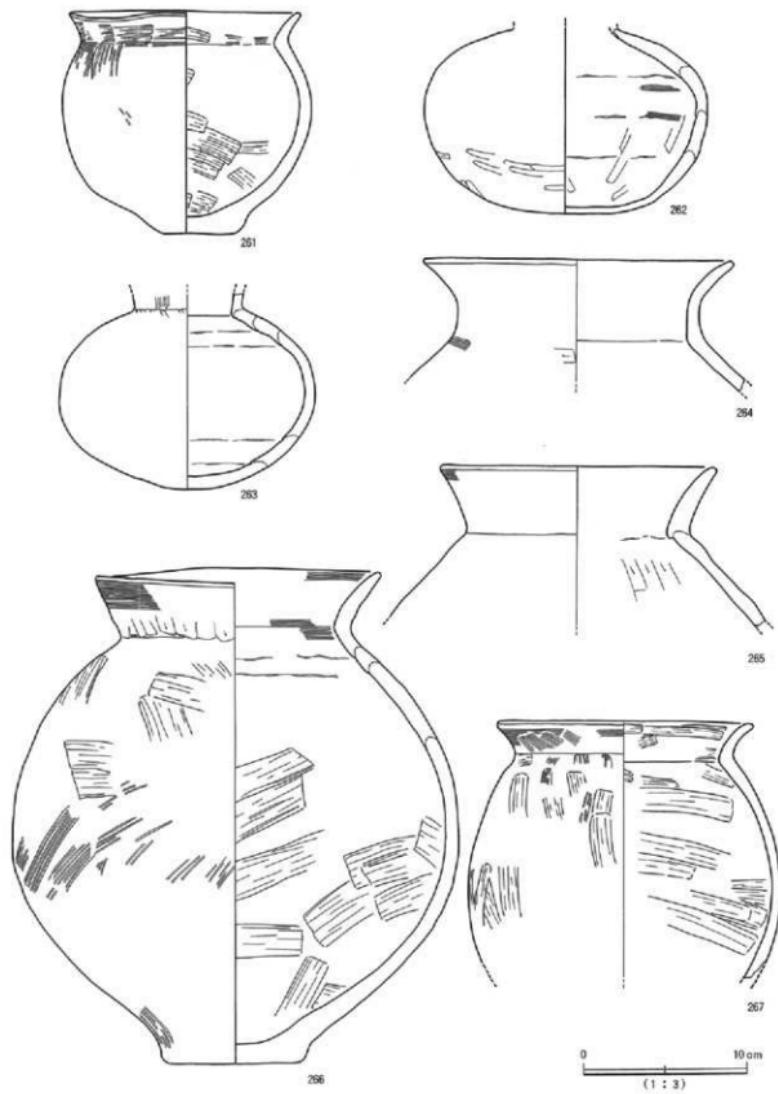
第78図 S T 716出土土器



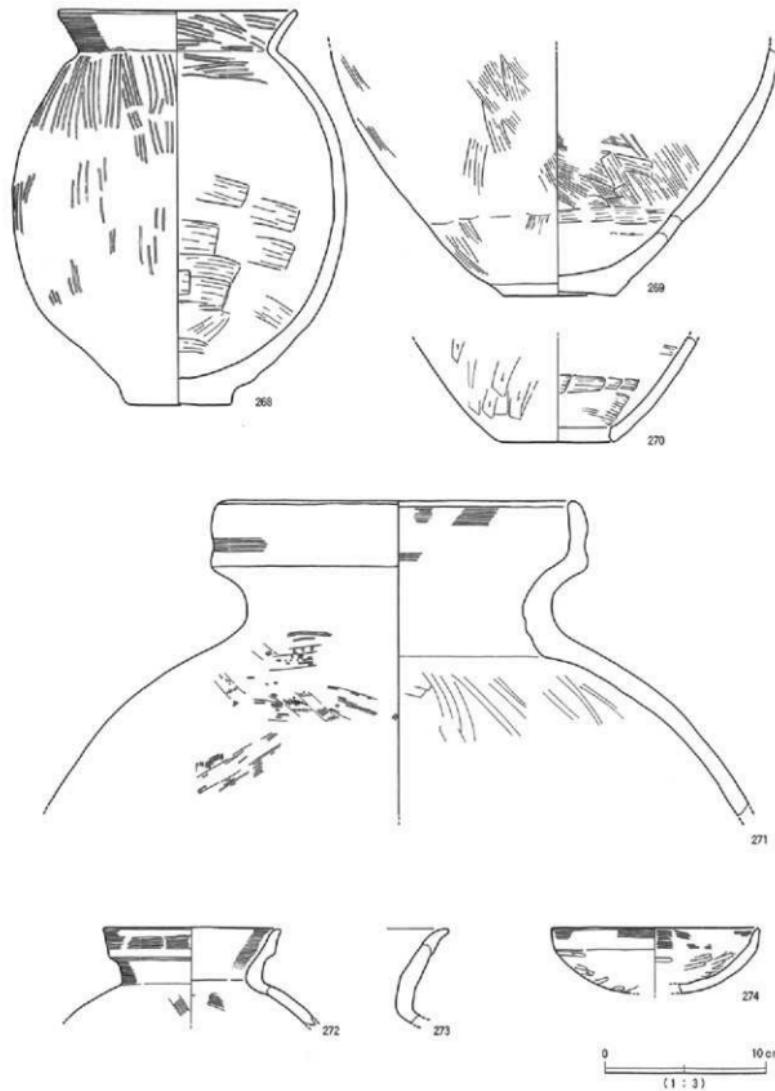
第79図 S T 717出土土器



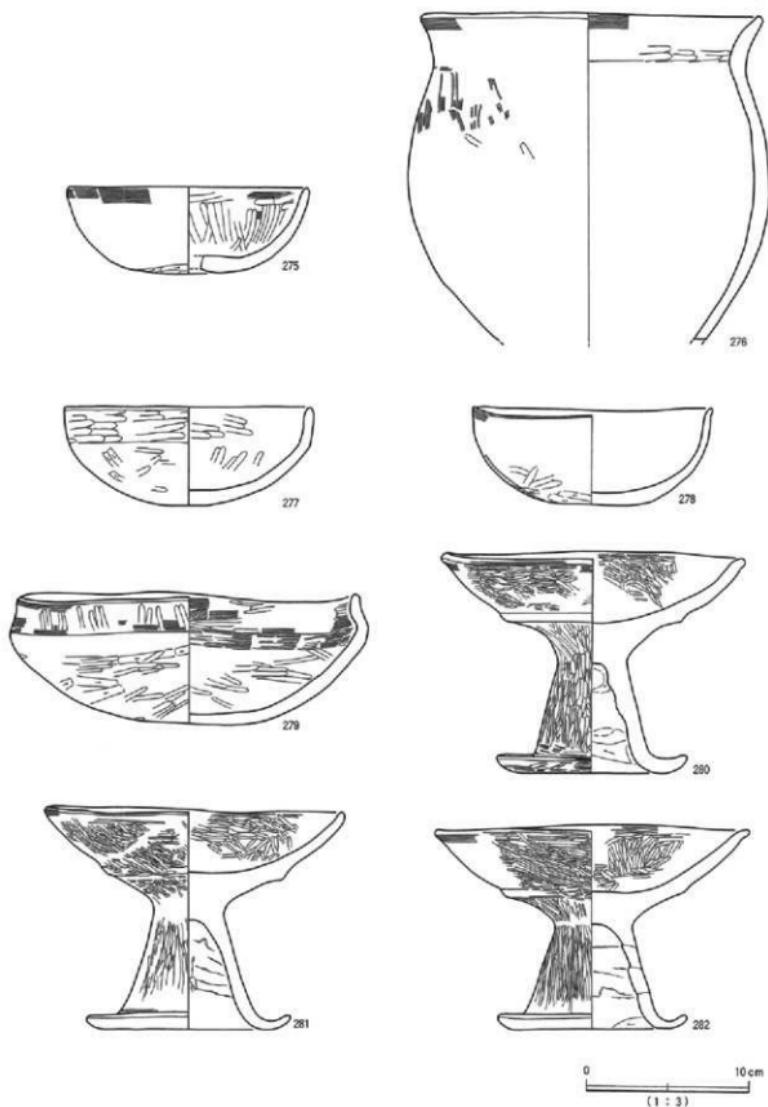
第80図 S 718・719出土土器



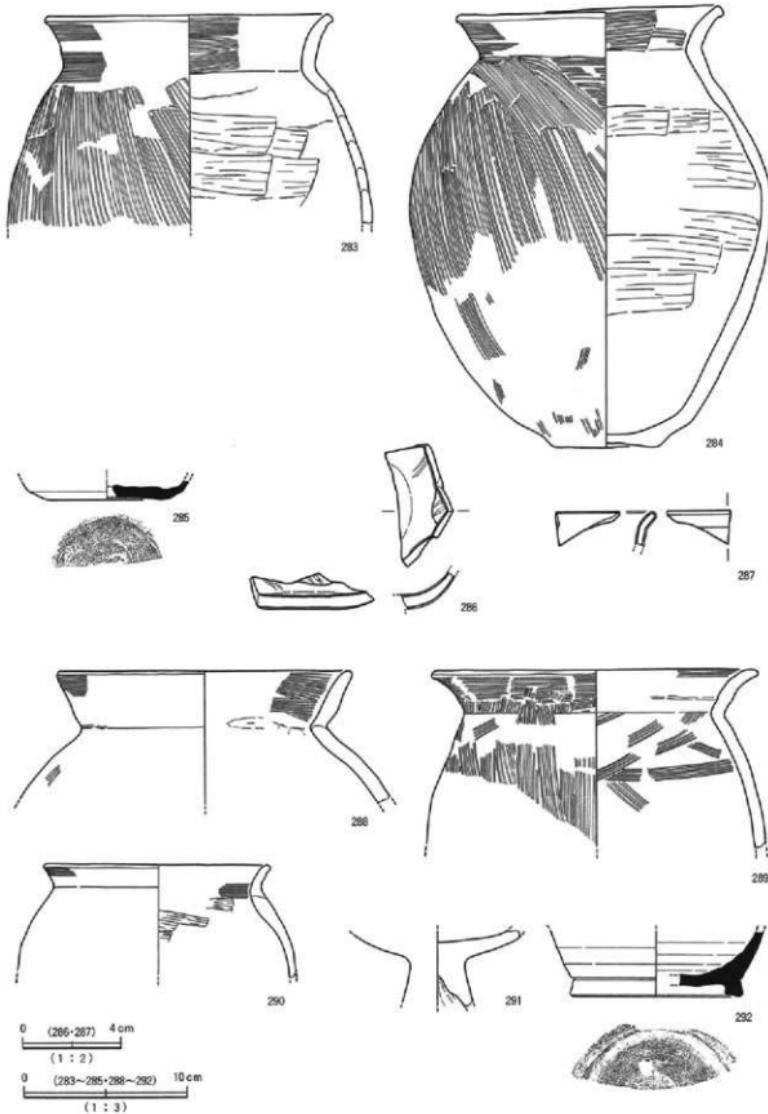
第81図 S T 719出土土器



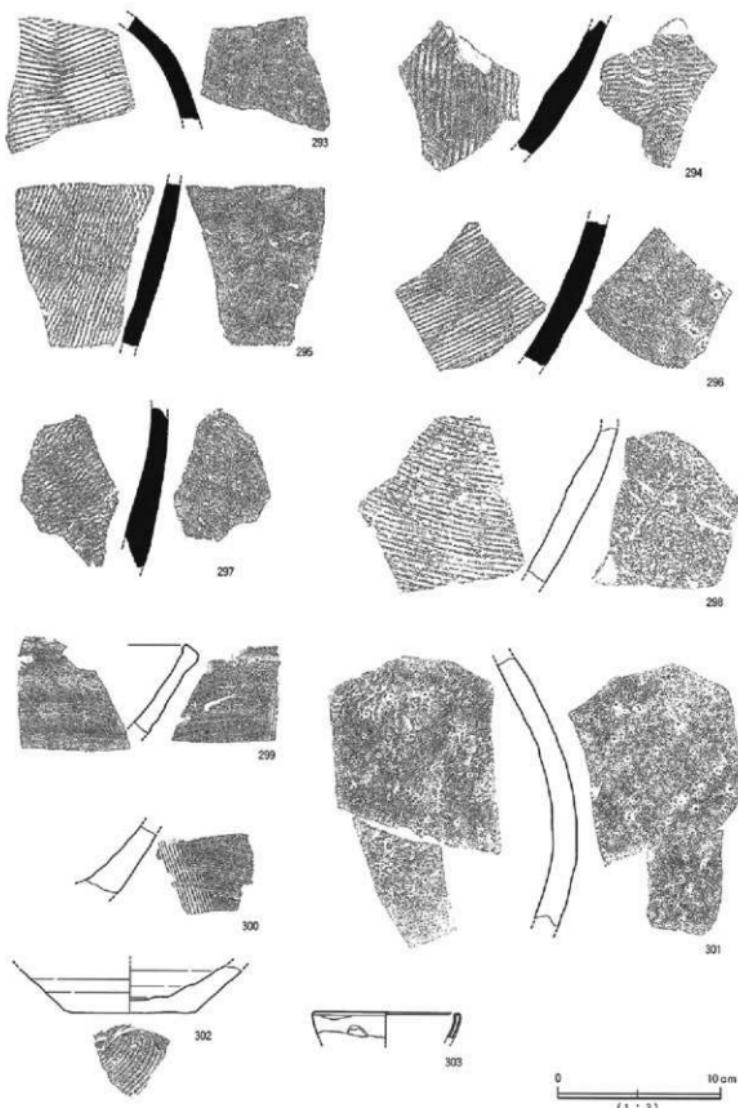
第82図 S T 719・720・721出土土器



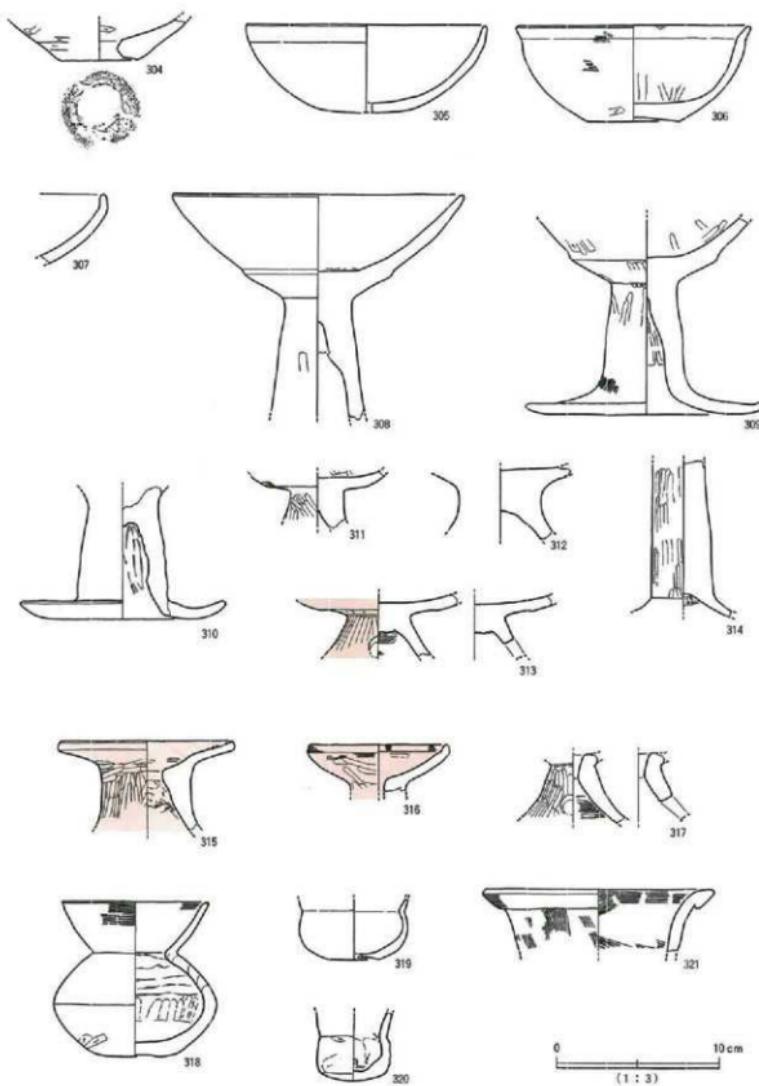
第83図 SK 231・SX 226出土土器



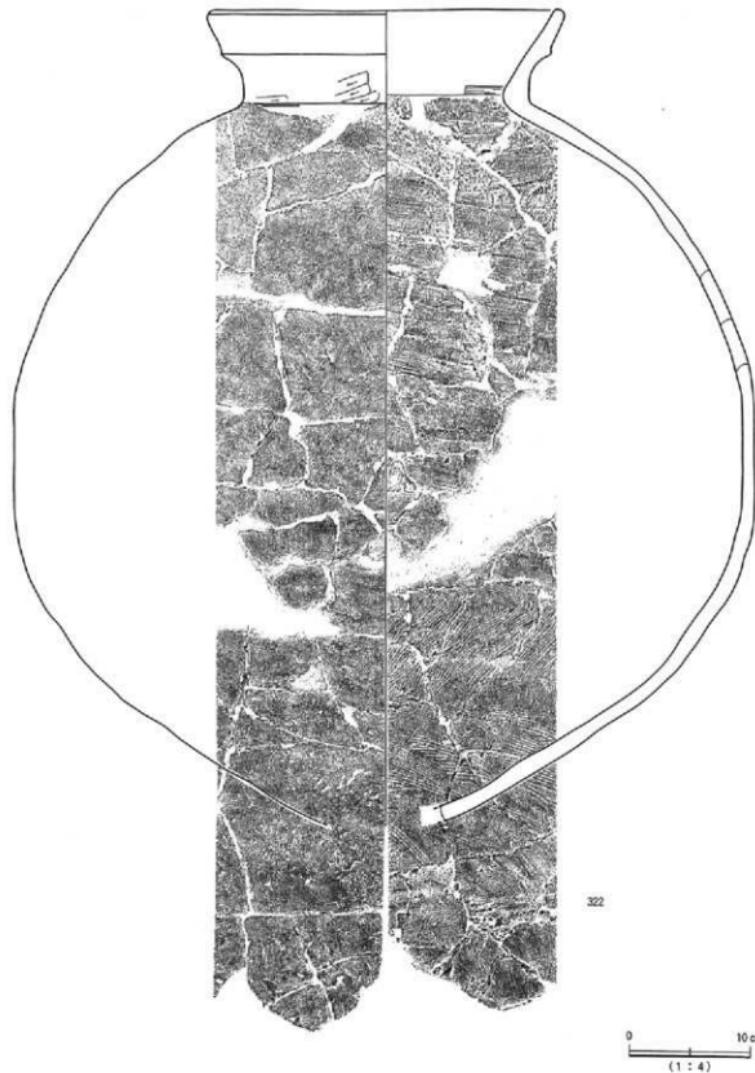
第84図 S X226・S D 4・90・87出土土器



第85図 SD 87出土土器



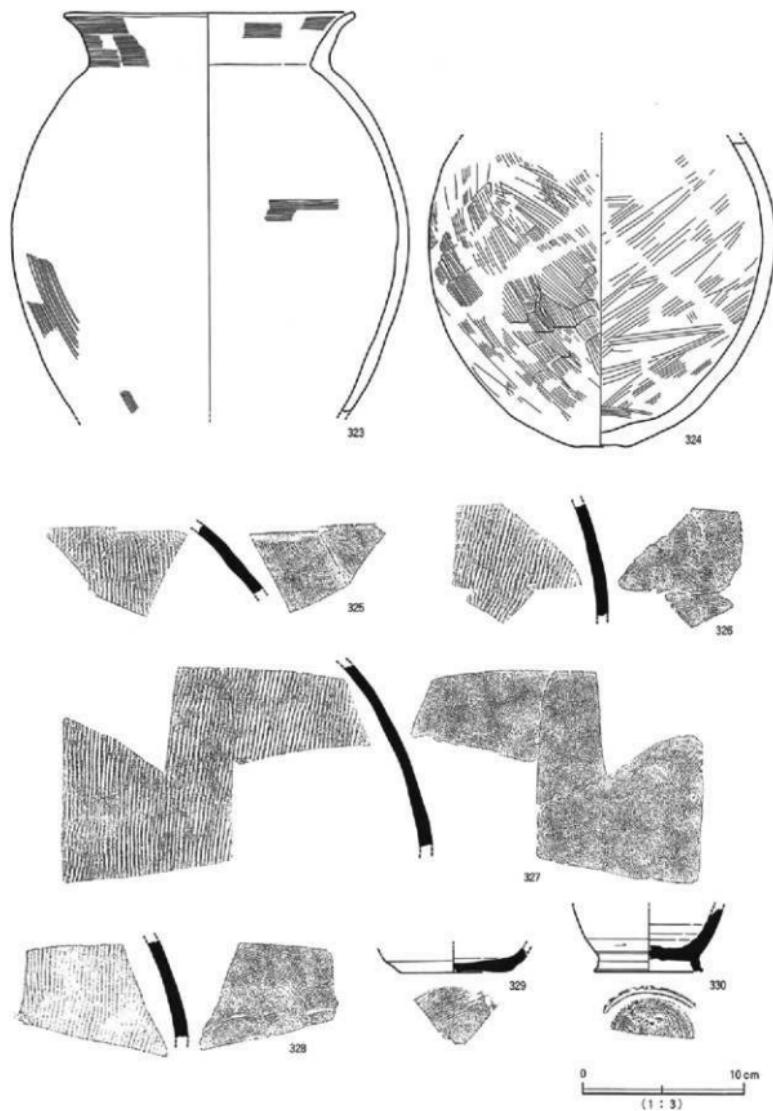
第86図 柱穴・包含層出土土器



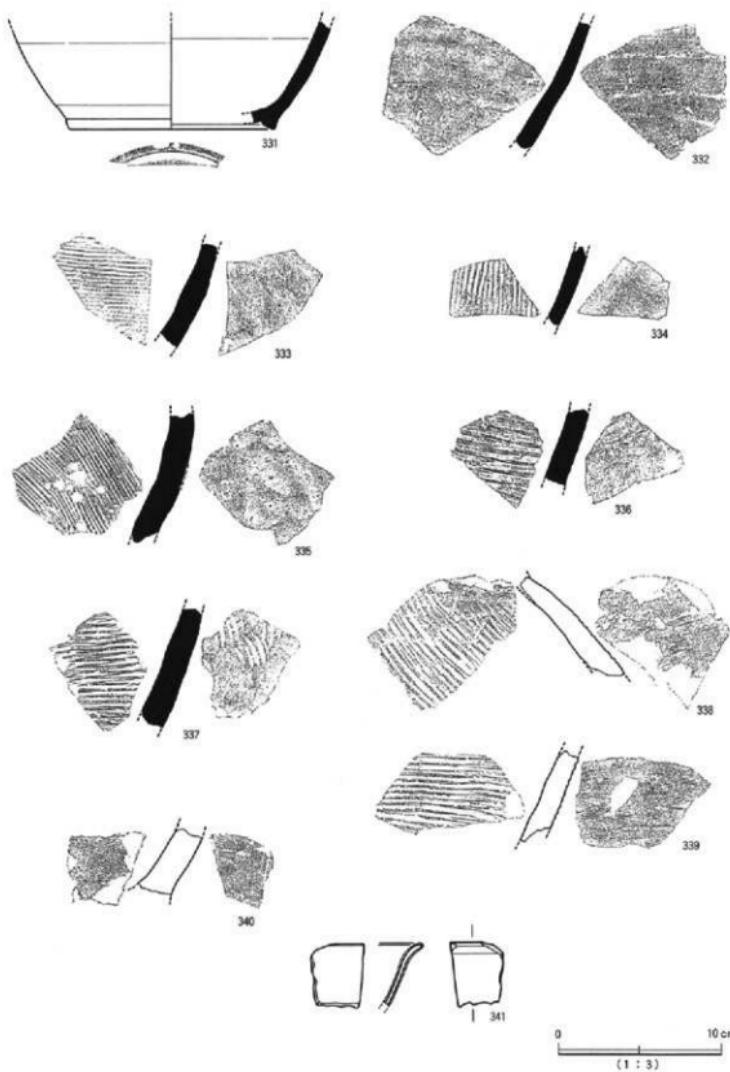
322

0 10 cm  
(1 : 4)

第87図 包含層出土土器



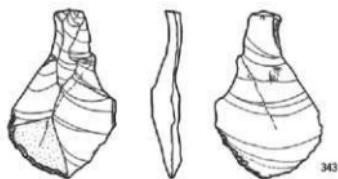
第88圖 包含層出土土器



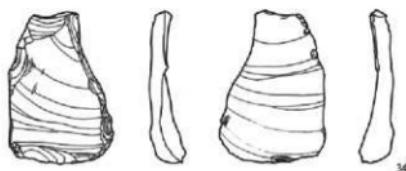
第89図 包含層出土土器



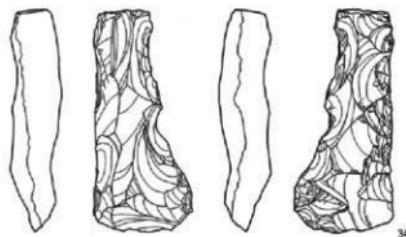
342



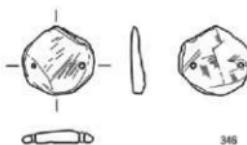
343



344



345



346



347

◎  
印  
印  
印  
348

0 4 cm  
(1 : 2)

第90圖 石器・石製品



第91図 石製品・古錢

表1 弥生土器觀察表

博物 番号	遺物 番号	器種	部位	文様	地文	出土地点	登録 番号	備考
	1	壺	口縁部	羽状撚糸文(撚糸L)		10-21G		
	2	口縁部		連弧状撚糸圓面圧痕文(撚糸L)		トレンチ		
	3	頸部?		横位撚糸圓面圧痕文(撚糸L)		ST36		
	4	口縁部		連弧状撚糸圓面圧痕文(撚糸L)		13-21G		
	5	口縁~頸部?		連弧状撚糸圓面圧痕文(撚糸L)		ST34		
	6	壺	口縁部	連弧状撚糸圓面圧痕文(撚糸L)		ST34		波状口縁 口唇部・撚糸L圧痕文
	7	壺	口縁~頸部	横位撚糸圓面圧痕文(撚糸L)	撚糸R	15-21G		
	8	壺	口縁~頸部	横位撚糸圓面圧痕文(撚糸L)	撚糸R	12-22G		
51	9	壺	口縁部	刺突文(竹管)		10-21G		
	10	壺	口縁部	刺突文(竹管)		10-21G		
	11	壺	頸~体部	横位撚糸圓面圧痕文(撚糸L)	撚糸R	ST47-ED368		
	12	口縁部		連弧状撚糸圓面圧痕文(撚糸L)		10-21G		
	13	口縁部		波状圓面圧痕文(繩文LR)		トレンチ		
	14	壺	口縁~体部	口縁部・撚糸圧痕文(撚糸R)	撚糸R	ST719-ST47		波状口縁
	15	壺	体部		撚糸R	ST47-EK372	RP126	
	16	壺	体部	拂拭状沈縄文	撚糸R	ST47-EK372	RP126	
	17	壺	底部			ST719		
	18	壺	底部	拂拭状沈縄文		ST719		
	19	壺	頸部	沈縄文(漫張文・沈縄文)		11-21G		
	20	壺	頸部?	沈縄文(横縄文・連弧文)		ST719		
	21	壺	頸部?	円形浮文張曳 沈縄文(変形工字文) 撚糸R・横縄文(横R)	撚糸L	ST34		
	22	壺	口縁部	口縁部に圓形文 沈縄文(通弧文)		ST35		有孔
	23	壺	口縁~体部	沈縄文(通弧文) 平行沈縄文・肩口	撚糸R	ST35		波状口縁
	24	壺	体部		撚糸R	ST35		
	25	壺	口縁部	撚糸文(撚糸R)		トレンチ		折返口縁
	26	壺	口縁部	撚糸文(撚糸R)		11-22G		折返口縁
	27	壺	口縁部	撚糸文(撚糸R)		10-22G		折返口縁
	28	壺	口縁部	斜位撚糸圧痕文(撚糸L)		ST37		波状口縫
	29	壺	口縁部	口縁部・撚糸文(撚糸R)		ST47		口唇部・撚糸R
	30	壺	体部		撚糸R	12-21G		
	31	壺	体部		撚糸L	12-21G		内面剥落
52	32	壺	口縁~体部	口縁部・撚糸文(撚糸R)		ST47		
	33	壺	口縁部	口縁部・撚糸文(撚糸R) 肩部・刺突文(撚糸R)	撚糸R	ST34		複合口縫 口唇部・撚糸R
	34	壺	口縁部	平行沈縄文 刺突文(手執竹管) 口縫部・撚糸文(撚糸R)		13-26G		
	35	壺	口縁部	沈縄文(横縄文) 口縫部・撚糸文(撚糸L)		ST717		波状口縫
	36	壺	体部		撚糸L	ST717		内面剥落
	37	壺?	口縁~頸部	半截竹管文	撚糸R?	SD90		
	38	壺	口縁部	羽状撚糸文	撚糸R	11-21G		複合口縫
	39	壺	底部	撚糸圓面圧痕文(撚糸L)		ST47		
	40	壺	底部		撚糸L	16-23G		
	41	壺	底部		撚糸L?	10-22G		
	42	壺	底部		撚糸R	ST720		
	43	壺	底部		撚糸R	ST47		
	44	壺	底部		撚糸R?	ST34		

表2 土器觀察表(1)

排号	遺物番号	種別	器種	計測値(mm)			調査技法			出土地点	登録番号	備考	分類	
				口径	底径	器高	器厚	底部	外面					
	45	土器器	壺	(150)	[42]	6		ミガキ・ナデ		ST13	RP3	内面剥落	E	
	46	土器器	壺	(240)	[44]	7		刷毛目・ナデ	ナデ	ST13	RP4		D	
	47	土器器	壺	156	82	5	ヘラ削り	ミガキ・ナデ	ミガキ・ナデ	ST33	RP83		Bbl	
	48	土器器	壺	(162)	[32]	5		ナデ		ST33	RP82		B	
	49	土器器	壺	(150)	[62]	6				ST34	RP121	二次加熱有り 内外面剥落	Bbl	
	50	黒色土器	壺	(152)	46	5	ミガキ	ミガキ		ST34Y	RP100	同上	Ca3	
	51	土器器	壺		70	[43]	6	ヘラ削り	ケズリ	ケズリ	ST34	RP120	外側下部ヘラ削り	
55	52	土器器	高壺		[64]	5		ナデ・ヘラナデ	ヘラナデ		ST34		脚部穿孔A	
	53	土器器	壺	153	84	6	ヘラ削り	ナデ・ケズリ		ST35-EK412	RP167	二次加熱有り	Fa1	
	54	土器器	壺	148	91	6	ヘラ削り	ケズリ・ナデ	ケズリ	ST35	RP161	二次加熱有り	Fb1	
	55	土器器	壺	144	57	7	ヘラ削り	ナデ・ケズリ	ヘラナデ?	ST35-EK412	RP220	二次加熱有り	Bb3	
	56	土器器	壺	(150)	57	6	ヘラ削り	ミガキ	ミガキ	ST35-EK412	RP166	二次加熱有り	Bc3	
	57	土器器	壺	154	52	9	ヘラ削り	ヘラナデ	ミガキ	ST35	RP171		Bc3	
	58	土器器	壺	(159)	[53]	5			ヘラナデ?	ST35	RP284	二次加熱有り	Bc3	
	59	土器器	壺	134	58	6	ヘラ削り	ケズリ		ST35Y	RP173	二次加熱有り 内外面剥落	Ba2	
	60	黒色土器	壺	151	56	7	ヘラ削り	ミガキ	ミガキ	ST35	RP169	同上	Fa3	
56	61	土器器	鉢	(164)	36	124	6	ヘラ削り	刷毛目・ナデ	ヘラナデ・ナデ	ST35	RP170	二次加熱有り	Eb2
	62	土器器	鉢	190	75	91	6	ヘラ削り	ナデ	ナデ	ST35Y	RP172		
	63	土器器	盃		21	[115]	7	ヘラ削り	ミガキ・ケズリ	輪積状	ST35-EL585	RP163	二次加熱有り	Cb1
	64	土器器	盃	(160)	[102]	7	ヘラ削り	刷毛目・ナデ	刷毛目・ナデ?	ST35-EL585	RP165	二次加熱有り	Ca3	
	65	土器器	盃	184	257	7	ヘラ削り	ケズリ・ナデ	ナデ・ヘラナデ	ST35-EL585	RP164		Ba1	
	66	土器器	盃	173	[230]	7	刷毛目・ナデ	刷毛目・ナデ	ST35-EL585	RP165	二次加熱有り	Ba2		
	67	土器器	盃	183	66	291	7	ヘラ削り	刷毛目・ナデ	刷毛目・ナデ	ST35	RP162	二次加熱有り	D
57	68	土器器	盃		72	[211]	6	ヘラ削り	刷毛目・ナデ	刷毛目・ナデ	ST35	RP162	二次加熱有り	Ba3
	69	土器器	壺	(148)	54	5	ヘラ削り	ナデ・ミガキ	ミガキ	ST36	RP70		Cb2	
	70	土器器	壺	(142)	[43]	5		ナデ	ミガキ・ナデ ヘラナデ		ST36Y			Ca1
	71	土器器	壺	(137)	51	8	ヘラ削り		ミガキ	ST36			Fa3	
	72	土器器	盃	153	62	294	7	ヘラ削り	ケズリ・刷毛目?	ナデ・ヘラナデ	ST36	RP42	外側下部斜片着	Ca3
	73	土器器	盃	130	[62]	7		ナデ?			ST36Y		二次加熱有り	Ca1
	74	土器器	盃	(160)	[55]	5		ナデ・ケズリ	ナデ?	ST36			Ca1	
58	75	土器器	鉢	(150)	[69]	5		ナデ・ヘラナデ		ST36		内外面剥落		
	76	土器器	壺	(114)	48	5		ナデ・ケズリ		ST37	RP109		Ca1	
	77	土器器	高壺		[73]	8		ケズリ	ケズリ・輪積状	ST37	RP107		G	
	78	土器器	瓶		51	[41]	9		ケズリ	刷毛目・ヘラナデ	ST37	RP133		D
	79	土器器	盃		[103]	7	ヘラ削り	ケズリ・刷毛目	刷毛目	ST37	RP118			
	80	土器器	盃		58	[238]	6	ヘラ削り	刷毛目	刷毛目	ST37	RP113		Bb3
	81	土器器	盃		[216]	6		ナデ・ヘラナデ	ヘラナデ	ST37	RP111		Cb3	
	82	土器器	壺	(120)	[36]	6		ヘラナデ	ミガキ	ST39				
	83	土器器	盃		[47]	8		ナデ	ナデ	ST39Y	RP127		Bc4	
	84	土器器	盃		[50]	7		刷毛目・ヘラナデ		ST39	RP130			
	85	土器器	盃		58	[21]	11	ヘラ削り	ナデ	ST39	RP131			
	86	土器器	盃		72	[29]	8	ヘラ削り	ヘラ削り		ST39	RP129		

表3土器観察表(2)

種類 番号	遺物 番号	種別	計測 値(mm)	調整技法			出土地点	登録 番号	備考	分類		
				口径	底径	器高	器厚	底部	外画	内画		
	87	土師器 壺	136	57	6	ヘラ削り	ナデ・ケズリ	ST40	RP174	Ca1		
	88	土師器 許	140	[112]	8		ナデ・ケズリ	ナデ・ヘラナデ	ST40Y	RP140	Eb1	
59	89	土師器 鉢?	166	72	164	10	ヘラ削り	輪積痕	ヘラ削り	ST40	RP139 外面剥落	
	90	土師器 壺	216	74	245	7	ヘラ削り	刷毛目・ナデ ケズリ	刷毛目・ナデ ヘラナデ	ST40-EL	RP135	D
60	91	土師器 壺	178	72	314	7	ヘラ削り	刷毛目・ナデ	刷毛目・ナデ	ST40Y	RP142	Ca1
	92	土師器 壺	194	[273]	7		刷毛目	ナデ・ヘラナデ	ST40	RP134	Ca1	
61	93	土師器 壺	170	[123]	7		ケズリ・ナデ	ナデ・ヘラナデ	ST40-EL	RP136	Ca1	
	94	土師器 壺	86	[318]	7	ヘラ削り	刷毛目・ナデ	刷毛目	ST40	RP137	D	
	95	土師器 壺	109	[80]	6		ナデ・ケズリ	刷毛目	ST40	RP175 二次加熱有り 内外面剥落	D	
61	96	土師器 壺	65	[121]	4	ヘラ削り	ケズリ・ミガキ	ケズリ・ミガキ	ST40	RP153	Ca1	
	97	土師器 壺	135	(90)	266	5	刷毛目・ナデ	刷毛目・ナデ	ST40	RP143	Ca1	
	98	土師器 壺	240	72	227	7	ケズリ・刷毛目	ケズリ・刷毛目	ST40Y	RP141	An	
	99	土師器 壺	242	81	258	6	刷毛目・ナデ	刷毛目・ナデ	ST40	RP138 底部縦付着	An	
	100	土師器 壺	(136)	[235]	5		ナデ・刷毛目	刷毛目	ST702	RP150 二次加熱有り	Ca2	
	101	須恵器 壺			6	平行タクキ目	青海波アテ痕	ST702	15-16-26G			
	102	須恵器 壺			6	平行タクキ目	青海波アテ痕	ST703	15-16-27G			
62	103	土師器 壺	141	40	53	5	ヘラ削り	ケズリ・ナデ	ナデ・ヘラナデ	ST701-EK426 RP228 二次加熱有り 内外面一部剥落	Ba3	
	104	土師器 壺	(138)	60	43	4	ヘラ削り	ナデ・ナデ	ナデ	ST701 RP157	Ba4	
	105	土師器 壺		[47]	6		ナデ	ミガキ・ナデ	ST701-EL429			
	106	土師器 壺	138		51	5	ヘラ削り	ナデ	ミガキ・ナデ	ST701 RP32	Bc3	
	107	土師器 壺	(127)		50	6	ヘラ削り	ミガキ・ナデ	ミガキ・ナデ	ST701 RP32	Ca2	
	108	土師器 壺		[41]	6		ミガキ・ナデ	ナデ	ST701			
63	109	土師器 壺	144	[248]	6		ケズリ・刷毛目	ヘラナデ	ST701-EL429 RP34 二次加熱有り 外曲一部剥落	Ca3		
	110	土師器 壺	166	69	278	10	ヘラ削り	ケズリ・ナデ	ナデ・ヘラナデ	ST701-EL429 RP222	Ca2	
	111	土師器 壺	195	74	282	6	ヘラ削り	刷毛目・ナデ	刷毛目	ST701-EL429 RP226 二次加熱有り	D	
	112	土師器 壺		[101]	7		刷毛目・ナデ	刷毛目	ST701-EL429 RP227 二次加熱有り	A		
	113	土師器 壺	130	[120]	6		刷毛目	ケズリ・ナデ	ST701-EL429 RP225 二次加熱有り 外曲一部剥落	Eb1		
	114	土師器 壺	160	[83]	7		ケズリ・ナデ	ナデ・ヘラナデ	ST701 RP155	Ea2		
64	115	土師器 壺	(156)	[61]	7		刷毛目・ナデ	刷毛目・ナデ	ST701 RP155	Ea2		
	116	土師器 壺		[45]	6		刷毛目・ナデ	ナデ・ヘラナデ	ST701Y			
	117	土師器 壺	143	[223]	7		刷毛目・ナデ	刷毛目・ナデ	ST701-EL429 RP224 二次加熱有り	Ca2		
	118	土師器 壺	154	[278]	7		刷毛目・ナデ	ナデ・ヘラナデ	ST701-EL429 RP223 簇合口絆	A		
	119	須恵器 壺	125	45			ロクロ	ロクロ	ST41Y RP94 RP104			
	120	須恵器 壺		9		平行タクキ目	ナデ・アテ板	ST41-SK231				
	121	須恵器 壺		8		平行タクキ目	青海波アテ痕	ST41	内面に輪積痕			
	122	須恵器 壺		8		平行タクキ目	青海波アテ痕	ST41	RP95			
	123	須恵器 壺		7		平行タクキ目	青海波アテ痕	ST41-16-24G				
	124	須恵器 壺		7		平行タクキ目	青海波アテ痕	ST41 16-24-26G	RP95			
65	125	須恵器 壺		7		平行タクキ目	青海波アテ痕	ST41-トレンチ				

表4 土器観察表(3)

博物 番号	種類	器種	計測値(mm)				調整 技法	出土点	登録 番号	備考	分類	
			口径	底径	器高	器厚						
	126	土師器 壺	(138)	[43]	6		ミガキ	ヘラ削り	ST42	RP7	Bc4	
	127	土師器 高壺	(56)	[62]	7		ヘラ削り	ケズリ・ナデ	ST42-EK323		二次加熱有り 内外面剥落	
	128	土師器 盆		[69]	5		ケズリ・ナデ	ケズリ・輪積痕	ST42Y	RP13	外面部色	
	129	土師器 盆		[109]	5		ミガキ	ケズリ・ナデ	ST42-EL324	RP40	Cb1	
66	130	土師器 登	64	[135]	6		ヘラ削り	ヘラ削り	ST42Y		Ca1	
	131	土師器 登?	76	[81]	5		ヘラ削り	ヘラ削り	ST42	RP6	E	
	132	土師器 脱	112	[46]	5		刷毛目・ナデ		ST43	RP25	二次加熱有り 内外面剥落	
	133	土師器 瓢	(208)	[96]	7		刷毛目・ナデ	刷毛目・ナデ	ST43	RP19	Bb1	
	134	土師器 瓢	(214)	42	299	6	ヘラ削り	刷毛目・ナデ	ST43	RP18	二次加熱有り 内外面剥落	
	135	頸唇器 壺蓋	(131)	[40]	5		ロクロ	ロクロ	ST44	RP50	外側灰かぶり 天井部剥離へ弓削	
	136	土師器 壺		[38]	7		ヘラ削り	ケズリ・ナデ	ミガキ・ナデ	ST44	RP67	頸唇器楕瓶
	137	土師器 壺	(100)	[36]	7		ナデ	ナデ	ST44		頸唇器楕瓶	
	138	土師器 壺	133	63	5		ヘラ削り	ケズリ	ミガキ	ST44	RP91	二次加熱有り 内外面剥落
	139	土師器 壺	128	56	8		ヘラ削り		ナデ	ST44	RP44	二次加熱有り 内外面剥落
67	140	土師器 壺	(142)	56	6		ヘラ削り		ST44	RP69	Ca2	
	141	土師器 壺	(146)	58	7		ヘラ削り	ナデ・ヘラナデ	ミガキ	ST44	RP91	Da
	142	土師器 壺	(168)	69	6		ヘラ削り	ナデ	ST44	RP85		
	143	土師器 壺	(140)	[46]	5		ヘラナデ?	ミガキ・ナデ	ST44	RP68	外面部色	
	144	土師器 脱	(135)	45	97	6	ヘラ削り	刷毛目	ヘラナデ	ST44-EL376	RP46	二次加熱有り
	145	土師器 盆		[109]	6		ヘラ削り	ケズリ	刷毛目	ST44	RP88	二次加熱有り 外面部色
	146	土師器 瓢	192	[112]	6		刷毛目・ナデ	刷毛目	ST44	RP90	Cb1	
	147	土師器 瓢	200	[263]	7		刷毛目・ナデ	刷毛目・ナデ	ST44-EL376	RP45	Ca1	
	148	土師器 瓢	174	48	288	8	ヘラ削り	刷毛目・ナデ	刷毛目・ナデ	ST44	RP43	Ca1
	149	土師器 盆	166	72	269	7	ヘラ削り	刷毛目・ナデ	刷毛目・ナデ	ST44-EL376	RP46	外面部色
68	150	土師器 高壺	(218)	[61]	6		ケズリ・ミガキ	ナデ	ST47	RP61	二次加熱有り	
	151	土師器 高壺	(193)	[45]	6		ケズリ・ナデ	ミガキ・ナデ	ヘラナデ		D	
	152	土師器 高壺	232	[66]	6		ミガキ・ヘラナデ	ミガキ・ナデ	ST47	RP57	二次加熱有り	
	153	土師器 高壺	179	[52]	6		刷毛目・ナデ	刷毛目	ST47	RP59	二次加熱有り 内外面剥落	
	154	土師器 高壺	(152)	[38]	5		ナデ・ヘラナデ	ヘラナデ	ST47			
	155	土師器 高壺	(118)	[43]	5			輪積痕	ST47		外面部剥落	
	156	土師器 登	99	94	7		ヘラ削り	ナデ・ケズリ	ヘラナデ・輪積痕	RP90	Cb2	
	157	土師器 登	(112)	[92]	5		ミガキ	ミガキ・ケズリ	ST47	RP65	Cb1	
69	158	土師器 瓢	160	[85]	5		刷毛目・ナデ	刷毛目	ST47	RP102	Ea1	
	159	土師器 瓢	(172)	[88]	5		刷毛目	刷毛目・輪積痕	ST47	RP93	Ba3	
	160	土師器 盆	(230)	[485]	10			刷毛目・輪積痕	ST47-EL345	RP56	二次加熱有り 内外面剥落	
	161	土師器 瓢	142	74	258	7	ヘラ削り	刷毛目・ナデ	ナデ・ヘラナデ	ST47	RPS2	外面部付着
70	162	土師器 盆		62	[83]	7	ヘラ削り	ケズリ	ST47	RP53	Ca1	
	163	飴匙器 盆				7	平行タクキ目	青漆波アラ板	ST47			

表5 土器観察表(4)

種類 番号	遺物 番号	種別 器種	計測値 (mm)				調査方法		出土地点	登録番号	備考	分類	
			口径	底径	器高	器厚	底部	外面					
	164	土器器 体	114	45	83	6	ヘラ削り	刷毛目・ナデ	ナデ・輪積痕	ST704	RP180	内面縦	
	165	土器器 体		48	[43]	6	ヘラ削り	ケズリ・刷毛目	ケズリ	ST704	RP176		
70	166	土器器 器合	87	[82]	7		ミガキ・ナデ	ナデ・ヘラナデ	ST704	RP179	脚部穿孔L3		
	167	土器器 瓢	(160)	[102]	5		刷毛目		ST704	RP187	二次加熱有り 内外面剥落	Cb2	
	168	土器器 瓢	(178)	[68]	5				ST704	RP187	内外面剥落	Ea1	
	169	土器器 瓢			8		刷毛目・ナデ	刷毛目・ナデ	ST704	RP189			
	170	土器器 瓢	(306)	[130]	6		刷毛目	ケズリ	ST704	RP181	二次加熱有り 内外面剥落	A	
71	171	土器器 瓢	26	[138]	5	ヘラ削り	刷毛目・ナデ	ヘラナデ	ST704	RP182			
	172	土器器 瓢	189	[192]	5		刷毛目・ヘラナデ	ヘラナデ	ST704	RP178		Ca1	
	173	土器器 瓢	140	48	5	ヘラ削り	ナデ		ST705	RP206	二次加熱有り	Cb2	
	174	土器器 瓢	142	51	6	ヘラ削り	ケズリ・ナデ	ナデ	ST705	RP208	二次加熱有り	Cb2	
	175	土器器 瓢	(142)	59	6	ヘラ削り	ミガキ・ナデ	ミガキ	ST705			D <sub>b</sub>	
	176	土器器 瓢	138	48	4	ヘラ削り	ミガキ・ヘラナデ	ミガキ	ST705	RP202		Ba3	
	177	土器器 瓢	(152)	69	7	ヘラ削り	ナデ・ミガキ	ケズリ・ナデ ミガキ?	ST705	RP209		Bc3	
	178	土器器 瓢	(142)	46	6	ヘラ削り	ケズリ・ミガキ	ミガキ	ST705		二次加熱?	E	
72	179	土器器 瓢	153	61	6	ヘラ削り	ケズリ・ミガキ	ミガキ・ナデ	ST705-EL586	RP193	内面剥落	Ca2	
	180	土器器 盆	(102)	58	192	7	削り	ケズリ・刷毛目	刷毛目・ナデ	ST705-EL586	RP200	二次加熱有り 外側剥落、内面堆積	D
	181	土器器 盆	(198)	[104]	6		刷毛目・ナデ	刷毛目・ナデ	ST705-EL586	RP198	二次加熱有り	Ca2	
	182	土器器 盆	157	70	303	7	ヘラ削り	ミガキ・刷毛目	ミガキ・刷毛目	ST705-EL586	RP194		D
	183	土器器 瓢	189	44	291	7	ヘラ削り	ケズリ・刷毛目	刷毛目・ナデ	ST705	RP195		Cb2
73	184	土器器 瓢	(172)	(54)	252	8		刷毛目・ナデ	刷毛目・ナデ	ST705	RP196		Cb1
	185	土器器 瓢	160	[235]	7		ケズリ?	刷毛目	刷毛目・ナデ	ST705	RP205		Ba1
	186	土器器 瓢	(164)	[181]	7		刷毛目・ナデ		ST705	RP195	二次加熱有り 内外面剥落	Ca1	
	187	土器器 瓢		[166]	7	ヘラ削り	刷毛目	刷毛目	ST705	RP203	二次加熱有り 内外面剥落		
	188	土器器 瓢	25	[212]	8	ヘラ削り	ケズリ・刷毛目	ケズリ・刷毛目	ST705-EL586	RP199	二次加熱有り		
	189	土器器 器合	79	112	86	6	ヘラ削り	ミガキ・ヘラナデ	刷毛目・ナデ	ST706	RP216	内外面彩色 脚部穿孔L3	
	190	土器器 器合		117	[78]	6	ヘラ削り?	ミガキ・刷毛目		ST706	RP215	内外面彩色 脚部穿孔L3	
	191	土器器 器合	192	[44]	7	ヘラ削り?	ナデ	ナデ	ST706	RP217	内面彩色、脚部穿孔L3 二次加熱有り		
74	192	土器器 高坏		[60]	8		ケズリ・刷毛目	刷毛目	ST706		脚部穿孔L3		
	193	土器器 瓢		[32]	7		ナデ	ナデ	ST706				
	194	土器器 瓢		[22]	10		ナデ	ナデ	ST706		複合口縫		
	195	土器器 瓢		[39]	9		ナデ	ナデ・ヘラナデ	ST706	RP218	複合口縫	A	
	196	黒色土器 环	(130)	52	6	ヘラ削り	ケズリ・ヘラナデ	ミガキ	ST707	RP255	二次加熱有り 内墨	Fa3	
	197	土器器 瓢	168	296	10	ヘラ削り	刷毛目・ナデ	刷毛目・ナデ	ST707	RP232	丸底	Ba2	
							ヘラ削り	ヘラナデ		RP255			

表 6 土器観察表 (5)

登録番号	種類	器種	計測値 (mm)				調査方法	出土地点	登録番号	備考	分類		
			口径	底径	器高	厚さ							
196	土器器	环	154	72	6	ヘラ削り	ケズリ・ミガキ ヘラナダ ヘラナダ	ST712	RP260	内外面彩色	Bc2		
199	土器器	坏	(125)	61	6	ヘラ削り		ST712	RP238	二次加熱有り 内外面剥落	Ba2		
200	土器器	坏	(140)	62	7	ヘラ削り	ナデ	ST712		内外面剥落	Fa2		
201	土器器	坏	(158)	50	74	5	ヘラ削り ケズリ	ミガキ	ST712Y	RP256		Fb2	
202	土器器	坏	(150)	57	43	5	ヘラ削り ケズリ・ナデ	ケズリ・ナデ	ST712-EL486	RP242	内外面彩色	Aa	
203	土器器	坏	(138)	44	47	8	ヘラ削り ケズリ・ナデ	ケズリ・ナデ	ST712			Ab	
204	土器器	鉢	158	114	9	ヘラ削り	刷毛目・ナデ	刷毛目・ナデ	ST712	RP251		Eb2	
205	土器器	鉢	[93]	9	ヘラ削り	ケズリ→ナデ	ナデ・ヘラナダ	ST712-EL486	RP240	外側二次加熱有り 底部ヘラ記号[×]			
206	土器器	高坏	(172) (102)	168	6	ヘラ削り	刷毛目・ナデ	ミガキ	ST712	RP239		B	
207	土器器	高坏	190	[61]	7		ケズリ・ミガキ	ミガキ・ナデ	ST712Y	RP262		F	
208	土器器	高坏	(186)	[71]	6		ケズリ・ミガキ	ミガキ・ヘラナダ	ST712	RP254	内面剥落着	F	
209	土器器	高坏	[90]	8			ヘラナダ		ST712	RP235	二次加熱有り 内外面剥落	G	
210	土器器	高坏	184	[53]	8				ST712		二次加熱有り 内外面剥落	Ea	
211	土器器	高坏	(176) [88]	9				ナデ	ST712	RP238	外面彩色	A	
212	土器器	高坏	[53]	7		ミガキ	刷毛目	ST712		脚部穿孔?			
213	土器器	壳	(190)	[47]	7		刷毛目・ナデ	刷毛目・ナデ	ST712Y		二次加熱有り	Ca1	
214	土器器	壳	(72) [254]	9	ヘラ削り	ケズリ・刷毛目	ケズリ・輪積	ST712-EL486	RP243		Ca1		
215	土器器	壳	178	[146]	7		刷毛目・ナデ	刷毛目・ナデ	ST712-EL486	RP265	二次加熱有り	Cb1	
216	土器器	壳	65 [175]	8	ヘラ削り	刷毛目	刷毛目・ヘラナダ	ST712-EL486	RP242	二次加熱有り	Cb1		
217	土器器	壳	202	68	317	7	ヘラ削り	刷毛目	刷毛目・ヘラナダ	ST712	RP257	外側下部二次加熱有り	Ca1
218	土器器	壳	[219]	6			刷毛目・ナデ	刷毛目・ナデ	ST712Y	RP258	二次加熱有り	Bb3	
219	土器器	板	184	78	249	7	ミガキ・ナデ	ミガキ・ヘラナダ	ST712-EL486	RP241		Ab	
220	土器器	壳	(204)	[223]	7		刷毛目・ナデ	ケズリ・ナデ	ST713	RP283	輪積	Bb2	
221	土器器	壺	150	7		刷毛目・ナデ	刷毛目・ナデ	ST714	RP275		D		
222	土器器	坏	(186)	[40]	6	ナデ	ミガキ・ヘラナダ	ST716		外面剥落	Bc3		
223	土器器	坏	149	61	5	ヘラ削り	ナデ	ST716	RP249	二次加熱有り 内外面剥落	Bb2		
224	土器器	坏	(128)	59	6	ヘラ削り	ミガキ・ナデ	ミガキ	ST716	RP245	内外面剥落	Cb1	
225	土器器	坏	(146)	55	7	ヘラ削り	ケズリ・ミガキ	ミガキ・ナデ	ST716Y			Cb2	
226	土器器	坏	(144)	[50]	6		ケズリ		ST716		二次加熱有り 内外面剥落	Cb2	
227	土器器	坏	[47]	6		ミガキ	ミガキ	ST716					
228	土器器	壳	(140)	42	175	6	ヘラ削り	刷毛目	刷毛目	ST716	RP248	二次加熱有り 内外面剥落	Ea2
229	土器器	壳	195	[91]	7		刷毛目・ナデ	刷毛目・ナデ	ST716-EL485	RP247		Ca3	
230	土器器	壳	180	[112]	8		刷毛目	刷毛目	ST716-EL485	RP246	二次加熱有り	Cb1	
231	土器器	板	(69) [205]	9		ケズリ・刷毛目	ケズリ・刷毛目	ST716	RP244		C		
232	土器器	壺	170	[87]	7		ナデ	ナデ	ST716-EL485	RP247		Ca1	

表7 土器観察表(6)

持括 番号	遺物 番号	種類	形様	計測 値 (mm)			調整技法			出土地點	登録 番号	備考	分類	
				口径	底径	器高	器厚	底 部	外 面					
	233	土師器 环	160	51	6	ヘラ削り ナデ	ミガキ	ST717-EL580	RP250	二次加熱有り	Cb3			
	234	土師器 环	(144)	[48]	6	ケズリ・ミガキ・ナデ	ミガキ	ST717Y	RP253		Cb1			
	235	土師器 环	(133)	[61]	5	ヘラ削り ナデ	ナデ・ミガキ	ST717Y	RP253	二次加熱有り	Ca1			
	236	土師器 环	(145)	52	5	ヘラ削り ミガキ	ナデ・ミガキ	ST717Y	RP253		Bb3			
	237	土師器 环	(149)	51	6	ヘラ削り ナデ	ミガキ	ST717	RP248	二次加熱有り	Bc3			
	238	土師器 脼	(100)	[94]	7	ナデ	ヘラナデ	ST717Y						
79	239	土師器 脼合		117	[105]	8	ケズリ・輪積板	ケズリ・輪積板	ST717	RP245				
	240	土師器 瓢	158	[220]	7	ケズリ→ナデ	刷毛目・ナデ	ヘラナデ	ST717	RP252	外面下部二次加熱有り	Bb2		
	241	土師器 瓢	204	30	275	7	ヘラ削り 刷毛目	ヘラナデ	ST717	RP254	二次加熱有り 内外面剥落	Cb3		
	242	土師器 瓢	(230)	[108]	9	ケズリ・ナデ	ナデ・ヘラナデ	ST717				B		
	243	土師器 瓢	(165)	[79]	6	刷毛目・ナデ	刷毛目・ナデ	ST717	RP247		Ca1			
	244	土師器 瓢	156	[175]	7	ケズリナデヘラナデ	ナデ・ヘラナデ	ST717-EL580	RP258		Ca1			
	245	須恵器 环壺	112	[42]	4	ロクロ	ロクロ	ST718	RP231	天井部削除ヘラ削り				
	246	土師器 高环		[42]	5	ミガキ・ナデ	ST718Y			外面剥落				
	247	須恵器 瓢			6	平行タキ目	青海波アテ痕	ST718-EP457	15-2G					
	248	須恵器 瓢			6	平行タキ目	青海波アテ痕	ST718						
	249	須恵器 瓢		[10]		ロクロ	ロクロ	ST719		ツマミ				
80	250	須恵器 环壺	120	46	4	ロクロ	ロクロ	EL495	RP268	天井部削除ヘラ 削り	ST719	RP281		
	251	土師器 环	142	88	5	ヘラ削り	ケズリ・ヘラナデ ナデ	ST719-EK583		二次加熱有り	Fa1			
	252	土師器 环	(142)	[48]	5	ミガキ・ナデ	ミガキ・ヘラナデ	ST719Y	RP279		Bb3			
	253	土師器 环	(144)	49	6	ヘラ削り ケズリ・ミガキ	ミガキ	ST719			Cb2			
	254	土師器 环	(159)	[48]	6	ナデ	ミガキ・ナデ	ST719	RP271	外面剥落	Bc4			
	255	土師器 环	(142)	[33]	6	ナデ	ミガキ・ナデ	ST719		二次加熱有り 外面剥落				
	256	土師器 环	(160)	[37]	5	ミガキ・ナデ	ミガキ・ナデ	ST719						
	257	土師器 环	133	49	7	ヘラ削り ケズリ・ミガキナデ	ミガキ・ナデ	ST719	RP271	須恵器模倣	Ca2			
	258	土師器 环	(144)	[51]	6	ミガキ・ヘラナデ	ミガキ・ナデ	ST719			Ca2			
	259	土師器 高环		[69]	7	ケズリ・ミガキ	輪積板	ST719Y	RP280		G			
	260	土師器 無窓壺	(120)	[49]	7	ミガキ・ナデ	ミガキ・ナデ	ST719			F			
	261	土師器 脼	140	43	137	7	ヘラ削り 刷毛目・ナデ	ナデ・ヘラナデ	ST719	RP279	二次加熱有り 外面剥落	Eb1		
	262	土師器 瓢		[114]	7	ヘラ削り	ケズリ・ミガキ ケズリ・ナデ	ST719-EK583		二次加熱有り 外面剥落	Cb1			
	263	土師器 瓢		[120]	7	ヘラ削り	刷毛目・ナデ	輪積板	ST719	RP278	二次加熱有り 外面削除	Cb1		
81	264	土師器 瓢	186	[80]	8	ケズリ・刷毛目		ST719Y		二次加熱有り 内外面剥落	Ba2			
	265	土師器 瓢	(168)	[98]	9	ナデ	ケズリ	ST719-EK583		二次加熱有り 内外面剥落	D			
	266	土師器 瓢	172	88	303	8	ヘラ削り	ケズリ・刷毛目 ナデ・ヘラナデ	ST719Y	RP266		Ba3		
	267	土師器 瓢	154	[157]	6	刷毛目→ヘラナデ	ヘラナデ	ST719-EL495	RP270		Ea1			
	268	土師器 瓢	144	64	242	7	ヘラ削り	刷毛目・ナデ	刷毛目・ヘラナデ	ST719	RP267		Ca3	
	269	土師器 瓢		68	[150]	10	ヘラ削り	ケズリ・ナデ	ヘラナデ・輪積板	ST719	RP279		A	
82	270	土師器 瓢		68	[64]	7	ケズリ	ヘラナデ	ST719-EL495	RP269		C		
	271	土師器 瓢	(212)	[192]	10	刷毛目・ナデ	ケズリ・ナデ	ST719Y	RP272		A			

表 8 土器観察表 (7)

拂図 番号	遺物 番号	種別	器種	計測値 (mm)			調査技術		出土地点	登録番号	備考	分類		
				口径	底径	器高	器厚	底部	外面	内面				
	272	土器器	壺	107	[59]	6		刷毛目・ナデ ヘラナダ	刷毛目・ナデ	ST720	RP276	A		
	82	土器器	壺		[53]	10		ナデ・ヘラナダ	ナデ・ヘラナダ	ST720				
	274	土器器	壺	(126)	[40]	6		ケズリ・ミガキ ナデ	ミガキ・ナデ	ST721		Ca2		
	275	土器器	壺	(146)	[53]	6	ヘラ削り	ナデ	ミガキ・ナデ	SK231	RP41	外面焼付着	Bc3	
	276	土器器	壺	208	[200]	9		ミガキ?・刷毛 目	ミガキ・ナデ	SK231	RP41	二次加熱有り 内外面剥落	Ab	
	277	土器器	壺	150	61	6	ヘラ削り	ケズリ・ミガキ	ミガキ	SX226	RP78		Cb1	
	278	土器器	壺	144	60	5	ヘラ削り	ミガキ	ナデ	SX226	RP79	二次加熱有り 外面剥落	Bb2	
83	279	土器器	壺	208	81	8	ヘラ削り	ケズリ・ミガキ ナデ	ミガキ・ナデ ヘラナダ	SX226	RP80		Db	
	280	土器器	高壺	186	90	137	9	ヘラ削り	ミガキ・ナデ	ミガキ	SX226	RP76		C
	281	土器器	高壺	184	102	137	9	ヘラ削り	ミガキ・ナデ	ミガキ	SX226	RP77		C
	282	土器器	高壺	193	100	126	8	ヘラ削り	ミガキ・ナデ	ミガキ	SX226	RP81		C
	283	土器器	壺	172	[131]	6		刷毛目・ナデ	ナデ・ヘラナダ	SX226	RP74		Cb2	
	284	土器器	壺	160	64	271	7	ヘラ削り	刷毛目・ナデ	刷毛目・ナデ ヘラナダ	SX226	RP75	二次加熱有り	Ca2
	285	須恵器	壺	(68)	[13]	4	回転ハラ切	ロクロ	ロクロ	SD4				
	286	青磁	碗		[22]	7		飛雲文	SD4			連接ぎ痕		
84	287	白磁	碗		[21]	6			SD60					
	288	土器器	壺	(178)	[81]	8		刷毛目・ナデ	ケズリ・刷毛目 輪積模	SD87	RP28		Ba3	
	289	土器器	壺	200	[167]	7		刷毛目・ナデ	刷毛目・ナデ	SD87	RP27		Cb1	
	290	土器器	壺	(140)	[69]	6		ナデ	ナデ・ヘラナダ	SD87	RP31	外面剥落	Eb1	
	291	土器器	高壺		[41]	7			SD87	RP5	外面剥落			
	292	須恵器	高台付壺	(106)	[40]	5	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SD87				
	293	須恵器	壺			10	平行タキ目	アテ板	SD87		外面に自然輪			
	294	須恵器	壺			13	タタキ	アテ板	SD87					
	295	須恵器	壺			11	平行タキ目	背海波アテ板	SD87	RP163				
	296	須恵器	壺			15	平行タキ目	アテ板	SD87	RP37	内面に自然輪			
	297	須恵器	壺			12	タタキ	アテ板	SD87					
85	298	須恵器	壺			14	平行タキ目	アテ・ナデ	SD87F					
	299	須恵器	壺		[48]	9	ロクロ	ロクロ	SD87		内面に鉢目			
	300	須恵器	壺			13	ロクロ	ロクロ	SD87		内面に鉢目			
	301	須恵器	壺			14	タタキ・ナデ	アテ・ナデ	SD87					
	302	須恵器	盤鉢	(80)	[30]	10	静止糸切	ロクロ	ロクロ	SD87		底部静止糸切		
	303	青磁	香炉?	(88)	[12]	4	蓮弁文		SD87	RP51				
	304	土器器	瓶	46	[24]	6	ヘラ削り	ケズリ		SP204		D		
	305	土器器	壺	(148)	54	6	ヘラ削り			16-30G		二次加熱有り 内外面剥落	Bc3	
	306	土器器	壺	(142)	55	59	6	ヘラ削り	ケズリ・ナデ ミガキ・ナデ	ミガキ・ナデ	11-23G			Fb2
	307	土器器	壺	(140)	[42]	6		ナデ・ヘラナダ	ミガキ・ヘラナダ	15-21G				
	308	土器器	高壺	(178)	[137]	7		ケズリ		12-21G		二次加熱有り 内外面剥落	Eb	
86	309	土器器	高壺	(144)	[120]	8		ケズリ・ミガキ ナデ	ミガキ・ミガキ	11-23G			Ea	
	310	土器器	高壺	(126?)	[82]	6	ヘラ削り			トレンチ			G	
	311	土器器	高壺		[34]	5		ミガキ・ヘラナダ	ミガキ	13-28G 14-27G				
	312	土器器	高壺		[44]	8				トレンチ		内外面剥落		

表9 土器観察表(8)

博物 番号	遺物 番号	種類	計測 値 (mm)			調整 技 法		出土地点	登録 番号	備 考	分類	
			口径	底径	器高	器厚	底 部	外 面				
	313	土師器 高环	[36]	6			ケズリ?・ミガキ	刷毛目	11-25G		外面部色 脚部穿孔3	
	314	土師器 高环	[96]				ミガキ	ヘラナデ	7-42G			
	315	土師器 節合	108	[54]	5		ミガキ	ミガキ・ナデ	14-28G		内外面部色	
86	316	土師器 節合	83	[28]	6		ミガキ・ナデ	ミガキ・ナデ	15-27G		内外面部色	
	317	土師器 節合	[42]	7			ミガキ	刷毛目	14-28G		脚部穿孔3	
	318	土師器 爪	88	(88)	95	6	ヘラ削り	ケズリ・刷毛目	ナデ・押住痕	12-25G		Cb2
	319	土師器 ニチュア	(30)	[32]	2		ヘラ削り			7-44G		
	320	土師器 ニチュア		[42]	6		ヘラ削り	ケズリ	押住痕	11-31G		手捏土器
	321	土師器 爪	142	[38]	7		刷毛目・ナデ	刷毛目・ナデ	13-28G		B	
87	322	土師器 爪	(262)	[664]	12		ケズリ・刷毛目	刷毛目	13-21G	RP72	A	
	323	土師器 爪	(178)	[244]	7		刷毛目・ナデ	刷毛目・ナデ	16-19G		Ca2	
	324	土師器 爪	32	[186]	9		ヘラ削り	刷毛目	刷毛目	16-19G		Ba2
88	325	須恵器 爪			6		平行タクキ目	青海波アテ軸	16-23G・トレチ			
	326	須恵器 爪			6		平行タクキ目	青海波アテ軸	15-16-27G			
89	327	須恵器 爪			6		平行タクキ目	青海波アテ軸	16-21-24-26			
	328	須恵器 爪			7		平行タクキ目	青海波アテ軸	15-26G			
	329	須恵器 环	(68)	[14]	5		回転糸切	ロクロ	ロクロ	10-24G		
	330	須恵器 环耳环	(66)	[38]	6		回転ヘラ切	ロクロ	ロクロ	6-41G		外面部自然軸
	331	須恵器 爪	(128)	[66]	8		ケズリ・カキメ	刷毛目・カキメ?	10-24G			
	332	須恵器 爪			9		ロクロ・ナデ	ロクロ・ナデ	16-27G			
	333	須恵器 爪			13		タタキ目	アテ痕	X-0		外面部自然軸	
	334	須恵器 爪			8		タタキ目	アテ痕	6-42G		内面部自然軸	
	335	須恵器 爪			16		タタキ目	アテ痕	15-22G		内面部に自然軸	
90	336	須恵器 爪			12		平行タクキ目	アテ痕	5-39G		外面部に自然軸	
	337	須恵器 爪			14		平行タクキ目	アテ痕	16-21G		外面部に自然軸	
	338	珠渦系 爪			13		平行タクキ目	アテ・ナデ	16-24G			
	339	珠渦系 爪			14		平行タクキ目	アテ・ナデ	トレンチ		内面部に握持	
	340	瓷器系 槌鉢			17		ロクロ	ロクロ・ナデ	13-22G		内面部に握持	
	341	青磁 遷反碗			[38]	4			トレンチ		縫合	

表10 石器・石製品観察表

博物 番号	遺物 番号	種類	器種	計測 値 (mm)			重量 (g)	石材	出土地点	登録 番号	備 考
				長	幅	厚					
	342	打製石器	石鎚	[33]	10.5	5.0	1.8	玉髓質	X-0		
	343	打製石器	解盤	69.5	42.5	13.0	22.5	頁岩	ST719F		
	344	打製石器	掻器	62.5	43.0	8.5	27.3	頁岩	ST34Y		
90	345	打製石器	塊狀石器	91.5	40.0	91.5	62.8	頁岩	SD87	RQ85	
	346	石製品	有孔円錐	28	28.0	5.0	4.9	練泥片岩	SD87	RQ92	
	347	石製品	有孔円錐	29.5	33.0	4.0	4.0	練泥片岩	14-15-20G		
	348	石製品	管玉	残存4(4)	5		0.2	碧玉	ST701	RQ229	
	349	石製品	砥石	[65]	50.0	29.0	121.3	砾灰岩	ST42Y		
	350	石製品	砥石	[62]	48.0	35.0	190.6	堆積岩	SD87	RQ105	
	351	石製品	砥石	[69.5]	50.0	29.0	78.7	堆積岩		トレンチ	
91	352	石製品	砥石	[81]	61.0	24.0	161.3	堆積岩	ST701	RQ230	
	353	石製品	砥石	[89.5]	30.0	27.0	117.8	堆積岩	SG4		
	354	石製品	砥石	[84]	78.0	15.0	163.4	堆積岩	SX245		
	355	石製品	支撑	156	44.5	39.6	243.6	堆積岩	ST35	RQ282	2次加热有り

表11 古錢観察表

博物 番号	遺物 番号	銘文	分類	铸造地・名称	铸造年代	計測 値 (mm)			出土地点	登録 番号	備 考
						外径	穿孔	厚			
91	356	永楽通寶	明	永楽6年(1408)	24.6	6.3	1.2	2.2	12-21G		銘付着
	357	寛永通寶	新寛永	元文元年(1737)	23.0	6.4	0.7	2.0	SD4	RM1	虎ノ尾冠

## VI まとめと考察

### 1 まとめ

今回の調査は、東北中央自動車道相馬・尾花沢線建設工事（上山～東根間）に伴う、渋江遺跡の第2・3次発掘調査である。遺跡は、山形県山形市大字渋江字田中に所在し、馬見ヶ崎川（白川）右岸の自然堤防上に立地する。調査は遺跡範囲内の遺跡にかかる事業実施部分約8,820m<sup>2</sup>を対象に実施した。その結果、遺跡は弥生土器の包藏地、古墳時代の集落、中世の集落を区画する溝跡などを含む複合遺跡と確認された。出土遺物は弥生土器、土師器、石製品、須恵器、陶磁器など整理箱にして78箱である。以下に各時代の遺構・遺物について要約する。

#### 1) 弥生土器について

**天王山式** 本遺跡からは約400点を超える弥生土器が出土した。それらは、刺突文や沈線文、円形浮文、そして撚糸の面面压痕文などの文様の特徴から概ね天王山式に比定されるが、当該期と判断できる遺構は検出されなかった。しかし、弥生土器の分布状況をみると、平成13年度の特定道路山形羽入線道路改良事業に伴って調査された渋江遺跡の第4次調査で検出された縄文・弥生遺物の集中区域と一連のものと考えられる。これを考慮すると、この区域に弥生時代の集落があったことをも推測される。但し、平成15年度に行われた馬見ヶ崎川を挟んで渋江遺跡の対岸に位置する向河原遺跡の第5次調査において、天王山式期に属する堅穴住居跡が検出され、弥生時代の集落が確認されたことから、河川等の氾濫による流れ込みの可能性も考えられる。今後、これら周辺遺跡出土遺物との比較検討を行って詳細の解明が課題となる。

#### 2) 古墳時代の遺構と遺物について

遺構は、第2次調査の北側調査区で検出された2棟の堅穴住居跡と第3次調査区の上下層で検出された33棟の堅穴住居跡や土坑、祭祀遺構などが当該期のものと考えられる。分布状況は、第2次調査の2棟を除けばその大半が第3次調査区の南東側で検出された。このことから、今回の調査区は渋江遺跡の集落西端に当たると考えられる。平成13年度に行われた第3次調査区東側の第4次調査では78棟もの当該期の堅穴住居跡が検出されたことからも集落の中心が東側にあることが窺える。

**上層** 上層の遺構は概ね古墳時代中期のものと推定される。検出された堅穴住居跡は18棟で、焼失家屋2棟を含む。形態的にはカマドを構築していたものが7棟、地床炉のものが1棟である。カマドは住居内に構築されるものと住居プランから張り出すものがみられたが、前者が多く後者はS T47のみであった。他は例外なく煙道を有さないものであった。カマドの位置はS T40の南西壁隅とS T47の北壁以外は、住居内の東または北東壁付近の中央もしくは中央や右寄りに構築され、煙道を持たない内部燃焼型と考えられた。主軸となる方向は磁北に対し東に振れるものが多くみられ、西に振れるものはS T34だけである。他に、祭祀遺構と考えられるも

のと土坑などが検出されているが、出土遺物から上層の住居跡と同時期と推測される。

遺物は堅穴住居跡及び祭祀遺構、土坑から出土しているが、特に S T35・40・44・701・S X226などで比較的まとまった出土例がみられた。このうち S T35では焼失住居の床面資料から一括性の高い壺や甕などの多くの資料が、カマド周辺や貯蔵穴などから出土している。

土師器では壺、甕、壺が多く黒色土器も2点出土している。壺はB・C類が多く混在するが、F・G類も含まれ、丸形から須恵器模倣壺や鉢型への変換がみられ、高壺には短脚化がみられる。さらに、甕はB類の丸形からC類の長胴形の傾向がみられること、そして、S T41・44出土の須恵器壺蓋がI期後葉から終末のT K23型式及びT K47型式併行と考えられることなどから上層の遺構は5世紀後葉から終末頃の南小泉式の終末段階に併行すると考えられる。

下層で検出された堅穴住居跡は17棟で、焼失住居2棟と古墳時代前期に属すると考えられる下層住居2棟が含まれる。

前期と推測されるのはS T704・706である。S T704の住居内中央付近で地床炉とも考えられる焼土・炭化物が検出された。主軸は磁北に対しS T704は東に、S T706は西に振れる。土器は脚部に穿孔される高壺や器台、小型の鉢、大型や複合口縁の甕・壺などで、S T706には彩色された器台が含まれている。壺の出土が無いこと、彩色や尖孔される器台、小型の鉢などから古墳時代前期のものと考えられるが、大型器台の存在からさらに遡る可能性も考えられる。

中期に属する住居の形態はカマドを構築していたものが5棟、地床炉のものが2棟である。カマドは全て住居内に構築されるもので煙道は検出されない。カマドの位置は住居内の東または東北壁の中央付近に構築され、煙道を持たない内部燃焼型と考えられる。主軸方向は磁北に対し東と西に振れるものに分かれる様相を示していた。

遺物は主に堅穴住居跡から出土し、S T705・712・717・719などにまとまりがみられ、焼失住居のS T719のカマド周辺の遺物は一括性が高いと判断できた。

土師器は壺、甕が多く出土している。壺はB・C類が多く混在しているが、丸形のものが多く認められ、また、古相を示すA類の出土もみられる。高壺は中空の長脚のものが主で、脚部や壺部に縫をもつA・E類がみられる。甕はB類の丸形からややC類の長胴形の傾向がみられる。そして、S T718・719出土の須恵器壺蓋がI期中葉T K208型式併行と考えられる。

以上から下層は古墳時代前期及び中期の遺構で、5世紀中葉から後葉頃の南小泉式の中葉から後葉への過渡期と窺われる。また、今回の調査で検出されたカマドは、煙道を持たない内部燃焼型が大半と推測され、群馬県中筋遺跡の平地式住居のカマドが煙道を持たず住居内側に構築されていることから同様のものである可能性が高いと考えられる。

### 3) 中世の遺構と遺物について

当該期に機能していたと考えられる遺構は、第2次調査南側調査区を東西に横断するSD4と第3次調査区では直角に曲がるSD87、南側で古墳時代の堅穴住居跡を切るSD88・90と時期を特定できる資料の出土は無かったが検出状況などからSD89・91も当該期に含まれると考えられる。当該期の明確な住居や建物跡が検出されなかったが、SD87は中世の集落を区画していた溝跡と推測され、さらに東側に延びる。遺物は白磁・青磁の磁器類や陶器系・珠洲系の陶器、古鏡などが出土し13世紀~15世紀頃に機能していたと考えられる。但し、SD4は寛

古墳時代  
前期

古墳時代  
中期

古墳時代  
後期

永通宝の出土から近世まで機能していた可能性が推測される。

## 2 考 察

### ・土師器類型の変換について

古墳時代中期に属すると考えられる土師器について器形分類を行った。器種は比較的多く出土した壺・高壺・瓶・甕・壺の5種である。以下に器種毎の変換について概略を述べていく。

壺は器形分類において、沢田遺跡にみられる特徴をもつA類は古い様相を示し、鉢型に近い器形のF類や須恵器模倣壺の器形のG類は新しいと考えられる。A類は下層の遺構のみ、G類は上層の遺構のみからの出土となることからそれが窺える。また、上・下層の遺構から多く出土しているB～E類については継続性が強く壺類の主体を成す形態と推測される。これらは、A類とF・G類の間に包括されると考えられるが今回の調査結果からはB～E類の前後関係は判別できなかった。

高壺の分類では、脚部に明確な縁の付くA類が最も古く、壺部に明確な縁がみられるD類が統くと推測され、短脚となるH類は新しいと考えられる。同じく、短脚化の様相が認められるC類や壺部が鉢形のB類も新しい様相を示していると判断できた。従って、A→D→E・F・G→B・C・Hの変遷が考えられる。

甕は点数が限られ全体の器形が判別できるもので新旧を考えざるをえなかった。器形の判別が可能なA～C類では、深鉢型のB・C類が古く、甕型となるA類が新しいと考えられる。また、A類でも最大径が口縁部にあるA b類がより新しいものと推測された。従ってB・C→A a→A bの変遷が考定される。今調査ではA b類の甕が下層の住居から出土しているが混入と考えられる。

壺は大型となるA類や丸形のB類から長胴型のC類に変化すると考えられ、菱形のD類は概ね古い段階と推測される。また、小型となるE類は新しい段階と思われ、A・B→D→C・Eの変遷が考えられる。しかし、今調査では上・下層の遺構に各類型が混在することから、住居毎での時期差は判別できなかった。

壺は複合口縁や折返し口縁をもつA・B類が古く、単純口縁のC a類や小型のD類が新しいと考えられる。また、壺型のC b類は、小型丸底のC b 2類が古く、大型のC b 1類が新しいと推測される。

今調査においては、壺のA類とG類を除き各器種の類形が上・下層に混在する状況があり、上層と下層の遺物による明確な変換期は判別できなかった。これは、下層から上層への推移が継続性をもって行われたことや上・下層の遺構の重複、河川の氾濫などによる土器の混入などの原因によると考えられ、今後これらを踏まえた検討が課題となる。

### 引用文献

- 馬目順一他 1979 「弥生土器一東北 南東北5—1」「考古学ジャーナル」(第59号)
- 阿部昭彦他 2002 「山形県における古墳時代中期の土器類相 (1)」「山形考古第7巻第2号 (通巻32号)」
- 尾羽與典他 1996 「下郷A遺跡発掘調査報告書」(山形県埋蔵文化財センター調査報告書第38集) 山形県埋蔵文化財センター
- 名和達朗他 1985 「沢田遺跡発掘調査報告書」(山形県埋蔵文化財センター調査報告書第88集) 山形県教育委員会
- 押切智紀他 2002 「沢江遺跡第4次発掘調査報告書」(山形県埋蔵文化財センター調査報告書第106集) 山形県埋蔵文化財センター
- 押切智紀他 2003 「沢江遺跡第4次発掘調査報告書」(山形考古第7巻第3号 (通巻33号))
- 中村 浩 2001 「和泉陶邑出土須恵器の型式編年」 美術書房出版

**写真図版**

---



基本層序A - A' (南西から)



基本層序B - B' (北西から)



2次調査区北側全景 (南から)



2次調査区南側全景 (南から)



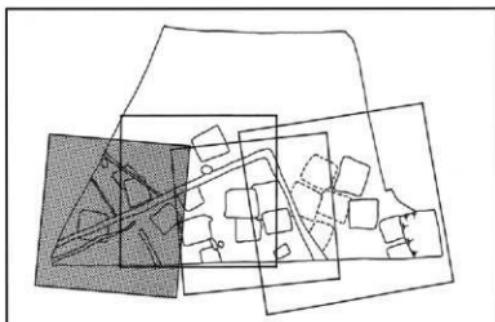
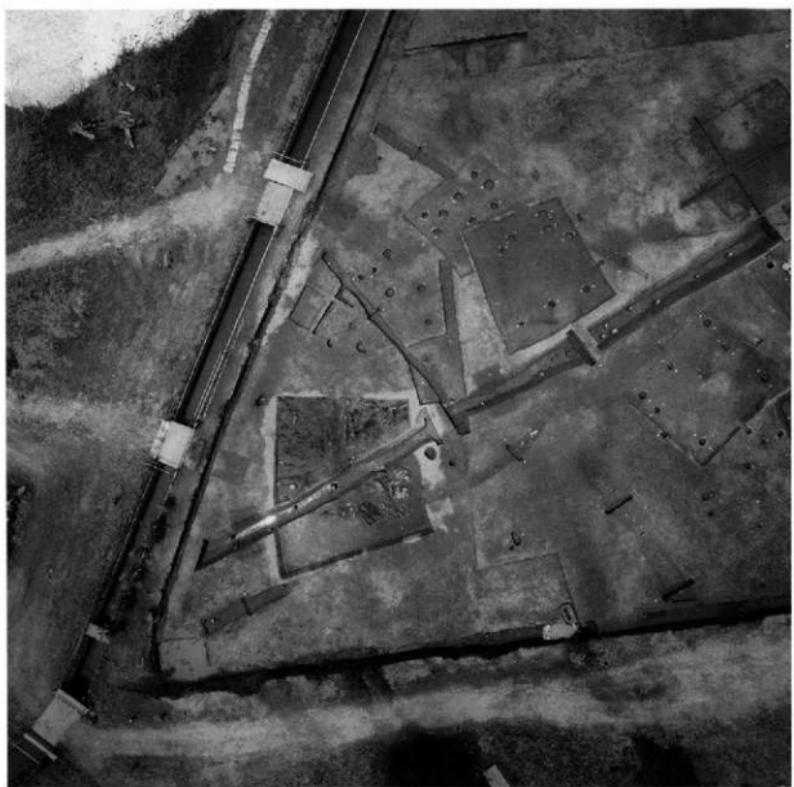
2次調査区全景 (上空から)



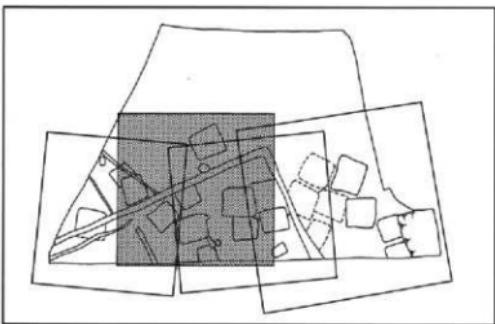
3次調査区上層全景（上空から）



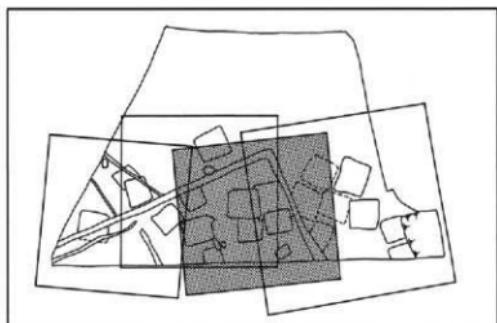
3次調査区下層全景（上空から）



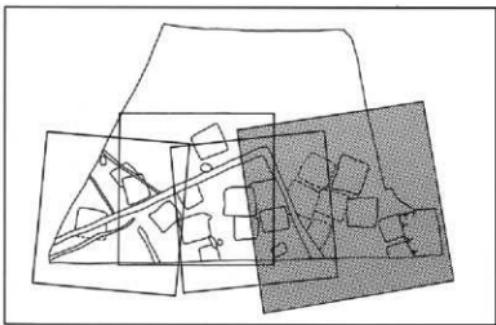
上層造橋空中写真 1



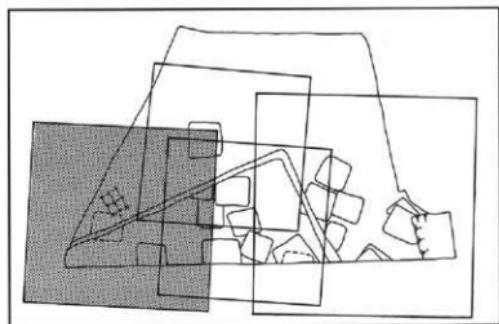
上層造構空中写真 2



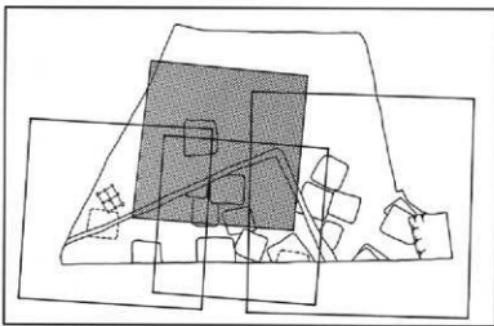
上層遺構空中写真 3



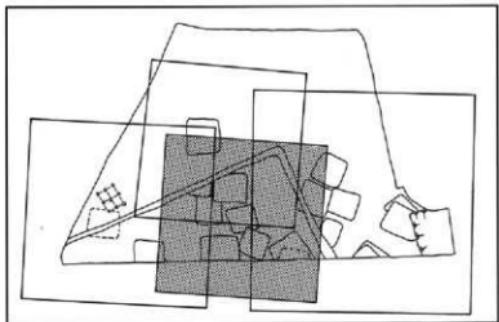
上層造構空中写真 4



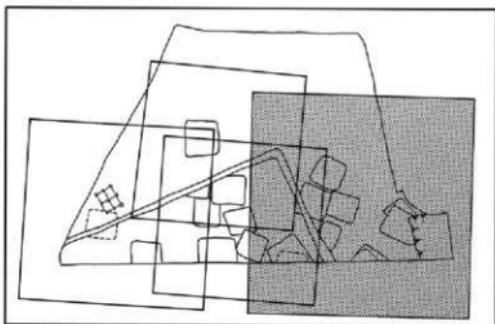
下層遺構空中写真 1



下層造構空中写真 2



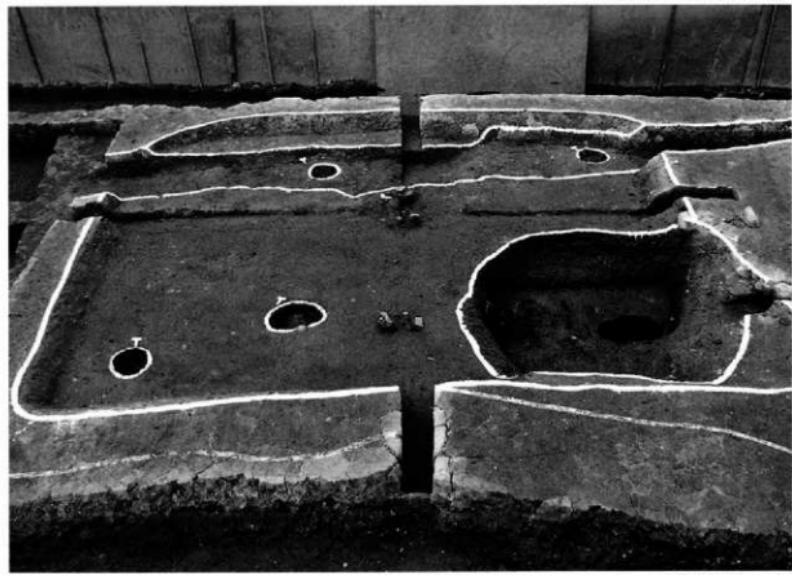
下層造構空中写真 3



下層造構空中写真 4



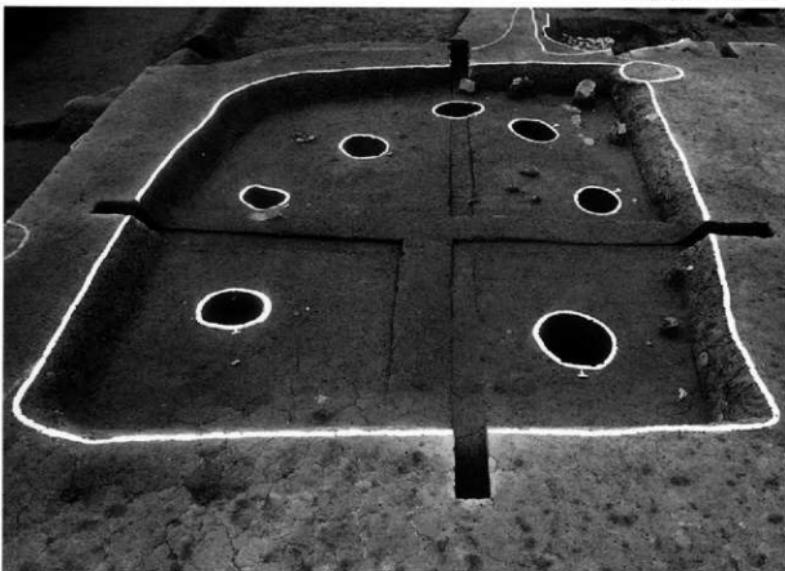
S T13土層断面（北東から）



S T13実掘状況（東から）



S T14土層断面（西から）



S T14実掘状況（北から）



S T 33完掘状況（北西から）



S T 34完掘状況（北西から）



S T 35 土層断面（西から）



S T 35 精査状況（南から）



S T 35 - E K412 土層断面（北から）



S T 35 - E K412 精査状況（東から）



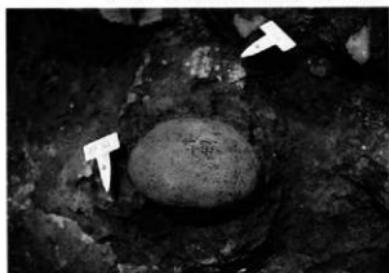
S T 35 - E K412 内 R P 167・220（東から）



S T 35 - E L 585遺物出土状況（南西から）



S T 35 - E L 585内 R P 161・162・171（北から）



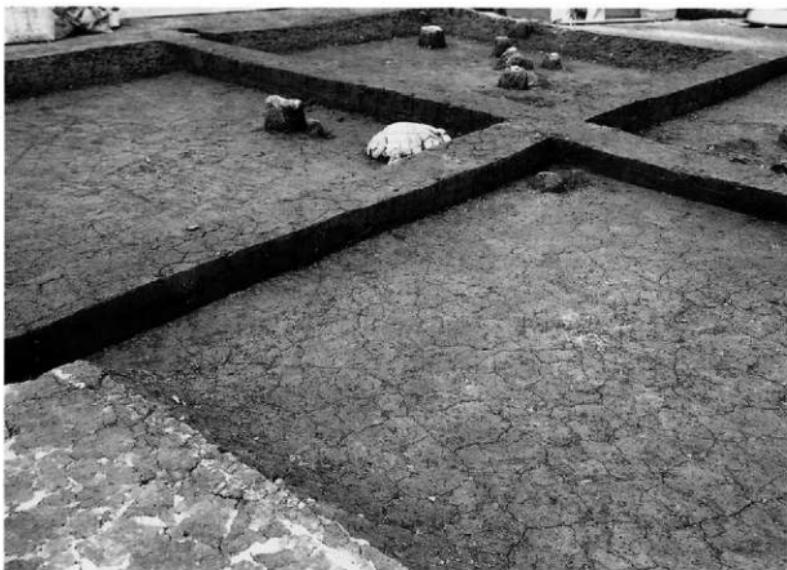
S T 35 - E L 585内 R P 163（北から）



S T 35 - E L 585断ち割り断面（北東から）



S T 35完掘状況（南東から）



S T36土層断面（南西から）



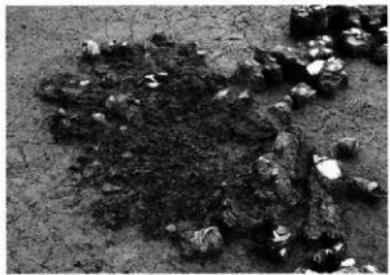
S T36完掘状況（南から）



S T 37土層断面（南東から）



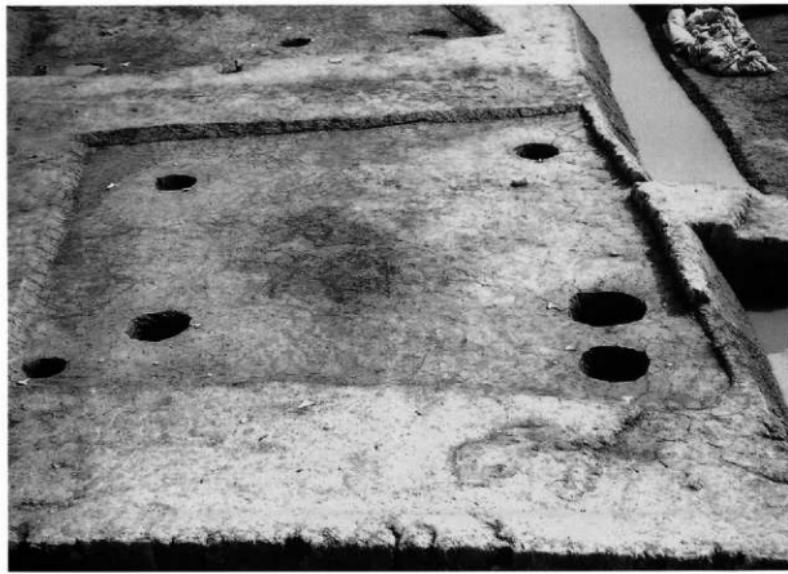
S T 37検査状況（北から）



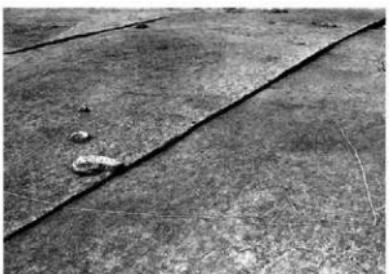
S T 37炭化物（北から）



S T 37内 RP 107（南から）



S T 37実掘状況（北から）



S T 39検出状況（北から）



S T 39完掘状況（南から）



S T 40土層断面（南東から）



S T 40遺物出土状況（東から）



S T 40内R P 135・136（北から）



S T 40内R P 140～142（南から）



S T 40内R P 174（北から）



S T 40完掘状況（西から）



S T 702土層断面（南東から）



S T 702完掘状況（東から）



S T 703土層断面（南東から）



S T 703完掘状況（東から）



S T 701土層断面（南東から）



S T 701 - E K 426土層断面（南東から）



S T 701 - E L 429遺物出土状況（北西から）



S T 701 - E L 429完掘状況（南から）



S T701完掘状況（西から）



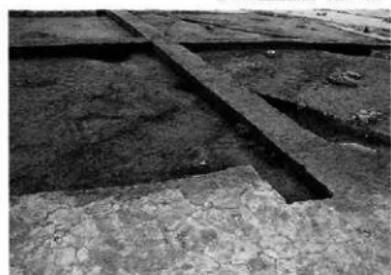
S T40・701～703完掘状況（南東から）



S T 41 土層断面（北から）



S T 41 勘掘状況（南から）



S T 42 土層断面（北東から）



S T 42 E K 323 土層断面（南東から）



S T 42 内 R P 6（北西から）



S T 42 内 R P 13（東から）



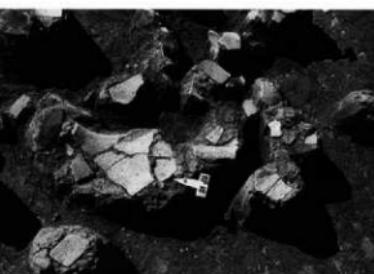
S T 42 - E L 324 勘査状況（南西から）



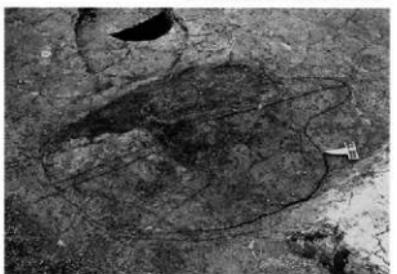
S T 42 勘掘状況（南東から）



S T 43遺物出土状況（南から）



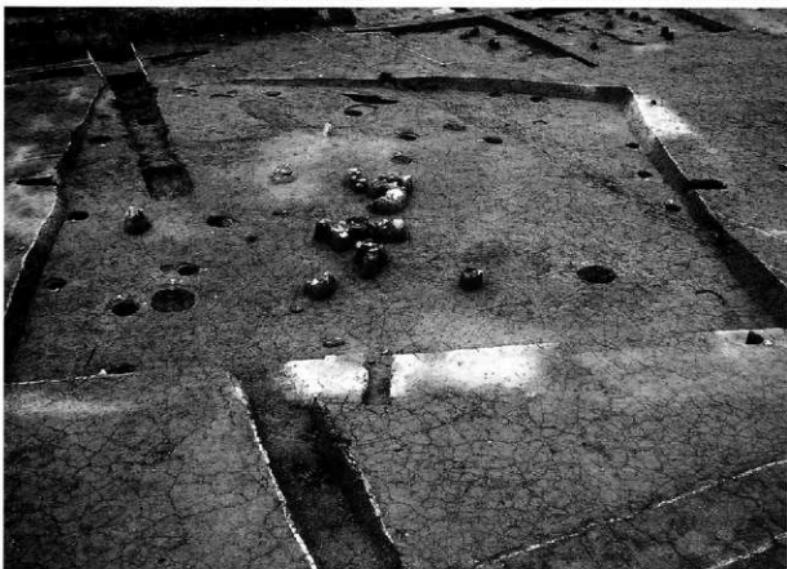
S T 43内R P 18（南東から）



S T 43 - E L 322精査状況（東から）



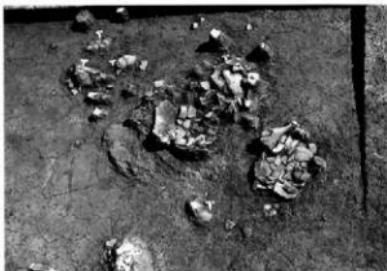
S T 43 - E L 322断ち割り断面（西から）



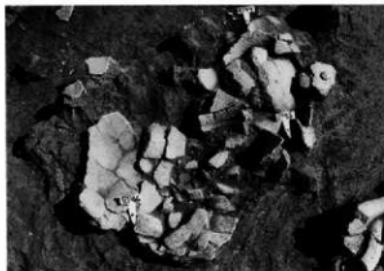
S T 43実掘状況（南から）



S T 44 土層断面（東から）



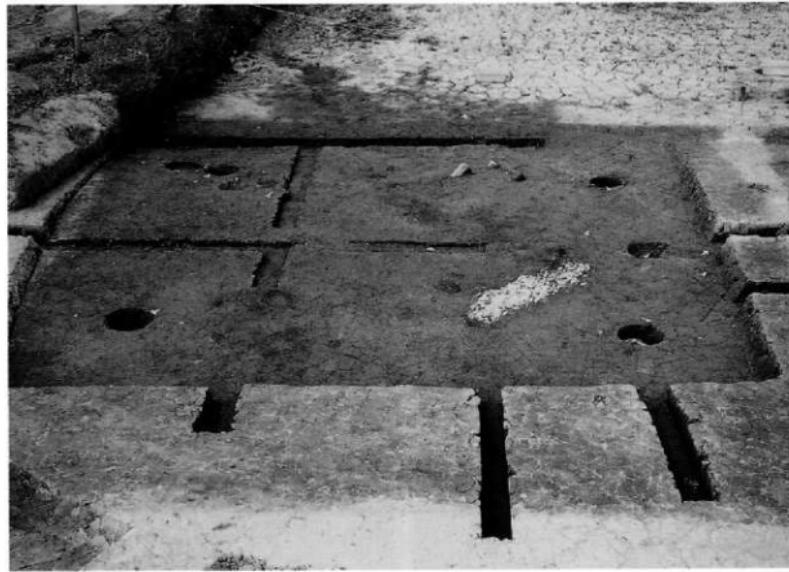
S T 44 遺物出土状況（北西から）



S T 44 - E L 376 遺物出土状況（北から）



S T 44 - E L 376 完掘状況（北から）



S T 44 完掘状況（南から）



S T 45土層断面（北西から）



S T 45完掘状況（南から）



S T 47土層断面（西南から）



S T 47遺物出土状況（南から）



S T 47内 R P 52（南から）



S T 47内 R P 53（西南から）



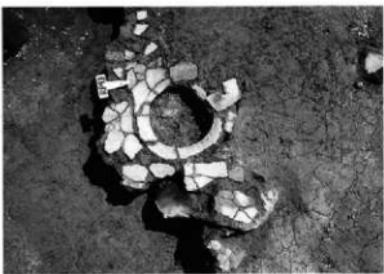
S T 47内 R P 59（西から）



S T 47内 R P 60（西から）



S T 47内 R P 65 (南から)



S T 47内 R P 93 (北から)



S T 47 - E L 345土層断面 (西から)



S T 47 - E L 345内 R P 56 (南から)



S T 47完掘状況 (東から)



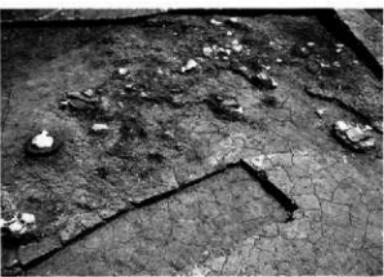
調査区北側上層全景（西から）



調査区南側上層全景（南から）



S T 704土層断面（西から）



S T 704遺物出土状況（南西から）



S T 704内 R P 179（南から）



S T 704内 R P 180（西から）



S T 704実掘状況（東から）



S T 705土層断面（南から）



S T 705内 R P 202（北から）



S T 705内 R P 206（北から）



S T 705内 R P 206（西から）



S T 705遺物出土状況（西から）



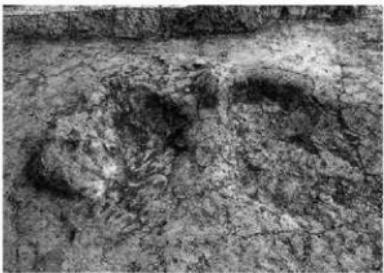
S T705 - E L586検出状況（北東から）



S T705 - E L586内 R P194（南から）



S T705 - E L586内 R P200（東から）



S T705 - E L586実掘状況（西から）



S T705実掘状況（北西から）



S T706土層断面（東から）



S T706遺物出土状況（南から）



S T706内 R P 215~217（西から）



S T706内 R P 215（東から）



S T706実測状況（北西から）



S T707土層断面（西から）



S T707内 R P232（西から）



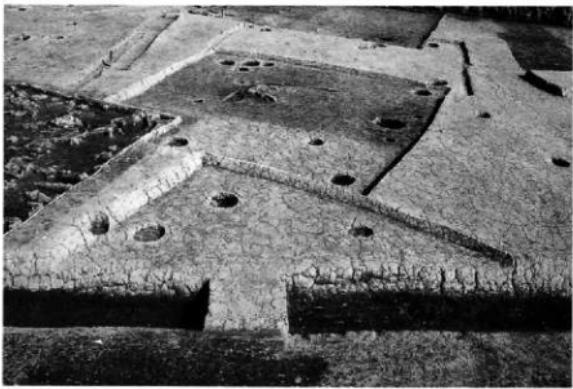
S T707完掘状況（南から）



S T 708・711完掘状況  
(南西から)



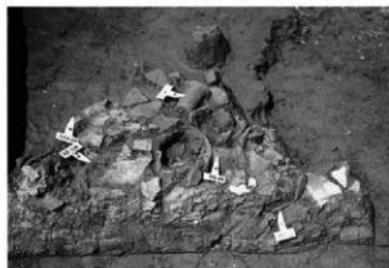
S T 709完掘状況 (南西から)



S T 715完掘状況 (西から)



S T712 - E L 486遺物出土状況（南から）



S T712遺物出土状況（東から）



S T712内 R P257~259（北西から）



S T712内 R P264（南から）



S T712内 R P241~243・265（北西から）



S T712 - E L486断ち割り断面  
(北から)



S T712 - E L486完掘状況  
(東から)



S T712完掘状況 (北から)



S T 713精査状況（西から）



S T 713完掘状況（北東から）



S T 714完掘状況（北から）



S T716遺物出土状況（南から）



S T716内 P 246（西から）



S T716-E L485実掘状況（北から）



S T716-E L485断ち割り断面（南西から）



S T716実掘状況（北西から）



S T717遺物出土状況（西から）



S T717内 R P 252・253（西から）



S T717 - E L 580遺物出土状況（南西から）



S T717 - E L 580完掘状況（西から）



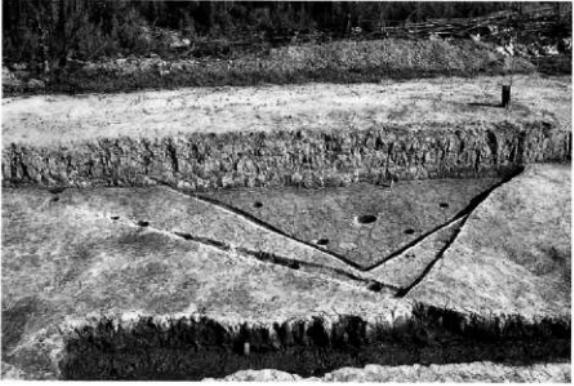
S T717完掘状況（西から）



S T718内 R P233 (南から)



S T718完掘状況 (南西から)



S T721完掘状況 (北西から)



S T719土層断面（北西から）



S T719 - E K583土層断面（南から）



S T719内遺物出土状況（北東から）



S T719内 R P266・267（南から）



S T719内 R P268・269（東から）



S T719内 R P271（南東から）



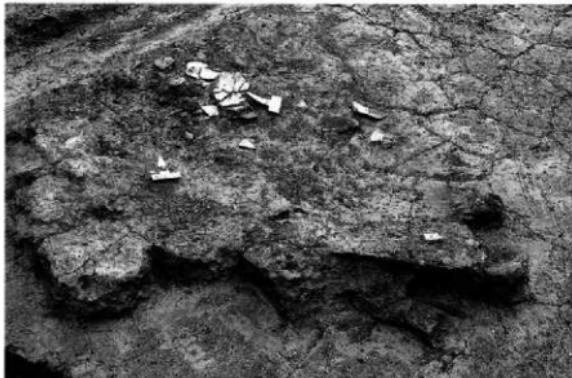
S T719内 R P278・279（西から）



S T719 - E L495完掘状況（南から）



S T719完掘状況（西から）



S T720 - E L496検査状況  
(北西から)



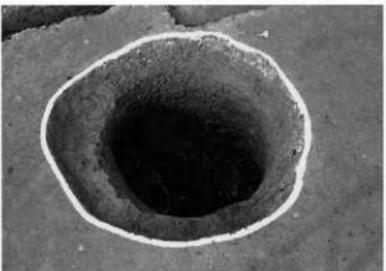
S T720完掘状況（南から）



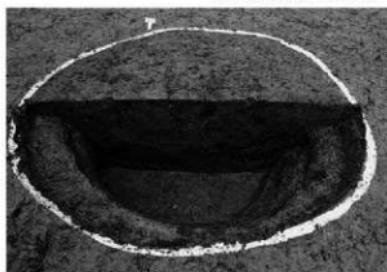
S B 50 完掘状況（南西から）



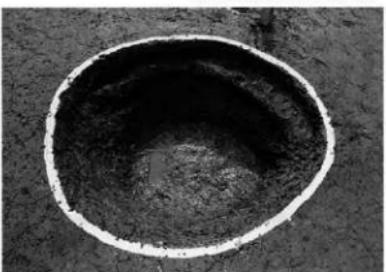
S E 8 土層断面（南から）



S E 8 完掘状況（南東から）



S K 9 土層断面（南から）



S K 9 完掘状況（北から）



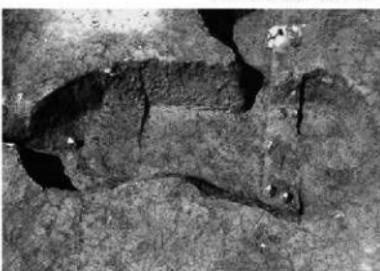
S X17土層断面（東から）



S X17実掘状況（東から）



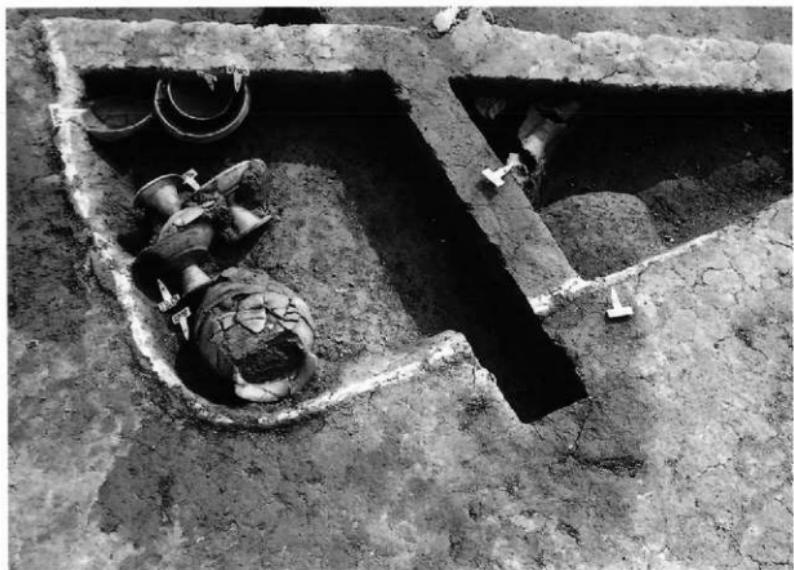
S X230・S K231土層断面（北から）



S X230実掘状況（南東から）



S K231実掘状況（西から）



S X226精査状況（北から）



S X226内 R P74（北から）



S X226内 R P75（北から）



S X226内 R P78~80（北から）



S X226内 R P76・77・81（北から）



SD 4 B - B' 土層断面（北東から）



SD 4 内 RM 1 (北から)



SD 4 内 RP 2 (南から)



SD 4 完掘状況 (東から)



SD 89 A - A' 土層断面（南西から）



SD 89 B - B' 土層断面（南西から）



SD 89 C - C' 土層断面（西から）



SD 89 完掘状況 (南西から)



S D 91 A - A' 土層断面（東から）



S D 91 実掘状況（西から）



S D 88 A - A' 土層断面（西から）



S D 88 実掘状況（南から）



S D 90 実掘状況（南西から）



SD 87 D - D' 土層断面（南から）



SD 87 G - G' 土層断面（南東から）



SD 87 J - J' 土層断面（西から）



SD 87内 R Q92 (西から)



SD 87実掘状況（西から）



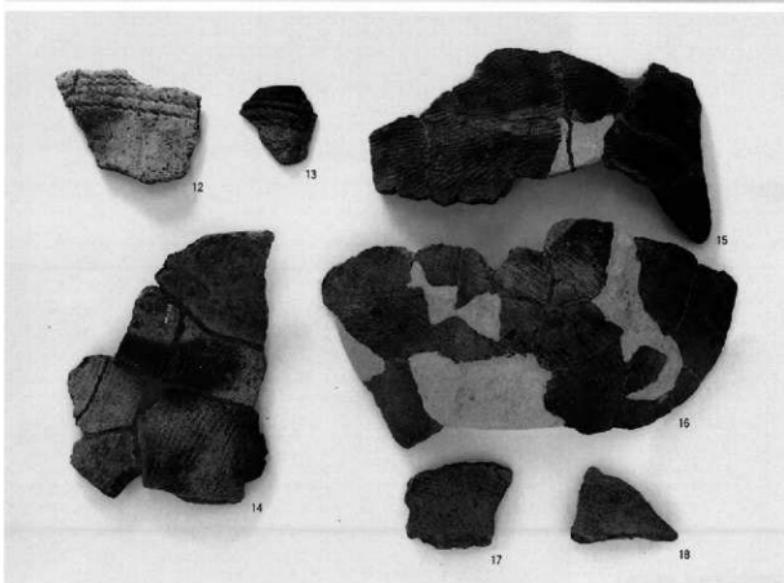
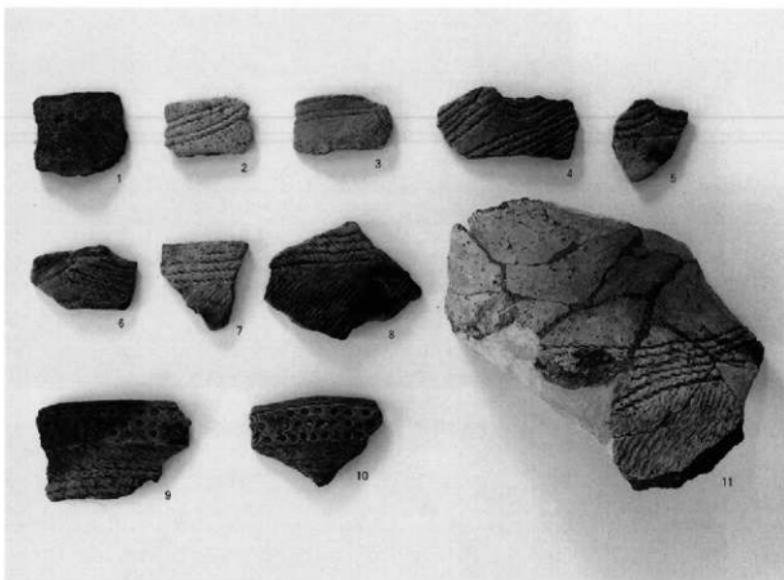
トレンチ完掘状況（北から）



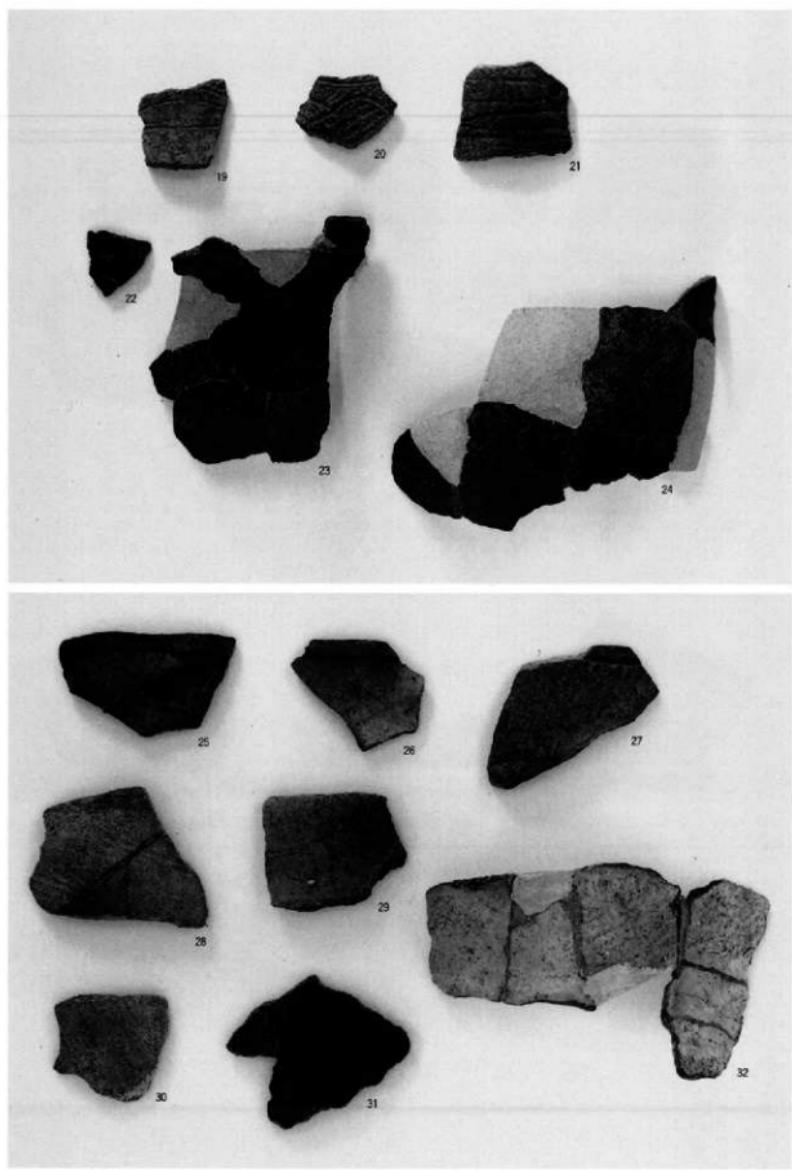
調査区北側完掘状況（南から）



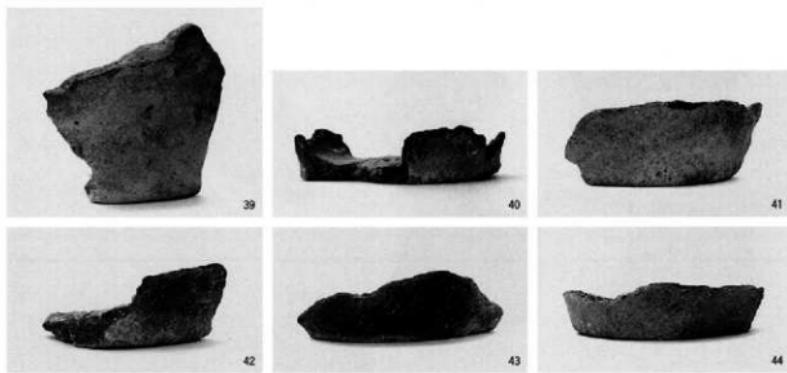
調査区完掘全景（南から）



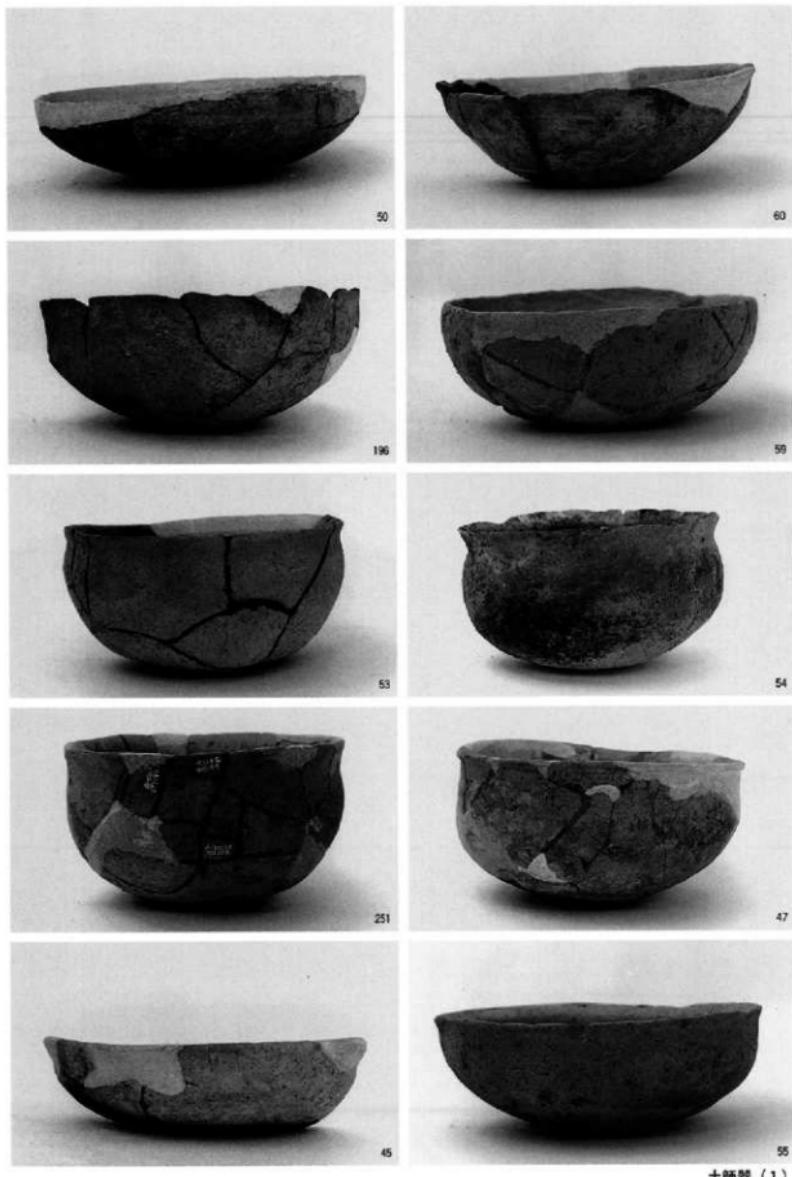
弥生土器 (1)



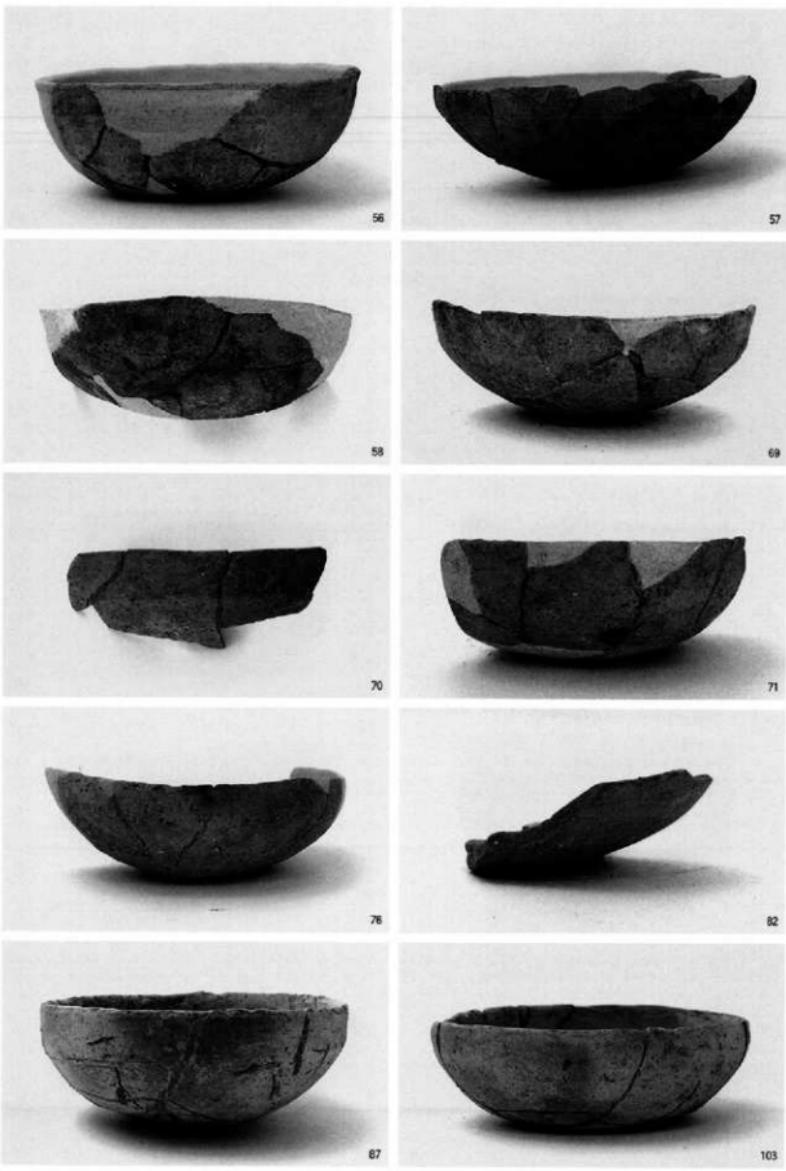
弥生土器（2）



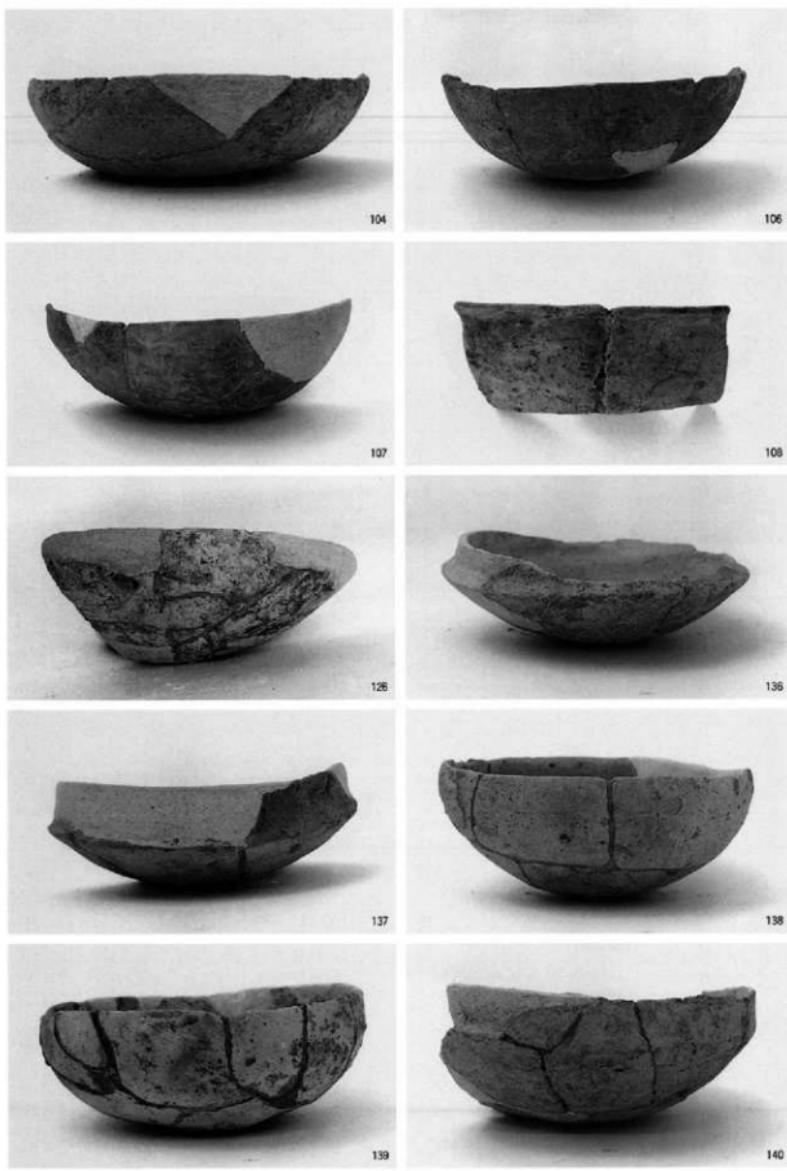
弥生土器（3）



土器 (1)



土師器（2）



104

106

107

108

126

135

137

138

139

140

土器 (3)



141



142



173



174



175



176



177



178

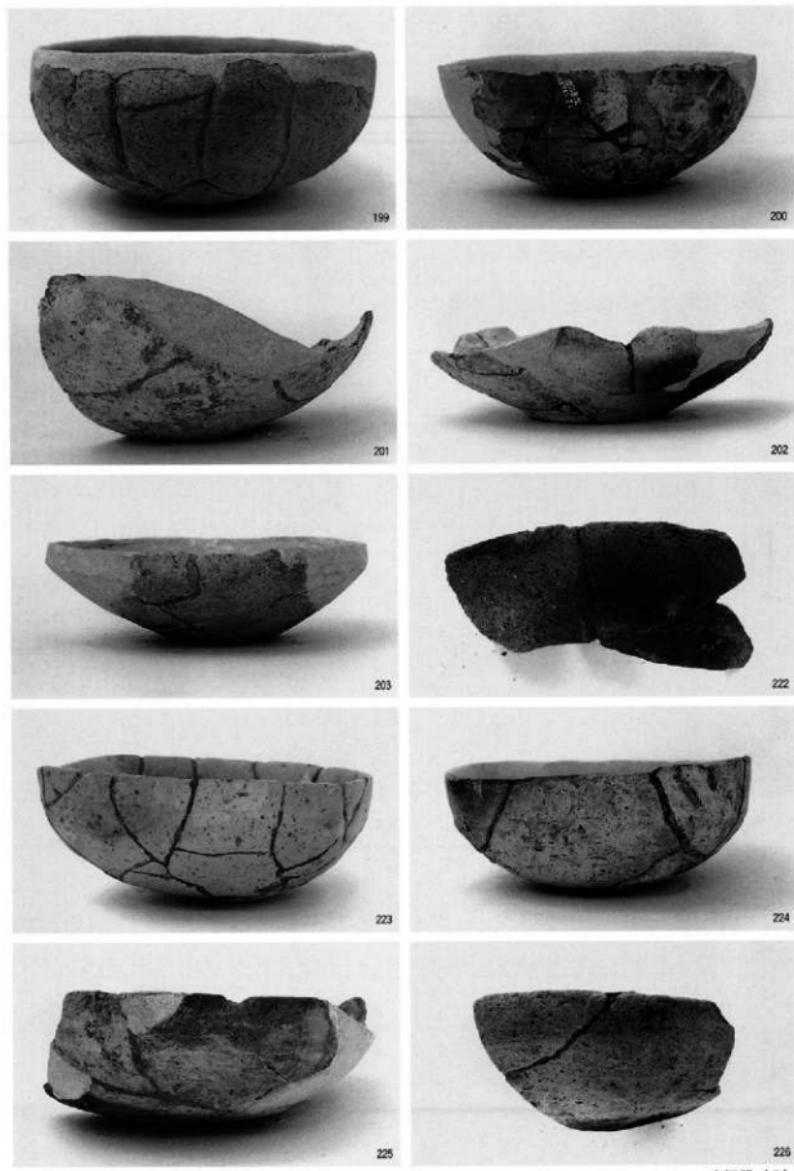


179



198

土師器（4）



土師器 (5)



233



234



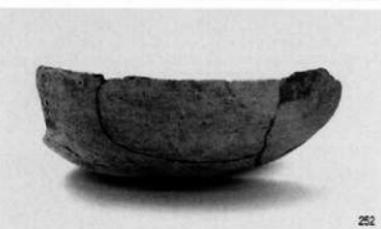
235



236



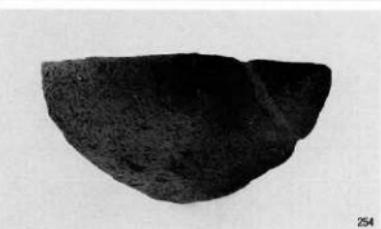
237



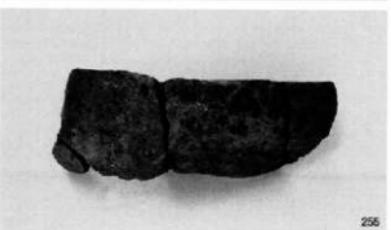
238



239



240



241



242

土篩器 (6)



258



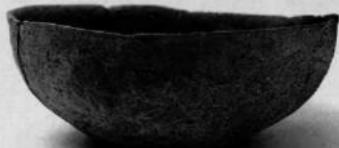
274



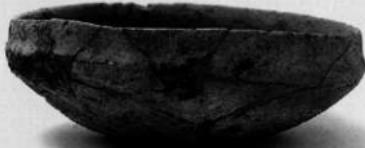
275



277



278



279



305



306



319



320

土器 (7)



280



281



282

土師器（8）



206



309

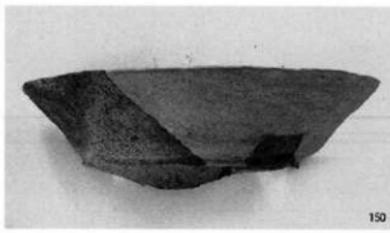


192



212

土器器 (9)



150



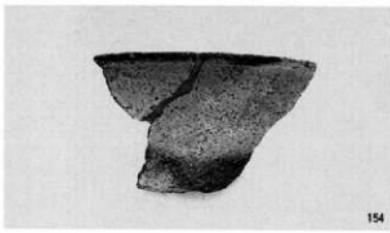
151



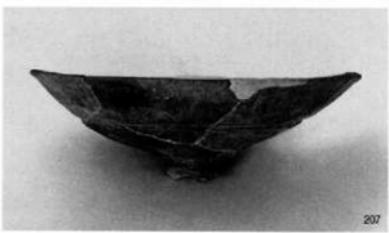
152



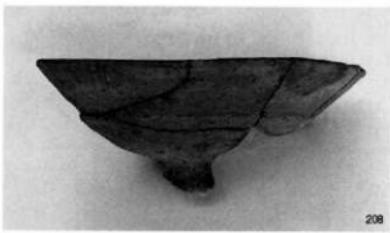
153



154



207



208



210



291



308

土器 (10)



310



311



312



313



52



127



155

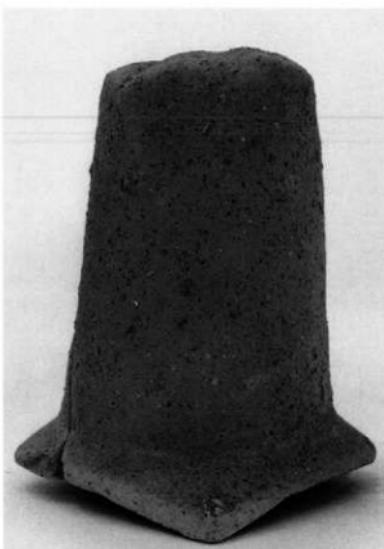


211

土器 (11)



77



209



259



314

土師器 (12)



61



62



63



64

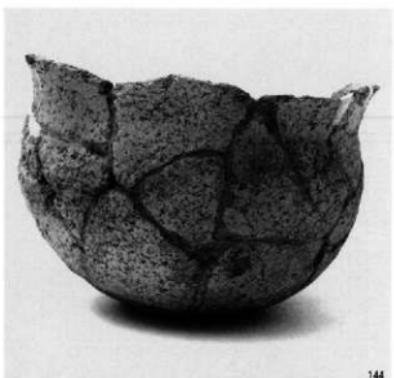


164

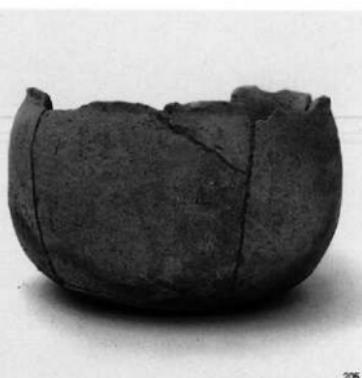


204

土師器 (13)



144



205



261



132

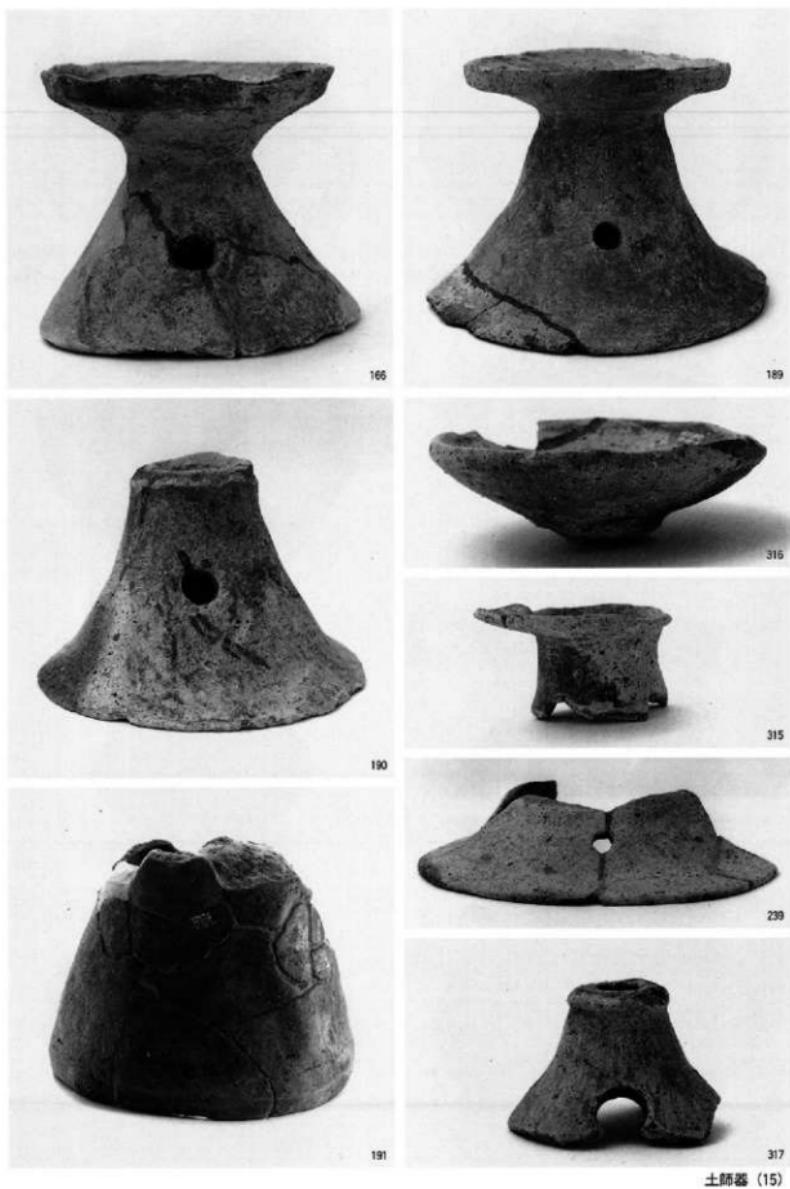


165



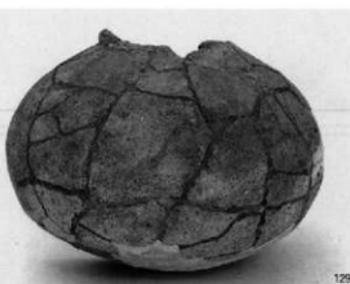
75

土師器 (14)

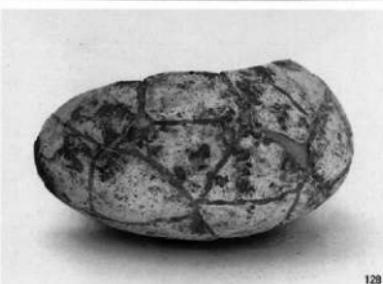




53



129



128



282



156



318



145



263

土器 (16)



98



99



219



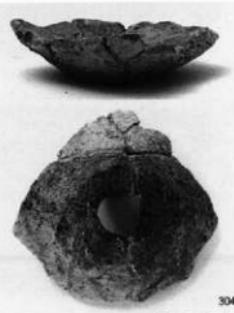
276



270



78



304

土器 (17)



48



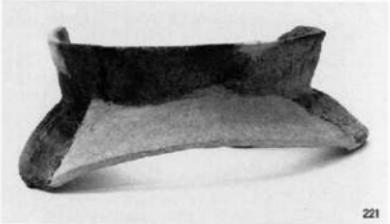
74



73



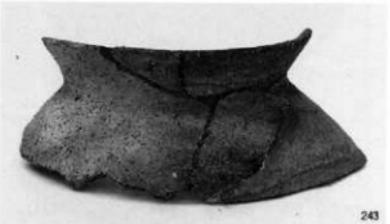
181



221



232



243



260



272



321

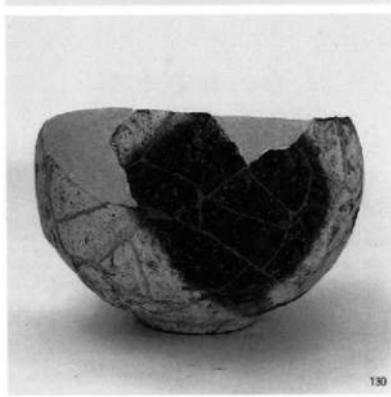
土師器 (18)



95



96



130



162



172



244

土器 (19)



100



117



118



131



94

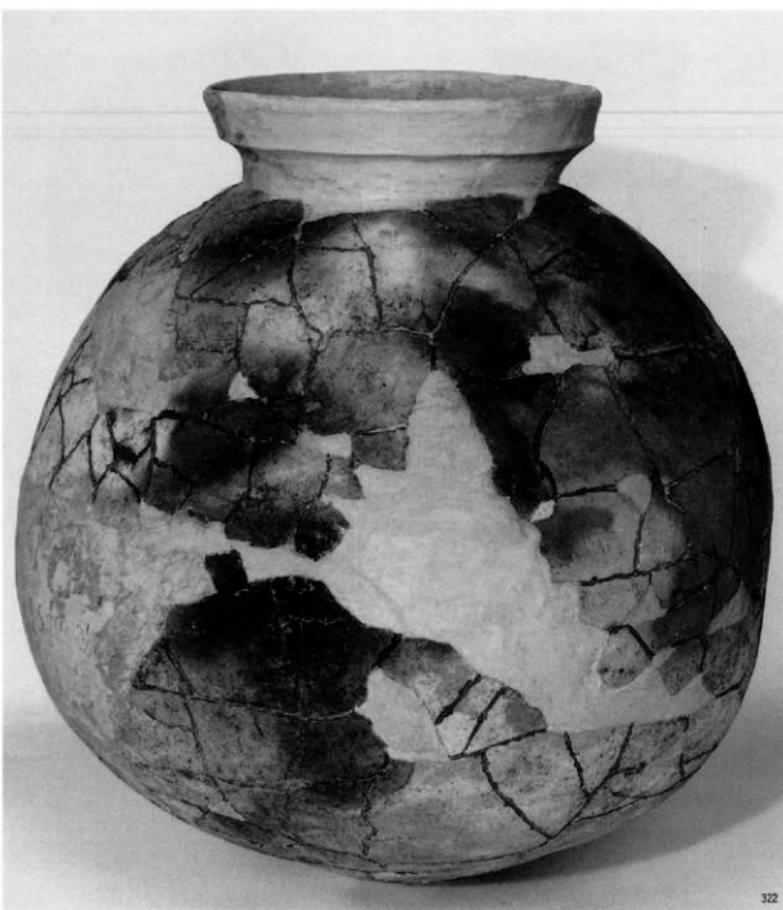


97

土器 (20)

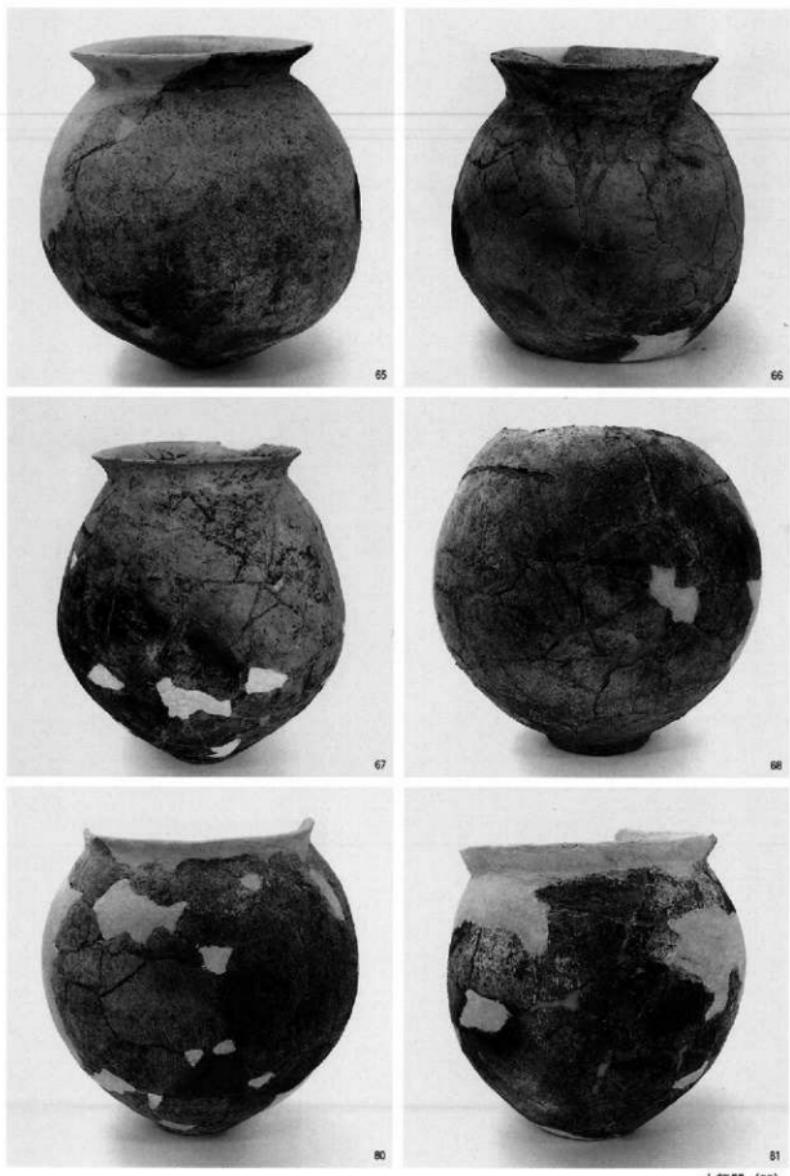


271  
土師器 (21)



322

土器 (22)



土器 (23)



90



109



147



186



185



228

土師器 (24)



72



91



92



110



111



134

土器 (25)



148



183



184



197



217



240

土器 (26)



241



246



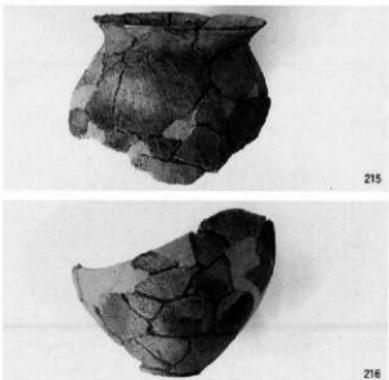
248



244

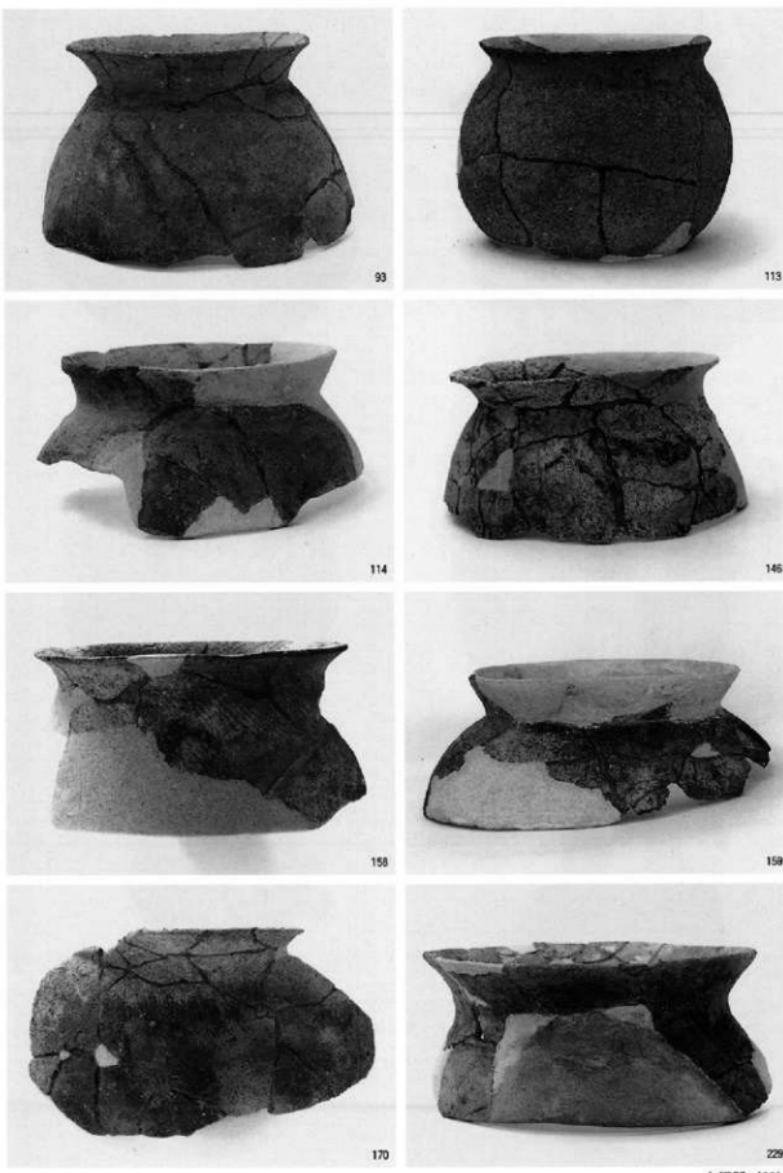


214

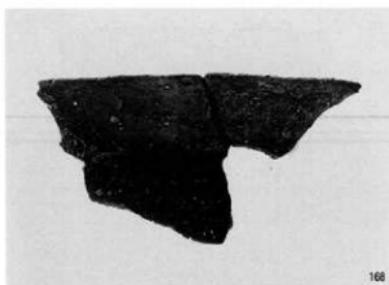


215

土筛器 (27)



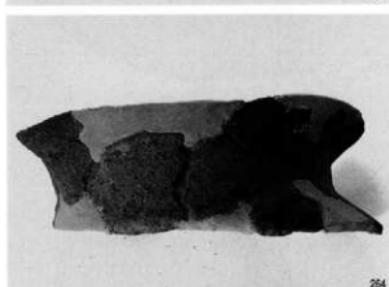
土師器 (28)



168



230



264



265



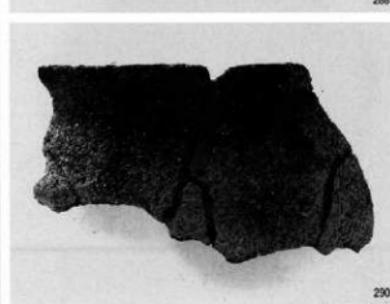
293



266



269



290

土器 (29)



218



220



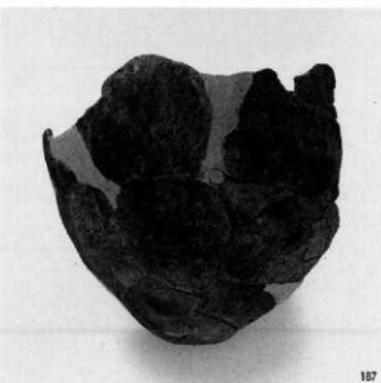
267



323

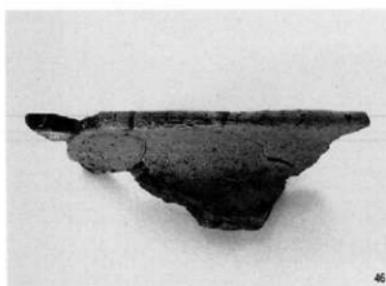


324

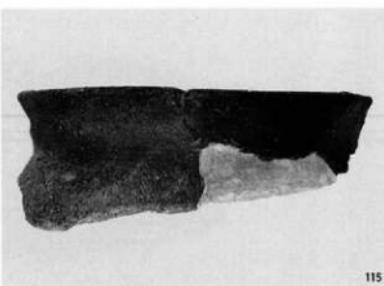


187

土師器 (30)



46



115



51



85



79



171

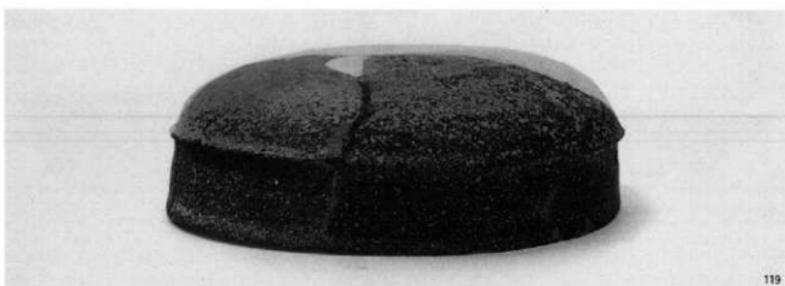


188

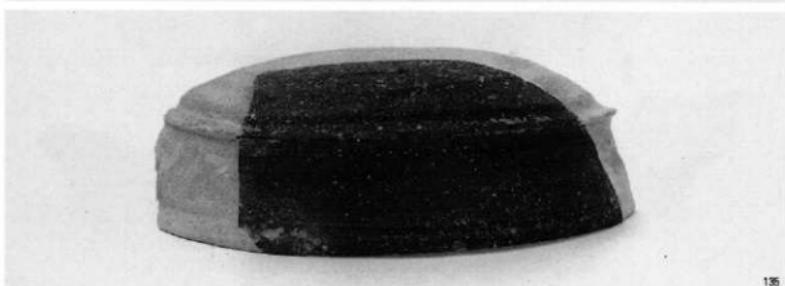


268

土師器 (31)



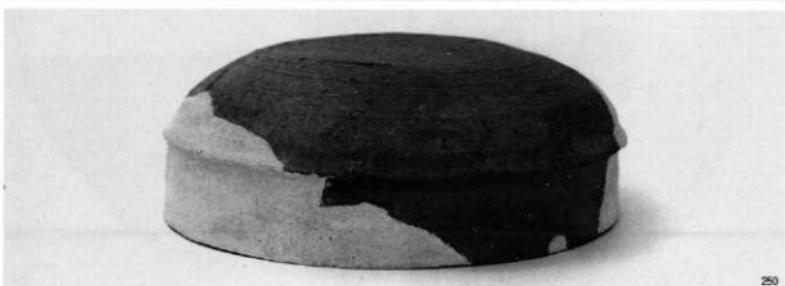
119



135

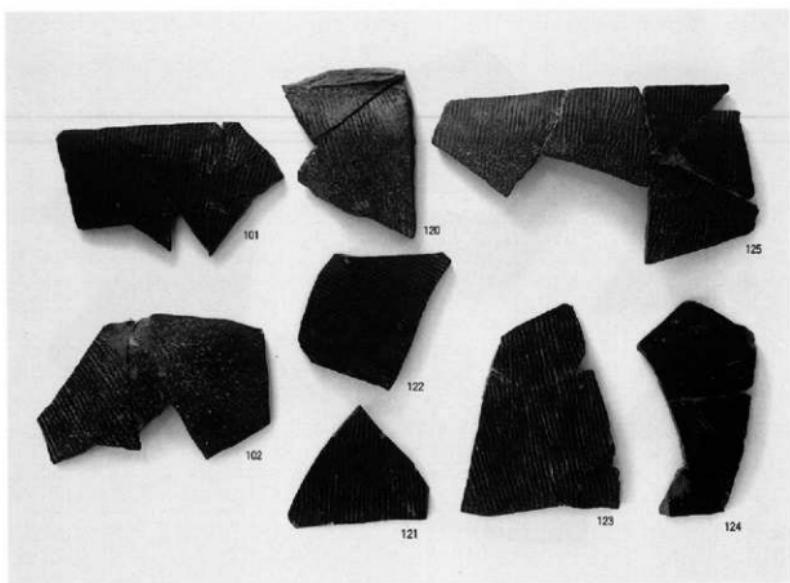


245

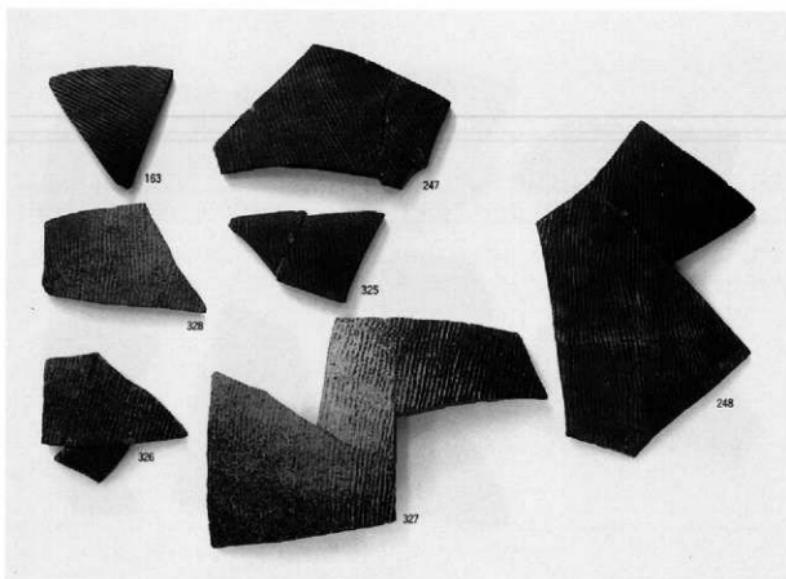


250

須恵器 (1)



須恵器（2）



須恵器 (3)



285



329



292

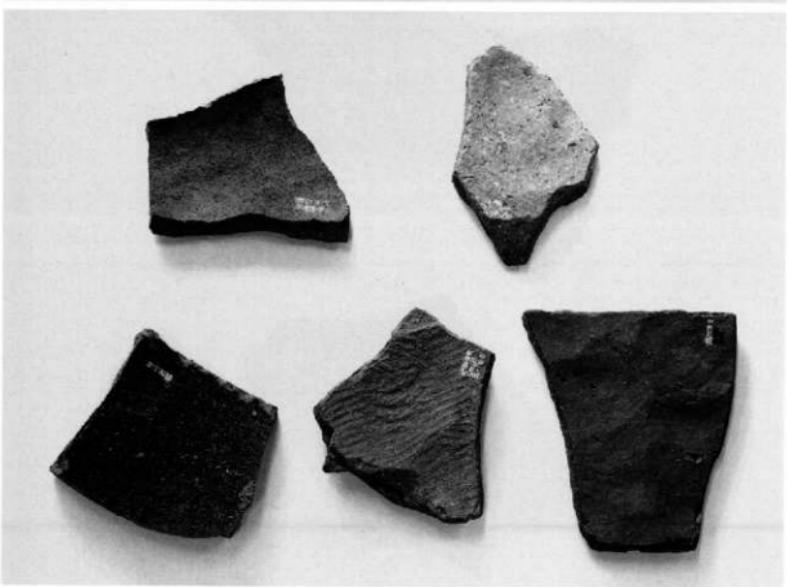
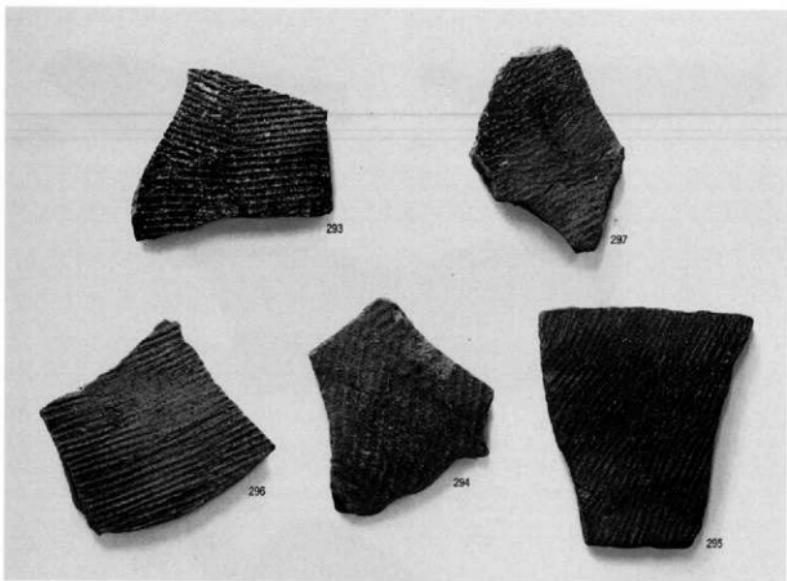


330

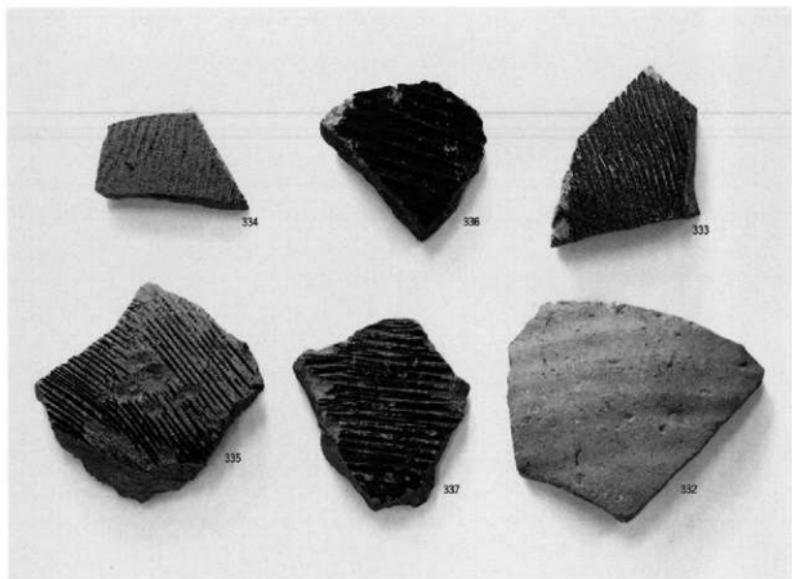


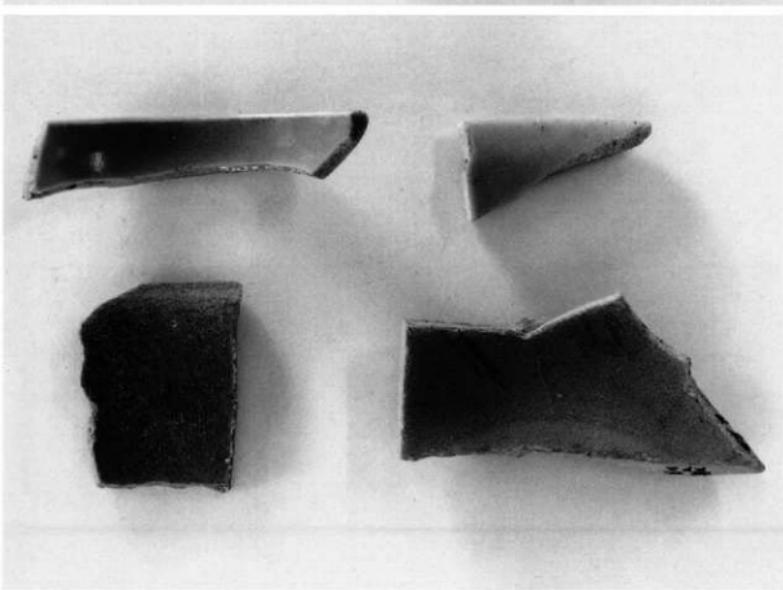
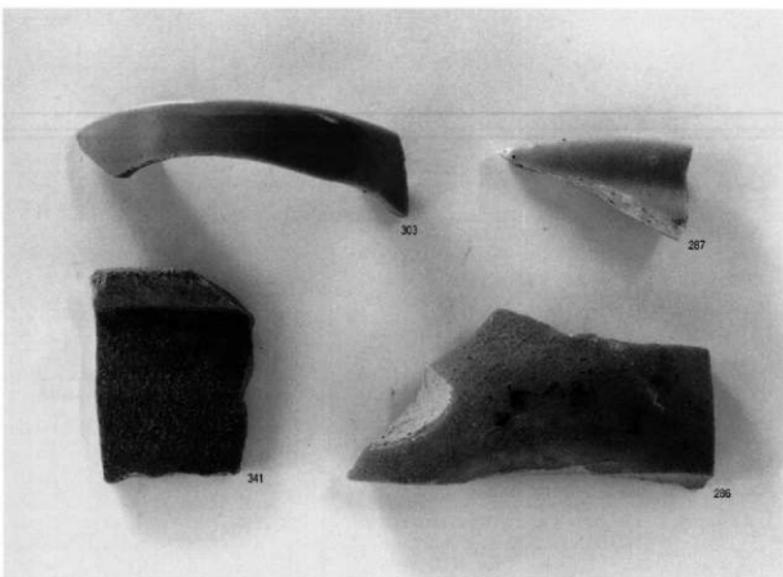
331

須恵器（4）

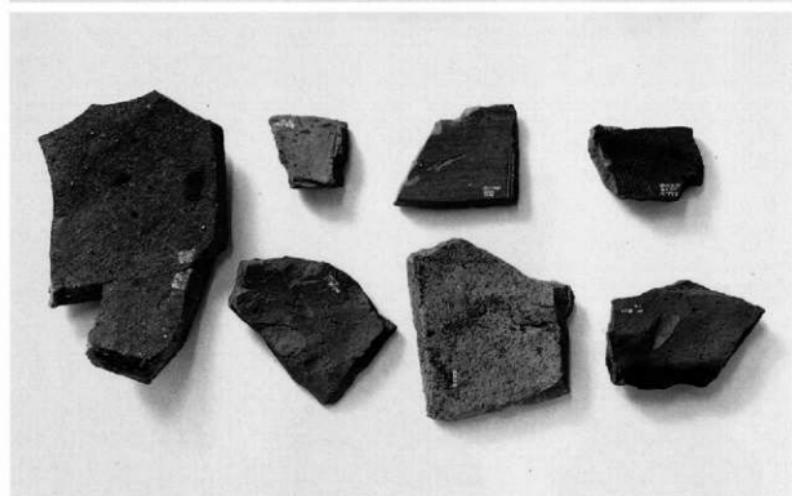
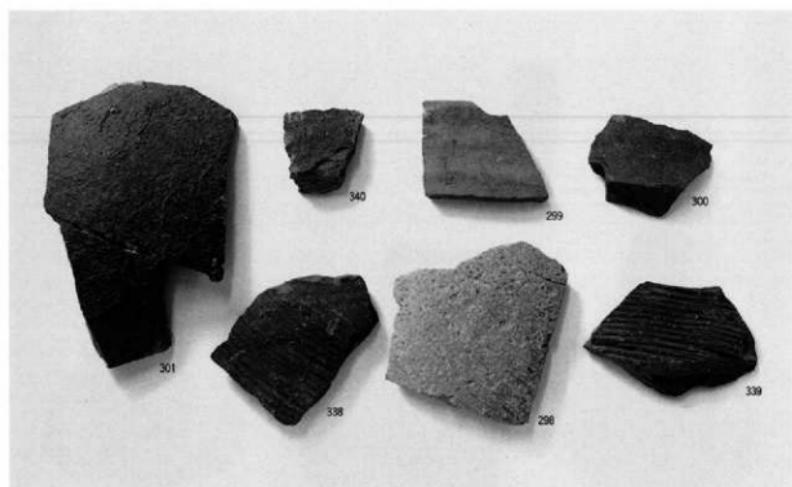


須恵器 (5)

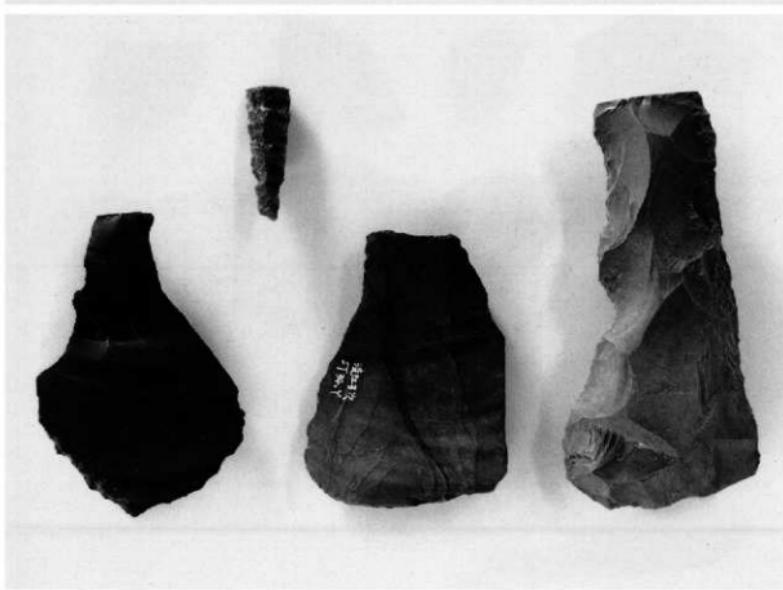
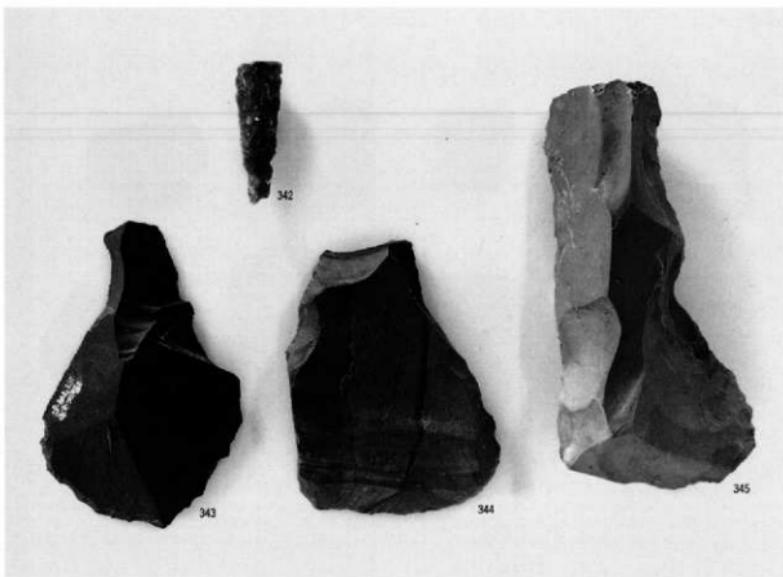




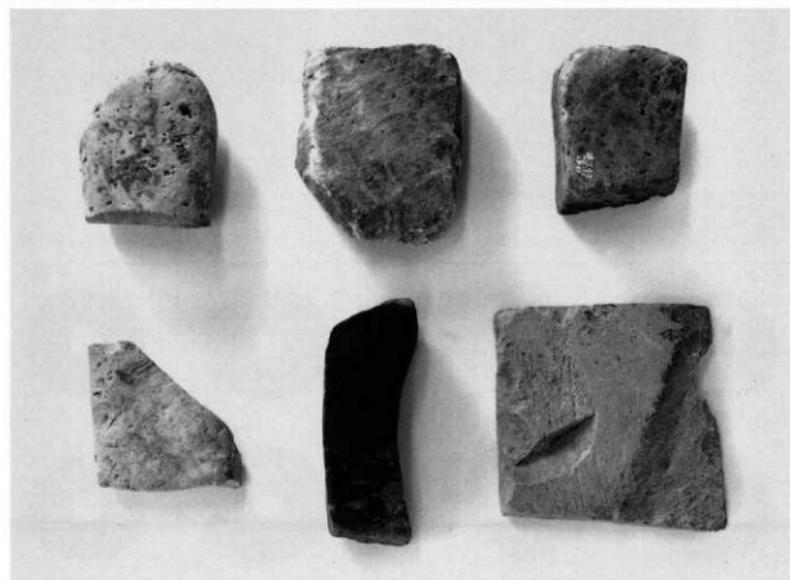
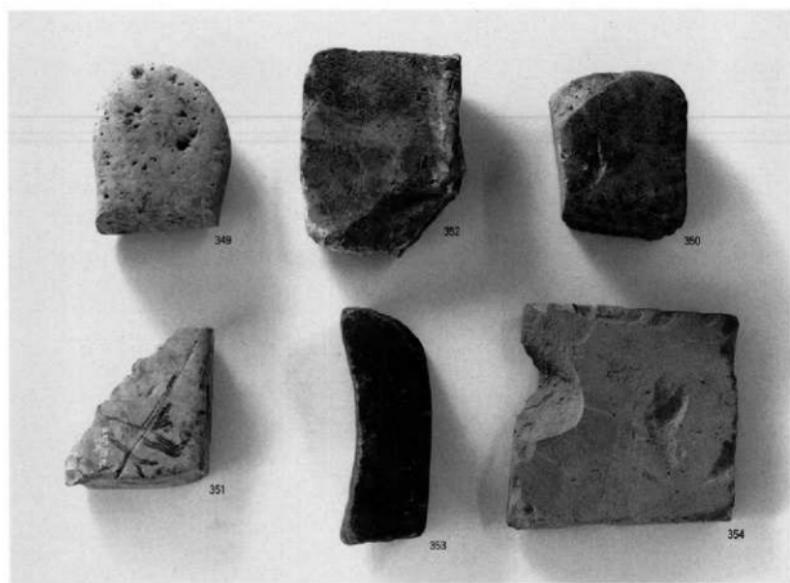
磁器



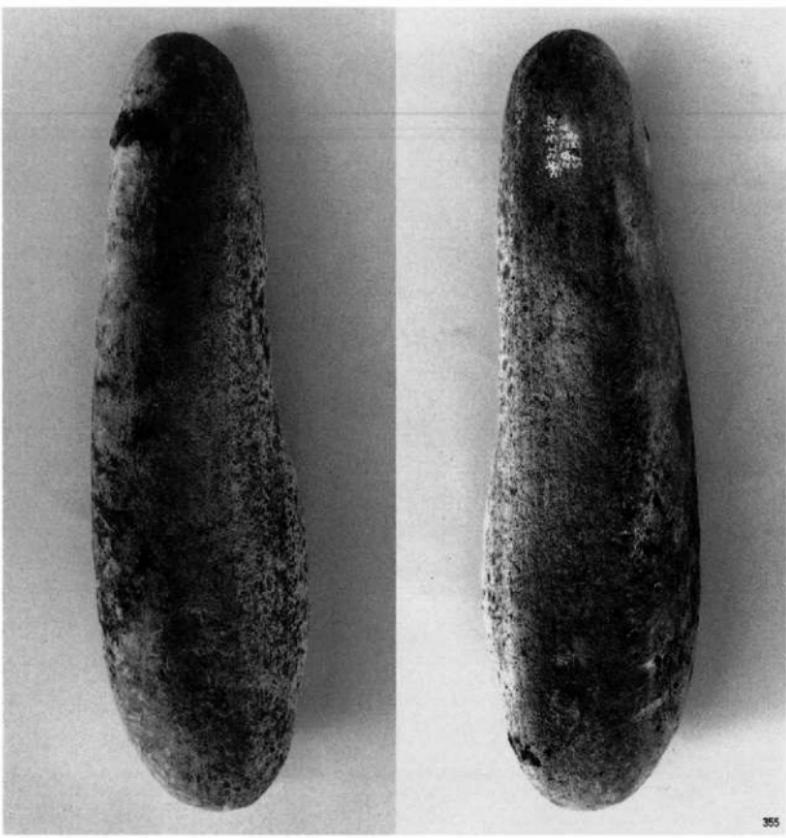
陶器



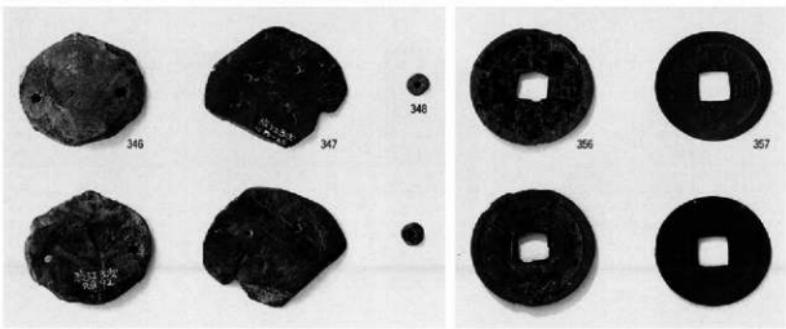
石器



石製品（1）



355



石製品（2）・古錢

## 報告書抄録

ふりがな	しぶえいせきだい2・3じはくつちょうさほうこくしょ					
書名	渋江遺跡第2・3次発掘調査報告書					
副書名						
卷次						
シリーズ名	山形県埋蔵文化財センター調査報告書					
シリーズ番号	第124集					
編著者名	氏家信行 大泉壽太郎					
編集機関	財団法人山形県埋蔵文化財センター					
所在地	〒999-3161 山形県上山市弁天二丁目15番1号 TEL 023-672-5301					
発行年月日	2004年3月26日					

ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しぶえいせき 渋江遺跡	やまがたけんやまとがたし 山形県山形市 おおわだしみえ 大字渋江 あざたなか 字田中	6201	160	38度 18分 53秒	140度 19分 36秒	19990920 20000927	8,820	東北中央 自動車道 相馬・尾 花沢線 (上山～ 東根間) 建設工事
種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項			
包蔵地	弥生時代			弥生土器	約400点を数える弥生時代終末期の 天王山式の土器が出土した。			
集落跡	古墳時代	竪穴住居跡 35 祭祀遺構 1 土坑 1 性格不明遺構 1	土師器 須恵器 砥石 有孔円盤	古墳時代の中期を主体とした集落跡 が二面確認され、住居跡や祭祀遺構 が検出された。				
区画溝他	中・近世	溝跡 5	青磁 陶器 古錢	中世の集落を区画するほぼ直角に曲 がる溝跡が検出された。 (出土箱数: 78)				

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第124集

**洪江遺跡第2・3次発掘調査報告書**

2004年3月26日発行

発行 財団法人 山形県埋蔵文化財センター  
〒999-3161 山形県上山市弁天二丁目15番1号

電話 023-672-5301

印刷 大場印刷株式会社  
〒990-2251 山形県山形市立谷川二丁目485-2  
電話 023-686-6155（代）